
けいおん！～春風と共に響く音楽～

エターナル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおん！〜春風と共に響く音楽〜

【Nコード】

N0809P

【作者名】

エターナル

【あらすじ】

桜ヶ丘女子高等学校に編入させられた一人の少年。そこで彼は軽音楽部と出会い…。一体彼はこの先どうなるのか？ 作者は文才無し・プロット無し・超絶駄文・展開が早い・キャラ崩壊という5つのスキル持ちです、更にいくつかバトルチックな場面が多いのでそういったのが苦手な人は戻るボタンで戻る事をお勧めします。ヒロインは現状澁です、基本澁メインですがこれからヒロインは後2〜3人増えます、悪しからず。

〱オリキャラ紹介〱（前書き）

初めまして！エターナルと申します。

ようやく踏ん切りが付いたので小説初投稿です。

処女作なので誤字・脱字・文才無しのため小説のようで小説っぽくないと思います。

ですが、頑張って小説っぽく書いていくので宜しければ感想・指摘などお願いします。

原作に沿って小説を書いています、オリスト交えるとどんどん原作から離れていくのは仕様だとお考えくださいorz

〽オリキャラ紹介〽

しんどうかける
神藤翔

年齢：15歳 身長：172cm、体重：58kg 利き手：両利き
誕生日：12月24日

特徴：鼻に（横に3cmほど）切り傷と右手の手の甲に小さなxの切り傷。いつ付いた傷なのかは不明。

本作の主人公。翔が6歳の頃に両親と姉を飛行機事故で失い、中学卒業まではお世話係の人が居たが、高校に入る頃に自立したいからと一人暮らしを開始。

元々何でもそつなくこなすが、料理があまり得意ではないのでよく簡単な料理か、もしくはコンビニ弁当で済ませる。

鼻と手の切り傷はいつ付いたのかは不明、鼻は隠そうとはしないが、右手の傷だけは黒い手袋を常に着用している。

趣味はギター、親父が翔が小学校に上がる前に買ってくれた最後のプレゼントのギターである。因みに独学で覚えている。

事故が起こる前まではよく練習したが、事故が起きてからは一切ギターに触れないようにしていた。

事故の際、失ったものは両親と姉だけだと零たちには告げるが、実はもう一人両親たちと同じぐらい大切にしていた人が居たが、秘密にしている。

中学時代、バンドを組むも親父に買ってもらったギターを弾く度に両親と姉が生きていた頃の記憶が蘇り途中からギターが弾けなくなるというトラウマがある。

それ以来あまりギターには触れないようにしていたが、桜ヶ丘に編入し軽音部に入部し再び触れてみるがやはり同じ症状が出てしまう。それを知った澪たちが何とか克服出来るようにと色々手伝ってくれる。

学校での成績は中の上と言ったところ。

好きな季節は春・秋・冬、嫌いな季節は夏。

異世界に友人が居る。時折様子を見に来たりと顔を合わせる事が多いが最近1年に一度会うか会わないかである。

翔が生まれた当時から魂に氷の神と呼ばれるルリエルという神が宿っている。

基本的に干渉はせず、眠っている事が多い。

CV：小野大輔

涼宮ハルヒの憂鬱（古泉一樹役）

黒執事（セバスチャン・ミカエリス役）

FORTUNE ARTERIAL 赤い約束（支倉孝平役）

くオリキャラ紹介く（後書き）

最初と言う事でまずは翔の紹介です。

翔「どうも、神藤翔（しんどうかける）です」

うん、ようやくだね、君の登場。

翔「ようやくだな、色んな先生方に質問してまわってようやくだど
り着いたな」

まあねえ…、何せ初投稿だからものすっごい緊張してるんだよ。

翔「いくら何でもズルズル引きずった感があるかな」

…言つなorz

翔「まあヘタレ作者って言うのは元から知ってたけどな」

酷っ!?

翔「そついや、けいおん！を元ネタにしたのはいいが音楽知識はあるのか？」

無いよ？音楽は高校の授業でクラシックギターを弾いた程度だし。

翔「…とりあえず」

ドゴッ！（翔の右ストレートが作者の顔面にクリーンヒットした音

ごふぁ！？

翔「ふう、少しスッキリしたな」

て…、てめえ作者に手を出すとはどういつ了見だ…。

翔「気にするな、俺は気にしてない」

気にしろよ！？

翔「そういや、俺の外見とかが紹介文に乗ってないんだが？」

ああ、それはプロローグで書かれてあるからとりあえずは大丈夫かな？と思ってね。

翔「いや先に紹介しなきゃダメだろ」

あはは…。因みに君は両目はいいんだけど、左目に眼帯してるよ。何故してるのかは後々明かすから気にしないように。

翔「そうか、ならいいか」

何か後書きの方が長くなってるから切ろうか。

翔「そうだな、そろそろ引き上げるか」

では今回はプロローグから始まります。

それでは！

ゝプロローグゝ（前書き）

連投になります、今回はプロローグ編です。

翔が何故桜ヶ丘に編入させられたのか、上手く書けてればいいんですが……。

それではプロローグ編です、どうぞ。

くプロローグく

く翔サイドく

桜の舞う季節、俺は晴れて高1になった。

俺の名は神藤翔^{しんどうかける}、どこにでも居そうな普通の一般人(?)だ。

何故疑問形なのかは後々わかるから詮索しないでくれ。

身長は173cm、髪は短く癖毛では無いのに常に逆立っている、色は金髪に近い黄色。

目はカラーコンタクトでも充血でも無いが紅色で若干ツリ目、そして鼻には深い傷が特徴的だ。

左目は見えないわけではないが眼帯をしている。これには深い理由があるが今は告げないでおく事にする。

そんな俺の新たな高校生活が始まるというのに出るのはため息ばかり、何故なら俺が入学した(させられた、が正しいのかも知れないが)高校は……。

桜ヶ丘高校、女子高だった。

何故俺がこの桜ヶ丘高校に入ることになったのかと言うと、あれは数日前の事だ。

本来通うはずの共学の高校に進学が決まった俺は、その高校の下見

に来ていた。

俺はあらかた校舎内やグラウンドなどを見て回り、帰宅しようとした矢先、教師たちのざわめきに気付いた。

俺は興味本位で近づいて行くと校長を筆頭に全教職員が勢ぞろいしていた。

扉に耳を当て聞いていたが詳しくは聞き取れなかったものの、どうやらこの高校から男子一人をどこかの高校に編入させるらしいが希望者が出ず焦っている様子だった。

「……俺には関係無いか」

誰に言うでもなく一人呟き帰ろうと踵を返そうとした矢先、話が終わったのか扉が開き中から教職員が出てきた。

そして俺は逃げる前に捕まってしまい、話を立ち聞きしていたのを白状すると校長から事細かな事情を話された上で

「では、君にこの大役を任せるがいいかな？」

と尋ねられた。

断る事も出来たが、それでは再び振り出しに戻り俺以外の他の生徒に迷惑になるかも知れない、そう考えた結果俺は

「……不本意ですがわかりました。」

と答えるしかなかった。

校長の話によると、どうやら桜ヶ丘高校という高校は女子高で、近々共学の高校に変えるかどうするかという話が持ち上がっていたらしい。

そこでこの高校にその話が持ち込まれ、そして立ち聞きしていた俺が選出された、ということらしい。

「だからって3年間女子高ってのは色々と問題な気もするがなあ……」

そして入学式当日、特別に作られた制服を身に纏い学校へ向かいながら以前の高校で聞いた話を思い出してはため息混じりに呟く。

「ま、こうなったら腹を括とするか」

そう呟くと俺は再び新たな高校、桜ヶ丘女子高等学校へ向け歩き出した。

しばらく歩くと目的地である桜ヶ丘高校に着いた。

時間は7時45分、辺りを見回してもまだ新1年生や上級生の姿は見えない。

もう少しゆっくりしても良かったが、入学式当日に何も知らない人を驚かさないための俺なりの配慮だ。

俺は門をくぐり校舎を見上げる。

予想していた以上に校舎は大きく、俺は少しばかり圧倒された。

「さすがに……、これはでかいな……」

校舎の大きさもだが、グラウンドや中庭などの広さにも圧倒されていた。

俺は大雑把に下見を済ませると靴を履き替え校長室を目指していた。数分ほど歩き回り目的地の校長室に着くと迷うことなく校長室に入る。

「失礼します」

校長室に入った俺は、校長から簡単な説明を受け入学式の途中で俺の事を紹介すると伝えてきた。

「紹介の時までは、舞台の袖に待機しておいてくれればいい、君が入学してくる子たちに混じっているのは新入生達が色々疑問に思うだろうからね」

という事を言われ俺は素直に了承していた。

ふと時計を見ると時刻は8時15分になっていた。

校長も時間を見ては

「では、そろそろ移動しようか」

と促してきたので俺は小さく頷き校長の後を歩いていく。

体育館に着くと俺は言われた通り舞台袖に身を潜めておく。

そして時刻は8時30分、入学式が始まった。

プログラムの大半が終了したところで、俺の紹介が始まった。

「今回、今年から3年間ある男の子が入学しました」

校長がそう告げた瞬間、体育館内にざわめきが起きる。

（無理も無いよな、今まで女子高だったところにいきなり男子が一人入学した、なんてな……）

そう考え無意識に鼻の傷を撫でていると

「これは、以前より我ら教職員一同で会議を開き、この学校を女子高から共学にしてはどうか、という案が出ました」

そう事実を述べるとざわついていた場が一瞬にして静まり返る。

「その案はすぐには可決されませんでした、まずは共学校から男子を編入させてから決めてもいいのではないか、という声も上がったためその案を採用したのです」

「そして、近くの共学校にこの件を提案したところ、今から紹介する彼に一任するとの返答が帰ってきたのです」

（まあ似た感じではあるが……嘘ではないな）

心の中で呟きながら俺は手を降ろしじつと校長の言葉を聴いていた。

「それでは、挨拶をお願いしよう、神藤君」

俺の名前が呼ばれると、無言のまま立ち上がりゆっくりと、しかし凜とした態度で壇上へ向かう。

「皆さん初めまして、先ほど紹介に預かりました神藤翔です」

当たり障りの無いように挨拶をする。

「突然の事で驚いている人も多いでしょう、実は俺もその一人です」
俺は自分の中に抱いている想いやこれまでの事をゆっくりと言葉にする。

俺自身の胸の内をある程度喋り終えると

「皆さん、こんな俺ではありますが卒業までの3年間、よろしくお願ひします」

と告げて一歩下がり深々と礼をする。

最初はところどころから拍手が沸き起ると釣られるようにみんなからの拍手を浴びた。

俺は校長を見て一礼し再び舞台袖に戻った。

そうして再び校長の話が手短に続き入学式は終わった。

今日は入学式だけだったので、終わり次第皆散り散りに帰宅する。

そんな中俺は再び校長室へと向かう。

「明日から色々あると思うけど頑張ってくれたまえ？」

開口一番に中に居た教師からそう告げられた。

その後は雑談などで時間を潰していたが、そろそろ帰宅する時刻になり

「それでは、今日はこの辺で失礼しますね」

と告げ一礼し校長室を後にした。

校長室を後にし、昇降口へ向かっていると後ろから2人の視線を感じた。

が、俺は特に気にする素振りも見せずそのまま帰路についた。

しかし、その視線は帰宅中もずっと浴び続けていた。

（あんまり面倒は起こしたくないし……、とりあえず逃げるか）

監視されているような視線を感じそれを振り切るため、一言心で呟くと曲がり角を曲がり死角になった直後に一気にダッシュした。

するとさすがに追いかけて来なかったのか視線はその曲がり角で途切れた。

（何だったんだ……、学校の昇降口の辺りからずっと視線を感じた

が……)

そんな事を思いながらしばらく歩き自宅へと辿り着いた。

家の外観は一般家庭よりも少し大きめである。

両親は俺が幼い頃に他界している、原因は旅客機の墜落事故らしいが、何故墜落したのかは不明らしい。

俺はこの家に一人で住んでいるということになる。

俺は自宅に着くと即座に部屋に向かい着替えを済ませリビングに降りた。

「そついや……夕飯どうするかな……」

冷蔵庫を開け中を見ながら呟き何も無い事に気付くと肩を落とす。

「しゃーない、ちょっと買いに行ってくるか……」

冷蔵庫を見たまま呟くと再び部屋に戻り鞆から財布を取り出しズボンのポケットの中に入れ、携帯も一緒に入れておく。

ついでに音楽プレイヤーとヘッドホンもセットで所持しておく事にした。

ヘッドホンを付け音楽を聴きながら玄関を開け、鍵をかけて出発する。

今度は視線を感じる事無く目的のスーパーまで辿り着いた。

「とりあえず……、簡単な料理でいいか」

カゴを手に取りゆつくりと歩いて商品を見ていく。

ある程度食材を集めたところでふと顔を上げると、桜ヶ丘高校の制服姿の人を見つけた。

髪のはきは腰の辺りまである黒髪で、前髪はお姫様カットの若干大人びた感じの女の子だった。

一言で言えばトップクラスの美少女だった。

俺は何故か気付かれないようにと移動していた。

何故そうしたのかはわからないが、無意識のうちに体が勝手に動いていた。

俺は途中で思い出したように猫缶を手にとるとそのままレジへ向かい会計を済ましスーパーを後にした。

「漣サイド」

私は突然のイベントが起き驚きながらも終わった入学式から解放され帰宅しようとした矢先、見知った顔を見かけた。

「律、何してるんだ？」

私は幼馴染（？）の律の後ろから声をかけていた。

「おーす漣、今編入生がどんな人か見てみようと思って様子見してるんだよ」

その一言を聞き私は

（相変わらず暇なんだなあ、律……）

と心の中で呟きながら尋ねてみた。

「で？どんな感じの人かわかったのか？」

律はその言葉を聞くと首を小さく横に振り

「いや、まだだな、校長室に入っただけ出てこないみたいだ」

と律は校長室の入り口を近くの空き部屋から見つめていた。

「そっか、じゃあ私は行くからな？」

あまり律と居ると面倒になりそうだと思い一言告げ帰宅しようとする。

しかしその思い行動しようとするも、律が制服の襟首を握り

「澪も一緒に尾行してみようぜ」

と告げてきた。

律が何かしているときに声をかけるところなるとわかっていながらも、どうしても声をかけてしまう。

やれやれ、とため息を吐き出し

「少しだけだからな？」

と了承し、律と同じように空き部屋からジッと校長室の入り口を見つめる。

それから10分ほどした頃に校長室の扉が開き、中から彼が姿を現した。

「お、帰るみたいだぞ」

律は気付かれないように尾行を始める。

私は乗りかかった船だと思い仕方なく後ろをついていく。

昇降口を抜け見失わないよう注意を払いながら、後を追いかけていく。

ある程度彼の後を追うが、途中で彼は曲がり角を曲がると既に姿を消していた。

「くっそー、いつから気付いてたんだろ？」

律が隣で左右を見渡しながら悔しがっている。

「もしかしたら途中から気付いていたのかもしれないな」

溜め息交じりに答えると、携帯を取り出し時間を確認する。

「あ、悪い律、今日はもう帰るな？」

簡潔に用件を伝え私はその場から離れた。

後ろの方で律が何か言っているが気にはしなかった。

「あ……、今日はパパもママも居ないんだっけ……」

帰宅してから今朝の事を思い出し今晚は一人なのを思い出していた。着替える前に冷蔵庫を確認するが、やはり今ある食材ではさすがに厳しかった。

「仕方ない、このまま買い物に行くしかないか……」

溜め息交じりに呟くと、一度自室に戻り鞆を置き着替えようとしたが、このままでいいかと思いそのまま家を出た。

いつものスーパーに着き、とりあえず歩きながら今日の献立を考えていた。

ある程度決まり食材を得たところで、ふと視線を上げると彼を見つけた。

どうやら彼も私に気付いてはいたみたいだけど、気付けば視界から消えていた。

「……なんて声かけたらいいんだろうな……」

誰に言うでもなく、ただポツリと一言漏らすと、気を取り直しレジへ向かう。

会計を済ませ帰路に着く途中の公園で、彼らしい人物を見つけた私は意を決して近付いて行った。

くプロローグく（後書き）

はい、というわけで翔と漣の遭遇ですね。

翔「遭遇言っな」

事実だろ？あ、今回ゲストで漣に来てもらってます。

翔「は？」

漣「……………」

翔「気絶してるし…………」

あはは…………、やっぱり最初は緊張してるんだろうね。

翔「かもな、いきなりこんな場所に一人で来ると心細くなるだろうし」

かもね、けど後々翔に対して漣は物凄い行動を取るよ？

翔・漣「「！？」」

あ、漣復活した。

漣「わ、私は何をするって言っただよ！？」

それは第9話で明らかになるからそれまでお楽しみって事で

翔「……今すぐ言え」

睨みながら言ってもダメだよ、後翔には第10話でもう一度驚いてもらうから

翔「……はあ」

しかし、翔の編入理由が意外だったね。

漣「確かに。盗み聞きはどうかと思うけどそういう理由だったとは思わなかったよ」

翔「興味本位だったんだ、それにまさか話が終わってすぐ出てくるとは俺も思ってたしな」

因みに翔の制服は特注だよ、黒をベースにして作られてるんだ。

翔「つか、よく俺のサイズとかわかったよな」

ああ、それは俺がサイズを学校側に教えたらすぐ作ったみたいだよ？

翔「お前が犯人か！！！！」

漣「ちょ、抑えて抑えて……」

翔「仕方ない……、漣に感謝するんだな作者」

それから、第0話では翔も漣もお互い苗字でしか呼び合わないからちよつと違和感あるね。

翔「そりゃそうだな」

さて今回は、漣とファーストコンタクトです。しかも漣から声をかけます。

漣「……………」シュ

あ、頭から煙が。

翔「そりゃそうだ、漣の性格を考えればそうなる」

あはは……、まあ積極的な漣も悪くないって事で。

翔「それでは皆様、誤字脱字などございましたら指摘お願いします」

それではまた次回！

漣「はっ！私は夢を見てたのか？男の子に私から声かけるなんてあり得ないよな」

あ、現実逃避始めた。因みに夢じゃないぞ？

漣「無理無理無理無理！！！！」

あはは……。

ゝ第0話ゝ（前書き）

申し訳ありません！第0話を投稿し忘れてました！orz

翔「アホだな」

うるせえ！！orz

というわけで第0話です。

今回は翔視点で進みます、短いですがどうぞ！

〜第0話〜

帰路の途中、俺は近くの公園に立ち寄る事にした。

というのも、そこには1匹の猫が居るのだが、人懐っこくよく買い物した帰りにはこうして猫缶をやることにしていた。

「よしよし、元気にしてたか？」

言葉が通じないとわかっていながらも声をかけてしまつのは俺の癖だと思う。

すぐさま擦り寄ってくる猫の頭を撫で、近くのベンチまで移動する。

「ほら、今日はこいつだ」

先ほど買った猫缶を取り出し蓋を開け、猫の前に差し出してやる。

すると、待ちわびたのか勢いよく食べ始める。

俺はそれを横目で見ながらジュースを開け飲む。

半分ほど食べたのを見計らい紙の器に牛乳を入れて、猫缶の隣に置いてやる。

牛乳にはすぐに手を出さなかったが、しばらくしてからようやく飲み始めた。

あっという間に猫缶と牛乳を平らげた猫からゴミを取っておく。

すると猫は俺の膝の上に乗リ目を閉じ丸くなり始めた。

いつもの事なので気にはしないが、どうやらこの猫の定位置は俺の膝の上のようだ。

右手で撫でてやりながらジュースを飲んでると不意に後ろから声をかけられた。

「あ、あの……」

少し緊張したような声で話しかけてきた相手を見ようと後ろを振り返る。

暗くてよくは見えないが相手はさっきスーパーで見かけたあの女の子だろう。

確信は無いのに、俺は何故か確信していた。

俺も若干緊張はするものの、いつもと態度は変える事はなかった。

「ん、俺に何か用？」

左手に持っていたジュースを隣に置き尋ねてみた。

「あ、あの……、君は神藤翔……で合ってるか？」

暗く俺の姿があまり見えないのだろう、おずおずといった感じで俺に尋ね返された。

「ああ、俺は神藤翔だが……、君は誰だい？」

立ってるのもなんだし、隣どうぞ。と付け足し促せば暗がりではあるが俺の顔をチラチラ見てゆっくりと俺の隣に腰掛けた。

「あ……、自己紹介がまだだったな、私は秋山濤、よろしく」

少しばかり緊張がほぐれたのか座ったまま自己紹介をしてくれた。

「俺の事は知ってると思うが、神藤翔だ、よろしくな秋山さん」

自己紹介されたので、こちらも自己紹介をしておく。

月明かりによりお互いの顔が見えると同時に

「それで、俺に何か用があつたんじゃないのか？」

少しでも話そうと思い俺は話題を振ってみた。

「あ……いや、特にこれと言って用事は無いんだ」

秋山さんは苦笑いなのか照れ隠しなのかわからない笑みを浮かべ答えた。

「ただ、どんな人なのか興味があつて少し話しがしてみたかったんだ」

恥ずかしがり屋なのか俺の顔を見ずまっすぐ前を見つめたまま話す。

「どんな人……か」

俺は小さく呟き苦笑いを浮かべていた。

「……今日、俺が帰る頃から見た感想を聞いてみようかな？」

少し考え思ったことを尋ねてみた。

すると秋山さんは驚いた表情を浮かべ俺の方を向き

「知ってたのか!？」

と答えてきた。

「まあね、これでも監視される視線とかそういうのには敏感でね、今日の帰りに浴びた視線と秋山さんの視線が一致したってわけだよ？」

と答え返す。

「……正直驚いたな、まさかバレてたとは……」

秋山さんは素直に驚いていた。

「そうだな……、まだ少ししか尾行しなかったから詳しくはわからないが、今の状況を見て優しそうな人だなんていうのはわかったかな？」

腕を組み考えながら視線を俺から逸らし真っ直ぐに戻すと秋山さんは俺にそう答えた。

「……優しくそう、か……」

秋山さんには聞こえないくらいの声量で小さく呟いた。

「猫、好きなのか？」

秋山さんから不意に尋ねられ俺は顔を上げ秋山さんを見た。

「好きというよりは、こいつは特別人懐っこいから、つい相手にしたくなるんだよな」

視線を落とし右手で撫でている猫を見ては答える。

秋山さんは猫を羨ましそうに見つめていた。

「撫でてみるかい？」

俺は不意に秋山さんにそう尋ねてみた。

秋山さんは無言で小さく頷き左手を猫に向け差し出す。

猫に触れようとした瞬間に、猫が目を開けたのに気付き秋山さんはさっと手を引いてしまった。

すると猫が俺の膝から離れ秋山さんのすぐ近くにまで移動し体を丸めゴロゴロし始めた。

俺は秋山さんに目で「優しく撫でてあげて」という視線を送る。

小さく頷き再び手を伸ばし猫に触れてみる。

特に嫌がる気配もなく秋山さんに撫でられ続ける猫。

俺はその光景を見て微笑みそつと席を立とうとした。

が、なにやら意味深な目で俺を見る秋山さん。

「もう帰るのか？」

左手で猫を優しく撫で続けながら秋山さんが尋ねてくる。

「ああ、もう少し居てやりたいがあまり時間も無さそうだしな」

苦笑混じりに答えつつ携帯を見やる。

時刻は既に20時30分を過ぎていた。

「あ……、すっかり遅くなったな……」

同じく自分の携帯を見て残念そうな表情を浮かべつつ一言呟く秋山さんに俺は

「時間が時間だし、家まで送っていくけど？」

と無意識のうちに提案していた。

「それは嬉しいけど、迷惑になるだろ？」

予想していた通りの返答が返ってきたため、俺はクスッと笑っていた。

「構わないさ、どうせ帰っても俺一人だしな」

若干自嘲気味に答える。

「あ……、両親は共働きか何かか？」

興味本位なのだろうか秋山さんは俺に尋ねてきた。

「いや、両親はとつくに他界してるよ」

最早過去の事なので気にせず俺がそう答えると

「あ……、すまない、聞いちゃマズかったよな？」

申し訳なさそうな表情を浮かべ秋山さんは俺に尋ねてきた。

「構わないよ、もうずいぶん昔の事だしね」

俺は席を立ち軽く伸びをしながら答える。

すると秋山さんから

「じゃあ……、お言葉に甘えて送ってもらっていいか？」

と頼まれた。

「ああ、構わないよ」

俺は迷う事なく頷いていた。

俺と秋山さんは共に歩き出し公園を後にした。

因みに猫は一つ欠伸をすると俺と秋山さんの元から離れ闇に消えていった。

秋山さんを送っていく途中で不意に

「そういえば、学費とかはどうしてるんだ？」

あ、無理に答えなくてもいいからな？と付け足し尋ねられた。

「学費に関しては親父の遺産があるからとりあえずは大丈夫だよ？」

俺がそう答えると

「って事は一人暮らしなのか？色々大変じゃないのか？」

秋山さんが俺に尋ねてきた。

恐らく「親父の遺産」のフレーズは聞いてなかったのだろう、スル―した秋山さん。

「まあ困る事は多々あるけど、一番の特権は広い家を独り占め出来る事だな」

俺はあえて遺産の事に関しては指摘せず苦笑混じりに答えてみた。

「あはは……、それはそれである意味羨ましいかな」

同じように秋山さんも苦笑混じりにそう答えた。

「意外と家もデカいから昔は友達呼んでは夜中まで騒いでたりしてたな」

クスッと笑いちよつとだけ過去の話を出してみた。

「なるほどな……、一度でいいから神藤君の家に私の幼馴染も連れて行ってみたいな」

笑みを浮かべその一言を聞き

「ああ、うちならいつでも歓迎するよ、それから俺の事は翔で構わないよ？」

俺は自然とそう答えていた。

最後の言葉を聴いた秋山さんは

「えー？い、いや、いきなり名前を呼び捨てはさすがにマズいだろう……？」

と驚いた表情で尋ねてきた。

「ん？俺は特に気にしないよ？」

それに俺はもう秋山さんとは友達だと思ってるからね、と付け足し尋ね返してみた。

「で、でも……」

どうやら秋山さんの中では葛藤している、というよりは恥ずかしがっているようでなかなか名前を呼ぼうとはしなかった。

その様子を見て俺は

「まあ焦るようなことじゃないから、ゆっくりで構わないよ?」

と微笑み浮かべ告げてみた。

しかし今の秋山さんにはその言葉も聞こえないほど考え込んでいた。程なくして秋山さんの家の前に着いた。

「今日は送ってくれてありがとう?」

玄関前で少しばかり雑談していると急にお礼を言われた。

「ああ、これくらいなら気にしないでいいよ?」

俺はサラッと答えあまり長居しては悪いと思い踵を返そうとする。

「あ……」

何か言おうとした秋山さんだがそれ以上は言えないのか黙ってしまった。

「?まあいいや、またな、秋山さん」

俺は深くは追求せず一言告げて背を向け帰路に着く。

「これから三年間、よろしくな神藤。」

その言葉を背中で聞くと俺は右手を軽く上げそれに応える。

それから少し歩き振り返ると既に秋山さんの姿も家も見えなくなっていた。

「秋山、か……」

俺は一言呟くと再び帰路に着いた。

〈第1話〉（前書き）

皆様おはようございます、作者ことエターナルです。

翔「しかしホント朝から投稿するとはな」

出来る限り早い投稿した方がいいかなーって思ってね、読んで下さる方もいらっしやると思って。

翔「懸命な判断だな」

本来唯は入学式の時走ってるんだけど、入学式が過ぎた後に走らせました。

翔「つか、本当は小説書いた後に1期の1話を見て書き直すのが面倒だったんだろ」

（グサツ）それを言うんじゃない。

翔「事実だろ」

それでは第1章です、どうぞ。

翔「無視か！」

〈第1話〉

〈翔サイド〉

入学式の翌日、俺は携帯のアラームが鳴る前に目を覚ました。

まだ若干眠気があり二度寝してもいい時間ではあったものの、入学初日から遅刻は避けたかった。

脳は覚醒したものの、まだ半分以上が寝ている身体を無理やり引きずりベッドから抜け出す。

徐々に身体も覚醒していきいつも通りの俺に戻る。

「ふわ……」

小さく欠伸をしながらも制服に着替える。

まだ前日の疲れが残っていたが、あまり気にしないでおく。

時刻は7時をちょっとすぎた辺りだった。

鞆の中に必要な物を詰めておく（と言っても入学式の後なので特に必要な物は無いが）。

それとi p o にヘッドフォンを接続し携帯と共にブレザーの内ポケットに入れておく。

一度だけ部屋を見回すと、ギタースタンドに立てかけてあるエレキ

ギターを見つける。

以前は親父の趣味でギターを弾いてるのを見て、憧れて見よう見真似でお古のギターを使っていた。

そんな親父が、俺が小学校に入る前に買ってくれた最後のプレゼントがランドセルとこのエレキギターだった。

昔は学校から帰るとすぐに弾いていたが、今では時折暇つぶしに弾く程度になってしまった。

俺は昔の事を思い出しながら部屋を後にする。

「昔の事を思い出すとはな……」

俺は小さく呟き苦笑浮かべると階下に降り朝食の準備に取り掛かる。

「昨日買ってきた分とあわせても……、まあこれくらいでいいか」

冷蔵庫の中を見ながら思考を巡らせ調理に取り掛かる。

と言っても所詮男の作る料理なので、簡単な料理にすることに。

本日の献立は、焼いたパン、目玉焼きとベーコン、シーザーサラダ、コーヒーという簡単な物だった。

俺は料理が完成するとリビングの椅子に腰掛け食べ始める。

20分ほどで完食し食器を洗っておく。

食器を洗い終え時計を確認しておく。

7時40分、もう少しのんびりは出来るが俺はそのまま鞆を手に取り登校する。

ヘッドフォンを付け施錠するとお気に入りの曲を聴きながらゆつくりと歩き出す。

途中のコンビニに一度立ち寄りコーヒーだけは確保しておく。

そのまま登校していると後ろから猛ダッシュで登校する女の子を見かけ、俺は携帯を取り出し時間を確認する。

8時10分、まだまだ余裕な時間である。

何をそんなに急いでいるのかわからないが俺はあえて気にしない事にした。

「やっぱりまだ抵抗あるよなあ……」

正門をくぐろうとするもなかなか一步が踏み出せず溜め息を吐き出す。

しかも正門前にはボーッと突っ立って校舎を見上げる一人の女の子が居た。というかさっきの子だ。

俺はその子を横目に覚悟を決めると重い足を前に出し正門をくぐる。

（人だかりが出来てるな……、クラス分け発表か……）

遠巻きに人だかりの意味を理解すると俺は遠目から自分の名前を探した。

1年3組 神藤翔

と書いてあつたため俺は即座に移動を開始した。

昇降口で上履きに履き替え、クラスに着くと案の定というべきか視線を浴びた。

その視線は大半が好奇による視線だった。

俺はその視線を浴びたまま空いていた窓際一番後ろの席に座り外を見つめていた。

クラスの大半がどう声をかけていいか悩んでいるのであろう、誰も声をかけて来なかった。

ヘッドフォンを首に降ろし居心地が悪いながらも座っていると

「ねえねえ、君が神藤君？」

不意に一人の女子が声をかけてきた。

俺はゆっくりとその声の主を見ようと振り返る。

右の前髪にヘアピンを2つ付けた女の子だった。

というか、先ほど俺を猛ダッシュで追い抜き、校舎を見上げていた女の子だった。

「ああ、そうだけど君は？」

俺は質問に素直に頷くと質問を投げ返してみた。

が、あえて俺はさつき何故走っていたのかは尋ねなかった。

「私は平沢唯、よろしくね」

と笑みを浮かべ自己紹介してくれた。

「昨日自己紹介も含めて話したと思うが、神藤翔だ、よろしくな平沢さん」

俺は平沢さんの笑みにつられ微笑みを浮かべ答える。

すると平沢さんが

「唯でいいよ、カケちゃん」

と言ってきた。

「カケちゃんだけはやめてくれ……、ハズいから」

謎のあだ名をつけられ俺は苦笑浮かべつつ反論する。

「え、カケちゃんでいいじゃん」

と唯は頬を膨らませ更に反論してきた。

すると唯の後ろから一人の女子が近付き

「唯、何やってるの？」

と声をかけてきた。

唯は振り返り声をかけてきた人物を見つけると

「あ、和ちゃん」

和と呼ばれた女の子が唯の隣に立つと俺に気付कि

「貴方が昨日の神藤君ね？」

と尋ねてきた。

「ああ、神藤翔だ、よろしくな」

昨日の入学式の時と秋山さんの時を含め4度目の自己紹介だが、連続で自己紹介するとなると自己紹介する側も疲れてくる。

「私は真鍋和よ、唯の幼馴染なの、よろしくね？」

と自己紹介されると同時に右手を差し出された。

俺は意図を汲み取ると小さく頷き握手を交わす。

「俺の事は好きに呼んでいいが、間違えても　「じゃあ力ケちゃんで！」というのは却下だから、普通に翔でも構わない」

俺の言葉の間に唯が割って入るがそれを却下し真鍋に伝える。

「ええ、わかったわ翔」

真鍋はクスクス笑いながら手を離す。

「カケちゃんの方がいいのに……」

唯は相変わらず頬を膨らませ左手の人差し指を顎に当て呟いていたが、俺はあえて聞き流した。

俺は左側一番後ろ、窓際最後方の席に固定され、その前に唯が座っている。

少し中央側に行ったところに真鍋の席となっていた。

どうやら席順は特に関係ないらしい。

それからチャイムが鳴り、休憩時間になるとクラス内に居た女子たちは唯と和の会話している俺を見てからか、積極的に話しかけてくるようになった。

そうして俺はたった1日でクラスのみんなと溶け込めるようになった。

（唯と和にはほんと感謝しなきゃな……、ありがとうな二人共）

俺は心の中で感謝の意を示すと今度何か奢ってやるか、と考えながら1日を過ごした。

帰宅前のHRで

「今日帰る前に講堂にて教科書類の引渡しがあるので必ず講堂に行ってください」

と担任から言われた。

俺は特にすることも無かったので鞆を手に取り講堂に行こうとすると

「カケちゃん講堂に行くの？」

と唯から声をかけられた。

「だからカケちゃんはやめてくれ、やることも無いから行って教科書類持って帰ってどこまで進んでるのか確認もしたかったしな」

と一言反論し鞆を肩に担ぎ答える。

「なら一緒に行こうよ、カケちゃん」

と笑みを浮かべ告げてくる。

（相変わらず聞いてねえな……）

「……ま、いいか、行くぞ唯」

と呟くと着いて来るよう促す。

「うん、行こうカケちゃん」

と唯は俺の隣を俺と同じペースで歩き講堂に向かうことにした。

数分程度で講堂に辿り着きさっさと済ませてしまおうと思い行動に移す。

「これが教科書のセットになります、無くさないように気をつけて管理してください」

と告げられ俺は教科書類を受け取る。

そのまま列を離れ講堂の出入り口付近の壁にもたれ掛かり教科書を開いてみる。

（へえ……、さすが私立と言ったところだな、かなり進んでるな）

俺は声には出さないも初めのページから流し読みで最後のページまで読みきる。

（どうやら少しは真面目に授業受けないと後々面倒になりそうだな……）

溜め息を吐き出し受け取った教科書を鞆の中に押し込んでおく。

と、ちょうど唯ももらってきたのか俺を見つけ小走りで駆け寄ってくる。

「いやぁ……、教科書ちょっと覗いてみたけど全然わかんないや……」

唯は苦笑混じりにそう言ってくる。

「さすが私立つてところだな、俺もまだ半分しかわからないからな……」

俺も苦笑混じりに答える。

「そつえば、カケちゃんは部活何やるの？」

ふと思い出したように唯が俺に尋ねてくる。

「いや、特にこれと言ってまだ決めてない、唯はどうするんだ？」

俺は小さく首を左右に振り答えると唯に同じ質問を投げ返す。

「私もまだ決めてないや」……、まあそのうち決めると思っよ」

超楽観的な答えを返してくる唯。

（そんな楽観的でいいんだろうか……、まあ本人が決める事だしとやかく言わないでおくか）

と心で呟き

「んじゃ俺は帰るな、またな唯」

俺は帰宅しようと思い唯に告げ講堂を出ようとする。

すると唯は俺のすぐ後ろをピッタリついてくる。

「一緒に帰ろ？」

と言われ特に用事も無く無下にするのも可愛そうと思い、小さく頷き唯と共に下校することにした。

俺は唯と談笑しながらゆっくりと自宅を目指していた。

が、家の方角が全く同じなのかずっと歩き続けていた。

「っと、俺ここだから、またな唯」

玄関前に辿り着くとそこで別れる。

「あれ、カケちゃん私の家の近所なんだ？」

と唯からビックリな一言を聞いた。

唯について行ってみると、確かに3軒隣に行った先には平沢という表札があった。

「それこそ驚きだな……、まあいい、俺も用事があるしまたな？」

俺はそこで話を切り上げ唯が家に消えるまで見送っていた。

消えたのを確認すると俺は自宅に入る。

帰宅早々、朝の眠気が今更舞い戻ってきたのか、用事を後回しにし俺は玄関の鍵をかけ自室に行くに着替える前にベッドに倒れ込む。

そのまま数分もしないうちに俺の意識は闇へと溶けていった。

「漣サイド」

「漣」

私が廊下を歩いていると後ろから聞きなれた律の声が聞こえた。

「クラブ見学行こうぜ」

と律から提案される。

「どこのクラブの見学に行くんだよ、律？」

ここで了承してはマズいのは重々承知しているため先に聞いておく。

「軽音部だよ！」

と律が高らかに宣言した。

「私文芸部に入るつもりだし……」

ほら、と入部届を律に見せる。

と、その入部届を見た律は

ビリーっ

無表情で入部届を引き裂いた。

「あー！？」

私は声をあげてしまっていた。

「何すんだよ律ー！！？」

と律に文句を言うも

「ほらほら、早く行こっぜ」

とスルーされてしまう。

しばらく歩き職員室に着くと私と律は意外な一言を聞く事になった。

「へ？廃部？」

律の口から一言漏れた。

「正確には廃部寸前ね、今年軽音部に在籍していた人がみんな卒業しちゃって、今年新たに4人入らないと廃部になるのよ？」

私から見ても綺麗な先生からそう聞いて居ると、不意に先生を呼ぶ声が聞こえてきた。

「それじゃ呼んでるからまたね？」

と先生はその場を立ち去った。

「……………」

律は無言になっていた。

「綺麗な先生だったなー、でも廃部じゃ仕方ないな、私は文芸部に

」

踵を返し戻ろうとすると律が無言で私の襟首を掴んでいた。

「…………誰も居ないということは今私が入部すれば部長…………、ふふ、悪くないわね」

何やらよからぬ事を考えているようだった。

とりあえず職員室にいつまでも居ても仕方ないので、私たちは音楽室に移動した。

音楽室に来る事数十分するが、誰も来ない。

諦めて帰ろうかと提案したところで音楽室の扉が開き

「あー…………」

と一人の女の子が現れた。

「クラブ見学がしたいんですが……」

という一言に律がすかさず反応し

「軽音部ですか!？」

と尋ねていた。

眉毛の特徴的な女の子は苦笑いしながら

「いえ、合唱部の……」

「軽音部に入りませんか!？今部員少なくて……」

律が無茶苦茶な勧誘を始めた。

「こら律!無理に勧誘したらダメだろ!」

私は律の襟首を引っ張り距離を離す。

「それじゃ、私も行くからな?」

私は音楽室の扉に手をかけ退室しようとする。

すると律が

「零!あの時の約束は嘘だったのか!？」

と言ってきた。

「私がドラムで漣がベースでずっとバンド組もって約束は嘘だったのか!？」

「律……」

「それで、プロになったらギャラは7:3ねって」

私は問答無用で律の頭に手刀を落とし

「捏造するな!!」

とツッコんだ。

すると

「ふふ……、なんだか面白そうですね、私キーボードぐらいしか出来ないけどそれでよかったら入部させてください」

と眉毛の特徴的な女の子から告げられた。

すると律は

「ありがとー!!よし、これで後一人!」

「私ももう数に入ってるのね……」

律の一言に私はもう諦めるしかなかった。

「えーっと……」

律が女の子を見たままなんと呼べばいいのかわからず困っていると

「琴吹紬です」

と自己紹介してくれた。

「私はドラム担当の田井中律、で、こっちがベースの秋山漣」

律が私を含め自己紹介を返すので私は会釈しておいた。

「さて、後はギターだな！」

律の考えには私も同感した。

「律、ギタリスト募集するならビラくらい作ったほうがいいんじゃないか？」

最早私は諦めて軽音部に入部する事を決めたので律に提案してみた。

「おお、それだ！早速作ろうぜ！」

そついうと私と琴吹さんと律は音楽室を出てすぐにある音楽準備室に移動することにした。

音楽準備室に着き30分ほどビラの構成を考え完成したビラを見て

「まーこれでいいだろ、後は入部希望者が来るのを待つまでだな！」

という律の一言によりビラは完成。

律の一言により私が貼り付けに行くことになった。

（入部希望者来てくれるかな……、ちょっと楽しみだな）

ビラを貼り終えながら私はちょっとだけ笑っていた。

〈第1話〉（後書き）

はい、というわけで本編と同じぐらい長い後書きコーナーです。

翔「まあいつもの事だしな」

まあな。

翔「しかし、まさか平沢の家が3軒隣なのは正直驚いたぞ」

本来なら翔は澪の家の近くにしようか悩んだんだけど、それじゃ後で翔に起きる出来事が成立しないから唯の家の近くにしました。

翔「何だよ、俺に起きる出来事って？」

それはまだ秘密、あ、因みに翔には軽音部入部と同時にあるイベントを行ってもらってから。

翔「はあ……」

溜め息で返すんじゃない、お前の得意な事だ。

翔「得意……、あれか？」

そう、あれ。2話でそのイベントフラグ成立して、3話でやってもらうから。

翔「わかった」

あつさりだね？

翔「諦めてるとも言えるがな、文才無い癖にこんな事させるとはな」
うるさいよ。

翔「それに、俺教科書貰って読むまではいいが、流し読みで半分も解けるもんなのか？」

それは翔は元々それだけの読解力があるんだ。

翔「ねーよ」

o r z

翔「さて、誤字脱字などございましたら指摘よろしくお願いします」

今回は翔が軽音部の面々と顔合わせする話となっております。

近日中に投稿すると思いますので是非！

それでは！

〈第2話〉（前書き）

第2話です、今回は翔の得意とする剣術での決闘、そして軽音部に入部がメインです。

翔「全く……、困ったもんだな」

とか言いつつまんざらでもないんだろ？

翔「まあな」

相変わらず素直じゃないね。

翔「うるさい、とりあえず3話でその決闘の内容を書いたんだよね？」

そうだね、というわけで3話は24日の17時以降に投稿します。

翔「それでは第2話です、どうぞ」

く第2話く

く翔サイドく

俺が桜ヶ丘に編入して早2週間が経過しようとしていた。

「う~~~~ん……」

うつ伏せになる俺の前で唸る唯。

「何唸ってるのよ、唯？」

真鍋が唯に声をかけていた。

「あ、和ちゃん 部活何しようか悩んでてねー……」

と唯は苦笑いを浮かべつつ答える。

「え！？まだ決めてなかったの？もう入学して2週間は経つよ？」

真鍋は素で驚いたように尋ねた。

「で、でもでも、私運動オンチだし文科系のクラブもよく知らないし……」

唯は若干慌てふためきながら答えた。

「はぁ……、こうやってノートが出来ていくのね……」

真鍋が額に左手を当てため息混じりに答えた。

（ちょっと待て、部活やってないだけで二ートって早計過ぎじゃないか……？）

「部活やってないだけで二ート!?」

俺の心の呟きと唯の答えはほぼ同時だった。

「カケちゃん……、カケちゃんは部活何選んだのー?」

唯が急に俺の方に振り向き尋ねてくる。

「俺もこれと言って特に無いんだよな……」

顔だけ起き上がらせ答える。

すると教室の後ろの扉が開き

「神藤つてのはこのクラスに居るかい?」

と一言澄み渡った声が響いた。

女子にしては珍しいエメラルドグリーンの短髪、身長は160cm後半ぐらい、更には八重歯が特徴的。

リボンの色を確認し3年の先輩だと判断する。

しかもその手には何故か竹刀を持っている。

居ません、などと言っても無駄なのは百も承知なので

「何ですか？」

椅子から立ち上がり近付き尋ねる。

「君に決闘を申し込むよ、何でも君、噂で聞いたけど剣術が相当強いんじゃないか」

と初耳な噂を言われた。

だが剣術が得意なのは事実なので俺はあえて否定しなかった。

その一言を聞きクラスのみんなは驚いていた。

「……わかりました、時間はいつですか？」

逃げるのも手だと考えたが、それでは俺のプライドが許さない。

「日時は明日の放課後、午後4時半、体育館で待つよ」

とだけ告げると3年の女子の人は去っていった。

俺も立っただけでも仕方ないので席に戻る。

「カケちゃん、剣術得意なんだ？」

と唯から尋ねられる。

「得意というか、精神集中とか出来るから覚えた程度だよ」

俺はあえて嘘を若干交えつつ答える。

「とりあえず、唯は何の部活やるんだ？」

改めて俺は話を本題に戻す。

「んー……」

相変わらず唸ったまま決まらないようだ。

するとチャイムが鳴りみんな席に着いた。

俺はしばらく授業に集中して耳を傾けていた。

そうこうしている間に授業が終わると同時に唯はHRが終わると姿を消していた。

どこに行ったのやら、と考えつつ俺は教室を後にし帰宅した。

翌日の昼休みの日に唯が

「とりあえず、軽音部ってどこに入部してみました！」

シュビッツと右手を掲げ宣言する唯。

「へえ、それで軽音部って何するの？」

真鍋が唯に尋ねてみる、が唯の答えは

「さあ？」

との一言だった。

「え……？」

「知らないで入部したのかよ……」

俺もツツコまざるを得ないと感じつい突っ込んでしまった。

「でも、軽い音楽って書くからきつと簡単な事しかないよ」

楽天的な唯。

「例えばどんな感じだ？」

俺が尋ねてみると

「ん、口笛とか？」

という唯の返答に

「何そのやる気のない（ねえ）クラブ……」

自然と俺と真鍋の声がハモった。

「そついや……、軽音部って確かギタリスト募集してたな」

俺は今朝登校した際に見た部員募集の中にあつた軽音部のビラを見ていた。

「え……、ギタリストってギターを弾く人の事？」

唯が若干血の気が引いたように尋ねてくる。

俺はそれに無言で頷いた。

「わ、私ギターなんて弾けないよ……」

入部届を出した後で後悔し始める唯。

すると真鍋が

「じゃあ何なら演奏出来るの？」

と尋ねてみた。

「んーっと………カステネット？」

という唯の一言に俺は軽く溜め息を吐き出し、真鍋は

「す、凄く似合っわ……」

苦笑いしながら答えた。

というやり取りが続けている間に昼休憩が終わり午後の授業が始ま

った。

そして放課後になり、俺は鞆を手に取り教室を出ようと思いい席を立つとする。

が、それ以前に気になる人物が目の前をフラフラと歩いていた。

唯である。

「何してんだ、唯」

俺は後ろから声をかけてみる。

すると若干震えながら振り返り、俺を見つけては安堵の溜め息を吐き出す唯。

この時点で既に嫌な予感センサーが働いていたが、さすがにこの状態の唯を放置は出来なかった。

「カケちゃん……お願いがあるんだけど……」

と唯から声をかけられ

「軽音部まで一緒に来てくれ、って言いたいんだろ？」

唯の次の言葉を俺が逆に尋ねてみた。

すると唯は小さく頷く。

「……しゃーない、付き添いで付いていってあげるか」

些か今の唯を放置するような事はしたくないので了承した。
すると唯は嬉しそうな表情を浮かべるが思い出したように
「でもカケちゃんこの後4時半から体育館で決闘だよね？」
と唯が言ってきた。

俺は現在の時刻を確認しようと時計を見してみる。
午後3時過ぎ。

俺は時計から目を離し

「後1時間は余裕はある、さっさと行って済ませた方がいいだろ？」
と言うと俺は廊下に出ようとした。

唯は俺の後ろをちょこちょこ付いてきていた。

俺は扉に手をかけ開けようとした瞬間

「神藤君、今日の決闘見に行くからね！」

「先輩とは言え手加減しちゃダメだよ？」

「神藤君が絶対勝つって私たち信じてるからね？」

「相手は剣道全国大会で3連覇してる人だけど、負けたら承知しな

いからね？」

等々のクラスメイトからの激励を受けた。

俺はその激励を受け

（先輩には悪いけど、この決闘勝たせてもらいますよ）

心の中で宣戦布告をしておいた。

そして俺はクラスメイトのみんなに

「ありがとう、みんな」

と短くではあるが笑みを浮かべ答えておいた。

そしてそのまま俺と唯は軽音部のある音楽準備室に向かっていた。

音楽準備室に近づくにつれ唯の足取りは重くなっていた。

俺は唯を見失わないように歩幅を唯に合わせゆっくりと音楽準備室へと歩いていった。

そして俺たちは音楽準備室の前に辿り着いた。

が、唯は何を想像したのかガクガクブルブルと震え始め、あわわわわわと呟いている。

俺は小さく溜め息を吐き唯が戻ってくるのを待っていると

ポンッ

と誰かの手が唯の肩に触れた。

それだけで唯はビックリしたのか背筋を伸ばし硬直した。

「うちの部の前で何してんの？」

前髪をかき上げカチューシャで留めた女の子が声をかけてきた。

その子が唯を見た後俺を見て

「あ！編入生の神藤だっけ！？」

と尋ねてきた。

「ああ、そうだが？」

もう5度目となると自己紹介するのも疲れるので肯定だけしておく。

「それじゃあ、この子が平沢唯さん？」

俺はその問いに頷き応える。

「ギターが上手いんだよね！？来てくれるの待ってたよ！！」

（何かあらぬ尾ヒレが付いてるな……）

心の中で苦笑していると不意にカチューシャの女の子が俺を見て

「神藤……でいいのかな？神藤も入部希望者なんだな！？」

俺の名前を呼んだかと思えば入部届すら出していない俺までも入部希望だと勘違いしている。

「いや、俺はこいつの　「やった！一気に新入部員が二人も！
！」……」

俺が説明する前に既にガッツポーズを決め喜んでいる。

そんな俺たちを無視して音楽準備室の扉を開けるカチューシャ娘。

「みんなー！新入部員が二人も来たぞー！」

と高らかに宣言した。

「まあ」

「本当か！」

俺と唯はカチューシャ娘に引きずられるように中に入れられた。

俺は溜め息を吐き出しカチューシャ娘と唯以外の二人を見ている。

一人は眉毛が物凄く特徴的なお嬢様っぽい子がお茶の準備をしている。

もう一人は……あれ？

「秋山さん？」

「神藤君？」

俺と秋山さんが声を発したのはほぼ同時だった。

「あれ、何だ神藤、漣と知り合いだったのか？」

カチューシャ娘に尋ねられた。

「入学式が終わった日の夜に公園で話して知り合ったんだよ」

と答えておく。

秋山さんは俺の言葉に頷く。

「紅茶どうぞ」

眉毛の特徴的な女の子が空いている席に紅茶を置く。

俺と唯は諦めたように席に座り紅茶を飲む。

正直、俺は紅茶を飲むのは今回が2度目だったりするので、味はよくわからなかったが一言で表現するなら美味い。

因みに俺の席はなんと秋山さんの真向かいだった。

「実は私たちも新入部員で、今週中に4人居ないと廃部が決定してたんだ……」

カチューシャ娘が声のトーンを少し落とし告げてくる。

「だから入部してくれて本当にありがとー!」

カチューシャ娘は俺と唯の手を握りお礼を言うてくる。

「それだが」

俺はカチューシャ娘を見たまま一言漏らす。

そのまま間髪入れずに

「俺、入部希望者じゃないぞ?」

と告げる。

「「「え……?」」」

すると一瞬でフリーズしたように固まる。

「俺はそこのカチューシャ娘に勘違いで引ッ張られてきたんだからな」

と付け足し言うておく。

すると秋山さんが

「……そうなのか、律?」

カチューシャ娘に尋ねていた。

「……………確かに言ってなかった。」

律と呼ばれたカチューシャ娘は思い出すと素直に白状した。

「お前なあ!!」

不意に秋山さんが激昂したように叫ぶ。

(おお……、秋山さんがこんな声を出すとは……)

「で、でも平沢さんは入部希望者なんだよね?」

しかし、すぐさまカチューシャ娘は唯に尋ねていた。

「は、はいっ!」

唯が緊張した面持ちで答える。

(はいって、辞めるって言いに来たんじゃないのかよ……)

心の中で小さくツツコみを入れておく。

「ついでに言っておくが、平沢は辞めるって言いに来たみたいだぞ?」

と素直に言えないであろう唯の代わりに告げておく。

すると三人は再フリーズ。

無理も無い、唯は入部すると思っていたのに辞めると言われたら固

まるのは当然だ。

「も、もっと違う楽器をやるんだと思って……」

と唯が言つと

「どんな楽器なら出来るんだ？」

秋山さんが尋ねてきた。

「カスタネ……………ハーモニカっ！」

唯の答えは見栄を張った答えだった。

（唯……………見栄張らなくていいのに……………）

俺は心で呟くと同時に

「あ、ハーモニカあるよ、吹いてみせ」

「ごめんなさい、吹けません」

ハーモニカを取り出すカチューシャ娘に対し即答で唯が謝罪する。

（何でこいつはハーモニカなんて持ってたんだ……………）

「でも、軽音部に入部届を出したって事は、音楽に興味があるって事だよな？」

秋山さんが唯に質問してきた。

「他にやりたい部活とかあるの?」

と眉毛の特徴的な女の子が追撃の如く尋ねてきた。

「うっん……、特にやりたい事が無いの」

唯は素直に答えた。

「神藤君は?」

秋山さんが今度は俺に話題を振ってきた。

「俺も特に無いな」

俺はほぼ即答するように答えた。

「なら私たちの演奏聴いて入部するかどうか判断してよ」

と力チューシャ娘から提案された。

「え、ほんとに!？」

唯は目を輝かせ反応していた。

「神藤君も聴いていくよね?」

不意に秋山さんが俺に尋ねる。

「……ああ、わかった」

そう答える以外俺に選択肢は他無かった。

すると三人はすぐさま移動を始める。

秋山さんはベースを取り出しアンプに接続する。

眉毛の特徴的な女の子はキーボードのようだ。

カチューシャ娘はドラム、何か3人とも似合うな。

準備が整ったのか秋山さんと眉毛の特徴的な女の子が、カチューシャ娘を見て小さく頷くと

「1・2・3・4！」

カウントを始めると演奏が始まる。

曲目は「翼をください」だった。

〃

俺と唯は素直にこの3人の奏でる演奏に聞き惚れていた。

程なくして演奏が終わり、カチューシャ娘が唯に

「どうだったかな？」

おずおずと尋ねる。

「なんていうか、上手く言葉に出来ないんですけど」

ここまでを聞きカチューシャ娘はうんうんと頷いていた。

「あんまり上手くないですね!」

一呼吸置いた唯の発言を聞き俺は小さく溜め息を吐き出す。

(バツサリだー!)

恐らくカチューシャ娘の心の叫びだろう、そう聞こえた気がする。

「でも、何か楽しそうな雰囲気伝わってきました!私、やっぱりここに入部します!」

と唯が宣言する。

「本当か!?」

秋山さんが嬉しそうに答える。

(さて……、俺の役目も終えたいし用事を済ませに行くか……)

そう思い鞆を手に取り部室を後にしようとしたところで

ガシッ!

右肩を掴まれた。

振り返ると満面の笑みを浮かべたカチューシャ娘の姿が。

「神藤も一緒に部活やろうぜ？」

カチューシャ娘が俺に告げてくる。

「言つたら、俺は付き添いだつて」

すると唯と秋山さんが同時に

「一緒に部活やろうよ？」

と言ってきた。

因みに配置は、唯は長椅子の近くで首をかしげている。

秋山さんは俺の左側から、というかむしろ左腕に抱きつきそんな距離で尋ねてきた。

最早俺に逃げ道は無いようなので

「……わかったよ、入部させてもらつよ」

そう答えるしかなかった。

「やったー！本当に二人も新入部員が増えた！」

カチューシャ娘が軽くジャンプしながら喜んでいる。

その隣で俺は携帯を開き時間を確認する。

4時15分。

「そろそろか……」

俺は小さく呟くと

「悪い、ちょっと用事があるからまた明日な」

それだけを告げると鞆を持ち扉を開け体育館へと向かった。

く 零サイドく

「どうしたんだ？神藤」

神藤君は用事があると言って部屋を出てすぐ、律が？マークを浮かべながら呟いていた。

すると平沢さんは

「あ、そっか、そろそろ時間だね」

携帯を開いて時計を確認し一言告げた。

「何があるんだ？」

私は平沢さんに尋ねていた。

「昨日、カケちゃんに決闘を申し込んだ3年生の先輩がいたんだよ」

と答えてきた。

私はそれでも十分驚きだった。

「へえ、場所わかるか？」

律が相槌を打ちながら尋ねた。

「確か……体育館だったかな？」

それだけを聞くと律が

「よし、面白そうだし神藤の決闘見に行ってみようぜ！」

野次馬根性丸出しで言い出した。

本来なら私が止めるべきなのだろうけど、珍しく私は律の意見に賛成していた。

それからすぐに移動を始める。

すると移動中に

「あの男の子、3年の先輩に勝てるのかな？」

「見に行こうよ、どうなるのか楽しみじゃない？」

「でも相手の先輩、確か剣道全国大会で3連覇してるんだよね？」

などと言う声が聞こえてきた。

どうやら既に始まっているらしい。

「急ぐぞ、みんな！」

律の一声により私たちは急ぐべく廊下をダッシュで駆け抜けた。

そして体育館に着くと中から竹刀が競り合う音が聞こえてきた。

「始まつてるみたいだな」

律が一言呟き扉を開け中に入る。

私たちも続いて中に入り様子を見ている。

私は神藤君をすぐに見つけるとその姿に圧倒された。

その姿はあまりに美しく剣道や剣術などは無知な私でも無駄の無い動きであるとわかるほどだった。

そんな彼を見て私は無意識のうちに応援しようと深呼吸し、恥ずかしいながらも声を出した。

〈第2話〉（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます！

翔「竹刀は嫌いなんだがな……」

まあまあ、仕方ないだろ？それしかないんだし。

翔「まあいい……」

正直、漣・律・ムギの口調が合ってるか不安でしょうがない。

翔「それは作者の文才が無いからな」

orz

翔「まあ、頑張れ」

頑張るorz

翔「しかし、読み返す度にホント漣が若干ではあるが積極的になってるな」

うん、本当なら男の子と話すのも緊張して律の後ろに隠れたり、自分の名前を囁んだりとかするんだけどね。

翔「それにしても、アニメ1期では紅茶とケーキだったのがこの小説では紅茶だけなんだな」

あはは……、アニメ見直したのが小説10話を書いてる最中だったからね、修正してたら話が長くなりそうだと判断してカットしたんだ。

翔「……………」

それと、翔に決闘を申し込んだ先輩のイメージとしては、涼宮ハヒの憂鬱の鶴さんの髪が短くなったとお考えください。

翔「確かに、エメラルドグリーンの短髪で女の先輩はそうそう見ないな」

うん、だからそれを想像してもらえば十分だと思うよ。

翔「というか、いつの間に俺は剣術が相当強いという噂が立ったんだ？」

それは作者が流したから。

翔「……………」

頼むから無言で竹刀をこっちに向けないで！？

翔「ハッ！……！」

スッパーン！！

ぶべらっ！

翔「ふう……、悪は滅びた」

て、てめえ……。

翔「それでは誤字脱字などドシドシお待ちしております、それではまた次回にお会いしましょう」

そ、それでは……（パタ

翔「あ、力尽きた」

〈第3話〉（前書き）

第3話です、今回は翔の剣術の強さがくつきりと書けてればな〜って感じですよ。

翔「正直けいおん！に剣術の決闘とかバトルが入るとけいおん！らしさ皆無だな」

それは作者も書いてて思った。

翔「なら何とかしろよ……」

あはは……、作者自身、ファンタジーとかRPGとか大好きだから自然とそういう描写が出るんだよ。

翔「はあ……」

それでは第3話です、どうぞ！

〈第3話〉

〈翔サイド〉

到着すると時刻は4時20分。

「どうやら間に合ったようだね」

既に待っていたのか剣道着に身をまとった昨日の上級生が立っていた。

「先輩には悪いですが、容赦しませんので最初から全力で来てください」

俺は壁に鞆を置くと一言告げた。

「いい根性だね。ルールは簡単、真剣を用いた場合の弱点を竹刀で叩いたほうの勝ち」

「つまり竹刀を真剣を見做し、頭部などを狙えばいいんですね？ずいぶんとわかりやすいルールですね？」

俺はルールを聞きクスッと笑う。

「使用武器は竹刀1本のみ、体術などの使用は相手に攻撃するタイプの物でなければ何でも可だよ」

先輩から補足が付け足されルール説明が終わった。

「それと、タイムは一度のみ、休憩は3分ごとに1分行つ」

細かいところの説明も受けて俺は竹刀を手に取ると軽く素振りをする。

「剣術の型は何でもいいんですか？」

俺は最大の疑問を尋ねてみた。

「もちろん、自分が最も得意とする型で構わないよ」

と了承の言葉が返ってきた。

俺は剣道着を着る事無く対峙する。

竹刀は本来の剣道とはちょっとだけ異なる型を取る。

逆手で竹刀を握る。それだけでもかなりのハンデであるようなものだ。

更に俺は本来竹刀のような剣は使わないので、それも合わさると十分すぎるほどのハンデである。

時刻は4時半、既に体育館内の2階席は人で埋め尽くされていた。

そして、審判と思わしき人物から開始の合図の笛が鳴り響いた。

「はっ！」

先制攻撃を仕掛けてきたのは相手だった。

俺は力量を測るためあえて俺からは攻撃に転じなかった。

怒涛の連撃を繰り出すも、俺はことごとく全てを竹刀で払う。

気付けばインターバルに入り俺はストレッチを繰り返していた。

そして開始と同時に相手の攻撃が始まる。

観客は最早息を呑み試合の行方を見守るしかないのか、誰一人として声を出さない。

そのため体育館内には俺の竹刀と先輩の竹刀が競り合う音だけが響く。

（やっぱ、この程度か……………）

俺は心で小さく呟き全ての攻撃を払う。

唯には精神統一のためと嘘をついたが、噂の通り剣術が最も得意分野である。

それ故俺は俺より強い人を求めているが、早々は現れなかった。

さすがにこれ以上は疲れるだけだと判断した俺は

「タイム」

一言告げ俺は鞆の方へ歩いていくと、鞆の中から真っ白なコートを取り出す。

このコートを取り出し着用した際は、最早遠慮はしないという証だった。

俺はコートを着用し身体に馴染ませるように軽くジャンプを繰り返して対峙する。

試合が再開され怒涛の攻撃を繰り返されるも全て払っていると、不意に体育館の扉が開くのに気付いた。

一瞬だけ見ると先ほどのカチューシャ娘と唯、眉毛の特徴的な女の子、更には秋山さんが現れた。

俺は視線を戻すと反撃の機を伺いながら相手の全ての攻撃を払っていた。

俺は一度だけ相手と距離を取り構えを変えた。

竹刀を右側の床に着くほど剣先を降ろし独自に編み出した、攻撃特化であり防御特化でもある型にする、本来俺が最も得意とする型である。

竹刀を握る手も逆手ではなく正規の握り方に戻し、深呼吸をし構える。

「神藤君頑張つて!!!」

不意に秋山さんから応援の声が聞こえた。

俺はそれに小さく笑みをこぼす事でしか応えられなかったが、その応

援だけで十分な力が出せると確信した。

目を閉じ、相手の攻撃の軌道を読む前にイメージし、そして目を開く。

既に半分以上進んでいたが俺の間合いに飛び込んできてくれたのだ。

相手の竹刀は既に突きの体勢を取り俺の喉元を狙っていた。

俺はそれを左に空いたスペースに左足を半歩踏み込み身体を捻り回避し、一回転し相手の背後に立ちカウンターを脳天に叩き込んだ。

俺が叩き込んでから少し間が空き

スパァン！！

竹刀の小気味良い音が高らかに鳴り響いた。

その威力は若干抑えてあるものの勢いを増した竹刀が脳天に直撃するのだ、相手は一撃で膝をつく。

俺は竹刀を床に置き一歩踏み出す。

すると体育館全体から大歓声が沸き起こった。

不意に上級生がヨロヨロと立ち上がり

「いやいや……、完敗だよ、本当に強いね君は」

面を外し爽やかな笑顔で告げてきた。

「あれだけ綺麗に、それもストレートに倒されたんじゃ清々しい気分だよ」

と笑い付け足し告げてきた。

「先輩も結構いい筋してますよ、後は努力次第で俺を抜けるかもしれませんよ」

嘘偽りは一切込めていない真実を答えておく。

俺はそれ以降何も言わなかった。

「神藤！」

背を向け鞆の元に向かう俺に上級生から声をかけられた。

俺は振り返ると

「神藤、剣道部来ないか？」

と部活勧誘された。

「遠慮しておきます、俺の型は特殊な型だから、剣道では一切無効な型なので。それに……」

一度俺はそこまで言うとおえて区切ってみる。

「それに？」

俺は一度深呼吸し

「俺はもう軽音部の一員なんで、剣道部入部は辞退させてもらいますよ」

俺は言い終わると同時に鞆の方へと歩き出した。

鞆の元へ辿り着くと同時に

「神藤」

と軽音部の面々が集まってきた。

が、よく見てみると秋山さんは顔を真っ赤にし硬直していたらしく、カチューシャ娘に引きずられていた。

（……極度の恥ずかしがり屋か？）

心の中で呟くと

「凄い！カッコ良かったよ！」

唯が興奮気味に告げてきた。

「神藤も特技があるもんだな、ホントに意外だけど」

一言多いカチューシャ娘。

「途中から見ましたが、あの人を倒すなんて凄いですね」

と眉毛の女の子。

「……………」

未だ顔を真つ赤に硬直したままの秋山さん。

「ありがとうな、それとカチューシャ、お前は後でデコピンな」

と俺は唯と眉毛の女の子に礼を言つとカチューシャ娘にはそう告げておく。

カチューシャ娘はその言葉を聞いてぶうと頬を膨らませていた。

「それから……秋山さん」

俺は未だに硬直している秋山さんに向かって

「ありがとう」

とだけ告げておいた。

その言葉に秋山さんはハツと復活するも、俺のお礼の意味がわからず？マークが浮かんでいた。

羽織っていたコートを鞆に戻し鞆を肩に担ぐと

「よし、部室戻るかー」

と先陣を切つてカチューシャ娘が歩き出した。

俺たちはみんなに見送られながら部室に向かうことに。

部室に戻るとカチューシャ娘が

「そっぴや自己紹介してなかったな、私は田井中律、律って呼んでくれればいいからな」

部室に戻ると同時に開口一番自己紹介を始めた。

「私は秋山澪、改めてよろしくな二人共」

復活した秋山さんも同じく自己紹介する。

「私は琴吹紬です、よろしくね」

それぞれ改めて自己紹介を交わす。

「私は平沢唯、楽器はまだ出来ないけどよろしく!」

シュビッと挙手しながら自己紹介する唯。

「俺は神藤翔、まあ入学式で全校生徒の前で自己紹介したから知ってるだろうがな」

俺も自己紹介しておく。

「そっぴや、神藤は楽器出来るのか?」

田井中が尋ねてきた。

「一応ギターを独学で、な、昔ちよつとやってた程度だからそこまです上手くないが」

田井中の質問にサラッと答える。

「へえ、どんなギター使ってるんだ？」

すると秋山さんが俺に尋ねてきた。

「確か、ミュージックマンだったかな、記憶が曖昧だから覚えてないんだ」

と答えると秋山さんは驚いた表情を浮かべた。

「ミュージックマンって、相当高価なギターじゃないのか？」

秋山さんが恐る恐る尋ねてきた。

「さあな、正直値段云々は気にした事が無いからな」

俺は正直に答える。

すると唯から

「ねえカケちゃん？」

声をかけられた。

「何だ？」

最早唯に力ケちゃんと呼ぶなど言っても無駄だと判断したのでスル
ーする。

「私ギター持っていないんだけど、いくらぐらいで買えるの？」
と尋ねてきた。

「んー……、その辺は俺もよく知らないからな……」

俺がそう答え秋山さんの方を見ると

「安いのは1万からあるけど、安すぎるのじゃダメだから、最低3
万以上のギターがいいかも……」

秋山さんは俺の代わりに答えてくれた。

「三万円！？私のお小遣いの半年分……」

唯がガクガクと震えていた。

（まあ……、一般の学生が気軽に買える値段ではないわな……）

と言いつつになったがグツと堪え心の中で呟く。

「高いのは10万以上するよ？」

秋山さんの一言に唯は田井中に向き合い

「りっちゃん」

「ん？」

「部費で落ちませんか？」

満面の笑みで田井中に尋ねた。

すると田井中は即答で

「落ちません」

こちらも満面の笑みで答えた。

「なら今週の日曜にでも楽器店行ってみようぜ」

と田井中が進言してくるので

「いいんじゃないか？」

否定することなく俺は同意しておく。

どうやらみんな了承したようなので明後日の予定が立った。

「さて、そろそろ帰りますかー」

そんな田井中の一言により俺たちは部室を後にし途中まで一緒に下校した。

（薄サイド）

神藤君と唯とムギと別れ、私は律と肩を並べ帰宅していた。

「いやー、神藤のやつ剣術が得意とはなー」

律はさっきの体育館での一件を思い出しながら感心したように呟いていた。

「私も驚いたよ、それに相手の人って、剣道全国大会女子の部で3回連続優勝を収めてる実力者らしいしな？」

ゆっくりとした歩幅で歩きながら律と言葉を交わす。

「今度、また機会があれば神藤に剣術の型とか色々見せてもらおうぜ」

そんな事を言う律に私はクスッと笑い

「ああ、そうだな」

先ほどの試合を思い出しつつ答えた。

正直に言えば、もっとあの試合を見ていたかった。

だけど、私は疑問に思ったことがあった。

（あの時の神藤君……、多分だけど全力を出してなかったんじゃないかな……？）

そんな思いが一瞬だけ駆け巡る。

（全力を出せなかったか、あるいは全力を出す必要の無い相手だったから……なのかな？）

私は一度だけ立ち止まり歩いてきた道を振り返る。

が、もうかなり歩いていたためか神藤君たちの姿は見えなかった。

「ん？どうした遷？」

律も立ち止まり私に声をかけてきた。

「いや、なんでもない」

私は急いで律の隣に立ち二人で歩き始める。

（そうだ……、今度聞いてみよう……、神藤君答えてくれるかな……？）

などと考えながら私と律は帰宅した。

〈第3話〉（後書き）

最近とある曲が気に入った作者です。

翔「何だ？」

最初はY o u t u b eで聴いてただけど、歌詞と曲のテンポが凄く好きでC Dも買ったZ E 㐂

翔「で、少しは覚えたのか？」

少しどころかほぼ覚えたよ、英語のところがどうしても躓くけどそれ以外は完璧だな。

翔「そうか、それはよかったな」

さて、今回の話は翔の強さが異常ですね。

翔「そうなのか？あれくらい普通だろ？」

普通の人が、突きを繰り出そうとする竹刀を搔い潜って避けるなんて芸当、不可能だよ？

翔「ま、まあそれは練習次第で何とかなる」

しかし、漣・律・唯は書きやすいんだがどうしてもムギのようなお嬢様キャラって書きにくい……。

翔「お嬢様キャラなんて書いたことないしな」

まあね、だから大よそんな感じかな？って書いてるのは否めない。

翔「と作者も言っているので、ご指摘があればお願いします」

それから、翔がミュージックマンを持っているって設定ですが、作者はギターに詳しくありません。

翔「なら何故持たせた」

ギターの通販サイトで一番高い値段のギターを見つけて、それを翔に持たせようって思ってたね。

翔「ダメだこの作者」

酷っ！！

翔「まあもう慣れたけどな」

慣れるなよ。さて次回は、翔の過去について少し触れます。完全に触れるのはもう少し後になります。

翔「それでは感想などございましたらよろしくお願いします」

それではまた次回！

〜第4話〜（前書き）

作者です。今回は若干シリアスっぽく書いてみました。

翔「今までシリアスのシの字すら書いた事無いけどな」

う……、その通りですorz

翔「なので、今回のシリアスが全然シリアスっぽく感じ無いと思います」

後、若干某ギャルゲーっぽく見えるのは仕様ですorz

翔「在り来たりだな」

返す言葉が無いorz

翔「今回は少し長いですが、第4話です」

〈第4話〉

〈翔サイド〉

唯が軽音部に入部した週の最後の授業が終わった。

俺は軽く伸びをしながら片付けをしていると

「カケちゃん、部活行こう?」

前の席に居る唯から声をかけられた。

「ああ、行くか」

俺は鞆を右肩に担ぎ唯と共に部室へ向かう。

ギターは持ってきていたが、予め朝のうちに部室に置いておいたのだ。

部室に入ると既に秋山さん、田井中、琴吹さんが揃っていた。

「こんにちはー」

唯が挨拶し3人からも挨拶が交わされる。

俺も軽く挨拶し鞆を適当な場所に置くと

「はい、二人共紅茶です」

とすかさず琴吹さんから紅茶が出された。

「ありがとう」

俺は礼を述べると一口飲んでみる。

以前とは違う茶葉のようだった。

（これ……、確かダージリンか？）

そんな事を思い

「これ、ダージリン？」

心で呟いた言葉をそのまま琴吹さんに尋ねてみた。

「ええ、そうよ」

琴吹さんは笑みを浮かべ答えてくれた。

俺は以前、小学校に入る前に一度だけ両親が飲んでいたダージリンを飲んだことがあったのだ。

今回琴吹さんが淹れたダージリンは、その時飲んだダージリンにそっくりな味だった。

「神藤、紅茶に詳しいのか？」

不意に田井中が俺に尋ねてきた。

「いや、昔一度だけダージリンを飲んだことがあってな、その時飲んだ味とそっくりだったから驚いてるんだ」

俺の過去をちよつとだけ教えつつ答える。

すると琴吹さんが

「そのダージリン、いつどこで飲んだか覚えてるかしら？」

と尋ねてきた。

「確か、小学校に入る前に家で両親が淹れてたのをもらったんだっけな」

俺は腕を組み天井を見上げながら思い出すように答えた。

すると琴吹さんは思考を巡らせている様子だったが、結論に辿り着けなかったのかしょんぼりとしていた。

「そっぴや神藤、ギターどれだ？」

またしても不意に田井中が俺に尋ねてきた。

「これだ」

俺は席を立ち立てかけておいた自分のギターケースからギターを取り出す。

ネックにはバースアイやメイプルなどの貴重な木材が使われているギターを取り出す。

それを見た秋山さんは

「凄い……、本物のミュージックマンだ……」

席を立ちフラフラとしながらも俺のギターに近付き呟く。

俺はその姿を見てクスッと笑い

「持ってみる？秋山さん」

思いついた事を提案してみた。

すると秋山さんは目を光らせ

「いいのか!？」

物凄い勢いで俺を見て尋ねてきた。

俺は小さく頷きギターを手渡した。

「なあ漣？そのギター、漣から見ていくくらいすると思うんだ？」

田井中が俺のギターを持つ秋山さんに尋ねた。

「詳しくはわからないけど……、ここまで保存状態が良くてしかも貴重な木材をふんだんに使って……」

秋山さんは田井中を見ることなく呟くように言葉を紡ぎ出す。

「多分だけど……、これ本当に50以上する……、もしかしたら100行くくらいかも……」

俺にギターを差し出し返却しながらもおおよその金額を呟いていた。

「……………へ?」

金額を聞き唯と田井中の声がハモった。

秋山さんからギターを返却されると俺はストラップを肩に通し軽くギターを弾いてみる。

しかし、久しぶりに弾くためチューニングがあっていなかったのでチューナーを使いチューニングを始めた。

最初は感覚を取り戻すためにアンプを使わず弾いてみる。

チューニングの調整も終わらせ、ギターをアンプに繋ぎ

「言っておくけど、久しぶりだから腕が落ちてると思うから、ちょっとだけ弾くな?」

と唯たちに向け告げる。

みんなの頷く様子を見ると俺はギターを構え本格的に弾き始める。

〃

弾いている最中、不意に昔の記憶が蘇って来た。

かすかに覚えている、生前の両親と姉の事。

楽しかったあの頃の記憶が蘇り始める。

その記憶を断ち切ろうと俺は無意識のうちにギターを弾くのを途中で止めてしまった。

（いつかは断ち切らなきゃならないと思ってたが……、予想以上に難しいな……）

いつしか俯いていた俺にみんなから拍手を受けた。

俺はギターをケースに戻しみんなに悟られないよう笑みを浮かべる。

「凄いじゃないか、神藤」

田井中から賞賛の言葉をもらった。

「そうか？ありがと」

俺は自身のテクニックに関しては無頓着だった。

すると秋山さんが

「……何かあったのか？」

神妙な面持ちで尋ねてきた。

「……何の事だ？」

俺はあえて知らないフリをしたが

「弾き終えた後、なんだか思い詰めたような表情だったからさ？」

追求しようと尋ねてきた。

まさか俺の俯いていたところを見て、秋山さんがそこまで読める人だとは思っていなかった。

俺は心の中で秋山さんの勘の鋭さに驚きながらも冷静な表情で

「それは、久しぶりに弾いたから」

と言いつきを言いかけたところで

「違う！」

秋山さんが若干声を荒げ否定した。

琴吹さんと唯は驚いたようだが、俺と秋山さんのやり取りを黙って聞いていた。

「言いにくい事なのかも知れない、けど……」

先ほど否定した時より声のトーンを落とし一区切りつけ

「もし、私たちを仲間で友達だと思うなら教えてほしい、少なくとも私は神藤君を仲間で友達だと思ってる、だからもし良かったら話して欲しい」

秋山さんは真っ直ぐ俺を見つめたまま告げてきた。

俺は秋山さんから視線を逸らし田井中・琴吹さん・唯の順に見やる。
すると3人とも大きく頷き田井中が

「こうなった遷は意地でも引き下がないからなー、話すなら早めに話したほうがいいぞー？」

ちよつとばかり場を和ませるように言ってきた。

俺はそれを聞くともう一度だけ全員を見渡し

「……ずいぶん昔で、それも記憶も曖昧だけどいいのか？」

再確認の意味を込めて尋ねてみた。

すると全員頷いてくれた。

俺は一つ溜め息を漏らし天井を見上げ

「あれは俺が小学校に入る1年前の話だ……」

俺は小さく語り始めた。

く 零サイドく

神藤君のギター演奏は本当に凄かった、としか言いようがないほど完璧だった。

けど、私は神藤君の俯き浮かない表情を見ると同時に途中で演奏が終わった。

私は浮かない神藤君を見たが為に、質問せざるを得なかった。

そして私の質問にのりくらり避けようとする神藤君を見て、私はつい声を荒げてしまった。

何故そうしてしまったのかは私にもわからなかった、ただ、気付けば私は神藤君の事をもっと知りたくなっていた。

そして神藤君の口から語られる、神藤君自身の過去の話。

「ちょうどあの事故が起きる半年ほど前の話だな……」

本来はこういう時には口を挟んではいけないとわかってはいたけれど

「あの事故って……？」

気になっていたのでおずおずと尋ねてみた。

神藤君はそれを聞かれるのを予想していたのか

「旅客機墜落事故の事だ、今から10年ほど前のね」

と答えてくれた。

私は記憶を辿り10年前の旅客機墜落事故があつたかを思い出す。

が、すぐには思い出せず私は思い出すのを一旦辞め、神藤君の話に耳を傾けた。

「その当時、俺はあのギターがほしくて親父に頼んだ事があつた。すると親父がああギターを持ってきて俺にプレゼントって事で、俺は喜んでもらい受けた」

神藤君は天井を見上げたまま語り続ける。

「そんな中、俺・親父・お袋・姉貴の全員で家族旅行に行く事が決まつたんだが、当日に俺は風邪をひいて寝込んだんだ」

昔を思い出すように目を閉じゆっくりと言葉を紡ぎ出す。

「親父たちは残ると言ったが、その当時いつもお世話になつて近所の人が俺の看病をするから楽しんで来なさい、って言って親父たちは旅行に行った」

神藤君の過去を聞き、私たちは誰も言葉を発する事が出来なかった。

「そして親父たちを乗せた旅客機はフライトを始めたが……」

そこで一度だけ区切り神藤君は溜め息を吐き出し

「今でも原因は不明だが、機体のコントロール制御不能で墜落したんだ」

吐き出すように小さく告げた。

「親父たちが亡くなってから時は進んで俺が中学1年の頃に進むんだが」

先ほどより明るめな声で更に語りだす。

「俺は転校した先で知り合ったやつらとバンドをしないかと持ちかけられ、俺はそれに参加した。ちょうどその時空いていたのが、ギターだったんだが」

そこまで語ると神藤君は天井から視線を私たちに戻し

「何度弾いても、弾く度にギターをもらった昔の事を思い出して途中で弾けなくなるんだ。頭では弾かなきゃ、と思っけていても身体が強制的に弾くのを辞めるんだ、トラウマみたいなもんだよ」

ここまで聞いて私は

（それでさっき演奏途中で止めたのか……）

と心の中で一人納得していた。

それと同時に

（それに比べて神藤君の事知らないのに無理やり聞き出すような事言つたよな私……、謝らなきゃ……）

罪悪感を覚えていた。

私はすぐ実行に移そうと思い

「神藤君……」

少し控えめに、でも相手に聴こえるようにはつきりと呼びかけた。

「ごめん、本当なら思い出したくないはずなのに私が無理やり聞きだすような事して……」

私は座つたままで頭を深く下げ謝罪する。

すると彼は

「構わないよ、いつかは乗り越えなきゃならない壁なだけだし」

こんな空気の中でも冗談交じりに答えてくれた。

頭を上げ彼の顔を見てみると、微笑んでいた。

「それに、秋山さんだつてまさかこんな事だつた、なんて悪気があつて聞いたわけじゃないんだから俺は気にしないよ」

更につけたし私を許すと言ってくれた。

私はそんな彼を、ただジッと見つめるしか出来なかった。

く翔サイドく

俺は一通り語り終え、秋山さんの謝罪にも答えてあげたところで田井中が

「んじゃあ、カケの壁を打ち砕くためにも私たちも練習しようぜ」

と至極真つ当な事を言い出した。

「いや、それ以前の問題があるんだが？」

俺はすかさずにツッコみを入れる。

「へ？何かあったっけ？」

すっ呆けた表情で尋ねてくる田井中。

俺は左手を額に当てため息を吐き

「唯のギター、どうすんだよ田井中？」

と尋ね返す。

すると田井中は手をポンッと叩き

「そついやそつだった！」

脳天に竹刀を全力で打ち込みたくなるような表情でそんなセリフを吐き出した。

更に田井中は思い出したように

「そついやカケって未だに洩やムギや私の事は苗字で呼ぶんだな、唯は唯って呼ぶくせに？」

田井中が口角吊り上げ笑みを浮かべ尋ねてきた。

「俺は呼んでも構わないが……、みんなが名前で呼ばれるのには抵抗があるのかもって思ってたからな」

そう答えると田井中から

「みんな名前で呼んでほしいって思ってるよ」

と両手を後頭部で組みながらやれやれと言った表情で田井中が答える。

俺はその言葉を聞き秋山さん、琴吹さん、田井中を見る。

3人は小さく頷いた。

「それじゃ……、改めてよろしくな、漑、紬、律」

俺の言葉に律は嬉しそうに頷き、漑は恥ずかしそうにしながらも小さく頷く。

「ムギって呼んでください!」

不意に紬が俺に一言告げた。

「ん……、わかったムギ」

俺がそう答え名前を呼び直すとムギは嬉しそうな表情を浮かべる。

「んで律、明後日何時にどこ集合するんだ?」

脱線した話を戻そうと俺は重要な事を律に尋ねてみた。

「そうだな……、とりあえず11時に商店街入り口前でいいんじゃないか?」

とのお言葉をもらった。

「わかった、だが俺を簡単に見つけれるかな?」

俺は普段の私服を思い出し律に挑戦的な言葉を投げかけてみた。

「私が知ってるだろ？」

漑は以前俺と会っているため尋ね返してきた。

「いや、明後日は本来の私服で出るからな」

そう返してみると漑は腕を組み

「神藤君と知り合った日の私服じゃないとなると、目印になるようなものは無いのか？」

更に質問が飛んできた。

「目印はそうだな……、俺の外見を覚えておく、としかいえないな」

大雑把ではあるもののそう答える。

すると律が

「つてか漑、神藤君じゃなくて翔だろ？」

茶化すように漑をからかいだす。

「す、すぐに名前で呼ぶのは恥ずかしいだろ！」

その言葉に漑は顔を赤くし反論する。

が、律には通用しないのか更に漣をからかっているため

「名前は慣れるまでは好きに呼んでいいさ」

助け舟を出すと唯から

「だからカケちゃんだって！」

唯オリジナルのあだ名を告げてきた。

「だからそれはやめろと何度言えればいいんだ、唯よ……」

そのあだ名を聞き俺は諦めが9割を占める溜め息を吐き出す。

「ま、何にせよ明後日ギター買わなきゃ話にならないから……」

俺は一言呟き考え、ある事に気付いた。

「唯、俺のギター使ってみるか？」

俺は考えた先に導いた質問を投げかけた。

すると唯は

「んーん、私が自分で買って練習したいから」

と答えてきた。

「そっか、ところでこの部室やけに物が揃ってるのが物凄く気になるんだが……？」

唯から視線を外しグルツと見回し尋ねてみる。

漑は苦笑しながら

「このティーセットとかは全部ムギが持ってきてるんだ……」

と答えた。

（これ全部自前かよ……）

改めて部室を見回す。

ティーセット以外にもコーヒースェット、ケーキを乗せる皿等色々な物が置かれていた。

（……いいとこのお嬢様っぽいな）

俺は心の中で呟くと無意識に苦笑を浮かべていた。

「そついえば漑ちゃんは何でベースをやらうと思ったの？」

と不意に唯が漑に質問した。

すると漑は

「だ、だってギターは………、は、恥ずかしい………」

顔を赤くしながら答えた。

「恥ずかしい!？」

唯がすかさずツッコむ。

「だってギターってバンドの中心に立って演奏しなきゃならないだろ？」

澪が続けて答えると顎に手をあてる。

「その立場に自分なるって考えただけで……………」

しばらく考え込んだ後、澪の頭から煙が立ち上り澪は卒倒した。

「澪のスキルの一つ、恥ずかしがり屋発動だな」

クツクツと律が笑いながら卒倒する澪を見て一言呟いた。

「まあ気持ちはわからないでもないが……、いくらなんでも繊細すぎだろあれは……」

静観していた俺は律に向け一言答えておく。

「まあ、澪の恥ずかしがりを何とか克服させてやりたいんだけどなあ、難しいところなんだよ」

律は他人事ではあるものの、友人をしつかりと心配するいいやつだった。

「つか、スキルの一つって言ってたが他にもあるのか？」

俺が律に尋ねると

「ああ、あるよ、恥ずかしがり屋・人見知り・怖いものダメ・負けず嫌い・寂しがり屋の5つだ」

律は指を折りながら答える。

「ただスキル持ってたんだよ……」

俺は苦笑混じりに答えた。

「でも何故か濡のやつ、カケには人見知りも恥ずかしがりもしないんだよな」

律が意外な一言を呟いた。

「んなまさか、気のせいだろ」

俺たちのやり取りを横目に

「ムギちゃんってキーボードいつからやってるの？」

今度はムギに質問する唯。

「4歳の頃からピアノを習っていたの、コンクールで賞をもらったこともあるのよ？」

さらりと驚きの一言を返すムギ。

（何で軽音部に居るんだろう……）

という唯の心の声が聞こえそうだった。

すると今度はこちらを振り向き

「りっちゃんはドラマーって感じだよねー」

律に質問が飛んできた。

「なっ、私にだってドラムを始めた理由があるんだからな!？」

唯の質問にまくし立てるように答える律。

(いったいどんな理由だかな……)

「へえ、どんな理由?どんな理由?」

唯は目を輝かせながら律に尋ねた。

「それはえっと、ほらあれよ……」

律は言いにくそうに視線を泳がせながらゴニョゴニョと呟き

「……………カッコいいから……………」

聞こえるか聞こえないか微妙なほど小さな声で呟いた。

「無いんじゃない……………」

と唯からツッコまれる律。

（唯にツッコまれるとは思ってなかっただろうな……）
すると律が

「だってさー！ギターとかベースとかキーボードとかチマチマしたの見てると……、キーッ！ってなるのよ！」

キーボードやギターを演奏する自分を想像しているのだろう、そう唯に告げると自らの頭をガシガシとかき肩で荒い呼吸を繰り返しながら言い訳染みた事を言ってきた。

（ま、気持ちはわかるがな……、だからって安直過ぎるだろ律よ……）

「カケちゃんはどうしてギターやってるの？」

と唯が最後に俺に尋ねてきた。

「これと言った理由は特に無いかな、強いて挙げるなら親父がギターを弾いてるのを見て親父を超えたかったのもあるかな」

すっかり冷え切ってしまったダージリンを飲みつつ答える。

「カケちゃんのお父さん、そんなに凄い人だったの？」

唯は興味津々に尋ねてくる。

「凄い、なんてもんじゃなかったな、ギターはおるか、ベース、ドラムの腕もかなり上手い部類に入と思うぞ」

そんな親父からギター、ベース、ドラムの一通りは教わったがな、
とつけたし答えておく。

すると復活した漣がおずおずと

「神藤……じゃなくて翔、利き手どっち？」

と尋ねてきた。

「ん、俺は両利きだけど？」

そう答えると漣はベースを俺に差し出し

「じゃあちよつと弾いてみて？」

俺は了承の意味を込め頷くと漣からベースを受け取りレフティベ
ースだと判断すると、右手で弦を押さえ左手にピックを持ち軽く弾く。

1分程弾き俺はベースを漣に返す。

「凄いな翔、演奏の幅がホント広がるよ」

ベースを受け取る漣から賞賛の言葉を受けた。

というか、最早漣は俺の事を名前で呼ぶのに抵抗がなくなったのか
普通に俺の名前を呼ぶ。

（ま、無意識だろうし指摘するのも吝かだろうから黙っておくか）

心の中で小さく納得すると律から

「そんじゃ、明後日の為に今日は早めに帰るかー」

高らかにそう告げてきた。

「確かに、唯がギターを買うまでは全員揃って練習は無理だからな、俺はそれで構わないぞ」

俺は否定する理由も無いので律の意見に賛同しておいた。

どうやら他のみんなも賛同したようで、俺たちは帰宅することに。

「翔、ギターどうするんだ？」

漣から部室を出る前に尋ねてきた。

「あー……、とりあえず持って帰るか……」

本来は置いて帰ろうと思ったが、さすがに気が引けたので持ち帰る事に。

俺たちは部室を後にし、正門を抜け途中の交差点まで一緒に帰宅する事にした。

「そんじゃ、明後日の１１時に商店街の入り口でな」

律の言葉に応えるように右手を軽く上げ、唯と共に帰宅した。

〈第4話〉（後書き）

ヘタレで文才の無い作者です。

翔「その小説の主人公の翔です」

いやあ、ギターにそんな想いが詰まっていたとは。

翔「書いたのお前だろ、だがあの頃の記憶はほぼ曖昧だけだな」

まあね、深く知ってる人は恐らく一握りぐらいだろうし。

翔「それにしても若干シリアスっぽいけどシリアスっぽくないな、ホント」

うぐ……、色んな小説を読んだりしてはいるけど、いざ書くとなると結構難しいんだよね、このシリアスシーンって……。

翔「ところで、第0話でもあったが、親父の遺産ってどれくらいあるんだ？」

んー、正確には作ってないけど、まあ億単位だって覚えておけばいいよ。

翔「……………」

因みにその一部は翔の通帳に、残りは翔の家の金庫室に厳重に保管されてるよ。

翔「うちに金庫室があったとは……、後で確認しに行くか」

あはは……、さて今回は唯の楽器購入編の前にオリストです。

翔「簡単に言えばこのシリーズ（？）シーンのその後、って所だな」

先に言っなよ。第6話で唯のギター購入編となります。

翔「そういえば一つ疑問なんだが」

何だ？

翔「この作品にOPとEDをつけるとしたらどんな曲にするんだ？」

唐突だね……、とりあえず未定だね。

翔「ダメ作者」

うるさい。

翔「ダメ糞作者」

……。

翔「はあ……」

それでは次回にお会いしましょう。

〈第5話〉（前書き）

どうも、作者ことエターナルです。

5話辺りから漣が翔を意識し始めます。

どうも作者はこの辺りからキャラ崩壊が始まったんじゃないかと考えてますorz

それでは本編をどうぞ。

〈第5話〉

〈漣サイド〉

「はあ……」

翔と唯とムギと別れ私と律の二人になってから何度目かわからない溜め息が出る。

「どうしたんだよ漣、さっきから溜め息ばかりじゃん？」

律が私の溜め息の原因を知ろうと尋ねてきた。

「私、翔に嫌われたかもな……」

私は溜め息を吐くと同時に小さく呟く。

すると律は真顔で

「へ？何で？」

頭に？マークを浮かべ尋ねてきた。

「だって、翔の過去とか無理やり聞きだしてただろ？私」

そう答えると、律から

「そう思うなら力ケに直接聞いてみればいいんじゃない？」

と答えが返ってくるが

「私から電話とかメールなんて無理だよ……、それにアドレスも番号も知らないし……」

そう告げると律が

「仕方ないなー、零の為に私が代わりに聞いておいてあげるよ」

気付いたら私だけが翔のアドレスと番号を知らないみたいだった。

「そんじゃ、カケから何か聞いたらメール出すよ」

律が自宅に入る前にそう一言告げて家の中へと消えていった。

一人になると不意に私の寂しがりが出てしまう。

しかし、それ以上に翔が私を嫌っているかどうかが気になってしまった。

「嫌ってないといいな……」

夕焼けに染まる空を見上げ私は呟くと自宅へと向かい歩き出した。

く翔サイドく

自宅に着きいつものように音楽を流してベッドに寝転んでいると、律から着信が入った。

「おーっすカケ、ちょっと時間もらっていいかー？」

通話が始まると開口一番に時間を取るよう言われた。

「電話で済むならいいがな、何の用だ？」

そう答えると律から

「カケってさ、零の事嫌いになったか？」

そんな事を尋ねられた。

俺は訳がわからず

「何でだ？」

と尋ね返すしかなかった。

「いやあ、カケたちと別れた後、零が溜め息ばかりついてて理由

を聞いたら、今日の翔の過去の事を無理やり聞きだしたから嫌いになったんじゃないかって」

その言葉を聞いて

「ああ……、なるほどね」

俺は納得した。

「それで律が仲介役を買って出たと、そんなところか？」

俺の質問に律は

「そ、澪自身からカケに電話とかメールは無理だって言うからな」

それにアドレスも番号も知らないらしいし、と聞かされた。

（そういえば、帰りの時澪に聞くのすっかり忘れてたな……）

俺たちは部室を出る前にアドレスと番号を赤外線で交換していたが、帰宅前に律にからかわれ気絶した澪を呼び覚ます事に必死になっていたため交換するのを忘れていた。

俺は自身の抜けているところに小さく溜め息を吐き出し

「律、良かったら澪の番号をメールで教えてくれないか？」

思い切って尋ねてみた。

「ん、わかった」

すると律は深くは追求せず了承してくれた。

「悪いな、律」

一言俺は謝罪すると

「いいって、カケに考えがあるんだろうしな」

律は快く答えてくれる。

「んじゃ、メール送るから切るな」

一言告げると即座に律は電話を切った。

「俺が返事する前に切るなよ……」

不通の音が鳴り響く中俺は小さく呟き苦笑いし律からのメールを待った。

数分後、律からメールが届いたので内容をチェックする。

そこには零の電話番号が掲載されてある上に、更には

「何か零に関する事で困ったことがあればいつでも相談乗るからな、遠慮するなよ？」

と記載されていた。

俺はクスリと笑うと本文に

「ああ、また何かあったら頼む、それとありがとな、律」

短いお礼の言葉を込め送信する。

「さて……、遅い時間にかけても迷惑だろうし今からかけてみるか……」

時刻は18時をちょっとすぎた辺りだった。

俺は律のメールに記載されていた番号に電話をかけてみた。

く 零サイドく

私はベッドに寝転び律からの返事を待っていた、正直不安で早く連絡が欲しかった。

すると携帯が振るえたのでガバツと起き上がり携帯を手に取る。

そこには知らない番号からの着信だったので、出ない事を選ぼうとしたが、もしかしたら、という小さな願いを込め電話に出てみた。

「あ、漣？俺だ、翔だ」

通話状態になり聞こえてきたのは案の定翔の声だった。

私は頭では律が教えたのだろうと考えているが、パニックになり

「ど、どうして翔が私の番号を知ってるんだ!？」

と尋ねてしまった。

すると翔から

「ん、律からさっき電話があつてな、話をして律から漣の番号を教えてもらったんだ」

予想通りの答えが返ってきた。

正直、今翔と上手く話せるかわからない、もし翔が私を嫌ってる事を翔自身の口から聞きたくないからだ。

「さっき律から聞いた、俺が漣の事を嫌ってるかもって思ってるんだって？」

翔はいきなり核心を突く一言を尋ねてきた。

「……うん」

私は聞きたくない反面、小さな希望を胸に頷いた。

「正直に答える、俺が漑を嫌う理由が無い」

即答するかのように翔が告げてきた。

その言葉を聞いて私は

「で、でも、私翔の過去に無闇に踏み込んだんだし嫌われる理由だってあるはずだぞ？」

私自身帰宅前に思っていた事を尋ね返してみると翔は電話越しに小さく笑っているのが聞こえた。

「さっきも言っただろ、それくらいもう気にしてないって、それに」

翔はそこで一度区切る。

「それに？」

私は続きが気になり尋ねてみた。

「それに、過去に昔の事で土足で踏み込まれた事は何度もあったけど、漑の場合は特別気にならなかったからな」

と答えてくれた。

「じゃあ……、翔は私を嫌ってない……んだな？」

翔の言葉を聞き私は不安になりながらも尋ねてみる。

「ああ、だからあまり気にしないでいいからな？」

翔は即答で答えてくれた。

私はその言葉を聞き安堵の溜め息を吐き出した。

「そうだ、漣とアドレスと番号交換するの忘れてたから、明後日交換しておくか？」

翔は私もすっかり忘れていた事を尋ねてきた。

「うん、そうしようか」

先ほどとは打って変わって明るく答える。

その雰囲気が変わったのが翔にも伝わったのか

「オッケー、約束な？そんなじゃ明後日の１１時に会おうな」

と翔からも明るい声が聞こえてきた。

私はそのまま切るのは嫌になったので

「翔……、その……良かったらもう少し話さないか？」

私は思い切って尋ねてみた。

「ああ、いいぞ？何を話す？」

翔は私の提案にすぐさま乗ってきてくれた。

それから1時間ほど、私は夕飯に呼ばれるまで翔と他愛も無い事を話しては笑い合った。

「それじゃ、そろそろ夕飯だから、またな翔？」

私は翔に告げ電話を切ろうとする。

すると、翔から

「ああ、わかった。それと、いつでもどんな相談でもいい、俺に係あってもなくても相談事があるならいつでも連絡してきな」

と心強い事を言われた。

「うん、わかった、その時はよろしくな？」

私は素直にその好意に甘える事にした。

「それじゃ、また明後日」

翔はそれだけを告げてきた。

「ああ、また明後日」

私はそれだけを告げ返すと翔から電話を切った。

電話が切れた途端無音になり、部屋に一人だと気付くと急に寂しい
気持ちが入み上げてきた。

（でも……、翔が私を嫌ってなくてよかった……）

ふう、と一息つくと律に先ほどの事をメールで報告し、足取りが軽
くなったまま部屋を後にした。

〈第5話〉（後書き）

皆様こんばんは！エターナルです。

翔「今回は零視点が2回出て来たな」

うん、電話で話すって事でヒロインである零の心境が上手く書けて
ればなって思ってたね。

翔「その判断は作者ではなく読者の皆様が判断する事だからな」

そうなんだよね……。なので上手く書けてないと思った方がいらっ
しゃいましたら遠慮なく仰ってください！

翔「……メンタル面が豆腐並みに弱い癖に」

orz

翔「まあそれはともかく、第6話はいつ投稿する予定なんだ？」

それは26日の21時以降になるかな、恐らくだけど。

翔「ふーん」

反応薄っ！？

翔「そういえば、この小説以外の小説も書いてるよな」

うん、リアルの友人にこの小説の話で色々相談してたら「オリジナ

ルの小説を書いたら？」と言われてね、オリキャラ紹介・プロローグ・1話までは書いてるよ。

翔「へえ、それでその小説はいつ投稿予定？」

未定！

翔「はぁ……」

溜め息ばかりの翔は置いて、次回は唯の楽器を購入します。バイトシーンはカットしますので悪しからずorz

翔「というか、学園祭までが長いな」

言うなorz

翔「それではこの辺りで失礼します」

それではまた次回！

ゝ第6話ゝ（前書き）

今回はいつも以上にグダグダです、ご了承くださいorz

因みに作者はD Rと麻雀が好きなので翔にもやらせました。

それでは唯の楽器購入編の第6話です。

〜第6話〜

〜翔サイド〜

二日後、俺はみんなの待ち合わせ場所の近くに来ていた。

「ふわ〜……、あふ……」

俺は若干寝不足気味に大きく欠伸をしてしまった。

時刻は10時45分、既に漑と律とムギは到着しているが未だに俺に気付いていない。

因みに俺の服装は、黒のカッターシャツに黒のズボン、その上に以前体育館で着用した物とは別の真っ黒なコートを羽織り黒のブーツを履いている。

コートにはところどころに赤の装飾が施されており、長さは脹脛辺りまである。

俺はこっそり様子を伺いながら全員が集まるのを少し離れた場所で待っていた。

10時55分、唯が現れたので俺もゆっくりとみんなの元へ歩き出す。

「カケのやつおっそいなー、電話でもしてみるか？」

律の声が聞こえ、更には携帯まで出て来る。

（当の本人がすぐ近くに居るとは思っただろうな……）

俺は苦笑を浮かべて居ると漣が俺を見つけ

「翔？」

と尋ねてきた。

その声をきっかけに全員が俺を見る。

「さすがだな漣、どこでわかった？」

俺はクスッと笑うと

「何となくそんな気がして……、それにしてもその私服色々と凄いな……、これは確かにわからないな」

漣もクスッと笑い俺の服装を見ている。

「何だよ、居るなら声かけろっての」

律が頬を膨らませ携帯をポケットに仕舞いながら文句を言ってくる。

「一昨日言っただろ、俺を見つけれかな？って」

俺は小さく笑うと律は

「そりゃ言っただけさ」

未だに頬を膨らませぶうたれている。

「そつだ、唯ちゃんお金準備出来た？」

不意にムギが唯に金銭面の事で尋ねた。

「うん、お母さんに無理言つて5万円ほど前借させてもらったよ」

と答える唯、相当無理言つたんだろうな……。

「お金つていつ必要になるかわかんないよね、これからは計画的に使わなきゃ！」

そんな事を言うが唯はフラフラと服屋の前に張り付き

「いけないんだけど……、今なら買える……」

幸先不安な一言を呟く、大丈夫なのだろうか……。

律はすかさず唯の襟首を掴み

「コラコラ、目的が違つたろ？」

あしらつように注意するも

「ちょっと見るだけ」

と唯は店内に入つて行つた。

律とムギが唯の後を追つように店内に入つて行き、残されたのは俺

と漑。

「はぁ……、既に目的がすり替わってるよな」

今日初の溜め息を吐き出し俺は呟く。

すると漑が

「翔……、一昨日の約束……」

と俺を見たまま恥ずかしげに呟く。

俺は一昨日の約束を思い出し

「ああ、いいぞ」

携帯を取り出し赤外線送信の準備をした。

程なく俺と漑はアドレスと番号を交換し終えるも、唯たちは未だに店内に居るため

「さて、俺たちはどうする？」

漑に尋ねてみる。

「私は唯たちを引っ張ってくるから、どこかで適当に時間潰しててくれないか？」

と漑が申し訳なさそうに告げてきた。

「ああ、わかった、それじゃまた後でな？」

俺は無意識のうちに漣の申し訳なさそうな表情を見て、漣の頭を優しく撫でていた。

それだけで漣は赤面してしまい、それに気付いた俺は焦ったように手を引いていた。

「じゃ、じゃあまた後で！」

それだけを告げると漣もそそくさと店内へ入って行った。

「さて……、どうするかな」

どこへ行こうかとフラフラしていると近くにゲーセンを見つけた。

（ゲーセンか……、久しぶりに行ってみるか、何か最新機種入ってるかな）

そんな事を思いながらゲーセンの中に入っていく。

中ではかなりの人で賑わい、色々なゲームが鎮座している中で俺はやりたいゲームがないか物色していた。

数分後、俺は一台のゲームを見つけた。

今でも人気のあるD Rである。

中学の頃までは暇があればゲーセンでD R をプレイしていたが、最近は色々忙しくなりめっきり来る事がなくなった。

（これは後にするか……、とりあえずは……）

そう思い俺は踵を返し一直線に向かった先にある麻雀コーナーに辿りついた。

それから数局打ち時計を見るとそれなりに時間が経っていた。

携帯を開いてみるとちょうど澗からメールが届いた。

俺は内容を読んでもみると

「ごめん！まだかかりそうだから……、こっちが終わったらまた連絡するからな？」

その文章を読み俺は苦笑いを浮かべる。

「ああ、構わない。俺はすぐ近くのゲーセンに居るからな？」

手早く打ち込み居場所を添えてメールを返信する。

そしてまた数局打つも飽きてきたので格ゲーコーナーに行ってみる事に。

新台はあったが、順番待ちしている人が多くとてもじゃないがやる気にならず俺はそこから離れた。

俺は思い出したかのようにD Rの元へ歩いて行った。

前の人がプレイしてるのを後ろから見ながら、プレイしようかどうかどう

しようか考えていると

「カケ、やるのか？」

不意に聞こえた声に振り返ると唯たちが揃っている。

「いつの間に……？」

俺はつい尋ねてしまいがそれ以前に

「翔やるの？」

と漑も尋ねてきた。

「やろつかどうしようか考えてたところだ、まあいつでも出来るからまたにするか」

聞こえなかったなら仕方ないと勝手に解釈し、そう言っただけ俺は踵を返し歩こうとする。

が、漑と律に肩を掴まれ

「踊ってる姿、見せてくれよ」

律から両手を合わせお願いするように頼み込まれ

「翔、私からもお願い」

更には漑からも頼まれた。

俺は軽く溜め息をつく

「1回だけだから？」

観念したように答えるしかなかった。

（やれやれ……、まあたまには誰かに見られるのも悪くは無い）

心の中で呟くと俺は前の人が居なくなっただころを見計らい、俺が入り100円を入れICカードを読み込ませる。

暗証番号を打ち込みソロプレイを選択する。

曲の選択画面に移動する前に軽くジャンプしておく。

（懐かしいな……、この感触……）

心で呟きジャンプを止めると俺は久しぶりなので肩慣らし程度の曲を選ぶ。

若干スローテンポな曲が始まり俺はゆっくりとステップを踏み出す。

久しぶりにプレイする事もあり、追いつけるか不安だったが、意外と身体はその動きを覚えていた。

1曲目を終え俺は軽く息を吐き出し間髪入れず次の曲を選択した。

2曲目は1曲目よりもテンポは速く、尚且つ難しさはかなりの曲だ。

俺は連続で2曲目、3曲目を終わらせると額に浮かんだ汗を手の甲

で拭う。

そしてラストの4曲目は俺が最も得意とする曲を選択する。

曲が始まり、俺は最初よりも少しステップを踏むスピードを上げ踏み出す。

「零サイド」

「これなんていいんじゃない？」

「こっちもいいよぉ」

「はぁ……」

律と唯のやり取りを見ながら私は溜め息を吐き出す。

（唯……、今日の目的完全に忘れてそうだな……）

翔と別れ30分も律と唯は服を手に取りどれがいいかと言い合って

いる。

（まだまだかかりそうだな……、翔にメールしておくか……）

私は律たちに気付かれないよう携帯を出しメールの新規作成を押す。

宛て先を翔に選択し本文を書こうとしたが、そこで手が止まった。

（何て書いて送ったらいいんだろ……？ 無難にした方がいいのかな……？）

私はこんな時自分の性格が恨めしくなる。

男の子とメールや手紙なんてしたことも無い上に、恥ずかしくてどんな文章を書けばいいのかわからなくなるからだ。

（……………よし）

私はやっぱりここは無難に送ろうと決め

「ごめん！まだかかりそうだから……、こっちが終わったらまた連絡するな？」

短いながらも精一杯の文章を書き送信する。

すると5分もしないうちに翔からメールの返事が来た。

「ああ、構わない。俺はすぐ近くのゲーセンに居るからな？」

その文面を読むと私は携帯をポケットにしまうと同時に、ちょうど

律たちがこっちに帰ってくるのが見えた。

「ほら、行くぞ、翔が待ってるんだからな」

私はそう告げ律たちを促す。

「わかったよ、ついどこに居るか知ってるのか？」

律から尋ねられる。

「ああ、近くのゲーセンだって」

私たちは服屋を後にするとそのまま翔の居るゲーセンへと向かった。

「どこに居るんだ？」

ゲーセンの中に入り少し歩くと律から尋ねられた。

「ん……、あ、居た」

私はグルッと辺りを見回していると、DDをプレイしようか悩んでる翔を見つけた。

私たちは翔の背後に立つと律が

「カケやるのか？」

先陣を切って翔に尋ねた。

翔は振り返り私たちを見つけると

「いつの間に……?」

と尋ねてきたが、それより早く私は

「翔やるの?」

私も律と同じ質問を投げかけた。

翔は私たちの質問を聞いて

「やろうかどうか考えてたところだ、まあいつでも出来るからまたにするか」

そう答えると踵を返しゲーセンを出ようとする。

私と律はその肩をほぼ同時に掴み

「踊ってる姿、見せてくれよ」

律が両手を合わせお願いするように頼み

「翔、私からもお願い」

私も律の頼みに乗る事にした。

すると翔は小さく溜め息を吐き出し

「1回だけだからな?」

と答えD Rへと向かった。

私たちは近すぎず遠すぎずの位置で翔がよく見える場所を陣取った。

「楽しみだな、どんな感じに踊るのか」

律は私に少しワクワクした表情を浮かべたまま告げてきた。

「そうだな」

私は律を見る事無く、翔の後ろ姿を見つめていた。

1曲目を選択し終えたのか、すぐ様曲が流れる。

スローテンポな曲だが、私にはそれは早い曲のように感じた。

翔はその曲をゆっくりとした感じで踊っていく。

（カッコいいなあ……）

翔の後ろ姿を見て私は素直にそう心の中で呟いた。

1曲目を終えると翔は即座に2曲目を選択した。

先ほどの曲よりもテンポが上がっていて、相当難しそうな曲を選んだ翔。

（クリア出来るのかな……？）

などと心で心配するが、その心配をよそに翔は2曲目も余裕でクリ

アしていく。

3曲目に至っては追いつくのがようやくと言った速さにも関わらず
楽々と翔はクリアしていた。

そしてラストの曲はテンポも速く翔が選んだ曲の中で最も難しいん
じゃないかと思われる曲を選んでいた。

〃 〃

テンポは速いものの、ノリのいい曲である。

私は自然と右足でリズムを刻んでいた。

するとどこからか話し声が聞こえてきた。

「おい、あれ確か……」

「ああ、間違いない……」

「こんなところで見かけれるとはな……」

「相変わらず無駄の無い動きだな……、ほとんどパーフェクトじゃ
ないか」

などと数人の男性の声が聞こえた。

そうこうしているうちに曲が終わった。

翔は画面を切り替えると踵を返し私たちの元へと歩いてきた。

「待たせて悪いな、みんな」

翔の額には汗がうつすらと浮かんでいた。

「これ、使つて？」

私はポケットからハンカチを取り出し差し出す。

ハンカチを受け取るうかどうしようか悩んでいた翔だが

「じゃあ借りるよ、ありがとう遷」

とハンカチを受け取り微笑みを浮かべてお礼を述べた。

「じゃ、じゃあ次行こうか」

私は照れた顔を見られたくないために背を向けてみんなに言つと、そのまま歩き出す。

（ダメだなあ……、もっと話したいのに恥ずかしくて話せないよ……）

はあ、と溜め息を吐き出すと私たちは次の場所へと向かった。

く翔サイドく

俺は澪から受け取ったハンカチで額の汗を拭くと、それを綺麗に折り畳みポケットにしまっておく。

次こそは楽器店に行くんだろうな、と考えていた俺が甘かった。

唯と律は次々と行く場所を変更させる。

デパ地下で試食会、雑貨店で家に飾る小物を物色などだった。

澪は最初は嫌がっていたものの、徐々に律たちと共に一緒にはしゃいでいた。

そして俺たちは今、喫茶店で一息ついていた。

すると唯が

「次どこ行こっか？」

などと言い出した。

「「楽器だろ」「」

俺と漣の声が八毛る。

唯は俺と漣の発言を聞き

「おお、そうだった！」

などとすっ呆けた答えを返してくれる。

俺は人知れず溜め息を吐き出し、注文したアイステイーを飲み干す。
しばらく休んだ後、俺たちは楽器店へと向かった。

【10GIA】

という店にたどり着いた。

「うわー、ギターがいっぱい！」

地下に行き、唯は驚きながら飾られている色々なギターを見ていく。
すると唯はあるギターを見て立ち止まり首を傾げていた。

そのギターとは、ツインネックだった。

（大方、唯の予想じゃもう2本腕が生えた人が弾くためのギターじゃないのか、何て思ってるのかな……、まさかな……）

俺は唯を放置し一人ギターを物色し始める。

しばらく物色していると、一本のギターに注目した。

フェンダージャパン、値段は12万6000円。

俺はギターを手に取り重さとネックの太さを確認した後、近くを通りかかった店員に試し弾きを頼んでみる。

〃

少しばかり弾くと俺は小さく頷きギターを買い取る。

小さく決断すると同時に

「翔、唯が……」

零が話しかけてきた。

「どうした？」

尋ね返すも零は

「ちょっと来て」

俺の腕を引き連れて行く。

するとそこにはしゃがみ込み1本のギターを注視する唯の姿が。

「このギターがほしいらしいんだけど……」

そのギターというのが、ギブソンのレスポールだった。

値段を見てみると、25万と書かれていた。

「唯、値段をしてみる」

俺はギターばかりを見ていて値段を見ていないであろう唯に促してみる。

「ん？……はっ」

視線をギターから値段に移動させ値段を確認させると驚いた表情を浮かべる。

「さすがにこれは手が出せないや……」

小さく震えながら呟く唯。

（確かに……、5万じゃ残りの20万足りないしな……）

などと思っていると

「カケ、それ買うのか？」

律が俺の手にあるギターを見て尋ねてきた。

「ああ、後は弦やら新しいアンプとかも今日中に買ってしまう予定だ」

俺は頷き答える。

「それじゃあ、前のギターはどうするんだ？つてか、よくそんな金があるな……」

律はもつともらしい質問を投げかけてきた。

「あれは……、もう使わなくなるかもしれないな」

と苦笑混じりに答える。

「じゃあ、ちよつと買ってくるから待っててくれ」

俺は一言告げると必要な機材や弦などを手に取りレジへ向かう。

「……………以上で25万8000円になります」

俺は財布を取り出すと、そこである事を閃いた。

「ちよつといいですか？」

店員に一言声をかけ耳打ちをする。

「あそこにあるレスポール、25万でしたよね？」

「ええ、そうですが……？」

「あれ、5万であの子に売ってあげてもらえませんか？」

「え、しかし……」

「20万足りないのは俺が内緒で出しておきます、それならいいで

すよね？」

「……わかりました、それで構いませんよ」

交渉の結果、俺は唯がほしがってたギターを値引きすることに成功した。

「俺が20万出したのは一切口外しないでくださいね？」

俺はもう一度だけ念を押し財布から46万ほど差し出し、おつりの2000円を受け取り、機材や重い物は後日送ってもらう事にした。

「唯、そのギター5万で売ってくれるってさ」

俺は後ろから声をかけるとそこに居た全員が一斉に振り返り

「……へ？」

4人同時に間抜けな声をあげた。

「翔……何かしたのか？」

漣が震えつつ尋ねてきた。

「別に、交渉した結果だから気にするな」

俺は半分嘘で、半分事実を織り交ぜ答える。

唯は嬉々とギターを持つとレジへと向かった。

すると漑と律が

「カケ、何やったんだよ？」

ニヤニヤしながら律が代表で尋ねてきた。

「言つたろ、交渉した結果だと、大した事はしてねえよ」

と答えると俺は新しく買ったギターケースにギターを入れ背負う。

弦やら小物類は全てレジ袋に収めてある。

「隠さなくてもいいんだぞ？」

どうやら漑と律には既にバレていたようだ。

「はあ……、唯には内緒だからな？」

これ以上隠し通せそうになかったので二人にも話しておく。

先ほどの店員とのやりとりを一通り話した後

「いいのか？そんな大金出しても……」

漑からの感想だった。

「いいって、軽音部が活動するために使ったと思えば苦でも無いかな」

俺は自嘲気味に答える。

「でも……、せめてこれだけは受け取ってほしい」

そう言うとき、澪は財布から唯に見つからないよう背を向け俺に5枚の万札を差し出す。

が、俺はそれを受け取らず

「いって、それは澪が自分で使うといい」

5枚の万札を財布に戻すように告げる。

「でも……」

「いいから、な？」

というやり取りを数回繰り返していると律が

「いいからカケ受け取ってやりなよ、じゃないと澪落ち込むぞ？それに唯にも気付かれそうだしな」

はあ、と溜め息を吐きながら告げてくる。

俺は迷ったが、澪が差し出した5枚のうち2枚だけを受け取った。

当然、澪は「なんで？」と言う表情を浮かべる。

「残りは自分で持っておきな、必要な時が来たら使うといい、これは澪の気持ちで事で受け取っておくよ？」

そんな中、律からも2枚の万札を差し出された。

「悪いな力ケ、私からも受け取っておいてくれ」

笑みを浮かべ律がそう告げてきた。

俺は二人を見てフツと笑うと律からも受け取っておく。

「ありがとうな二人共」

短いながらも俺は二人にお礼を述べる。

3人同時に財布に札をしまいポケットに戻すと同時に、唯とムギが戻ってきた。

俺たちは全員が揃ったところで店を出た。

太陽は既に西に沈みかけ、なんだかんだで時間を忘れ楽しんでいた。

「じゃあ、私と律はこっちだから」

いつもの交差点に差し掛かり、漑と律と別れた。

その間も唯は嬉しそうにギュツとギターを抱きしめていた。

（ようやくスタート地点だな……、後はコードとか教えておけば大丈夫だろ……）

俺はそんな事を考えながらムギと唯と別れ自宅へ入って行った。

〈第6話〉（後書き）

正直グダグダ。

翔「何故こうなった」

知らん、オリスト交えるつもりは本来は無かったんだが、自然と書いてたらこうなった。

翔「ダメじゃねえか……」

まあまあ。そういえばもう少しで1万PV、1000人ユニーク行きそうぞ。

翔「……………なんだって？」

聞こえなかったか、もう少しで1万PV、1000人ユニーク行きそうだって言ったんだ。

翔「マジかよ……、こんな駄文小説がか？」

マジマジ。これも読んで下さる読者様がいらっしゃるから成し得るわけだな。

翔「だな、本当にこんな駄文小説を読んでくださってありがとうございます」

もし仮に10万PV行くような事があつたら、番外編でも書いてみようか。

翔「それはいいかもしれないが、どんな内容にするんだよ？」

そうだね、まだ決めて無いけど翔の家に漕が泊まりに来たってストリーにしようかなーと考えたり、ファンタジーチックなものにしようかなーと考えたり。

翔「前者はいくら何でもマズイだろ、まだ付き合ってるわけでも無いのに」

そこが悩みどころなんだよね、だから10万PVに近付いたら読者の皆様にアンケートを取ろうかなーと考えてるよ。

翔「そうだな」

さて今回は、高1になって初の中間テストです。

翔「あー、唯の勉強会前までを書いたんだよね？」

そう、そして翔が倒れます。その理由とは一体！？

翔「こんな駄文ではありますが、これからお付き合い頂けると幸いです」

それではまた次回！

く第7話く（前書き）

色々とまずいな……。

翔「何がだ？」

そろそろ10話を執筆しないとストックが溜まらないのに、書けなくなってる。

翔「気合で書け、そして読者様に認められるような文章にするんだ」

わかってるよorz

〈第7話〉

「うー……」

シャーペン片手に唸る唯。

「ここがこうなって、この公式を使えば……」

唯の近くで澪は教科書片手に指導中。

「……」

ムギは唯と澪の近くでその様子を見守っている。

律は何やらデカいたんごぶを作り大人しくしょんぼりしていた。

大方騒がしくして澪にゲンコツ食らった、ってところだろう。

そして俺はベッドで仰向けに寝転んでいた。

「どうしてこうなった」

俺は誰に言うでもなく小さく呟く。

この状況を説明するには2週間ほど前に遡らなければならない。

それは今から2週間前の事、俺は用事のため遅れて部室に行く事に。

というのも、見知らぬピンク色のポニーテールが特徴的な女子生徒（リボンの色から見て2年生だろう）から話があるから来てほしい、との事だった。

（まーた決闘の申し込みか……？）

等と思いながら俺は指定された屋上へと向かった。

屋上に出るとまだ春のため心地よい風が俺の頬を撫でていく。

すると先ほど俺を呼び出した女子生徒から

「あの……、この前の決闘を見て一目惚れました……、良かったら付き合ってください……。」

と告白を受けた。

さすがにこの状況は読んでいなかったので驚くが

「すみません、でも友達からならいいですよ？」

悪気は無いがその告白を断り俺は思いついたように提案した。

「あ……、じゃあ友達からお願いします……。」

俺の提案を受けその人は特徴的なポニーテールを揺らしながらペコリと頭を下げた。

その女子生徒は恥ずかしさからか名乗る事も連絡先を交換する事も

無く、屋上の扉に向かっていく。

扉の前に立つと俺の方に向き直り再びペコリと頭を下げ校舎へと消えていった。

俺は屋上のフェンスにもたれ掛かりふう、と一息つく。

「まさか、呼び出しの理由が告白だったとはな……」

空を見上げたまま誰に言うでも無く小さく呟く。

確かに先ほどの女子生徒は律や唯に負けないほど可愛かった。

が、知り合いでは無いというのもあるが、何故か好きになれなかった。

俺はゆっくりとフェンスから離れ校舎に戻る。

教室に戻らず俺はそのまま部室へと向かった。

部室の扉を開けようとした直後、中から

「ああーーーーー!？」

という声が聞こえてきた。

俺はゆっくりと扉を開け中に入ると唯が落ち込んでいた。

鞆を置き近くに居た湊に

「何があつたんだ？」

と尋ねてみた。

「キャッ！か、翔か……脅かすなよ……」

漣は文字通り飛び上がって数歩後ずさりして俺に非難してくる。

「悪い悪い、で、どうしたんだ？」

改めて質問してみる。

「律が唯のギターのフィルムを剥がしたんだ、唯は大切に剥がさないようにしてたみたいなんだが……」

苦笑いを浮かべつつ答えてくれた。

「ほら、謝れ律！」

「ごめん！ほんの出来心だったんだ！」

怒った漣に促され謝罪する律。

すると律は何を思ったか

「ほら、ムギが持って来たお菓子だぞー」

机の上にあつた本日のお菓子を差し出す。

「そんな事で機嫌が直るわけ……」

澪は律の行動に呆れているが

ハグハグ……

なんと唯は機嫌を直し一心不乱にお菓子を頬張っていた。

（直るんだ、それで……）

心の中で苦笑いしつつ俺はいつもの定位置に座っていた。

「そつえば、どうして翔今日遅れたんだ？」

澪が振り返り俺に尋ねてきた。

（さて、どう答えるべきかな……）

と思案していると唯が

「今度は違う上級生の人に呼ばれてたよね、カケちゃん？」

サラリと暴露する。

「また決闘の誘いか？」

律は既に俺が居るのを知ってたのか普通に尋ねてきた。

「いや、今回は決闘の誘いじゃなかったな」

首を左右に振り律の質問を否定した。

「じゃあ一体……、ハッ、まさか告白されたとか!？」

という律の発言を聞き

「ええ!？そうなのか翔!？」

漣が驚いたように尋ねてくる。

「……ああ、された」

隠しても仕方ないと踏んだ俺は素直に答えた。

「」「」「」……「」「」「」

4人はその言葉を聞き沈黙した。

「……そ、それで、翔は何て答えたんだ？」

漣が恐る恐る尋ねてきた。

「断ったよ？」

俺はサラッと答えた。

すると漣たちはホッと溜め息を吐き出した。

(何でもみんな溜め息吐き出してんだ……?)

そう考えるも特に気にせず、俺はムギから差し出された紅茶を飲む。

「ならカケ、この軽音部の中でもし恋人に選ぶなら誰を選ぶんだ？」
いきなり律からぶっ飛んだ質問が飛んできた。

俺は紅茶を噴き出しそうになるも抑えたが、逆にむせてしまう。

「り、律！いきなりすぎる質問するなよ！」

漑が俺の代わりにそう答える。

「まあまあ、漑だって知りたいんじゃないか？」

律はニヤニヤ笑いながら漑に尋ねる。

すると漑はビクツとしながらも顔を赤くし

「それは……、気になるけど……」

漑陥落。

「というわけで誰がいいんだ、カケは？」

再び俺に矛先が向けられる。

俺は腕を組みしばし考え始める。

そして答えを導くように

「……悪い、まだ答えが出せそうに無いな」

と答える。

俺の答えを受け律は

「なーんだ、面白くないのー」

頬を膨らませ抗議してくる。

「んな事言われてもな……、まだ律たちと知り合って1ヶ月経つか経たないか程度なんだし……」

はあ、と溜め息を吐きつつ答える。

「じゃあ後どれくらい経てばわかるんだ？」

律はニヤニヤ顔に戻り尋ねてくる。

「さあな……、早ければもう1ヵ月後かもしれないし、長ければ後1年は見ないと無理かもしれないな……」

俺はそう答えるのが精一杯だった。

それ以降は律たちは俺に質問はしてこなかった。

いや、質問したいがこれ以上はさすがにこの場で聞けないのかもしれない。

すると唯がギターの弦を凝視しながら

「ギターの弦って怖いよねー、細くて硬いから指切っちゃいそう」
そんな事を言う。

するとそれに反応した律が

「そうだぜー、気をつけないと指がスパーーーーっと切れて血がド
バーーーーっと」

「キャーーーーー！！！」

律のちよつと痛い話に漑が反応し悲鳴をあげながら耳を塞ぎしゃが
み込む。

「な、何で漑が怖がつてるんだ……」

律が一言呟いている。

唯に至っては

「可愛い悲鳴……」

可愛いものを見つけた、というような表情を浮かべ呟いている。

「い、痛い話はダメなんだ……」

部室の隅で小さくなりガクガクと震えている漑が何とか聞き取れる
くらいの声量で答える。

「余程怖いんだな……」

俺の呟く声に漣が震えながら小さく頷く。

漣のスキル、怖い話や痛い話がダメスキル発動の瞬間だった。

それから漣が立ち直るまでに数分を要したのは言うまでもない。

「ギターを練習するって言っても、何から始めればいいのかわかんないや……」

唯のその呟きに漣は自分の鞆を開くと、一冊の本を取り出す。

「あ、じゃあこれ使って？」

と唯に渡す。

俺は本のタイトルが気になり覗いてみる。

【サルでもわかるギターコード】

（嫌なタイトルだなおい……）

心の中で苦笑いを浮かべ呟くと俺は天井を見上げる。

ふと視線を戻すと暫く本を読んでいた唯が、頭から煙を出し

「ま、まずは楽譜の読み方から教えてください……」

と漣に懇願する。

そのまま澪は唯に付きっ切りで楽譜の読み方とコードを教えていた。

最近深夜に活動しなければならず、まともに睡眠を取っていないかった俺は小さく欠伸をし、鞆からヘッドフォンを取り出し定位置に戻り音楽を聴きながら目を閉じる。

1分もしないうちに俺の意識は一瞬で闇へと消えていった。

く 零サイドく

私は本を見ながら唯にコードを教えられるだけ教えた。

「とりあえずこれだけ弾けるようになれば大丈夫だろ」

そう告げると律とムギが人差し指を口に当てこちらを見ていた。

「どうしたんだ？」

私は小声で律に耳打ちする。

「ほら、あれ」

律が指差す方を見ると翔が座ったまま眠っていた。

すると律が何か思いついたような表情を浮かべた、何か嫌な予感がある……。

律は部室の扉側に来るようにみんなに手招きする。

集まったみんなで円陣を組んで、律が小声で

「今ならカケにキスくらいしてもバレる事はないと思うけど……どう?」

律らしい言葉が飛んできた。

私はそれに対し無言でゲンコツを律の頭に落とす。

「あで!何するんだよ遷」

「何するんだよ、じゃないだろ律!」

律の言葉に私は即座にツッコむ。

「今は眠いみたいなんだから、そつとしいてあげなきゃダメだろ?」

翔が学校で眠るなんて、余程睡眠を取ってなかったんだろうと思い

何もしない事に私は一票入れる。

が、ムギと唯は律の意見に賛同していた。

「ほらほら、澪一人だけ拒否側に孤立してるぞ？」

ニヤニヤ顔で私に追い討ちをかけてくる律。

私の性格を知ってる律だからこそその追い討ちである。

「澪がしないなら私からしてくるかな？」

チラチラと私を見ながら告げると律は翔の元へと歩き出そうとする。

私とムギと唯は律の行動を見守るしか出来なかった。

というより、私はその場から動く事も出来なかったというほうが正しいのかもしれない。

そして律は音を立てず歩き翔の真横に立つ。

「「「……………」」」

私たち3人は無言で成り行きを見つめていた。

しかし、私はその光景を見たくなかったので視線を逸らしてしまう。

が、どうしても気になるので横目でチラチラと様子を伺う。

「カケ、起きないとキスするぞ……………」

律が翔に声をかけるが起きる気配は無かった。

徐々に律が顔を近づけ後少しといったところで誰かの携帯が鳴り響いた。

「誰だよこんな時に……」

律が愚痴りながら戻ってくると同時に

「あん……？」

翔が起きた。

「……はあ……」「」

私とムギと唯は溜め息を漏らす。

ムギと唯の溜め息は恐らく残念な溜め息だと思うが、私の溜め息は安堵の溜め息だった。

何故かはわからないけど、安堵の溜め息が漏れたのだ。

「んー……」

翔は眠そうな目を擦りながら携帯を取り出す。

通話を始めると翔は目を擦りながらも表情が眠そうな表情からすぐにいつもの表情に戻る。

翔は席を立ち、窓際に移動すると空を見つめると

「はいよ……、そろそろ連絡が来る頃だと思ってたぞ」

グルッと部室内を見渡すと私たちを見つけた翔はホワイトボードに

「屋上に出るにはどう行けばいい？」

と書いて尋ねてきた。

私は書いて説明するよりも連れて行くほうが早いと踏んで、翔を手招きで呼ぶと一緒に屋上に行く事にした。

すると律たちも気になるのか私たちについてきた。

程なくして屋上の扉の前に着くと翔は電話をポケットにしまい

「ちょっと待っててくれ」

とだけ告げて屋上に出た。

「どうする？」

律が私たちに尋ねてくる。

「気になるし私は行ってみたいんだけど、みんなどう？」

律が更に付け足し尋ねてきた。

私たちはアイコンタクトを交わし頷くと、律は屋上のドアに手をか

ける。

そして屋上へと出た私たちを待ち受けていた光景は

。

〈第7話〉（後書き）

さてさて、今回翔はいきなり告白されましたねえ。

翔「決闘を見て惚れたって言ってたな」

だね、因みに告白したのは三浦茜です。

翔「誰だ？」

某掲示板でこんなキャラ居たらどうだろう、って作られたキャラだったかな？

翔「その書き込み見てたのかよ」

いや、作者自身茜の存在を知ったのはYouTubeだね。

翔「というか、律の行動が結構大胆な気がしてならないんだが」

律も零同様に翔を意識し始めてるからね、後は悪戯しようとしてるのもあるけど。

翔「唯とムギはそんな描写が無いな？」

今のところ唯とムギに関しては応援する側、といった立ち位置かな？

翔「ふーん」

さて次回は、翔が一度倒れます。

翔「あれは流石に俺でも苦しかったからな」

そつだろっね、あんな感覚に陥ったら誰でも気絶するよ。

翔「書いたのアンタだろ」

あはは……、それではまた次回に。

そっういえば1万PV、ユニーク1000人突破しました。

翔「そっういのは最初に言おうぜ？本当にありがとうございます」

これから頑張るので宜しければ応援お願いします！

く第8話く（前書き）

相も変わらずグダグダ。

翔「ならまともに書けと」

今回は原作では唯の追試・勉強会編です。

翔「無視かよ!？」

それではどうぞ。

翔「……」

〈第8話〉

〈翔サイド〉

「悪いな、眠ってたのにいきなり呼び出したりして?」

俺は屋上に着くと既に待っていたであろう人物から声をかけられる。

「お前の事だ、どうせ俺の魔力の波長でも読み取ったんじゃないのか?」

久しぶりに会うそいつは、髪の色は金で、俺と良く似てはいるものの色は赤いコートを羽織っている。

「さすがに読まれてるか、さすがだねクロ……じゃなくて翔」

そいつは俺の真名を呼びそうになるも改めて呼びなおす。

「で、1年に一度来るか来ないかわからないお前の用事は何だ?」

俺は催促するように用事を尋ねた。

そいつはコートの中から少しばかり厚い手紙を取り出す。

「俺はこいつを届けにきたただだよ、後は翔が元気に生活してるか見てくるように頼まれたからね?」

俺は躊躇無く手紙を受け取ると読む事無くブレザーの内ポケットに入れる。

「サンキュ、お前はもう戻るのか？」

「ああ、それに後ろの生徒に見つかってるみたいだしね？」

俺の質問に即答で答えるとクスッと笑う。

最後の言葉が気になり振り返ると漣たちが来ていた。

「漣、律、唯、ムギ……、どうして？」

俺は額に左手を当てため息混じりに尋ねる。

「翔が親しそうに話す人って気になったから……」

漣が代表で俺の質問に答える。

「悪い、もう帰らなきゃならないからまたな、翔？」

再び振り返るとそいつは翼を生やし空に舞い上がる。

その翼は青空のような蒼。蒼天の翼を持つ友人、そう呼ぶのが妥当だと思う。

「ああ、またな」

漣たちは背中から翼が生えた友人を見て驚き言葉も出ないようだが、俺は見慣れているので普通に別れの挨拶を済ませる。

「我、真名において名ずる。世界を越えし扉を開く力を与えよ」

ある程度上昇したそいつの言葉が聞こえてきた。

すると空間を裂き黒い穴が出現すると、友人はそれに臆する事無く自ら飛び込む。

黒い穴が閉じ、消えるまで俺はその場で見送っていた。

「な、なあ……今の人背中から翼生えてなかったか？」

漣が俺に尋ねてくる。

（さて、どう答えるべきか……）

「私も見たぜ？ いいなあ、あんな翼があれば遅刻も無くなるだろうなあ」

律はまともな使い方を選ばないようだ。

「翔、答えて？」

漣からの懇願、更にはムギと唯と律が俺をジッと見つめる。

俺は一つ溜め息を吐き出すと

「あいつは異世界の住人だよ、普通じゃ考えられないような世界の、な」

それだけ答える事にする。

「詳しくは聞くな、いずれ話す時が来るだろうからそれまで待っていてくれ」

俺は更に追及される前に釘を刺しておく。

「……わかった、それまでは聞かないでおくよ?」

漣が納得した返事を返してくれたので俺はホッと一息つく。

俺たちは部室に戻ると下校時刻になっていた。

5人並び正門を抜けると律と漣は用事があるとの事で正門で別れた。

いつもの分かれ道に差し掛かりムギとも別れた。

唯は隣で漣から教わったコードを忘れないように指を動かし覚えようとしている。

「あ、唯ー、翔ー!」

後ろから和の声が聞こえ俺たちは立ち止まり振り返る。

「あ、和ちゃん!」

挨拶をするが唯の手はギターのコードになっていた。

「何それ、新しい挨拶?」

苦笑いしながら和は唯に尋ねる。

「ギターのコードだ、零から教わって忘れないようにしてるみたいだぞ？」

俺が和に補足説明をしておく和は納得してくれた様子で頷く。

「和ちゃん、こんな時間まで何してたの？」

唯がギターのコードを練習しながら和に尋ねた。

「何って、もうすぐ中間テストでしょ？だから図書館で勉強してたのよ」

サラッと唯に通用する爆弾を投下する和。

「へえーそうなんだ」

気付いていないのか軽く受け流す唯。

しかし

「……………え！？中間テスト！？」

驚きの声をあげる唯。

しかもまたその手はギターのコードになっていた。

「……………それもギターのコード？」

和は苦笑いしながら尋ねていた。

（はあ、中間か……、いつも通りでいいか……）

「せっかくギターの練習しようと思ったのに、もう中間テストなのかあ……」

はあ、と溜め息混じりに唯が呟く。

「……アンタ、今まで一度も試験勉強した事無いじゃない」

和が唯に対しそう告げるも、俺には驚きだった。

「和……、それ本当か？」

俺は恐る恐る和に尋ねる。

「ええ、本当よ……」

俺の質問に素直に頷いた和。

「「はあ……」」

俺と和の溜め息が同時に出る。

しかし当の唯は

「そっかー、なら安心だね！」

等と告げてきた。

俺たちは再度溜め息を吐き帰路に着いた。

帰宅してすぐ、俺は手早く着替えると机に向かっていた。

（唯のやつ、大丈夫なのか……？）

俺は心の中で不安を抱えながらも赤点を取らないよう必死に勉強した。

そして時は過ぎ中間テストが終わり、テスト用紙が返された。

ふと前を見ると、真っ白に燃え尽きた唯の姿があった。

（まさかな……、和も居るんだし赤点はない……よな？）

そんな事を考えながらも自分の答案用紙を見える。

（５教科のテスト全て合わせても４００点越えか、まずまずだな……）

俺は赤点は回避したが、唯の方からは危険な香りが漂っていた。

そして放課後になり俺と唯は部活の為部室へ向かった。

「いやー、やっとテスト終わったぜー」

律が伸びをしながらテスト終了の喜びを告げていた。

「高校になってから急に難しくなったから大変だったわー」

ムギは苦戦したらしいが、どうやら赤点は回避しているようだ。

「そうだな……、そして……」

澪は余裕だったのか苦笑いしながら視線を唯へと移動させる。

「もつと大変そうなやつがここに……」

部室の隅に居る唯を見て一言呟いた。

どんよりとした空気を醸し出す唯に澪が近付き

「そ、そんなにテスト悪かったのか？」

恐る恐る尋ねてみた。

「クラスでただ一人、追試だそうです……」

唯は視線は明後日の方を見ながらもテストの答案を澪に差し出す。

俺も点が気になりそつと覗いてみた。

『12』

という数字が名前の近くに記入されていた。

俺は視線を逸らすと人知れず溜め息を吐いた。

「大丈夫よ、今回は勉強の方法が悪かっただけじゃない？」

「そうそう、ちょっと頑張れば追試なんて余裕余裕！」

ムギと律が必死に励ます中、唯の答えは

「勉強は全くしてなかったけど……」

だった。

俺は無言のまま溜め息を吐き壁に寄りかかって成り行きを見守る事にした。

「励ましの言葉返せコノヤロウ」

律の若干怒りの籠った言葉が唯に突き刺さる。

「そもそも、何で勉強しなかったんだよ？」

律が原因を探ろうと唯に尋ねる。

「いやー、しようと思ったんだけど……」

頭をポリポリとかきながら唯が答え始める。

「試験勉強中ってさ、何か他の事に集中出来たりしない？」

唯が律に向け同意を求めるような質問を投げかける。

「ああー、それはあるな、部屋の掃除がはかどったり」

律はその質問に同意しながら頷いた。

「勉強の息抜きにギターの練習してたら抜け出せなくなって、結局全然勉強出来なかったの」

俺はその言葉を聞き本日何度目かの溜め息を吐きながら唯の言葉を聞く事にした。

「そのおかげでコードほとんど弾けるようになったよ!」

とVサインしながら唯は告げた。

「その集中力を少しでも勉強に回せば……、いや凄いいけどね?」

漣が呆れたように答える。

「そ、そういうりっちゃんはどうだったの?」

慌てた様子で唯は律に尋ねる。

「ん?私?」

自分にネタが振られると律は鞆からテスト用紙を取り出し

「じゃーん!この通り余裕ですよ!」

と突き出されたテスト用紙をしてみる。

『 89 』

(ふむ……、意外と勉強出来るんだな律って……)

「カケ、何か失礼な事考えてないか？」

律がジト目で俺に尋ねてくる。

「んな事ねえよ……」

俺は軽くその質問を受け流す。

「……こんなのりっちゃんのキャラじゃないよ」

律のテスト用紙を持っていた唯が一言告げた。

「何だと！？どういう意味だ！！」

律の一言が木霊する。

「私くらいの人間になると何でもそつなくこなせるのですよ！！」

と高笑いする律。

「りっちゃんは私の仲間だと信じてたのに……」

唯の呟きに澪が何かを思い出したようにニヤニヤ笑いながら

「……テスト前日に勉強がわからないから教えてくれって泣き付いてきたのは誰だったっけ？」

と律を見て尋ねる。

（ああ……、澪に教えてもらったからなのか……）

律の高得点の意味がようやく解けた俺は小さく笑っておく。

「あ！？バラすなよ！！」

律が濡を見て焦ったように告げる。

すると唯が

「それでこそりっちゃんだよ！！」

と律の両肩を掴み告げた。

「赤点取ったやつに言われたくねえ！！」

律の盛大なツッコみが炸裂した。

「追試がある人は部活動禁止だって……」

唯が用意されていた羊羹に手を伸ばし一口食べながら呟く。

「え！？じゃあここに居るのもマズいんじゃない？」

律の一言に唯は

「大丈夫だよ、お菓子食べに来てるだけだし」

等と答えてくれた。

「そっか、それなら安心だね」

律は満面の笑みを浮かべるが直後に

「なんでやねん！」

唯の首にチョークスリーパーを炸裂させる。

「そういえば、翔は大丈夫だったのか？」

唯と律のやり取りのさなか、唐突に漑が俺に尋ねてきた。

「5教科全部合わせて400点越えだから大丈夫だ」

俺は小さく頷き紅茶を一口飲む。

すると律のチョークスリーパーから抜け出した唯が漑の方に向かい

「漑ちゃん助けてえ」

と泣きそうな表情で勉強を教えてもらおうと頼む。

「仕方ないな、今日は唯の家で勉強会だな」

驚きながらも溜め息混じりに答えるもその表情はどこか嬉しそうな感じだった。

「漑に教われれば確実に合格点取れるよ、上手いんだぜ漑は……一夜漬けの術教えるのが……」

律の言葉に俺は即座に否定しようとしたが言葉を出さなかった。

「うおーい！！印象悪いな！！普通に教えるよ！」

俺が言う前に漣がすかさず否定したからだ。

「あ、カケも来ること！いいな！部長命令だからな！」

律が俺にずびしっ！と指を差し告げてくる。

「わーったよ……」

拒否しても無駄と読んだ俺は溜め息混じりに答える。

という事で今日は部活をせず唯の家に向かう事に。

途中、俺は一度着替えたいので

「後で向かう、また後でな」

と告げて家に入っていく。

玄関に着き靴を脱ぎ家に入る。

リビングに向かおうと一歩踏み出すと同時に俺は胸を、というよりは心臓を何かで強く締め付けられる感覚に陥った。

「っ！かはっ……」

軽く呼吸困難に陥る、それほど強い力だった。

いつものルリエルの魔力の暴走なのだが、今回はそれを抑える薬が部屋にあるため対処の仕様がなかった。

そして俺はその暴走する力に抗う術もなく、うつ伏せに倒れたまま意識を失った。

く 零サイドく

翔と一度別れ唯の家に向かう事に。

「ただいまく、みんなあがってあがって」

唯が玄関を開け一言告げると促してくれる。

するとリビングであろう場所から一人の女の子が現れた。

「お帰りくお姉ちゃん、あれお友達？」

唯にそっくりな女の子、恐らく妹なのだろう子だった。

「初めまして、妹の憂です、いつも姉がお世話になってます」
ペコリとお辞儀をする妹。

（（出来た子だー！！）（））

唯と憂ちゃんを除いた全員の心の声が一致したような感じだった。

2階へ行き唯の部屋へ案内されると律が

「いやぁ……、姉妹でこうも違うもんかね？」

と唯を見ながら尋ねた。

唯はわかっていない様子で

「何が？」

と答える。

「妹さんに唯のいいところ全部吸い取られたんじゃないの？」

律がニヤニヤ笑いながら尋ねる。

「ひびーいー！」

ようやく意味を理解した唯が涙目で反論する。

すると扉が開き

「あの……、皆さん良かったらお茶どうぞ」

買い置きのお菓子で申し訳ないんですけど、と付け足しお茶を運んでくる憂ちゃん。

（（（本当に出来た子だー！！）））

再び私たちの心の声が重なった瞬間だった。

そして唯に勉強を教えることに。

すると律が

「そついやカケのやつ遅いな、何してんだろ？」

と独り言のように呟くと携帯を取り出す。

携帯を耳に当てるも反応が無いのか

「あつれー？いつもならすぐ出るんだけどなあ……」

携帯を見て溜め息混じりに告げる。

そこで私は

「じゃあ律、ちょっと翔の様子見てきてくれないか？」

と提案してみると

「うし、ちょっと見てくるぜ」

意外にも私の提案に賛成してくれた。

律が部屋を出て翔の家に向かってから5分後、私の携帯に律からの着信がきた。

「どうした律？」

私は唯に勉強を教えながら電話に出てみる事になると

「み、漣！い、今すぐ全員でカケの家に来てくれ！」

と焦ったように一言告げると電話を切った。

「どうしたの？」

唯が電話していた私に尋ねてきた。

「わからないけど、律が焦った感じで翔の家に来てくれて……」

私たちはアイコンタクトを交わすと頷きあい、律の待つ翔の家に向かう事にした。

すると翔の家の玄関が開いているどころか、そこに律が立っていた。

「どうしたんだ、律？」

私は律の後ろから声をかけた。

「良かった、カケが……」

私に気付いた律が振り返ると玄関の中を指差す。

私はそつと玄関の中を覗くと、入り口の廊下で倒れている翔を見つけた。

「翔！？」

玄関に入り靴を脱ぎ捨て翔を抱える、まだ温かいので生きてはいるようだ。

「すぐに救急車を呼ばなきゃ！」

私が言うと同時に

「お待ちなさい」

一言どこからか声が聞こえた。

すると抱えていた翔の身体が自然と起き上がると

「皆さん、こちらへどうぞ」

と再び先ほどの声が聞こえると同時に翔の身体が何かで引っ張られるように動き出す。

私たちは無言のまま翔の後をついていく。

通された場所はリビングだった。

翔はソファに仰向けに寝転ぶと

「翔は今、私の力を抑え切れず眠っています」

再び声が聞こえると同時にうつすらと氷の羽の生えた人が翔の傍に居るのに気付いた。

「貴方は……幽霊？」

私は恐る恐る尋ねてみると

「私は神の一人、ルリエルです」

翔の傍に居るルリエルと名乗った人が一礼する。

「因みに私は魂のみの存在、こうして存在出来るのは翔の魂と同化しているからです」

ルリエルはクスッと笑うと

「翔に関しては安心してください、もう少しすれば目が覚めますので」

私たちの心配していた事に関して告げてくれた。

その言葉を聞き私たちはホッと安心した。

「本来ならばこうなる前にいつもは薬を飲んでいたのに、今回は翔

に落ち度がありますね」

やれやれと溜め息を吐き出しながらルリエルは告げる。

「あの……、翔に関して何か知ってるんですか？」

恐らくは私たち4人の尋ねたい質問であろう事を、私が代表で尋ねてみた。

「ええ、翔とはもう長い付き合いになりますね」

昔を懐かしむようにクスッと笑い答えるルリエル。

「私や翔の事を詳しく知りたいなら、翔自身に尋ねてみてください。ルリエルからある程度教えるように、と言われたと言ってみてください。」

ルリエルは優しそうな笑みで私たちにアドバイスをくれる。

私たちは頷くとルリエルが

「そろそろ翔が目覚ます時間ですね、部屋に向かうとしておきます、翔が無茶しないように注意を払ってください」

何か用事があるなら翔の部屋にご案内しますよ、とルリエルが告げてきたので

「じゃあ部屋の場所だけ教えてもらってもいいですか？」

私はこの機会に尋ねてみた。

小さく頷くとルリエルが先導する後を私たちはついていった。

2階に上がり階段側右から2番目の扉が翔の部屋のようにだった。

「よろしければ、用事が終わるまで翔の事を見張っててもらえませんか？」

と私たちを見て尋ねてくる。

「わかりました、一度ここを離れますが、すぐに戻ってきます」

私たちは同時に頷き答える。

それを聞いたルリエルは部屋へと入っていった。

「律、ムギ、悪いけど翔のそばにいてあげてくれないか？私と唯は一度唯の家に行って鞆とか持ってくるから」

私は律とムギに尋ねると

「オツケ、頼んだぞ漣」

と律が答えた。

その言葉を聞き私と唯は一度唯の家に戻った。

唯の家に着き私は自分の鞆と律の鞆を持つ。

唯は唯の鞆とムギの鞆を持ち頷きあうと再び家を出ようとする。

「お姉ちゃん、どうしたの？」

玄関に向かっている途中、憂ちゃんが唯に話しかけてきた。

「勉強する場所を変更するんだよ」

のんびりとした答えを返す唯。

すると憂ちゃんが

「じゃあ私も行ってもいいかな？」

と尋ねてきた。

「いいと思うよ」？

唯は翔の了承も得ずにそう答えた。

「とにかく急ごう、唯」

私は唯を促すように告げると

「そうだね、行こう！」

力いっぱい頷き3人で翔の家に向かう事に。

「とりあえず来たのはいいが……、カケはまだ眠ってるぜ？」

翔の部屋に入ると律とムギが既に座って待機していた。

失礼だとはわかっているが、初めて入る男の子の部屋に興味が沸き、部屋を見回す。

机の上にはパソコン、ベッドの近くにギタースタンド、部屋の中央にテーブルなど色々置いてある。

「とりあえず翔が目を覚ますまでテーブル借りるとするか」

私と唯は鞆を下ろしテーブルの周りに集まり教科書やノートを取り出す。

それから20分もしないうちに律が部屋を物色し始める。

すると律が一冊の本を手に取り読み始め

「あっはははははは!!」

と笑い出したので私は無言で拳骨を食らわせ大人しくさせる。

「ん……」

不意に翔の方から声が聞こえるが、私は唯の為の勉強会なので唯に勉強を教える事にした。

〈第8話〉（後書き）

ども、作者のエターナルです。早速ですが今回のゲストは氷の神ルリエルです。

ルリエル「神話のページ見ても氷の神が載ってないからと無理やり作られた神です」

あはは……。今回翔は魔力暴走でK・Oしてるためお休みです。

ルリエル「それはそうと、8話の冒頭からオリキャラがちょっとだけ出たわね？」

うん、このオリキャラは友人が作ったキャラでね、名前とか出さないならちよつとだけ出してもいいという条件付きで許可を貰ったんだ。

ルリエル「という事は今回出たのが最初で最後？」

なるかも知れないね、またその辺りは友人に聞いてみないと流石にね。

ルリエル「それにしても、異世界を渡る程の力を持つ友人って……」

因みに翔もそれと同等かそれ以上の力を秘めてるよ、今は全く覚醒していないから使えないけど。

ルリエル「じゃあ翔も異世界を渡る事が出来るの？」

現在のけいおん！世界から異世界に直接渡る事は出来ないね、どれだけ経つても。

ルリエル「ダメじゃない」

ただ、異世界に飛ばされてそこからけいおん！世界に直接渡る事は出来るよ。

ルリエル「……どういう事？」

つまりこうだね。

けいおん！世界 異世界 ×

異世界 けいおん！世界

という事だよ。

ルリエル「けいおん！世界から異世界に直接飛べなくて、異世界から直接けいおん！世界に飛べるという事でいいのね？」

物凄く簡単な説明をありがとうルリエル。

ルリエル「何で遠回しに書いた」

作者自身、説明が苦手だからな。

ルリエル「翔の溜め息の回数が増えた理由がわかるわ……」

俺のせいだよ！？

ルリエル「ええ」

即答！？それと翔は１１話辺りで一度戦闘させようかと思ってます。

ルリエル「それはいいけど、どんな相手と戦わせるのよ？」

そうだね……、ドッペルゲンガーとかドラゴンとか？

ルリエル「現存しそうな敵と神話の敵ね……」

ドッペルゲンガーは思いっきり姿は翔なんだけど、色は真っ黒にしようかと。

ルリエル「hackみたいな感じ？」

そう、後は異世界の扉を開いてドラゴンが来たり、とかかな？

ルリエル「ありきたりなのかなんというか……」

うるさい。ただ困った事に、どんな魔法を使おうとか考えてないから魔法の名前とか決まってるんだよ。

ルリエル「ドクエみたいな感じは？」

それはまずいと思うんだ、流石に。

ルリエル「まあ今回の作者の宿題よね」

だな……、因みに翔の戦闘スタイルはルリエルの力を使って大気中

の水分を凍らせたり海や湖の水を凍らせる事だね、後は氷で作った双小剣を扱うスタイル。

ルリエル「もちろん戻す事も出来るのよね？」

当然。覚醒すれば背中から絶対に溶けない氷の羽を生成して空も飛ぶよ。

ルリエル「何でもありね」

あはは……、後は覚醒した時としてない時のスピードが格段に違うから余計性質が悪いよ。

ルリエル「どれくらい違うの？」

そうだね……、50m走を10秒台で走る子供が、2回目走るとウイン・ボト並に早くなるくらい？

ルリエル「どれだけ早いんだよ……」

ある意味ではチートキャラなのかもしれないね、うちの翔も。

ルリエル「そうね……」

さて次回、9話は以前プロローグの後書きに書きましたが漣が大胆行動を取ります。

ルリエル「正直私も驚いたわ」

だろうね、それでは次回をお楽しみにっ

く第9話く（前書き）

相変わらずグダグダ。

翔「今回は澪から……という行動が……」

うん、何をされたかは今書いちゃ面白くないので本編で。

翔「というか、思いつきり自然体じゃない気がしてならないが……」

気にするな、とにかく第9話です、どうぞ。

〈第9話〉

〈翔サイド〉

意識を失っている間、懐かしい夢を見た。

場所や登場する人はあまり覚えてはいないが、この世の物とは思えないほど綺麗な場所だった。

辺り一面に様々な花が咲いている。

その中に俺は立ち尽くしていた。

すると俺の後ろの方で声がしたので振り向いてみる。

花に囲まれている人が居た。

が、距離があるためか顔ははっきりと見えなかったが、腰まで伸びる蒼い髪、漆黒を連想させるような黒いローブを纏っている少女のようだ。

笑っているのか、泣いているのか、絶望感に打ちひしがれているのか、それは俺にはわからなかった。

（この子……誰だ？）

恐らく俺が知っている少女なのだろうが、思い出す事が出来ない。声に出そうとするが、口が動かず心の中で呟く形になってしまふ。

俺はその場から動く事も出来ない、いわば演劇を見させられている人形のようなのだ。

すると今度は別の方向から声が聞こえそちらを向くと、俺の身体は強い力で新たな声の方へと引っ張られていく。

抗う術もなく俺は行き着いた先に待っていた光に包まれる。

眩しく俺は目を閉じ、光が消えたと同時にゆっくりと目を開ける。

最初に飛び込んできたのは見慣れた天井。

俺はまず軽く手足が動くかだけ確認すると、首だけ動かしてみる。

すると何故か唯の家に居たはずの4人と見知らぬ女の子が座っていた。

俺は視線を天井に戻し

「どうしてこうなった」

そう呟いていた。

ベッドの近くに居た律はその声が聞こえたらしく

「カケ、目覚めたか？」

俺の顔を覗き込みながら尋ねてくる。

その言葉を合図にみんなが寄ってきては俺の顔を覗き込み

「大丈夫か、翔？」

「心配したよ……」

「目が覚めて良かったわ」

という言葉をもらった。

「ああ……、とりあえずは大丈夫だ」

そう答えると漑・唯・ムギは勉強のためテーブルに向かう。

少し起き上がろうとするが

「ダメだって、もう少し寝てたほうがいいぞ？」

と律に起き上がるのを阻止された。

仕方なく再びベッドに寝転ぶと

「どれくらい眠ってた？」

律に質問を試みる。

「大体1時間つてところかな？」

うん、と律は腕を組み考えながら答えた。

「そうか……」

天井を見上げ溜め息を吐き出す。

「それで、その子は誰だ？」

俺は再び首を動かし見知らぬ女の子を見たまま尋ねた。

「初めまして、平沢憂です、いつも姉がお世話になってます」

憂と名乗った女の子が立ち上がりその場でお辞儀をする。

(……唯の妹、かなり出来た子だな)

心の中でポツリと呟き

「ああ、俺は神藤翔、よろしくな」

なんと呼べばいいのかわからないため名前は呼ばなかったが、自己紹介し返しておく。

そんな俺の思いを汲み取ったのか平沢妹は

「憂でいいですよ、神藤さん」

と告げてくれた。

「……わかった、俺の事も翔でいいぞ憂ちゃん？」

俺はふっと笑みを浮かべ告げると

「わかりました、翔さん」

同じく笑みを浮かべる憂ちゃん。

視線を天井に戻すと目を閉じる。

すると勉強中の唯が

「うっ……、ダメだやる気が続かない」

シャーペンを投げ出す音と共にそんな言葉を吐き出した。

「おいおい、まだ30分も経ってないぞ？」

涙が呆れたように尋ねると

「唯ちゃん、後でケーキ食べよう？だからもう少し頑張って」

ムギがケーキを見せると、一度は消えかかったはずの唯のやる気メーターがMAXになり問題集を一気に解き始める。

（さすがだな、唯の事把握してやがる……）

そのやり取りを聞き俺は心の中で呟くと同時に苦笑いを浮かべる。

それから2時間ほど経った頃、憂ちゃんは用事があるとの事で自宅に帰った。

「出来た！」

嬉しそうな表情を浮かべながら終了を告げる唯。

「とりあえずそれだけ解ければ十分だろ」

漣もさすがに疲れたのか軽く伸びをしている。

「あれ、そういえば律は？」

漣が辺りをキョロキョロと見回して不在の部長を探す。

「翔、何か知らないか？」

そのまま俺に質問が飛んできた。

「知らないぞ……、とりあえずリビングに行くか」

俺はゆっくりと起き上がるとそのまま部屋を出る。

（律に口止めされたからな……）

はあ、と溜め息を吐き出し階下に向かう。

漣たちも俺の後に続きリビングに向かう。

リビングに入った俺たちを迎えたのは綺麗に盛り付けられた食事の数々だった。

「ん、終わったのか？」

キッチンから出てきた律が俺たちに尋ねてきた。

「ああ、唯なら終わつたらしい」

俺が答えると次に漣が

「この食事、もしかして律が作ったのか？」

料理を目の当たりにしながら律に尋ねた。

「ああ、私だけ何もしてなかっただろ？だからカケにちよつと冷蔵庫の食材使つていいか聞いたんだ」

ネタバラしをしながら答える律。

「翔……、口止めされてたのか」

呆れたような表情を浮かべた漣が俺に告げてきた。

「悪いな、律にどうしても口止めしてほしいって頼まれたからさ」

ふう、と一息つきながら答えておく。

「ま、そんな事よりみんなの分もあるから食つていきな」

俺はいつもの定位置の席に座るとみんなを手招きして呼ぶ。

「カケが良く食べるだろうなーと思って、ちよつと量多めに作ったからな？」

律がしゃもじを器用にクルクル回しながら告げてきた。

「わかった、漚たちもこっちに来いよ」

小さく頷くといまだリビングの入り口で立っている漚たちを呼ぶと、ハツとした表情を一瞬浮かべると

「ああ、そうするよ」

そう答え各々好きな席に着く。

全員が席に着いたのを見て律も席に着く。

すると不意に玄関からチャイムが鳴る。

「ちょっと見てくるから、先に食ってていいぞ」

と告げ俺は席を立った。

玄関を開けるとどうやら宅配便だったようで、俺は簡単にサインし荷物を受け取る。

荷物を受け取り俺は一度部屋に向かい荷物を開封する。

中から出てきたのは更にグルグル巻きにされた長細い何かだった。

躊躇せず俺は封を開けると、中から刀が出てくる。

するとヒラリと一枚の紙が舞い落ちるのを見つけ読んでみる。

「新作が出来たから送ってみる、模造刀だが練習用には使えるだろ」

急いでいたのか少し殴り書きになっていたが、そう書かれていた。

どうやら俺の友人がこちらの世界に来た直後に贈ったものだろう。

（やれやれ、あいつもその場で渡せばいいものを……）

心の中で呟き苦笑を漏らしながらも俺は刀を引き抜いてみる。

柄と鞘は木で出来ており、刀身はどうやら鉄のようだ、鍔は無い。

右手のみで刀を持ち、軽く横に刀を振ってみる。

ヒュンッ！

と一瞬重さを感じさせず風の切る音が聞こえると、再び刀は取り出した時と同じ重さに戻る。

その刀を鞘に戻しベッドの近くに立てかけると俺は階下へ向かう。

「遅かったな、カケ？」

リビングに入ると同時に律から声が聞こえた。

「ああ、ちよつと部屋に戻ってたからな」

簡単に答えると俺は席に着く。

それから雑談しながら俺たちは律の作った食事を食べつくした。

（正直な感想、律がここまで美味しい料理作れるのは意外だな……）

椅子の背もたれに身を預け天井見ながら一息つく。

「それじゃあ私たちはそろそろ帰るか」

漣の一言により解散することに。

「あ、なら送ってくぞ?」

そう告げると俺は立ち上がり、壁に掛けておいた白いコートを手に取る。

「あ、私は玄関のところで大丈夫だよー」

唯が一言告げてくるが

「いいから、こういう時は全員の方が安全だろ?」

俺はその一言を却下する。

唯はうーん?と唸りながらも

「じゃあお願いするよ、カケちゃん」

と答えてくれた。

するとムギからも

「私は迎えが来るので大丈夫よ」

どうやらムギに関しては唯を送っている間に来るようなので

「わかった、それじゃあ後は漣と律か」

一度漣と律を見ると二人はお互いの顔を見て頷きあうと

「それじゃあ……、お願いしていいか？翔」

漣からお願いされた。

「わかった、ムギと唯を送ったら行くか」

了承すると俺はコートを羽織り玄関に向かう。

外に出ると既に闇に囲まれていた。

時刻は午後10時ジャスト。

全員が家を出ると

「それじゃ、まずは唯の家からだな」

俺の一声により唯が先導する。

俺たちはその後ろをゆつくりと歩いていく。

3分もしないうちに唯の家に到着する。

「それじゃみんな、おやすみー！」

別れの挨拶を済ませ唯が家へと入っていく。

するとすぐさまヘリの音が聞こえてきた。

俺が空を見上げるとちょうどヘリのライトが俺たちの場所を照らす。

眩しくなり俺は視線を逸らすと

「それじゃあ、私もここで」

そうムギが告げるとヘリが少し離れた場所に着陸する。

そのヘリへとムギが歩み寄ると中から暗くてよく見えなかったが、恐らく執事であろう人物がヘリから出てくる。

（どんな家だよ、ほんとに……）

心底そう痛感させられながら心の中で苦笑するとムギを乗せたヘリは上昇し夜の空へ消えていった。

「さて、んじゃ行きますか」

律の一声により俺たちはまず田井中家へ向かう事にした。

雑談しながら歩いていた最中、律が俺に

「そついやカケって彼女居ないんだよな？」

何を思ったかいきなり尋ねてきた。

「ああ、いねえな、そもそもここまで仲良くなった女子って桜ヶ丘に入ってからだしな」

俺は即答し、更につけたし答えておく。

「そんじゃカケの好きなタイプはどんななんだ？」

何を思ったか律は次々と質問をしてくる。

「好きなタイプねえ……、正直考えた事も無いが……」

俺は腕を組み考え始める。

「そうだな、濡みたいなタイプかな？」

考えた末に出た答えを聞いた濡が顔を真っ赤にし俯いていた。

「ほほお、その理由は？」

律が更に尋ねてくる。

「何ていうか、こう濡みたいなタイプの子を見ると、守ってあげたくなるんだよな」

そう答えると律が

「でも濡って、人見知り・怖いもの痛い話ダメ・負けず嫌い・恥ずかしがり屋・寂しがり屋だぜ？」

ニヤニヤしながら尋ねてくる。

「ああ知ってる、それでも、だ」

クスッと笑い答えると

「じゃあもし仮に漣じゃなくて私ならどうなんだ？」

律が今度は自分自身を例えに挙げ尋ねてきた。

「律も同じかな、男勝りでバカばかりやってるけど、俺から見たら漣と同じかな」

俺は思っていた事をサラッと答えると今度は律が顔を赤くする。

すると真っ赤になっていた漣が

「じゃ…じゃあ、私と律ならどっちを選ぶんだ？」

これまた難しい質問をしてきた。

「……今はまだ決めれないな、だが今は漣……かな、まだ確定じゃないが」

そう答えると漣と律は顔を赤くしたまま互いの顔を見合わせ

「という事は、今後の私たちの行動次第でカケはどちらかに動く、って事だな」

と律が告げてきた。

「まあそうなるかな、だが飽くまで自然体での二人を見るからな、妙に余所余所しくなったりすると逆に怪しいし」

恐らくこの二人ならあり得るであろう事に対し釘を刺しておく。

「うぐっ、先に釘刺されたぜ……、つとここだ、そんじゃまたな」

どうやら色々話している間に田井中家に着いたようで、律は軽く挨拶を済ませると家へと消えていった。

そして取り残された俺と漑。

「……行くか」

俺の一言に漑は未だ顔を赤くしたまま

「……うん」

小さく頷いた。

暫くは無言で肩を並べ歩いていたが、田井中家を離れて10分程歩いたときだった。

不意に左腕に漑が抱きついてきた。

恥ずかしがりの持ち主のはずの漑が取った驚くべき行動だった。

「どうした？」

俺は冷静を装いながら尋ねてみる。

が、漑は何も答えなかった。

俺もそれ以上は何も聞かず漑と共に夜の住宅街を歩いていく。

それから程なくして俺と漑は秋山家に着いた。

しかし俺の腕から離れまいとしっかりと抱きついたままの漑。

「着いたぞ？」

漑に催促するように告げると今まで口を噤んでいた漑が

「……さっきの話し、全部本当なのか？」

と尋ねてきた。

「ああ……、本当だが……どうしたんだ？」

漑の様子を伺おうと尋ね返すと

「じゃあ私と律、翔の彼女になるならどっちなんだ？」

今の気持ちを教えてほしい、と付け足し真っ赤な顔を上げ尋ねてきた。

「……」

その言葉と漣の表情に俺は面食らった。

恥ずかしさで今にも視線を外しそうだが、しっかりと真剣な眼差しで俺を見据えている。

「確かに知り合った期間も短いしあまり翔の事を詳しく知らない、けど……！」

そこまで漣が言つと俺は無意識に漣の唇に右手の人差し指を当てる。

「俺が今好きなのは漣だ、だがさっきも言つたがこれから先の行動次第では律に転ぶかもしれない」

漣の唇から人差し指を離し告げる。

「だからもう少し先、俺がどちらかに告白するまで待っていてくれ」

さらに付け足し告げると納得したのか漣は俺から離れた。

家に入ろうとする漣を見て俺はその場を離れ歩き出す。

「あ、待って！」

秋山家から少し歩いたところで漣の声が聞こえたのでその場で振り返る。

すると漣が俺に飛びついてきた。

不意打ちを食らったが俺は倒れる事無く漣を抱き留める。

「今度はどうした、何か言い忘れたか？」

俺の首に両腕を回し抱きついた漣にわざとらしく尋ねてみた。

「ああ、いつか必ず私か律に告白するって約束の証をもらい忘れてた……」

そう告げると同時に漣は背伸びし自ら俺の唇にキスした。

とは言っても漣は恥ずかしさからか震えながらも唇を合わせるだけのキスを続ける。

どれくらい経ったのかわからない間漣とキスを続けると満足したのか漣がゆつくりと離れる。

その表情は暗くて読めなかったが、恐らくは茹蛸のように真っ赤なのだろう。

俺の首から腕を下ろすと漣は

「じゃ、じゃあ、また明日な！」

それだけ告げて家へと消えていった。

俺はその場に立ち尽くし自身の唇をそつと撫でてみる。

「あの漣が俺にキス……したんだよな……」

誰に言うでも無くポツリと呟きその場を離れ自宅へ戻る。

一度だけ立ち止まり見上げた空には無数に散りばめられた星が明るく輝いていた。

く 濡サイドく

私は玄関に置いておいた鞆とベースを持ち家の中に入る。

自室に戻ると鞆とベースを置くと着替えるのも気にせずベッドに倒れ込んだ。

私自身の想いを翔に告げると、歯止めが利かなくなり最後には大好きな翔とキスまでしてしまった。

その事を思い出すたびに顔が熱くなり恥ずかしなる。

翔には約束の証だと言ったが、実際の私は翔が私を好きだと言ってくれた時から自分の気持ちを抑える事が出来なかった。

「明日からどんな顔で会えばいいんだろ……」

私は明日からどうしよう、という事ばかり考えていた。

するとポケットに入れておいた携帯が震える。

私は携帯を取り出すとメールが届いた。

送信者：翔

「あ……」

私は期待半分、怖さ半分でメールを開いてみる。

すると本文には

「さっきのキスには驚いたけど嬉しかった、ありがとうな？多分気持ち混乱してるだろうけど明日からはいつも通りで会おうな」

と書いてあった。

そのメールを読むだけで胸の中がじんわりと暖かくなるのを感じると返事を書くことと思ったが、さすがに先ほどの事を思い出し上手く返事が書けなかった。

「いつも通りで、か……」

携帯を枕元に置くと天井を見上げ一言呟き溜め息を一つ吐き出す。

「翔が私を選んでくれるといいな……」

私は着替えるために起き上がり部屋着に手早く着替えるとパソコンを起動する。

今の気持ちを忘れないように、少しでも文字として残しておきたかったから。

パソコンの前に座った私は拙い文章ながらも文字を書き始める。

程なくして私はパソコンの電源を落とし部屋を離れる。

今の気持ちを思う存分この言葉に込めれたと思う、たった一言だけ
ど今の私の強い思いを込めた一言。

『大好き』と書いて。

部屋を後にした私は階下へ降りリビングへと向かった。

（翔サイド）

翌日、俺たちは唯の追試が終わり戻ってくるのを待っていた。

俺は動揺も心配もしていなかった。

唯と漑の勉強会は必ず成功していると信じていたからだ。

が、漑は部室内をウロウロし、ムギに至っては淹れた紅茶をカップから溢れているのにも気付いていないようだ。

「ムギ、紅茶こぼれてるぞ？」

律の一言にハツとしたムギが慌ててこぼれた紅茶を拭き取った。

当の律はというと、いつもの様子でいつもの席に座り紅茶とケーキを楽しんでいた。

因みに今日の漑の様子は、昨日メールで送った通りいつも通りの漑に戻っていた。

しかし、やはりまだ意識するのかぎこちない部分も見受けられるが俺はあえてスルーする。

そんな事を思っていると不意に部室の扉が開いた。

「あ、唯！」

そこには唯が俯きながら部室に入ってくる。

「ど、どうだった？」

漣は恐る恐る尋ねてみた。

「ど、どうしよう漣ちゃん……」

肩をプルプル震わせながら、しかし何かあるような感じの唯。

「え……、もしかしてまたダメだった……？」

漣の表情には焦りが浮かんでいる。

すると唯は漣にテスト用紙を見せる。

「ひゃ、100点取っちゃった……」

そのテスト用紙を見た漣は一言

「極端な子……」

恐らくこの場に居る全員の思いを漣が叫んだ。

（まあ……12点だったやつが漣に教わっただけで満点取れるのは
凄いわな……）

心の中で呟いてみると、視線を感じそちらに向いてみる。

すると律が不意に

「漣って教えるのホント上手いから、唯でもわかりやすかったんだ

ろくな」

俺の心の呟きを汲み取ったのかそう小声で告げてくる。

「確かに、でもまさか満点取るとは思ってたがな」

俺が答えると俺と律は顔を見合わせ小さく笑う。

「何はともあれ、一段落ついたな……」

漑は深い溜め息を吐き出しながらポツリと漏らす。

「これもみんなのおかげだよ、ありがとう！」

唯のお礼の言葉に対し律が立ち上がり

「いやあ、それほども」

頭をポリポリと掻きながら答える律。

「お前は何もしてないだろ」

自然と俺と漑がハモる。

「酷いよ二人共!!」

律が泣き真似しながら抗議してくる。

「律は基本、邪魔しかしてなかったじゃないか、でも料理は良かったかな」

漚の一言に律は言葉が出ない様子だが、最後の一言には嬉しそうに笑っていた。

「よし、そんじゃ追試合格祝いでカラオケでも行くかー」

という律の一声が聞こえると俺は心無しか溜め息を吐き出す。

（ここ、本当に何部なんだろうな……）

「え、奢ってくれるの!？」

「ねーよ」

という唯と律の漫才声にも俺は溜め息を吐く。

（（（ギターに復帰させるまでが一苦労だな……）（））

俺と漚とムギの思考が一致した。

暫く俺たちは部室でお茶を楽しんでいたが、下校時刻が迫っていたため俺たちは昇降口に向かった。

「明日休みだし、どっか遊びに行かないかー？」

昇降口を一步外に出ると、律の一言が夕焼けに染まる空に響いた。

俺たちはその場に立ち止まり律の方へと振り返り

「それはいいが、何するかくらい決めてから言おうぜ?」

俺が先陣を切って尋ね返す。

「うつ……、予定は未定って言うだろ！」

返す言葉が無いのか律がそう答える。

俺と漑は顔を合わせると溜め息を吐き出し

「行くなら今日中に決めてからメールで知らせればいいだろ」

漑と声が八モった。

すると律は頬を膨らませたまま

「わかったよ……」

不貞腐れたように答えた。

正門を抜け漑と律をいつもの別れ道まで送り、漑たちとはそこで別れる。

ムギは迎えが来ていたので正門で別れた。

残ったのは俺と唯。

「カケちゃん」

俺と肩を並べ歩いている最中唯が立ち止まると、不意に声をかけた。

「どした？」

俺は少し歩いた場所で立ち止まり尋ねる。

すると唯から

「何か今日の澪ちゃん、いつもと様子が違うような気がしたんだけど気のせいかなあ？」

意外にも鋭い質問が飛んできた。

実際、俺には思い当たる節があり若干驚くが冷静を保ちつつ

「さあな、気のせいじゃないか？」

と答えておく。

俺の答えを聞いて唯はうーんと唸りながらも

「気のせいかなあ、まあいいや」

さほど気にしない様子を見せる。

（唯って時々鋭いところがあるよな……、いつもは天然な癖に……）

俺は一度だけ唯を見ると視線を戻し

（改めて平沢唯を再認識したな……）

そんな事を考えながら俺は帰路に着いた。

く第9話く（後書き）

はい、というわけで漣の意外な行動が翔にキスでした。

漣「／／／／／」

翔「気絶してるし……」

あはは……、まああの時は夜で暗かったからね、それに街灯1個と月明かりだけだったし。

翔「にしても、唯が意外にも鋭いな」

天然なんだけどそういうところは意外と鋭いんだよ。

翔「へえ」

反応薄いね、それと以前書いたと思うけど、翔には10話でもう一度驚いてもらいます。

翔「具体的には？」

伏せる！書いたら面白くない！

翔「少しぐらい教えろよ」

仕方ないな……、とある人と……を行ってもらいます。

翔「ふーん、ところで冒頭の花畑って俺もよく知ってるところなの

か？」

冒頭の花畑は魔族やら神族やら人間が交わるギャルゲーから引つ張ってきました、というか書いてたらそうなった。

翔「ダメじゃん」

次回は澪視点はありません。

澪「じゃあ誰視点が入るんだ？」

お、復活したか。それは言えないな。

翔「つたく」

あはは……、澪も復活したという事で今回はこの辺りで！

翔・澪「また次回に会いましょう」

ホント仲いいお前ら。

〈第10話〉（前書き）

今回は澪以外の視点を交えてみました。

翔「誰を入れたんだよ？」

それは本編のお楽しみ、では第10話です、どうぞ。

〈第10話〉

〈翔サイド〉

「……………」

7月下旬、茹だるような暑さの中俺は

「夏だ！海だ！泳ぐぞー！」

「おい、あんまりハメを外しすぎるなよー！」

「唯！水がしょっぱいぞ！」

「塩！塩だよりっちゃん！」

「き、聞いちゃいねえ……」

軽音部全員で合宿に来ていた。

唯と律は波打ち際ではしゃぎ、漑は二人に声をかけている。

ムギはその様子を楽しそうに見ている。

俺はというと、みんなから少し離れたところで砂浜に腰掛け成り行きを見守っていた。

何故こんな事になったのか、それは夏休み前の事だ。

俺たちが部室でいつものように過ごしている（俺はヘッドフォンを机に置きぐでーとしたまま音楽を流し聴いている）と、漑が一言

「合宿をします！」

と告げた。

少しの間があつた後

「合宿……！？」

「マジで！？海！？山！？」

唯と律が興奮気味に漑に尋ねる。

俺は漑の一言に顔だけを漑たちの方へ向ける。

「遊びに行くんじゃないやありません」

漑はそれをスッパリと切り捨て

「バンドの強化合宿！朝から晩までミツチリとバンドの練習をするの……！」

と答えるが

「着ていく服買わなきゃ！」

「水着も買わなきゃな！」

やはり唯と律は遊ぶ気満々の様子。

「聞けー!!」

漚の怒声により遊ぶ気満々の二人が戻ってくる。

「唯と翔が軽音部に入って3ヶ月は経つのに一度も音合わせしてないんだから」

確かに俺たちはこれまで部室でお茶をし、バンドらしいバンド活動を一切していなかった。

「それはそうと……なんで急に？」

律が頭に？マークを浮かべつつ漚に尋ねてみる。

「夏休み明けたら学園祭があるだろ？」

漚の一言に律は

「学園祭……!？」

驚きを隠せないでいた。

が、しかし

「はいはい！メイド喫茶やりたい!!」

という律の一言に俺は溜め息を吐く。

それどころか

「私お化け屋敷ーっ」

唯がノった、カオス化し始めている。

「ここ軽音部！！ライブやるの！！」

漑の鉄拳が律の頭上に振り下ろされる。

律の頭には大きいたんこぶが出来上がる。

「ちょっとしたジョークなのに……なんで私だけ……」

若干涙目になりつつ呟く律。

唯は律のたんこぶを見て「おー……」と感心したような表情で見ている。

漑の手は若干赤くなっている、余程力を込めたのだろう。

「でも漑ならメイド服が似合いそうだなー」

復活した律が漑を見ながら一言告げると

「ええ！？」

漑は顔を真っ赤にし驚く。

頭から煙を上げ「私が……」などと呟いている漑、恐らく自分がメ

イド服を着ている姿を想像しているのだろう。

「何てなー、冗談だよ冗談」

律がそう告げた次の瞬間には漑の鉄拳が2度振り下ろされた。

漑はムギに抱きつき「律がいじめる……」と泣き付いていた。

律は頭に2段のたんこぶを形成し伸びている。

カオス化してきた部室内の様子を見て俺は一つ溜め息を吐く。最近溜め息の回数が増えてきた気がする……。

すると律がたんこぶを2段作っただまま漑を見て

「でも合宿するって言っても、スタジオ付きの旅館とかあるの？」

一番重要な点を漑に尋ねる。

「私お金無いよ？」

唯も一言告げる。

「そ、それは……」

漑が二人の口撃にたじろぐ。

ぶーぶーと言う二人を抑えつつ漑はムギの方を見て

「ム、ムギ、別荘とか持ってた……」

「ありますよ?」

漣の質問にムギは即答で答える。

「「「あるんかい」「」」

俺以外の3人の声が揃う。

(まあムギクラスのお嬢様なら別荘の1つや2つ持ってもおかしくは無いな……)

俺は心の中で呟く。

するとどうやら合宿先はムギの別荘という事に決まり、4人とも席に着く。

相変わらずでーとしている俺を見て律が

「思ったんだけどさ」

一言発する。

俺は首だけ動かし律を見て

「何だ?」

この日初の俺の発言。

「いつも力ケってヘッドフォンしてるけど、どんな曲聴いてるのか

興味あるんだけど？」

俺のヘッドフォンを指差し俺に尋ねてきた。

「俺が気に入った曲ばかり集めてるだけだ、気にするな」

俺は軽く律をあしらうが

「「「聴かせて！」「」」

漣・唯・ムギの3人も興味があるらしく俺に告げてきた。

さすがに律以外の3人を同時にあしらうのは無理と判断し、俺は小さく溜め息を吐き出し椅子から立ち上がり鞆の元へと向かう。

鞆を手にとると中から小さいがスピーカーを取り出し席に戻る。

「先に言うが、ほとんど女性の曲だからな？」

そう告げるとヘッドフォンを外しプレイヤーにスピーカーを接続し電源を入れる。

〃

俺の好きな曲ばかりではあるがバラードやアップテンポな曲など色々の曲を流していく。

その一曲一曲にみんなは真剣に聴いていた。

ある程度流し、一周したところで俺はプレイヤーを止める。

「ざっとこんなところだな」

俺は一言告げるとみんなの反応を見える。

「すごい、後でまた聴かせてカケちゃん！」

と唯、だから何度禁句を発するんだ唯よ。

「へえ……、バラードとかもいいかも」

と唯、どうやら曲を聴いて歌詞が浮かびかかっているのだろう。

「素敵ですね、ずっと聴いてても飽きないと思うわ」

とムギ、若干うつとりしてるがあえて放置。

「へえ、でも何で男性の曲聴かないんだ？」

最後の律から質問が飛んできた。

「俺の声は普通に比べて低すぎるから男性の曲は歌いにくいんだ、だから声の高い女性の曲が主体だな」

後は女性の曲の方がいい曲が多いしな、と付け足し質問に答えつつ再び再生する。

「しかし、本当に聴き飽きないな」

スピーカーから流れる音楽を聴きながら律は紅茶を啜っている。

「俺自身、何度聴いても飽きない曲ばっか入れてるからな」

律と同じく俺も紅茶を啜る。

「つか、律よ」

俺はふと思いついた事があつたので律に声をかける。

「んあ？」

音楽を聴くのに夢中になっている律は間抜けた声をあげる。

「合宿の件だが、行く場所は決まったが日にちはいつだ？」

気になった事を尋ねてみると律は

「んー、溲いつ行くんだ？」

と溲に尋ねていた。

「うーん、8月の1・2日ぐらいを考えてるかな？」

右手を顎にあて考えると溲は答え、その日にちは大丈夫かという視線をムギに送る。

ムギはそれに無言で笑みを浮かべ小さく頷く、恐らくは了承という事だろう。

「って事で8月の1・2日で行くぞ！」

律が高らかに宣言する、俺も用事は無いので了承する。

え？いい歳した男女が一緒に寝泊りするのは問題があるんじゃないかって？

俺もそれは考えたが、恐らくはこいつら全員に言いくるめられるのがオチだろうと考えてるから言うだけ無駄ってやつだ。

それにこいつらならそういう分別ぐらいつけれるだろ。

それから俺たちは、やはり練習する事もなく一日を過ごしていった。

(……大丈夫なんだろうか？)

俺は心の中で少しばかり不安が募ってきた。

そして時は少し流れ今は夏休みの7月31日。

俺は今、灼熱の太陽が輝く中外出していた。

格好は黒いTシャツにジーパン、薄い上着を肩に羽織っているがさすがに暑い。

「……あっち」

誰に言うでも無く俺は一言漏らすと

「あつちいなあ……」

俺の言葉に賛同するかのよう一言聞こえてきた。

その言葉のした方を見ると

「オッス、カケ」

律だった。

何故こいつは俺だと気付けた？と問う前に

「……じゃあな」

俺は暑さと律から逃げるように一言告げるとあてもなく歩き出そうとするが

「ちょ！待てよカケ！」

キ　タク風にセリフを吐き出した律に勢いよく肩を掴まれた。

「何だよ……」

暑さでだいぶ参っていたので移動しようとしたが、律に肩を掴まれる。

「だいぶ参ってるな……、せつかくこうして会ったんだからどっか遊びに行かないか？」

律は俺の状態を見て一言呟くが、すぐに俺を遊びに誘ってきた。

「まあ断る理由も無いし、別にいいぜ？」

俺は迷う事無く了承する。

「んじゃ決まり！まずはゲーセンでも行かないか？」

このクソ暑い中、律のテンションはいつも通りかそれ以上だった。

「んじゃ行こうぜ、この暑い中外にずっと居ると干からびそうだし」

俺はそう告げると歩き始める。

律も俺を追いかけ左隣を俺と同じペースで歩く。

「そっぴゃ、漣はどうした？」

俺は歩きつついつも一緒に居る漣が居ない事を尋ねると

「ああ、漣は家で勉強だつてさ、真面目だよな」

律の回答に、漣らしいな、と心で呟くと苦笑を浮かべる。

「ま、そっぴゃ事なら仕方ないな」

暫く歩くと不意に律が

「そっぴゃ、カケはいつも休みの日は何してるんだ？」

俺の休日の過ごし方について尋ねてきた。

「そうだな……、その日によって変わるが、今日みたいに出かけた
りとかだな」

と答えると律は

「じゃあ今日みたいな日以外の事は？」

更に俺に質問してきた。

「基本、夕方ぐらいまで寝溜めておくか剣術の練習、あるいは音楽
聴いてるけど？」

俺は思い出すように答えていく。

「へえ、なるほどね……あ、そうだカケ」

俺の休日の過ごし方に納得したのか律が一言告げてくる。

「何だ？」

続きが気になり俺は律に尋ねてみる。

「今度、剣術やってる姿見せてくれないか？」

と律が答えてきた。

「ああ、別に構わないがいつ見に来るんだ？」

日にちを決めておこうと思い尋ねてみる。

「じゃあ、合宿終わった2日後の昼前から!」

律の回答に俺は了承の意味を込め頷く。

雑談しつつ歩いていたためか、目的地まであっという間にたどり着く。

ゲーセンの中に入るとエアコンの風が火照った身体を冷ましてくれる。

「んで、何やるんだ?」

俺は軽く伸びをしつつ律に尋ねてみる。

「ん……、あれだな」

律は一通り見回すと指差した先には何台も並ぶプリクラ。

「……マジか? 律」

俺が律に尋ねると律は俺の方を向き

「マジだ!」

満面の笑みで答える。

俺は小さく溜め息を吐き出し

「わーっ たよ……」

そう答えるしかなかった。

律は俺の答えを聞くと待ちきれないのか俺の腕を引っ張り歩き出す。若干律に引っ張られ躓きそうになるものの、何とか律のペースにあわせ歩く。

中に入るが、操作等は全く無知なので全て律任せにする。

律は手馴れた様子で手早く操作すると

「1枚目行くぞ」

と声をかけられた。

俺は律から少し離れた場所に立っていると、俺に気付いた律が俺の隣に立ち1枚目が撮影される。

それから立ち位置を変えたり等して2枚目、3枚目と撮っていく。

「カケ、次で最後だからこっちこっち」

律が手招きしつつ俺を呼び寄せるので、律の指示に従い隣に立つ。

「んじゃ、最後の1枚行くぞ」！

やけに気合の入った一声を上げ律は撮影ボタンを押す。

（まあ、こついうのもたまには悪くないかもな……）

俺が心の中で考えて居ると、撮影5秒前になった直後に

「ん……」

律は俺の顔に手を添えると自分の方へ向けいきなりキスしてきた。

今の状況がわからず俺は恐らく驚いた表情をしたまま律とキスしているであろう。

そしてその状態のまま撮影が終わると律がゆっくり離れる。

「……………」

律は顔を真っ赤にしたまま無言になる。

そんな律を見て俺はクスッと笑うと律を抱き寄せる。

「笑うなよ……、私のファーストキスなんだから……」

抱き締められていると気付くと律は俺の背に腕を回し抱き返してくる。

律は俺を一頻り抱くと自ら離れる。

「さーて、カケにいたずら書きするかな！」

まだ若干頬に赤みを帯びているが、いつもの律に戻ったようだ。

それから暫くして俺と律は恥ずかしさからか、お互い一言も交わさずブラブラしていた。

（さて、どうしたもんかな……）

そんな事を考えていると不意に律が立ち止まり

「なあ、カケ……」

ギリギリ聞こえるぐらいの音量で俺に話しかけてきた。

「ん？」

俺は少し前に進んだところで立ち止まり振り返る。

「えっと……、さっきの迷惑だったかな……？」

恐らく律はキスした事に対し尋ねてきたのだろう。

なので、俺の答えはもちろん

「んなわけないだろ、正直戸惑ったのはあるが嬉しかったってのもあるけどな？」

だった。

俺の答えに律の表情は笑みに変わり俺の隣に駆け寄ってきた。

「さて、次どこ行く？」

律が俺に質問してくるので俺は携帯の時計を確認する。

時刻は13時を過ぎたところだ。

「そうだな……、飯でも食いに行くか」

ちょうど昼食を摂ってない事を思い出し提案してみる。

「オツケ、んじゃ行こうぜ」

律はそれだけを告げるとゆっくりと歩き始める。

その隣を俺が並ぶように歩く。

暫く歩き辿り着いたのはマックスバーガーというファーストフード店だった。

俺と律は同じハンバーガーセットを注文しトレイを持ち入り口に近い窓際の席を陣取った。

「にしても、明日唯遅れないで来れるかなあ？」

ハンバーガーに口をつけながら律が一言呟く。

「どうだろうな……、時計見間違えて早く来るってのは考えれそうだな」

俺はポテトを一つ摘み上げ口に運びつつ答える。

「どうだか、案外寝坊しそうじゃないか？」

クツクツと律が笑い不吉な事を言い出した。

「……なんだかあり得そうだからやめてくれ」

俺は深い溜め息と共にポテトを食べていく。

律は俺の返答に苦笑いしている。

「まあ憂ちゃんが居るから多分大丈夫だろ」

よく出来た妹を思い出し告げれば俺は小さく笑う。

「カケはこれから何か用事あるのか？」

恐らくはまだ一緒に遊ぼうと言うであろう律から尋ねられる。

「いや、今日は一日丸々暇だ」

そう答えると律は携帯を取り出し時間を確認すると、タイミング良く着信が入る。

「少し待っててくれ」

一言言くと律は席を立ち電話に出る。

声は聞こえないが律の様子を伺うと何か約束を忘れていたのか焦っている。

数分ほど戻ってくるなり

「ごめん！今日弟と映画見に行く予定だったの忘れてた」

両手を合わせ謝罪してくるので

「ああ、気にするな、しっかり楽しんで来いよ？」

と答えておいた。

それを聞いた律は

「じゃあ、もう行くな？また今度遊ぼうぜ」

と告げて店を出て行った。

俺は一人で食事を済ませるとする事も無いのでそのまま帰路に着いた。

く律視点く

「ったく、聡のやつタイミング良すぎだったの……」

カケと別れ私は太陽が照りつける中弟との待ち合わせ場所に向かっている。

若干愚痴を漏らすけど、もし聡の電話が無かったら、と考えるとあの意味では良かったのかもしれない。

私はさつき撮ったプリクラを見る。

そこにはクスッと笑った表情や、私のキスに本気で驚いてるカケの表情が写っていた。

自然と頬が緩んでしまう、傍から見れば変な人に見られてしまうので、両手で自分の頬を軽く叩く。

プリクラを財布に戻すと、いつの間にか待ち合わせ場所に着いていた。

「あ、姉ちゃん」

少し離れた場所から聡の声がするので

「おーい、聡」

軽く右手を挙げ応える。

「悪いな、すっかり約束忘れてた」

私が謝罪すると電話口では怒ってはいたが、どうやら気にしてないらしく

「いいよ、それより早く行かないと始まる!」

と答えてくれた。

私たちは暫く歩き街の映画館にやってきた。

「何観るんだ?」

私は聡に尋ねると

「これかな」

そう言っ指差したのは、魔法少女リカルナは The MOVIE 1st だった。

特に異論も無いのでチケットを2枚購入し、映画館の中に入っていく。

上映が始まると、弟は食い入るようにスクリーンを凝視している。

私かというと、こういった映画も嫌いではない。

が、何故か楽しめないで居た。

（カケが居ないから……なのかな？）

心の中で自問自答を試みるが、答えは出てこなかった。

そして私は一つの答えを導き出した。

（やっぱり……、私は本気でカケを好きになったみたいだな……）

いつからかわからない、けれど気がいたら翔の事を気にしていた。しかも今回のライバルは漑だ、負けたくないという気持ちも強くなる一方である。

（……決めた、私も真っ向から勝負して、カケがどっちを選んで後悔いの残らないようにしなきゃ！）

そつ心に誓い私は意識を映画に向けた。

〈第10話〉（後書き）

夏休みの日常編と言う事でしたが、上手く書けたかな？

翔「それを読者に聞いてどうする、つーか今回律視点か……」

それに翔、律にもキスされたしね。

翔「させたのはお前だろ」

まあね、元々書いてるうちに律もヒロイン化し始めてたし。

翔「はあ、これからどうなるやら……」

構成は頭にあるよ、因みに予め書いたように、3人で仲良く終わるか、律とくつつくか、漣とくつつくかはまだ決めてないけどね。

翔「作者的には誰とくつつくのがいいんだ？」

作者の超個人的意見なら漣だね、揺らぐ事は無いよ。

翔「でも現に揺らいでるじゃねえか」

言うなorz

翔「次回は合宿編です、短いですが最後には布石が……？」

次回に会いましょう。

12月6日 午前3時26分追記

そういえば、21000PVとユニークが2000人突破したよ。

翔「だからそういうのは後書きの初めに書けって言っただろ！」

読者の皆様本当にありがとうございます！

〜第11話〜（前書き）

合宿編初日です、が、練習始まるのが13話になりますorz

翔「10話の後書きに書いた布石というのが、今回の最後でわかります」

今回は翔サイドのみです、すみませんorz

それでは第11話どうぞ。

〈第11話〉

〈翔サイド〉

翌日、俺は全員集合するのを待っていた。

時刻は午前8時をちょっと過ぎたところ。

俺以外に漣・律の二人しか来ていない。

「ん……、ねみい……」

俺は軽く伸びをし、一言漏らすと

「寝てないのか？」

漣が心配そうに俺の顔色を伺いつつ尋ねてきた。

「いや、寝たには寝たが、寝た時間が遅くてな」

そう、前日は夜中に用事を済ませていたため寝たのは夜中の4時である。

何故そんなに遅くなったのか？という質問が来るだろうが、今は割愛させてもらう。

「まああまり無理するなよ？」

漣の一言に俺は苦笑いを浮かべ応えるしかなかった。

そして時刻は8時45分、ムギも到着し残すは唯一人となった。

が、8時50分を過ぎても唯の姿は見えないので、漣が試しに電話を掛けてみる。

暫く間が空いた後に漣が一言

「……おはよう」

と言ったので俺は溜め息を吐き出す。

唯は何とか電車ギリギリに合流し、俺たちは雪崩れ込むように電車へ駆けて行った。

「はぁ……、はぁ……、遅れてごめん……なさい……はぁ……」

息も絶え絶えになりながらも謝罪してくる唯。

「とりあえず落ち着くまで喋らない方がいい、その方がすぐ使った体力が戻るから」

俺の一言に唯は頷き乱れた呼吸を整え始める。

数分後、俺たちは電車で唯が遅れた理由を尋ねてみた。

「いやあ、ワクワクしてたら寝付けなくてね」

何とも唯らしい返答だった。

そして前日律が言った通りであった。

「まったく、小学生かっつの」

律が呆れたように告げるが

「いや、そうでもないみたい」

漣が一言告げると隣に居るムギを見ると、どうやら眠っている様子だった。

「夢だつて言つてたもんね」

唯が思い出したように呟くと

「写真撮つておこつぜ」

とカメラを鞆から取り出す。

「よしなよ、起きちゃうよ」

唯が止めるが表情はクスクスと笑っていた。

「思い出思い出」

律はそういうとシャッターを切る。

フラッシュ付きだったらしく、その光が収まるとムギが起きた。

「それよりさ、そろそろ目的地どこなのか教えてくれよ」

律が喜々とした表情でムギに尋ねる。

「えーっと……」

ムギが答えようと窓を見るが、タイミングよくトンネルに入る。

「もうすぐ」

ムギの一言を聞くと同時にトンネルから抜け、目に飛び込んできたのは眼前に広がるのは青々とした海だった。

「海かあ」

漣が一言呟いている。

「唯！」

何を思ったか律が窓のレバーに手をかけると、律に呼ばれた唯は意思疎通を図り同じ様に空いたレバーを握る。

「「せーの！」」

と掛け声と共に開け放たれた窓からは海の潮の香りが漂ってきた。

「よし、泳ぐぞー！！」

「だから！遊びに来たんじゃなくて！！」

律の一言に漣が反論するが、二人とも聞いていなかった、むしろ騒

いでいる。

「うるさい……、騒ぐなお前ら……」

まだ半分以上眠い状態の俺は一言告げるとヘッドフォンを耳にかけ音楽を流す。

電車が到着し暫く歩いた後、俺たちは一つの別荘に到着した。

「で、デケえゝ!!」

そう叫んだのは律だった。

「本当にこんなところに泊まってるの？」

唯が躊躇いがちにムギに尋ねる。

「本当はもっと広いところに泊まりたかったんだけど、一番小さいところしか借りれなかったの」

とムギが答えると零と律が驚いた表情を浮かべる。

「これで……一番小さいの？」

律が冷や汗をかきつつムギに尋ねる。

「ええ、ごめんなさいね？」

何を思ったか俺たちに謝罪するムギ。

「これで……一番小さい……？」

律は別荘を再び見上げ呆気にとられていた。

そうこうしているうちに俺たちはムギの案内で別荘の中を見せてもらった。

色々見た後、俺は一言

「さすがお嬢様だな」

と呟いた。

冷蔵庫の中には霜降り肉がドンツと置いてあり、更にある一室にはお姫様ベッドが置かれていた。

俺たちは更にムギの案内で音楽ブースへとやってきた。

「暫く使ってないからちゃんと動くか心配だけど……」

その言葉に漣が近くにあるアンプに触れてみる。

「うん、大丈夫そう！」

ワクワクしているのか漣が楽しげに答える。

「つーか、唯と律どこ行つた……」

俺が辺りを見回し居ない二人の人物の行方を尋ねてみる。

「そついえば途中から見なくなつたけど……」

ムギがそう答えると漑が溜め息を吐き出し、鞆から古いラジカセを取り出す。

「何だ？」

俺が尋ねると漑はクスッと笑い再生ボタンを押す。

流れ始めた曲に俺たちは耳を傾ける。

「昔の軽音部の学園祭でのライブ、この前部室で見つけたんだ」

その言葉を聞いて俺は前に律から聞いた事を思い出す。

（5つのスキルの1つ、負けず嫌いか……）

俺は自然と納得していた。

「今の私たちより相当上手い……、聴いてたら負けたくないなって思つて……」

漑が今回合宿をしようとした提案した理由がわかったので、俺は漑の肩を叩き無言で励ます。

「んじゃ、練習しよう」「よーっし、あつそぶぞー!!」「おういえー!!」「お前らな……」

俺が一言告げようとした瞬間、音楽ブースに飛び込んできた唯と律。

格好を見れば既に水着に着替えたようで、唯の手にはビーチボール、律の手には何故か鋏が握られていた。

「早っ！って練習は！？」

漣が驚愕しながらも尋ねるが二人はその言葉を聞き流し

「早く来いよー！」

と告げてビーチへと向かった。

最早俺は溜め息を付く事しか出来なかったので盛大に溜め息を吐き出す。

「早く〜！」

遠くで唯が呼ぶ声が聞こえると

「ちょっと待って〜！」

ムギが答える。

俺はギターケースを立てかけムギの行動を見守ってからどうするか考える事にした。

「行こう、漣ちゃん、翔君」

満面の笑みでビーチに行こうとしているムギ。

「ムギ！？」

漣は本気で驚いている様子だった。

「せっかく来たんだし、楽しまないと、ね？」

ムギの一言に俺は同意していた。

漣が何か考えている間にムギは着替えるためにブースを出ようとする。

俺とすれ違う際にムギは

「じゃあ、後は任せるわね？」

と俺にだけ聞こえるように告げてブースを出て行った。

俺は漣の方を見てみるといつの間に接近されたのか、目の前まで漣は迫っていた。

「か、翔はどうするんだ？」

漣は一筋の光と言わんばかりに俺に尋ねてくる。

俺は少しばかり考え、導いた答えは

「俺も行くかな、あちいの嫌いだし」

と答えると漣はしょんぼりとしていた。

「心配すんな、今は思いつきり遊んで、後で練習を目一杯やるさ」

俺は自然と漣の頭に手を置き撫でながら付け足す。

「で、でも、律とか唯がちゃんと練習するかどうか……」

漣は少し恥ずかしがりながらも心配の種である事を尋ねてくる。

「まあその時はその時だ、とにかく楽しめる時に楽しんでおかないと後で損するぞ？」

俺は一言告げると漣から離れブースを後にする。

ブースを出た俺は割り振られた部屋へ向かおうとすると、陰からブースに残された漣の様子を覗く3人が居た。

俺もそれに加わり陰から漣の様子を覗くと、一人になった寂しさからか目尻に涙を浮かべると

「私も行くー!!」

そう叫ぶと扉側に背を向けしゃがみ込むと鞆を漁り出す。

俺は苦笑いを浮かべたままそこから離れ部屋へと戻った。

それから数分後、着替えを済ませた俺は海に向かう。

唯と律は既に二人でビーチボールで遊んでいた。

「綺麗なところだな」

ムギと共に到着した漣が海を見て一言漏らす。

「……………」

律が漣のある部分を見て沈黙する。

漣は律の沈黙の意味がわからないで居たが、少しの間があった後

「食らえー！！！」

ビーチボールを漣の顔面に投げつけると唯と二人で海にダイブしていった。

俺は少し離れ砂浜に座り込んでいたが、目を閉じそのまま仰向けに寝転ぶ。

「あつちい……………」

背中には太陽に熱された砂、更に太陽の光が直に身体に当たる。

すると足音が聞こえ目を開けると漣が立っていた。

「翔、泳がないか？」

笑みを浮かべ右手を差し出しながら尋ねてきた。

少しはこの暑さも和らぐだろうと考えると同時に、拒否なんかしたら可愛そうだと考えると

「ああ、いいぜ」

俺は身体を起こし漣の右手に左手で掴まり起き上がる。

『翔、気付いていますか？』

不意にルリエルの声が頭の中に響いた。

『何にだ？』

わからず俺が尋ね返すと

『はあ……』

ルリエルの溜め息に俺は頭に疑問符を浮かべる。

「どうした？」

急に黙った事に疑問を感じたのか漣が尋ねてくる。

「いや、何でもない」

俺は小さく首を左右に振ると漣の手引きにより海へ向かおうとする。

波打ち際まで来たところで俺の身体に悪寒が走った。

「何だあれ？」

何かに気付いたのは律だった。

「この感じ……まさか『アイツ』が……!？」

それは俺に向けられた殺気と強大な魔力の集合体。

すると黒い水のような物が空中に集まる。

それらが大量に集まると徐々に人の形を形成していく。

所謂ドッペルゲンガーと呼ばれる存在だった。

(くそ、こうなったらやるしかない……か)

俺は自然と漑の手を引き砂浜へと戻す。

「ど、どうしたんだ？」

漑は俺の行動がわからず俺に尋ねるがそれに答えてる暇など無かった。

「漑、みんなと一緒に居てくれ」

俺は視線を一点に集中させたまま漑に一言告げる。

すると漑は俺を見て何かを悟ったのか何も言わずみんなの居る場所へと向かう。

「さて、最初から全力で行くか……、ルリエル！」

『わかってるわ』

俺は小さく呟くとルリエルを呼び出す。

ルリエルは俺が呼び出すとわかっていたらしく、一言で返事を返すと力を与えてくれる。

ルリエルが現れる際、俺の身体が光り辺りを照らす。

光りが収まると、俺の姿は以前の真っ黒な服装に身を包んでいる。

「水よ、我に従い我が力となれ」

掬い上げた海水を両手で包むと小さく呟く。

するとそれらは徐々に凍り始め俺のイメージする氷の双小剣へと変化する。

待ちきれないと言った感じでドッペルゲンガーが先制攻撃を仕掛けてきた。

それは俺とドッペルゲンガーの戦いの幕開けの合図となった。

〈第11話〉（後書き）

はい、というわけでこの小説の戦闘シーンが初めて出てきましたね。

翔「ドッペルゲンガーに関しては・hack//G・U・を参考にしてくださいませ幸いです」

G・U・はホント神作だったからねえ、今もまたやりたいくらいだし。

翔「でもデータは全削除したんだろ？」

そうなんだよねorz とりあえずまた1からやろうかなーと。

翔「で、無駄にそれを元にした小説を創ろうとするんだろ」

orz

翔「1つぐらい作品完成させろよ、過去に何作品消したと思ってるんだ」

4作品ぐらい？

翔「そういう問題じゃねえ！」

でもまあ、この作品は完全に完成目指してるよ。

翔「それは当然だ」

というわけでこれからこんな駄文ですが、お付き合いお願いします！

それではまた次回に！

〈第12話〉（前書き）

今回はバトルメインです。

翔「正直、目の能力が異常だとしか俺は思えないんだが」

今言っな、ともかく12話です、どうぞ。

〈第12話〉

〈翔サイド〉

「くっ……」

もう何度斬り合ったか覚えては居ない。

鏑迫り合いをしては離れ、再び一瞬で間合いを詰め鏑迫り合いを繰り返していた。

漚たちに被害が及ばないよう空中戦に切り替え戦うも、なかなかすぐには決着が付かなかった。

当の漚たちは啞然とした表情を浮かべ俺の戦闘を見守っている。

「ちっ、こうなったらやるしかない……か！」

一人小さく呟くと双小剣の一部を液体に戻し相手に投げつける。

相手の周囲に水が飛んだのを見た瞬間

「範囲指定魔法『絶対零度』！」

素早く詠唱を行う。

この魔法は黒き勇者様が考案なさった魔法に、翔が手を加え指定範囲型魔法へと変換したものである。

詠唱を終えると同時に投げつけた水は一気に凍り始める。

が、氷の中へと閉じ込める事に失敗してしまう。

すると一気に接近され攻撃をされるがそれを防ぐも、俺は砂浜まで叩きつけられた。

「ぐう……、まだまだ！」

俺はすぐさま起き上がるが、ドッペルゲンガーの視線は澁たちに向いていた。

ドッペルゲンガーはそのまま澁たちに攻撃しようとい気に接近しようとする。

それに気付いた俺は神速とまでは行かないが、限りなくそれに近い速度で澁たちの前に立ちふさがる。

何度目かの鏖迫り合いとなり、俺は少しでも離そうと追撃をする。

再び空中へ上昇し対峙するが、相手の方が早く接近を許してしまう。

振り上げた剣が俺の左腕を刻んでいく。

「くっ……」

距離を離すと腕からは血が滴り落ち、双小剣を赤く染めていく。

俺も負けじと双小剣を解除すると同時に双小剣を作った水を使い刀を生成する。

刀を手にし瞬速で接近すると相手の胴体を切り刻む。

呻き声すらあげないものの、切り刻んだ部分からは黒い水が滴る。

俺は目を閉じ

「居合い術奥義、神水閃」

一言告げ目を開けると同時に脚力を極限にまで上げ、相手の懐に飛び込み切りかかる。

ドッペルゲンガーも負けじと応戦しようとするが、俺はドッペルゲンガーの攻撃を水の如く避け続ける。

刀を水平にし胴目掛け飛び込む。

（手応え十分、だが倒せたか……？）

そう考えると俺は振り返ってみると、斬ったはずの箇所が既に再生していた。

それどころか、刀を生成した際につけた傷さえ再生している。

『やはり、目を使うしかないようですね？』

不意にルリエルの声が再び頭に響く。

『……………いけるか？』

俺はルリエルに尋ね返すと

『もちろん、残り5分と言ったところよ』

クスッと笑い答えるルリエル。

俺は覚悟を決め左目の眼帯に手をかけ、眼帯を取り外す。

俺の左目は生まれつき無く、その事に気付いた俺は小学生の頃から左目に氷で生成した目を取り込んでいる。

もちろん、魔力を付加しているため左目は紅では無く、金色になっている。

『最後の勝負ですね、しっかり反応しなさいよ？』

ルリエルの声が響く。

『わーってる、眼帯が無い分魔力放出が激しいからな』

目を覆っている眼帯は、魔力を外に逃がさず身体に循環させるためつけている。

その目の効果は、任意で指定した相手を5秒間停止させる事が出来る。

しかし、眼帯をしていないため魔力が駄々漏れ状態になっているため、早々の決着をつけなければならない。

俺は決着を付けるため、一気に接近する。

2度3度斬り合うと俺は距離を離し詠唱を始める。

「我が翼から相手を縛る鎖となれ、氷結触手束縛！」

今度は背中の氷の翼から氷の鎖が伸びると同時に目の効果を発動させドッペルゲンガーを動けなくさせる。

鎖は完全にドッペルゲンガーの四肢に絡みつき、これには流石のドッペルゲンガーもなす術が無いのか鎖を引き千切ろうともがく。

「右手にダイヤモンドダスト、左手にアイシクルレイン」

持っている刀を解除し、両手の手のひらに魔法を乗せる。

「吹き荒れる氷の嵐よ、悪しき者を断罪せよ！」

両手の魔法を合体させ合体魔法を作る、この手段は最終手段で魔力をかなり消費するため普段の戦闘では使わないようにしている。

「究極氷乱魔法、ダイシクルレスト！」

詠唱が終わると俺の背後から無数の氷の刃がドッペルゲンガー目掛け雨のように降り注ぐ。

氷結触手束縛により身動きの取れないドッペルゲンガーは必然的に全ての氷の刃を受ける。

その間に俺は水を両手に集め氷の大剣を作り出す。

合体魔法が消えると同時に俺は残る全ての魔力を大剣に込め、思い切り大剣を振り上げドッペルゲンガーを真つ二つにする。

両断されたドッペルゲンガーは苦痛の声をあげる事も無く弾ける。

黒い水となったドッペルゲンガーは戻る事も出来ずサラサラと消えていく。

俺はそれを見送り眼帯をつけると砂浜に戻る。

「大丈夫か？翔」

すぐさま駆け寄ってきた漣が俺に尋ねる。

「ああ、平気だ」

俺の返答にホッと溜め息を吐き出す漣たち。

「あれ、何なんだ？」

律がすかさず尋ねてくる。

「ドッペルゲンガーだ、俺の姿をした、な」

俺の答えに驚いた表情を浮かべる漣たち、それと同時に魔力を半分以上失ったルリエルはそのまま眠りにつく。

気が付けば服装は海に出てきた状態へ戻っていた。

「少し疲れた……、少し寝るな？」

そう告げると遷が手を引きパラソルの元へと導いてくれた。

俺は辿り着くとすぐさま寝転び眠りについた。

（零サイド）

翔の寝顔を見ながら私は翔の隣に腰掛ける。

正直先ほどの戦闘を見た私たちは言葉を発する事が出来なかった。

それほど戦ってる翔は以前の剣術決闘の時よりも美しいしかった
いと思えたから。

気が付くと翔の周りには律たちも寄ってきては翔の様子を伺っていた。

「私が見ておくから、みんなは遊んできたら?」

私が一言告げると

「じゃあ漣に任せるぜ、唯、行くぞ!」

律はそう告げ唯と共に海へ向かった。

「ムギはどうするんだ?」

ふと視線をやるとムギはパラソルの中で私の隣に座っていた。

「私はここでみんなを見てるわ」

ムギは私と翔を見てクスッと笑うと視線を律たちに向ける。

私は無意識のうちに翔の頭に手を置き撫でている。

撫でられている翔は擦ったそうに身を擦る。

その光景が面白くて私はついつい悪戯心が湧き、撫で続ける。

撫でられる度に翔は身を擦るが、何度か繰り返していると

「……なあ、もういいか?」

と翔が声を発する。

私は寝ているものだとばかり思っていたので、吃驚して文字通り飛

び上がる。

「つか、何で漣は俺を撫でてるんだよ？」

翔は起き上がると私を横目で見ながら尋ねてくる。

「だって……、翔の寝顔可愛かったから……」

私は若干俯きながらも素直に白状する。

すると翔は溜め息を一つ吐き立ち上がると

「行くぞ、漣」

左手を私に差し出す。

私も立ち上がると翔の左手に右手を合わせ指を絡ませギュッと握り締める。

翔もそれに応えるようにギュッと握り返してくれる。

私たちはどちらからでも無く笑い出すと自然に海へと駆け出す。

（このまま時間が止まればいいのにな……）

そんな事を考えていると、翔の手が離れる。

「あ……」

私はその寂しさから波打ち際で立ち止まってしまつた。

「隙ありっ」

翔の声が聞こえ顔を上げると同時に海水が私の顔に直撃した。

「う……、何するんだよ翔！」

私は顔の海水を両手で払いながらつい声を荒げ抗議する。

「油断大敵ってね」

クスクス笑いながら一言返す翔に仕返ししようと、海水を掬い上げ翔目掛け投げつける。

翔もそれは読んでいたであろうが、水の中に居るため動きが鈍る。

その為、私が投げつけた海水は翔の顔に直撃する。

（本当に、こんな時間がずっと続くといいな……）

そう考えると私は自然と笑い出し、翔と水の掛け合いを楽しんだ。

律や唯、ムギに見られているのも忘れて。

〈第12話〉（後書き）

何最後のバカップル。

翔「お前が書いたんだろうがあああああああ！！！」

まあね、しかし翔も色々な意味でチートだよな。

翔「まあな、合体魔法を使うとか、目の能力で相手を5秒止めるとか……」

うん、正直合体魔法はロトの 章読んでて思いついて、目の能力は簡単に言えば金縛りに出来るって事だし、目は魔力駄々漏れだけだね。

翔「魔力駄々漏れを防ぐための眼帯、だもんなあ」

予備はあるけど、作るの面倒だから無くしたら危険と思っててね。

翔「面倒って何だ！？」

それと、魔法に関して許可を下さった黒き勇者様、本当にありがとうございました！

翔「ありがとうございます」

次回もホント短いです、というかネタが尽きてきてr。

翔「無い知恵を振り絞って考えろ」

o
r
z

翔「ではまた次回に」

〈第13話〉（前書き）

相変わらずアニメと原作とオリストのトリプルクロスです。

翔「いつもの事だな」

仕方ないだろ、原作見てオリスト交えた後にアニメ見てもう一度足してるんだから。

翔「つーかオリストは確実に交わるのな」

まあね、それがこの小説の強みだから！

翔「嫌な強みだな」

orz

それでは第13話、合宿編の夜です、どうぞ。

〈第13話〉

〈翔サイド〉

俺たちは練習を忘れ一頻り海で遊んだ。

時刻はわからないが、既に夕焼け空になっていた。

最も、漑は覚えていると考えていたがそれは間違いだと知らされた。別荘に着いた当初は嫌がっていたものの、遊ぶにつれ徐々に律たちとはしゃいでいた。

「綺麗だな……」

漑が一言漏らす、が、漑の手にはデカイスイカがある。

「漑、お前その手にあるスイカどうするんだ？」

俺は気になって尋ねてみた。

「ん、スイカ割りでもしようかなーって」

漑はすっかり練習が頭から離れているようだ。

「……練習はどうすんだ？」

はあ、と溜め息を吐き出し尋ねてみる。

「あーーーー！！そうだ練習！！」

漣は漸く思い出したのかそう絶叫した。

俺はもう一度溜め息を吐くと一人別荘へ向かう。

みんなも思い出し片付けを始め、俺の後を追ってきた。

（今回ののは意外だったな……、まさか目までも使う羽目になるとは）

今日の戦闘を一人で振り返りながらも、自分の未熟さと弱さを痛感する。

（もつと強くなるには……、やはり氷以外の属性の魔法や攻撃方法を得るしかないのか……？）

俺は考え事をしながらも部屋に戻り着替えを済ませる。

着替え終わると鞆から一冊の分厚い本を取り出す。

知恵の書と呼ばれる書物である。

俺が使える魔法は氷のみであるが、今回の戦闘でそれ以外の属性の魔法に触れてみようとする。

火・水・風・土・雷・闇・光の7属性の他に、毒や無と言った魔法も存在するが、過去に触れた際は書物がそれを覚えさせないと言わんばかりに拒絶した。

「今回は上手く行くかな……」

無意識のうちに独り言を呟き書物を開いていく。

「何が上手く行くんのだ？」

いつの間にか部屋に来ていた漣の存在にも気付かず、俺は書物に穴が開くんじやないかと言うほど集中して見ていた。

今回触れてみるのは無と光の2つだが、どちらも解読が今の俺では不可能な程難しかった。

「……はあ、ダメか……」

魔法が記された箇所を触れるが、反応は無かった。

それと同時に肩を控えめに叩かれる。

それに気付き振り返ると後ろに漣が立っていた。

「いつから居た？」

俺は疑問に思い尋ねてみた。

「えっと、翔がその本を読み始めた頃かな」

漣が申し訳なさそうに答えてくる。

「そうか、それでどうした、俺の部屋に来てさ？」

本を閉じ本来の用件を尋ねてみた。

「そうだ、今日の夕飯誰が担当するか決めようって話になって、翔を呼びに来たんだ」

漑は思い出したように少し口早に答える。

「ん、なら待たせたお詫びとして俺が作ってやるよ」

無意識に漑の頭に手を置き撫でてやる。

撫でを受けると漑は恥ずかしらしく顔を赤くし俯いてしまう。

「行くか」

漑が俯いた理由がわかると俺は手を離しみんなの元へと向かおうと手を差し出す。

「うん、行こう」

顔はまだ赤いものの、俺の手をしっかりと握り二人並んで階下へ降りていく。

次第にリビングに近付き俺は手を離そうとするが、漑は俺の手をしっかりと握ったまま離そうとはしなかった。

「お熱いですなー、お二人さん？」

不意に背後から律の声が聞こえてきた。

俺と漑は同時に振り返るとリビングで待っていたはずの3人が揃っ

ていた。

漣は手を握っている事を気付かれると顔を真っ赤にしパツと手を離す。

「こ、これはその、ご、誤解だからな!？」

慌てふためいた漣が弁解するが、律たちは既に聞いていない。

「ん〜？何が誤解なのかな漣ちゅわ〜ん？」

ニヤニヤしたまま律が漣に尋ねるが、漣は最早放心状態になっている。

「俺が本読んでてな、漣は俺を呼びに來ただけだ」

なので俺が助け舟を出す事に。

「何だ、つまんないの〜」

律は頬を膨らませぶうぶう言っている、というか唯も一緒に頬を膨らませている。

「はあ……、ムギ、台所にある食材は全部使っているのか？」

俺は一つ溜め息を吐くと、ムギに食材の使用許可を尋ねる。

「ええ、いいわよ」

俺の質問に二つ返事で即答するムギ。

それだけを聞き俺は4人をその場に残し台所へ向かう。

「さつて、何にすっかな……」

多彩で多数ある食材を前に、俺は何の料理を作ろうか思案していると

「こんだけあればバーベキューにしないか？」

律が後ろから飛び込んできた。

「ふむ……、それも悪くないな」

飛び込んできた律に驚く事も無く、律の提案に乗る事にした。

俺は材料を切り、律はみんなにバーベキューをするから外に集合と伝えにと役割分担をする事に。

「さて、とりあえずこんなもんか？」

一通り切り終わるとタイミングよく漑が入ってくる。

「終わった？」

漑の一言に振り返り小さく頷く。

「じゃ、運ぶの手伝うよ」

そう告げると漑は切り揃えた食材を皿に乗せ運び出す。

「お待たせ、少し多めに切っておいたぞ」

漣が持つていけなかった材料を持ちみんなの居る元へ辿り着く。

律と唯は食材を見ると「待ってました！！」と言わんばかりに目を光らせている。

「んじゃ、さつさと準備しようぜ」

律はそう告げると率先して準備に取り掛かる。

俺と漣は顔を見合わせクスッと笑い準備に取り掛かる。

「律！肉ばかり取るなよ！」

漣の声が聞こえたので見てみると、律は串に肉だけを突き刺している。

「野菜も取れよ……」

俺は小さく呟き苦笑いを浮かべる。

ふと空を見上げてみる。

そこには暗い夜空を照らすように散りばめられた星と月が綺麗な光を放っていた。

夕飯を済ませのんびりした後、俺たちは全員で音楽ブースへと向かった。

が、案の定律と唯がすぐさま寝転び練習する気0の様子だった。

「練習するぞ！」

漣が少し怒気の籠った声で律と唯に告げるが、全くの無反応。

「二人とも、ちょっと退いてて」

漣は有無を言わせないと云った表情で俺とムギに告げると、アンプを持ち上げる。

（……まさかな）

アンプを持ち上げた漣は、二人の頭の近くにアンプをドスン！と置く。

（つーか、今の振動で起きねえのかよ……）

そしてベースを構えた漣は、大音量でベースをストロークする。

「「うう……」」

ベースの低い音が大音量で響き、耳元で聴いた律と唯は身を縮こまらせる。

二人は渋々起き上がり律はドラムへ、唯はギターを持つが二人の顔はほぼ遊び疲れが今祟ったのであろう、疲労感が滲んでいた。

「なあ漣ー、やっぱ練習やめにしないかー？」

スティックを握る律がダルそうに一言漏らすと、漣は何か考え付いた様子で

「そつえば律、さっき海で遊んでた時思ったんだけど、少し太ってないか？」

漣はニヤニヤしながら律に尋ねる。

「ええ！？」

律はその言葉を聞くと服を少しまくり上げ確認する。

(……うん、多分こいつ俺が居る事忘れてやがるな)

心の中で俺は呟くが、漣の追撃が続く。

「最近ドラム叩いてないせいじゃないか？」

漣が告げると律は泣きながらもドラムを猛スピードで叩き始める。

俺は視線をずらし唯を見ると、ギターを軽やかに弾いていた。

「すごい、弾けるようになってる」

ムギが拍手しながら賞賛の言葉を唯に送る。

唯はそれに応えるようにピースサインを作りムギに向け突き出す。

その様子を見た漣が

「へえ……、後はチョーキングとかスライドとか、細かいテクニクを覚えたら完璧だな」

と告げると、ドラムを叩いていたはずの律が唯の背後に回り込み

「チョーキング？」

唯の首を絞めた。

「違う」

漣は溜め息を吐き答える。

「チョーキングっていうのは、音を出しながら弦を引っ張るの、そうすると音程が上がるんだ」

見本のため漣が説明を加え実際に弾いてみる。

一通り弾き終わると次は唯が弾いてみる。

みょーん、みょーん。

チョーキングにより響いた音に唯は

「あっはははははは」

爆笑した。

（何がツボだったんだろ……？）

俺は一人考えてみるが、答えはわからなかった。

「うー……」

先ほどまで爆笑していた唯だが、不意に唸り始める。

「どうした？」

疑問に思った俺が尋ねると

「もうギター持てない……」

と呟きギターをスタンドに立てかける。

「早、まだちょっとしか弾いてないのに！」

律がツッコむが、漑は呆れて腰に手を当てていた。

「だってこのギター重いんだもん！」

唯は床に座り込み愚痴り出す。

「だから軽いやつ買えって言ったのに……」

漑が呆れつつ一言告げる、すると唯は天井を見上げ

「誰だー、このギター買うつて言ったのー!!」

等と言い出した。

「お前だ」

俺と漣は同時にツッコんだ。

結局、律と唯は再び床に寝転び元に戻ってしまう。

「はあ、こんなんで学園祭どうするんだよ……」

漣のぼやきに対し律と唯は

「メイド喫茶だって言ってるだろー」

「えー、お化け屋敷だよー」

溜め息を吐き出したくなる言葉を吐き出す二人。

「唯、お前はホントに何もわかってないわ」

不意に律が起き上がり唯に告げる。

「漣を見てみ」

唯も起き上がり律と共に漣を見る。

「な、何よ」

漣は不意に見られた事に後ずさりする。

「漣ほどメイド服姿が似合っやつはそうは居ないぞ」

その言葉を聞き俺は妙に納得してしまった。

「黒のストッキング！純白のエプロン！メイドカチューシャ！」

律の言葉に俺は考え込む。

「萌え萌え……きゅんっ」

考え込み続けるとクスッと笑い、現実に戻ってくる。

漣は想像しただけで顔を真っ赤にしながら律の頭部に拳骨を思いっきり振り下ろす。

その拳骨だけで、律は沈黙してしまう。

「翔……、何考えてたんだ？」

漣は肩で呼吸を繰り返しながらも、不意にジト目で俺に尋ねてくる。

「別に何も、気にするな」

俺は隠したい一心でそう答える。

「つか、もう9時半か……」

軽く伸びをし携帯を取り出し時間を確認すると軽く驚愕した。

「さすがにそろそろお風呂入って休まないとな」

漣がそう告げると全員同意し楽器を片付け始める。

俺たちは一度部屋に戻り着替えを持ち階下集まる事に。

「翔君、こっち」

漣たちを案内した後、ムギが戻って来て俺を案内する。

脱衣所に到着するとムギはみんなの元へと向かっていった。

俺は衣服を脱ぐと浴室へ入っていった。

く
漫
サ
イ
ド
く

「露天風呂まであるとは……」

私は呟いてしまう。

ムギの案内により、私たちは露天風呂に案内された。

露天風呂に浸かりながら私は先ほどの練習を思い出す。

「しかし、そんなに心配する事も無かったな」

律も唯も、普段は真面目に練習しない割りには以前より上達している。

「唯ちゃんも上手になってたし」

ああ、と私はムギの言葉に頷く。

「だからもつと遊べば良かったのに!!」

不意に声が聞こえそちらを見ると前髪が物凄く長い誰かが居た。

「誰だー!!」

私はその誰かに声を高くしツッコんだ。

「私だ」

前髪を掻き分けるとそこにはいつもの律が居た。

「前髪なげー……」

私と律のやり取りを横目に、唯は

「今日初めてみんなと合わせてみたけど……、すっごく楽しかった！」

唯の感想に気付けばみんな微笑んでいた。

「合宿しようって言うてくれた澪ちゃんのおかげだよ！ありがとう澪ちゃん！！」

そう言うとき唯は私の手を握る。

「え、あ、あつ……」

恥ずかしさから私は顔を赤くすると

「澪のやつ照れてるぞー」

律がからかってくる。

「ち、ちが、のぼせただけだー！！」

私は慌てて否定するが、唯の言った通り私も楽しかった。

（それに翔の新しい一面も見つけたし……、収穫は多いかな？）

そんな事を考えながらも私は空を見上げ笑っていた。

〈第13話〉（後書き）

流石に、元々前に作った14話を足して作ったから予想以上に13話が長くなった気がする。

翔「今14話の終わりを書いてるからな」

うん、もうすぐで15話目を執筆開始だよ。

翔「そういえば、思いつきり抜けてるよな」

ああ、澪の半泣きのシーンか。

翔「ああ、そこは何で入れなかったんだ？」

正直、あのシーンもだけど、澪がメイド服を着る時の表現方法がいまいちわからなくてね、後はすっかり忘れてた。

翔「正直、後者がほぼ100%な理由だろ」

……さて次回は！

翔「てめえ！逃げるな！」

翔君、何度もサプライズを受けるから書いてる方も面白くなるよ。

翔「今度は何させる気だ……！」

ヒントは、澪が「」をします。

翔「重要なところ伏せんじゃねえ！！！」

それと次回は、漑がなんとある物を出します。

翔「まだあるのかよ！？」

皆様も何が起こるのか、漑が何を出すのか予想と想像してみてください。
さい。

それではまた次回！

〈第14話〉（前書き）

エタ「正直15話がまだ完成してない」

翔「さつさと書けよ」

エタ「それはわかってる、流石に1話書くのに2〜3日かかってるからな……」

翔「もう少しペースあげてもいいんじゃないか？」

エタ「うん、ネタさえあればいけると思っけど、どう絡ませるか悩みどころ」

翔「まあなんとかするんだな」

エタ「では14話です、どうぞ」

翔「零にご期待ください」

〈第14話〉

〈翔サイド〉

風呂から上がり、少し薄暗い廊下を歩く。

因みに今の俺の服装は、黒のＴシャツに黒の長めのズボン、肩に半袖の上着を乗せている。

部屋に戻り鞆から先ほど手にしていた本を取り出すと、何となく部屋に居ると落ち着かないと思った俺はテラスへ向かう。

階下を降り音楽ブースを抜けようとすると、持ってきていたギターに目が止まる。

「結局、こいつを使う事は本当に無いのかもしれないな……」

ミュージックマンを取り出し一人呟くと

「やっぱり、トラウマが原因なのか？」

不意に声をかけられた。

ゆっくりと振り返るとそこには漑が立っていた。

「どうだろうな、俺が無意識に避けてるだけなのかも知れないが」

ギターをケースに戻そうとすると

「今から練習してみないか？」

漣から提案された。

「まあ……、それはいいが……後でもいいか？」

今はやりたい事があったのでそう尋ねると漣は頷く。

ギターをケースに戻し俺は一つ溜め息を吐き出し

「で、漣はどうしたんだ？」

漣に尋ねてみた。

「ん？ちよつと涼みに行こうかなって」

はにかみながら頬を掻き答える。

「んじゃ一緒に行くか、ちよつと俺もテラスに行きたかったし」

クスッと笑い俺が誘うと漣は小さく頷く。

「その本、さつき読んでたあれか？」

漣は俺の手にある本を見て首を傾げ尋ねてきた。

「ああ、そうだが？」

本を漣に見せつつ俺は頷く。

「何の本なんだ？」

漣は本に興味津々な様子で俺に尋ねてくる。

「魔法の本かな、正式名称は知恵の書だけだな」

俺の答えに漣は驚いた表情を浮かべる。

「魔法って凄いな……」

その言葉と表情に俺はクスッと笑う。

「そうかな？にしても夜は涼しいな」

テラスに出た俺たちは近くにある椅子に腰を下ろした。

「私も読んでみてもいいか？」

漣が不意にそう尋ねてくる。

「それは構わないけど……」

俺はそう答えると本を漣に手渡す。

漣は本をゆっくりと開くが、空白のページばかりなのか次々とページをめくる。

（まあ、反応はしないだろうな……）

そう考えていたが、漣の手が不意に止まる。

俺は頭に？マークを浮かべると同時に漣から

「他のページは空白だったのに……、ここだけ読める……」

自分でも驚いているのか、少し口調が震えながらも告げてきた。

その言葉に俺は驚くばかりだった。

「本当かよ……」

俺の呟きが聞こえたのか、漣は頷いた。

（おかしいな……、ただの一般人に魔法の書が読めるなんて……、まさか……？）

俺は考え得る事柄を全て考え、そして一つの結論に至った。

「漣、ちょっと」

そう口早に言うと同時に俺は左手を差し出し漣の右手を握る。

「左手を前に突き出して漣が考えれる武器か防具を頭でイメージしてみてくれ」

俺の言葉に漣は戸惑っていたが、頷くと目を閉じ集中する。

すると、魔法の書が光り出し漣の左手に光が集まる。

俺の頭の中に、詠唱魔法名が流れ込んでくる。

「静かなる光よ、全てを守る盾となれ。現れよ、プリトウエンの盾！」

俺と漑は同時に詠唱を唱える、すると徐々に光は形を形成し、光が消えると漑の左手には人一人が隠れる事が可能なほど大きな盾が現れる。

しかしここで俺は疑問を抱いた、何故漑が詠唱の言葉がわかったのか、と。

「こ、これって……？」

漑は左手にある盾を見て戸惑っている。

「恐らく、俺の魔力の一部が手を伝って漑に流れ込んで、漑のイメージした魔法の盾が出来たんだと思う」

俺が手を離すと盾は光の粒子となって消えていった。

『凄いわね、彼女』

ルリエルが起き、先ほどの状況を見ていたのか俺に声をかけてくる。

『ああ……、防御特化の盾だな、今の』

魂同士で会話を交わすが

『ところでルリエル、漑に神とか宿ってないよな？』

俺は一つの疑問を抱いたので尋ねてみた。

『ええ、宿っていないわ』

ルリエルの即答により謎が深まる。

『恐らくだけど、翔の戦いを見て翔やみんなを『守りたい』という想いが強かったんでしょね、じゃないとあんな盾は出せないわ』

俺の考えていた謎をルリエルが見抜き告げてくる。

『それと彼女が詠唱出来た理由は、貴方の頭に流れた言葉が彼女にも流れたからよ』

ルリエルは俺が疑問を思っていた先ほどの詠唱の言葉がわかったのか、という疑問にも答える。

『なるほどな……』

俺は妙に納得すると

「翔？」

漣が俺の顔を覗き込みつつ心配そうに尋ねてくる。

「悪い、考え事してた」

俺の返答に漣は溜め息を吐く。

「いつも考え事してるよな、翔って」

同時にクスクス笑いながら漣は俺に告げてくる。

（俺ってそんなに考え事してるっけ？）

俺は苦笑いを浮かべていると

「あ、ここに居た」

律がやってきた。

「どうした、律？」

俺は律の来訪に疑問を抱き尋ねてみる。

「ん、ちょーっと漣借りてくぜ？」

ニヤニヤしたまま律は許可を俺に取る。

「俺に聞くな、漣に聞け」

溜め息を吐き出し俺は漣に聞くよう促す。

「何か企んでるみたいだけど……まあいいか」

律の友人を長年やっている漣は何かを感じ取りながらも渋々了承すると、律は漣の腕を取りその場を去った。

「まったく、相変わらずあいつらと居ると飽きないな」

風の如く去っていった律を見送りながら俺は一言呟くと、自然と笑みを浮かべていた。

「零サイド」

私は律に連れられ、ムギの部屋の前に辿り着いた。

「何するんだよ、律？」

未だに何故連れて来られたのかわからないため、律に尋ねるが

「内緒だつて」

ニヤニヤしたまま律は内容を伏せる。

「ムギー、連れて来たぞー」

扉をノックし中に入ると、ムギは待ちわびた様子で私に駆け寄る。

するとムギは私の周りをジッと眺めグルグルと一周すると

「うん、澪ちゃんになら合いそうね」

満面の笑みで告げる。

「な、なあ、ムギ、一体何をしようとしてるんだ？」

律に聞いても返事は返ってこないだろうと思い、私はムギに尋ねてみた。

するとムギはクローゼットから一着の『ソレ』を取り出す。

「こ、これって……!？」

私は『ソレ』を見て後退りするが、律が逃げないようにと捕まえたまま離さない。

「澪ちゃん、ちょっと」

ムギは『ソレ』をベッドに置くと手招きしてくる。

何だろうと思い近付くと耳元で話してくれる。

その話を聞いた私は

「そ、それはさすがにマズいんじゃないか!？」

顔を赤くし話を拒否しようとする。

「大丈夫だって、澪だからこそ許されるかもしれないぜ?」

律が尋ねてくると私は考え込んでみた。

(確かに、この話のメリットはあるけど……、やっぱり恥ずかしいよな……)

暫く考え込んでいるとムギが

「これとこれは澪ちゃんに渡しておくから、後は澪ちゃんが決めて行動するといいわ」

ベッドに置いた『ソレ』ともう一つ、どこかの部屋の鍵を私に手渡す。

「……もう少し考えたいから部屋に戻るよ」

私はそう告げると、律は腕から手を離したので私は廊下に出る。

深い溜め息を一つ吐き出し部屋に戻り、先ほどの話を思い出す。

今手にしている『ソレ』とポケットに入れた鍵を見て再び溜め息を吐き出す。

正直自分に似合っているか、笑われないだろうか、その考えが頭をよぎってばかりだったからだ。

「でも、着てみる価値はある……のかもしれないな」

私は勇気を振り絞り『ソレ』に着替え、鍵を手には部屋を出る。

幸い、誰にも見られなかったので素早く鍵を開け扉の中に入りすぐさま鍵をかける。

居ても立ってももられなくなったので、『ソレ』が皺にならないよう注意を払いつつベッドに潜り込んだ。

く翔サイドく

「もうこんな時間か……」

律が来てもテラスで集中したまま知恵の書を読んでいたせいかな、時間をすっかり忘れていた。

因みに今回も収穫は得られずじまいだった。

携帯を開き時間を確認すると、既に午前0時を過ぎていた。

知恵の書を閉じると部屋へ戻る。

（そついや漑のやつ、結局戻ってこなかったな、まあ漑の事だからもう寝てるだろうな）

ゆっくりとした足取りで部屋に戻り鍵を開け部屋に入る。

さすがに眠気が一気に襲ってきたので、知恵の書をテーブルの上に置き、上着を無造作に鞆の上に投げると俺は寝ようとベッドに寝転ぶ。

が、ベッドに寝転びすぐに違和感を覚える。

月明かりだけを頼りに、布団を引き剥がそうとすると

「ま、待ってくれ翔！」

小声ながらも漑の声が聞こえた。

俺はそのまま布団を引き剥がすと

「うう……」

ベッドの上で小さく丸まった漑の姿があったが、俺は言葉を発せず
に居た。

何故なら漣の服装は先ほどの私服ではなく

「何でメイド服……」

メイド服を着ていたからである。

しかも漣は顔を真っ赤にして俯いている。

「む、ムギがこれ着て翔のベッドに忍び込んでおけば何かしらしてくるかもって言うから……」

ボソボソと小声で漣が事の内容を説明してきた。

俺は漣の近くに移動しベッドの縁に腰を下ろすと右手で漣の頭を撫でる。

「どうせ律も加担してるんだろ？」

クスッと笑い尋ねると漣は小さく頷く。

「でもまあ、これはこれでいいけどな、メイド服似合ってるしさ？」

俺がそう告げると漣は顔を更に赤くしながらも、嬉しそうな表情を浮かべている。

「さて……、俺は寝るが漣はどうする？」

空いているスペースに寝転びつつ尋ねると

「か、翔さえ良かったら……その、きよ、今日だけ一緒に寝てもいいか？」

恥ずかしがりながらもしっかりと俺の目を見て尋ねてくる。

「ああ、いいぞ？」

今帰すのは可愛そうという想いと、もう少しこのままで居たいという想いの二つからか、俺は即答した。

俺の言葉を聞いた漣は少し離れて寝転んでいたが、俺が左手で頭を撫でてやると俺を抱き枕代わりと言わんばかりに抱きついてきた。

漣は数分もしないうちに眠りに堕ちたが、俺は未だに起きていた。

抱きつかれ最初は気恥ずかしかったが、漣の寝顔を見ているとその気持ちは消え、俺も漣の背に腕を回し抱き締める。

再び睡魔が俺を襲い、気付けば俺も眠りに堕ちていた。

〈第14話〉（後書き）

エタ「相変わらず積極的過ぎるね、漣が」

翔「確かに、最後は漣らしからぬ行動だし」

エタ「原作のキャラ崩壊ってこんな感じなんだろうね」

翔「だろうな」

エタ「というか、漣と抱き合って寝てた癖に意外と落ち着いてるね？」

翔「あれで取り乱すのは漣だけか漣並みの恥ずかしがりじゃないか？」

エタ「相変わらずの余裕発言……」

エタ「はい、1つ目は翔の魔力を使い漣が盾を出し、2つ目はメイド服に着替えた漣が翔と一つのベッドで一緒に寝る、でした！」

翔「ホント、無茶苦茶するよなうちの作者」

エタ「まあね、その方が面白いし」

翔「はあ……」

エタ「知恵の書についてはまだ登場します」

翔「という事はまだ魔法覚えたりするのか？」

エタ「正確には知恵の書以外にも出るからね」

翔「まだ出すつもりか」

エタ「剣術関係の書とかも出るよ」

翔「……わかった」

エタ「さて今回は、16話目を執筆開始した頃に投稿しますので、2〜3日以内には投稿します」

翔「言っただな？」

エタ「ああ、15話は今半分ぐらい書いてるから間に合うと思う」

翔「まあ、いつものペースで書けば十分だろ」

エタ「そういう事、それではまた次回！」

エタ「34700PV、3240ユニーク突破いたしました、ありがとうございます!!」

〈第15話〉（前書き）

エタ「ギリギリ間に合った……」

翔「っち……」

エタ「何故舌打ち!？」

翔「遅れたら地獄を見せてやれたのに」

エタ「恐!？」

翔「それで、ストックは出来たのか？」

エタ「いや、今回も結構いっぱい、オリストが多いからどうしても原作のここから……ってところまで持っていくのが難しくてね」

翔「じゃあオリスト省けよ」

エタ「orz」

翔「では第15話です、どうぞ」

エタ「正直、翔の思いが上手く書けてればいいけど……orz」

翔「正直読み返しても、何でこんな文章になったんだろう、とか言うなよ?」

エタ「……orz」

〈第15話〉

〈翔サイド〉

「ん……」

太陽の光が眩しくゆっくりと目を覚ますと、そこには漣の姿は無かった。

どうやら俺が起きるより前に起きて、部屋に戻ったのだろう。

すると不意に扉が開いたのでそちらに視線を送る。

「あ、起きたみたいだな」

私服に着替えた漣が俺を呼びに来たようだ。

「ああ、今起きたばっかだ」

俺は欠伸を隠すように右手で口元を抑えつつ答える。

「翔、まだ眠そうだな？」

漣はクスクス笑いながら尋ねてくる。

「正直出来るなら今日は寝溜めたい気分だな……」

俺は冗談交じりに答えるとベッドから降り、上着を羽織る。

「先にリビングに居るからな？」

それだけを告げると漣は足早に部屋を後にした。

一通り着替えと必要な物を持つと同じく部屋を後にしリビングへ向かう。

リビングには既に全員揃っていた。

「おーっす」

リビングに入り一言挨拶すると

「おはよー、カケちゃん」

「おはようございます、翔君」

「おっす、カケ」

上から唯・ムギ・律の順で挨拶が返ってきた。

「カケ、昨日の夜中どうだったんだ？」

律が不意に耳元で小声で尋ねてきた。

「最初は驚いたが、結構似合ってたしいいもの見れたかなってのはあるな」

俺も律と同じく小声で返す。

すると律はニヤニヤし始める。

「……………何だそのニヤケ顔は？」

俺は溜め息を吐き出しつつ尋ねる。

「いやあ、こんな写真が撮れたんだけどさ？」

そう言って律はポケットのデジカメを取り出す。

手馴れた様子でデジカメを操作し、ある1枚の写真で手を止める。

「ほら、これ」

律はデジカメを俺に見せ付けてきた。

そこには俺とメイド服姿の漑が抱き合って寝ている写真だった。

「……………律、今すぐ消すか俺が物理的に消すか選べ」

少し声に怒気を込め告げるが、律はサッとポケットにデジカメをしまい俺から距離を離す。

「やったよー、これは後で現像するんだからな」

クックツと笑いながら律が逃亡しようと思える。

「ったく……………、後で漑に鉄拳制裁だろうな」

俺は再び溜め息を吐き出し一言漏らす。

「何騒いでるんだ？」

不意に俺の背後から漣が尋ねてくる。

「ああ、律のやつが　「別に何でもないぜ！」……」

俺が答えようとしたところで律が俺の言葉を遮り答える。

「？まあいいや」

深くは追求しなかった漣は

「練習するぞ」

と一言告げると俺を含めた全員が頷き移動を始める。

ブースに着き、各々楽器のチューニングを始めるが、俺はまだ迷っていた。

（さて、結局ミュージックマンは持ってきただけで使わないで済む……のか？）

二つのギターを前に俺はどちらを使おうか悩んでいると

「翔」

漣が呼びかけてきた。

「ん？」

呼ばれたので振り返ると

「後は翔だけだぞ？」

どうやら俺以外の全員はチューニングを済ませ準備が整っていた。

「ああ、悪い、すぐ準備する」

俺は答えると同時にフェンダー・ジャパンを手に取りチューニングを始める。

絶対音感等は持ち合わせていないので、チューナーを使つてのチューニングになる。

1分もしないうちに準備を済ませると、俺は小さく頷く。

楽譜は澪が合宿をすると言つた日に渡されている。

律の開始の合図と共に、俺たちは演奏を始める。

〃 〃

歌詞が無いため、俺たちはただ演奏に集中した。

〃 〃

一通り演奏を終えると澪から

「翔、あのギターでもう一回やってみないか？」

提案をされるが、俺はその言葉にすぐには頷けなかった。

「またあのトラウマが出るかもしれないんだぞ？」

俺は未だ抱えているトラウマの事を話すと

「それなら、そのトラウマを克服出来るまで練習するまでだ」

漣は笑みを浮かべ即答する。

「なあカケ？」

不意に律からも声かけられた。

「何だ？」

今度は律の方を見て尋ね返す。

「カケのトラウマって、両親とお姉さんを失う前の楽しかった記憶が蘇るんだよな？」

律の質問に俺はただ頷くと

「だったら、私たちと一緒にその楽しかった記憶を上回る程楽しい事をすれば、克服出来るんじゃないか？」

律の指摘に俺は吃驚した。

そこまで考えた事等無かったから、という想いもあるが、この記憶

を上回る程楽しい事ってあるのだろうか、と考えてしまっ。

「翔、私たちが翔をしっかりと支えるよ、だからやってみよう?」

漣がそう告げると俺は一つ溜め息を吐き出し

「お前ら二人には敵わねえな……」

クスッと笑い答えると持っていたフェンダー・ジャパンをギターケースに仕舞い、ミュージックマンを取り出す。

もう一度チューニングを済ませ漣の方を向き

「……そうだな、過去に囚われてばかりじゃ前に進めないよな」

俺の一言に漣が力強く頷いた。

「途中で止まるかも知れない、それだけは覚えておいてくれ」

みんなに向かい告げると

「ああ、帰るまで練習に付き合っよ」

「だな、止まったら止まったでもう一度最初からやればいいんだし」

「頑張らしましょう、翔君!」

「頑張ろっね、カケちゃん!」

漣・律・ムギ・唯の順で答えが返ってきた。

（ホント、最高の仲間だよ、こいつらは）

一言心の中で呟きクスッと笑うとギターを構える。

そして再び練習が始まった。

が、やはり予想した通りトラウマが発動する。

（もう……、もう俺は過去に囚われたりしねえって決めたんだ！）

すぐさまみんなは初めから演奏をやり直す。

（だからこれ以上俺の邪魔をするんじゃないやねえ……！）

徐々にはあるが演奏する時間が延びている事に気付いた澪は、微笑みを浮かべたままみんなの方を向き小さく頷く。

みんなもそれに応えるように頷き合い演奏は続いた。

（これからはこいつらと……、昔以上に楽しんで音楽をするんだ……！）

そして、気付けば1曲を最後まで演奏しきっていた。

俺は演奏しきっている事に気付かず失敗したと思い込みギターを注視していると

「「「「「や……」「」「」」

不意に声が聞こえそちらを向いてみると、みんな肩を震わせている。

「や？」

俺は何の事なのかわからずオウム返しに尋ねようとすると

「「「「「やったー！！！！」」」」」

漚と律は俺に抱き付き、唯とムギはその場で万歳をしていた。

「ちょ、何だ！？」

俺は混乱しながらも尋ねるとムギが

「翔君、最後まで演奏しきったのよ？」

答えを返すと、俺はその言葉を聞き

「…………マジで？」

俺はムギに尋ね返すとムギは満面の笑みで頷く。

（そっか…………、良かった…………）

自然と俺は安堵の溜め息を吐き出すと

「そ、そっだ、もう一回やってみないか？」

漚が一言尋ねてくる。

恐らくはまぐれなのかもしれない、と考えたのだろう。

俺は頷くとすぐさま全員楽器の準備を始める。

そしてもう一度演奏を始めると、俺はもうトラウマに縛られる事は無くなっていた。

演奏を終えると漣は俺に向かい小さく頷き、俺もそれに対し頷き返す。

「もう大丈夫そうだな」

漣の一言で俺は自分の中にあったトラウマは完全に消え去ったのだと確信する。

俺たちは練習漬けだったためか、時計を見るのを忘れていた。

携帯を取り出し時刻を確認すると

午後4時半。

「なあムギ、電車の予定時刻っていつだったけ？」

俺が携帯を見たままムギに尋ねると

「確か、4時50分じゃなかったかしら？」

俺はその言葉を聞いて無言でギターを片付ける。

「どうしたんだ？」

律が尋ねてくるので

「……今4時半、残り時間すくねえ……」

一言漏らすと全員携帯を取り出し時間を確認する。

「」「」「あーーーーー！！」「」「」

漸く事の重大さに気付いた4人は同時に絶叫し、急いで楽器を片付け始める。

5分後、俺たちは玄関に集合しダッシュで駅に向かい、ギリギリで電車に滑り込む。

「結構……疲れたな……」

「……………」

「でも練習もいっぱい出来たし、いい思い出が出来たわ」

「はぁ……はぁ……、また……この……パターン……？」

上から律・漑・ムギ・唯の順である。

律は息こそ切らしては居ないものの、額に汗が浮かび上がっている。漑も額に汗が浮かんでいる、どうやら無言で呼吸を整えているらしく肩で呼吸を繰り返している。

ムギは呼吸を乱す事も無く、更には同じ距離を走ったのにも関わらず汗一つかいていない。

唯は初日の朝と同じ状態に戻っていた。

「やれやれ……」

俺はムギ同様息を乱す事も、汗をかく事も無かった。

暫く電車に揺られていると隣に居た漑と律の頭が俺の肩に寄りかかる。

「……ま、いいか」

最初は起こそうとしたが、流石に気が引けたのでそのまま寝かせる事に。

駅に着いた頃には日は沈み、辺りは暗くなっていた。

ムギは既に迎えの車が到着していたようで、その場で見送る事にした。

「さて、どうするかな」

残ったのは俺・漑・律・唯の4人。

「とりあえず、律から送ってくか」

俺の一言により全員で律を送る事に。

流石に遊び疲れと練習疲れのせいか、誰も一言も発する事は無かった。

暫く歩き律の家に着くと

「おお、ここが律ちゃんの家！」

唯が律の家を見上げ一言漏らす。

「珍しいか？」

俺は苦笑混じりに尋ねると

「一度も来た事が無かったからね、想像してたのより大きくて吃驚だよ」

唯の言葉に即座に反応したのは

「唯はどんな家だと思ってたんだよ……」

予想通り律だった。

「そんじゃな、カケは明後日よろしく」

律の一言に俺は小さく頷く。

律を見送った後、零を送っている最中

「明後日何があるんだ？」

漣から質問された。

「一昨日だったかな、街で律に会って遊んだんだが、その時剣術を見せて欲しいって頼まれてな」

俺はゆっくりと歩きつつ答える。

「え……、律と遊んだって本当か？」

漣の質問に俺は頷くと

「どうして私も誘ってくれなかったんだよぉ！」

若干泣きそうな顔で俺に詰め寄る。

「律が漣は勉強で忙しいって言ってたって言うからさ、邪魔しちゃ悪いと思ったんだよ」

何とか漣を抑えつつ答えると

「私、一昨日律に遊ぼうなんて誘われてないぞ？」

漣はキョトンとした表情で答える。

（どういう事だ……、まさか律のやつ……）

俺は一つの答えを導き溜め息を吐き出す。

「まあそういうわけで、明後日剣術を見せて欲しいって事で俺が了承したんだよ」

脱線した話を戻し告げると

「何時からどこでやるの？」

唯が俺に尋ねてきた。

「時間は……昼前だから１１時ぐらいかな、場所はうちだな」

大まかに詳細を答えると

「私も行ってもいいの？」

唯は興味あり気な表情で更に尋ねてきた。

「ああ、別に構わないよ」

俺は了承すると唯は何故かガッツポーズ、澪は腕を組んで考え事を始める。

それから数分後、澪の家に着くと

「あ、翔、ちよつといいか？」

不意に澪に手招きされる。

「何だ？」

俺は近づき尋ねると唯に見えないように俺の耳を手で隠し

「今日……、翔の家に泊まってもいいかな？」

漑は顔を赤くしながらも耳打ちしてくる。

「それはいいけど？」

俺は即座に了承すると

「じゃあ、ちよつと待っていてくれ」

そう告げ漑は家に戻っていく。

それから10分程した後漑が家から出てきた。

「よし、行こうか」

漑の一言により俺たちは唯の家に向かう事にした。

「そつえばカケちゃん？」

唯の家に向かう最中、不意に唯から声をかけられた。

「何だ？」

何だろうと思い尋ね返すと

「カケちゃんって、漑ちゃんと付き合ってるの？」

唯の一言により漑は顔を真っ赤にし俯いてしまう。

「……唯はどつちだと思っ？」

俺はあえて答えずに唯の予想を尋ねてみた。

「付き合ってると思う」

すると唯はその質問に即答する。

「どうして？」

俺は更に質問すると唯は笑顔で

「だって、カケちゃんと漣ちゃんお似合いだし、海でも二人楽しく楽しそうだったし」

唯の答えに俺と漣は吃驚し、俺と漣は顔を見合わせるとクスッと笑う。

「私も翔と付き合えたらいいな、とは思ってるよ」

漣が他人には言わなかった自分自身の気持ちを告げる。

「でも、こればかりは翔が誰を恋人にするかわからないからな」

漣は続けてそう告げると俺を見てクスッと笑う。

まるで俺が今好きな人がわかってるよ、と言っかのよう。

気付けば平沢家に到着していた俺たちは、唯を見送る。

「じゃあ力ケちゃんに漣ちゃん、またね」

唯の一言に俺と漣は軽く手を上げそれに応える。

そして二人きりになると途端に静寂が訪れる。

「…………行くか」

俺の一言に漣は頷き歩き出す。

数分程歩き俺の自宅が見えてくる。

（それにしても、漣から泊まりに来たいなんて言うとは思わなかったな…………）

玄関の鍵を開けながらそう考えるとチラツと漣を見やる。

当の漣はというと、自分から言い出したがやはり恥ずかしいようで俯きながらも家の中をキョロキョロとしている。

俺は一つ溜め息を吐くとブーツを脱ぎ自室に向かおうとするが

「……………」

俺の服の裾をしっかりと握って離さない漣は無言で付いてくる。

もう一度溜め息を吐き漣のペースに合わせ階段を上る。

自室の扉を開け中に入り、荷物類を下ろす。

漣は落ち着かない様子で俺のベッドにちょこんと座っている。

俺は漣に部屋を用意するため一度自室を出ると、向かい側の部屋に入る。

向かい側の部屋は時折俺がギターやベースを弾くのに使用している部屋で、アンプやベース、ギターが置かれている。

元々この部屋は姉が使っていた部屋だが、中学時代よく友人が泊まりに来る事が多かったので今でもベッドなどは置かれている。

それらを部屋の隅に移動させベッドの準備に取り掛かる。

「うん、こんなもんか」

数分で準備を終わらせ一つ呟くと部屋を抜け自室に戻る。

「お帰り」

漣は俺の部屋をじっくりと見ていたが、俺が戻ると笑みを浮かべ告げてきた。

「ああ、漣の部屋は俺の部屋の向かい側に用意しておいたから、好きに使って構わねえよ」

「わかった、ちょっと行って来るな？」

俺の一言に漣は荷物を持ち部屋に向かう。

俺はその間にパソコンを起動させ、スピーカーから音楽を流す。

5分もしないうちに漣は俺の部屋に戻ってくると

「翔、部屋にあったベースって翔のか？」

恐らくはあの部屋にあるベースの事を言っているのだと思い

「あれは親父が使ってたやつだな、一応レフティだけど」

俺の答えを聞くと漣は目を輝かせ

「試し弾きしてもいいか!？」

俺に詰め寄り尋ねてくる。

「ああ、構わねえよ？」

俺が頷くと有無を言わず漣は部屋を飛び出す。

昨日の戦闘と遊びと、今日の練習疲れが今頃になって襲ってきた俺はベッドに寝転ぶ。

「ホント……、楽しかった……な」

俺は一言呟くとそのまま眠りに堕ちた。

（薄サイド）

翔の許可を貰い、私のために用意された部屋にあったベースを手取る。

すぐさまアンプに繋ぎ、ベースを構える。

私が使っているベースより若干重く、ネックも少し太いが特に気にならなかった。

思いつく限りをゆっくりと弾いていく。

（他にも楽器あるのかな……？）

ベースを弾きながらもそう考えた私はベースを置き翔の部屋に向かう。

扉の前に立つと中からは音楽が聴こえてくる。

ゆっくりと開け中を覗いてみると、翔はベッドで眠っていた。

私はクスッと笑うとパソコンに接続されているスピーカーから流れる音楽に耳を傾ける。

〃

テンポも歌詞も良く、学園祭で歌うにはちょうどいい曲を見つけた。

（でも誰が歌うだろう……）

私自身、人前で歌うなんて恥ずかしすぎて不可能である。

（唯か翔か……）

私は配置の関係上、前で演奏する人を思い浮かべると二人の名前が出てくる。

（後で翔にこの曲の詳細を聞いて、音源取っておかなきゃ……）

ちょうど曲が終わり、次の曲が流れ始める。

最初はスローテンポな感じがするが、Aメロに入る前にはアップテンポな曲に変わる。

歌詞としてはギリギリセーフな感じがするが、私はこの曲に惹かれていた。

色々チェックしたかったけど、勝手に他人のパソコンに触るのはマズイと思い触れないでおく事にした。

私はベッドの縁に座り翔を眺めながら音楽を聴いているが、時間は既に1時を回っていた。

「そろそろ寝ようか……」

一言呟くと私は用意された部屋には向かわず翔の布団に潜り込んだ。私なりのちょっとしたサプライズだが、これは昨日もやったので翔は然程驚かないかもしれない。

翔の寝顔を見ながら私は翔を抱き締めると、翔は無意識のうちに抱き返してくる。

私はそれが嬉しくて目を閉じているとそのまま眠ってしまった。

く第15話く（後書き）

エタ「相変わらず漑に好かれてるね」

翔「書いてるのでめえだろうが」

エタ「まあね、でも翔的には嬉しいんじゃないか？」

翔「……………」

エタ「黙秘権かい……………」

翔「正直漑サイドの曲って何を参考にしてるんだ？」

エタ「思いっきり話逸らしたな。曲に関しては色々なところから引っ張ってる」

翔「例えば？」

エタ「色々だ」

翔「答えろよ！」

エタ「……………気にするな、気にしたら負けだ！」

翔「やれやれ……………」

エタ「うーん……………」

翔「思考のループに陥ってるし……、それではまた次回お会いしま
しょう」

〈第16話〉（前書き）

エタ「ふう、今書きあがったぜ」

翔「ホント、ストック溜めようとは思えないんだな」

エタ「ストック書くにしても、第何話になるのかわからなくなるかな、とりあえず順次書いていく予定」

翔「少しはストック書けよ」

エタ「とりあえず学園祭の頃になればストックは溜まる……かもしれない」

翔「曖昧だなおい」

エタ「今回はあの娘が登場します」

翔「では第16話です」

エタ「前書きで書いておこう」

翔「何をだ？」

エタ「45600PVと40000ユニーク突破だ！」

翔「早いな、3週間か4週間くらいだろ？まだ」

エタ「ここまで読んでくださった皆様、本当にありがとうございます！」

「……………」

俺は一度撫でる手を離してみる。

「……………／／／」

澪の表情は先ほどよりは赤みが引いている。

俺は頭を撫でようと手を移動させる素振りを見せると

「……………！／／／／／」

若干ビクツとしながらも撫でられるのを待っている。

俺は一つの結論に至り澪の頭に手を置くと

「ふー……………」

悪戯心が湧き耳に息を吹きかけてみる。

「な！／／／／／」

顔を真っ赤にした澪は咄嗟に左手で息を吹きかけられた耳を塞ぐ。

「寝た振りしてんじゃねえよ……………」

一つ溜め息を吐き俺が告げると

「い、いいじゃないか…………／／／」

漣は俺の胸に顔を埋めながら反論する。

もう一度溜め息を吐くと右手を漣の頭の後ろに回し撫でてやる事に。

10分程撫でていると漣の腕が離れた。

「お、おはよう…… / / /」

改めて漣が挨拶をしてくるので

「おはよう、よく眠れたか？」

わかっていながらもイタズラっぽく尋ねてみる。

「き、聞くな！！ / / /」

顔を更に真っ赤にしながら答える。

「で、何で漣は俺の部屋で寝てんだ？」

俺が漣に尋ねると思い出したように

「そうだ、翔に2つお願いがあるんだった」

漣の発言になんだろうと思いつつ次の漣の言葉を待つ。

「1つ目はあの部屋にある以外にまだ楽器はあるのか？」

あるなら見せて欲しい、と言われたので

「ああ、まだ別室だが置いてあるぞ？」

俺の答えに漑は目を輝かせていた。

「2つ目は翔のパソコンから流れてる曲、色々教えて欲しいんだけど……」

そう告げる漑は小さな期待を込めた目で俺を見ってくる。

「構わねえよ？」

俺はベッドから抜け出すとパソコンの前に置いてある椅子に座り、マウスを操作し始める。

「どれが知りたいんだ？」

漑は俺の肩越しからモニターを見ている。

「とりあえず……、一通り流してみてくれないか？」

俺は頷くと最初から順に流し始める。

それから数分後、ある1曲が流れ始めた途端

「ここで止めて」

漑がモニターを凝視したまま告げてくるので俺は停止ボタンをクリックする。

俺も結構気に入っている曲の一つである。

漣は曲名を素早く携帯のメモ帳に打ち込むと

「じゃあ、続きお願い」

相変わらずモニターを凝視したまま告げてくる。

「後はこの曲か……」

漣が一言呟くので俺は停止させる。

「なあ漣？」

俺は気になり漣に声をかけると

「何だ？」

画面を見たまま尋ね返す。

「曲名メモしてどうするんだ？」

俺の質問に漣は腕を組み考えると

「学園祭で演奏する曲が1曲だけじゃ面白くないだろ？でも今から作ってたら遅いから、もう1〜2曲ほど既存の曲を演奏するのもいいんじゃないかなって思ってたな？」

漣の答えに俺は妙に納得していた。

「でも、仮にこれらを採用したとして、誰が歌うんだ？」

俺の疑問に漑は溜め息を一つ吐き出し

「そこなんだよなあ……、候補としては唯か翔のどっちかに任せたいんだよな……」

漑の答えに俺は漑同様溜め息を吐くしかなかった。

「漑は人前で歌うのは無理そうだしな……、唯は緊張はしないだろうが天然だから歌詞を忘れたりしそうだしな……」

俺の言葉に漑は苦笑いしている。

「じゃあ翔、3曲全部任せていいか？」

漑の言葉に俺は

「3曲？」

疑問に思った箇所を尋ねてみる。

「ああ、1曲は私が作詞してくる曲だ」

漑が笑みを浮かべて告げてくる。

「……俺が歌っても平気そうな歌詞なら考えてやる」

溜め息交じりに答えると

「ああ、わかった」

澪は相変わらず笑みを浮かべたまま答える。

それから暫く、曲を流しては澪が言ったところで停止させ曲名をメモしていく。

「どうだ？学園祭で追加したい曲はあったか？」

俺は再び最初から曲をループで流しつつ澪に尋ねてみる。

「ああ、帰ってからもう少し聴いてみて、追加する曲を決めるよ」

澪は携帯をポケットにしまいながら答える。

「もし仮に翔が歌うとしたら、どの曲が歌いたい？」

澪はふと俺に疑問を投げかけてくる。

俺は少し考え込んだ後に

「それはまだわからないな」

澪は俺の答えに苦笑を漏らす。

「正直、お気に入りの曲が多すぎて決めるのが難しいけどな」

更に付け足し答えると澪はクスクス笑っていた。

「その気持ち、何となくわかるなあ。じゃあこれは帰ってから歌詞

とか曲調をもう一度聴き直したら考えてみるよ」

漑は未だクスクス笑っているが真面目に答えてくれた。

「んじゃ、次は楽器が置いてある部屋に行くか」

俺は椅子から立ち上がると部屋の扉を開ける。

向かう先は同じく2階の一番奥の部屋。

その部屋の前に立ち扉を開くと朝にも関わらずその部屋は薄暗い。

俺はゆっくりと電気をつけると、部屋の至るところに大量の楽器が置いてある。

「うわぁ……」

漑は部屋をグルッと見回すと感嘆の声をあげる。

「試し弾きならしても構わねえから、好きなのを持ってみていいぞ」

俺の言葉を聞いた漑はそのままベースが置いてある場所へ向かうとじつくりと品定めするように見始める。

俺はその姿を見てクスッと笑い改めて部屋を見る。

（ベースだけじゃなくギターにドラムまで置いてあるからなぁ……）

考えながら足を向けた先にあるのはドラム。

オーダーメイドらしく、詳しい事はわからない。

ドラムの近くに置いてあったスティックを握ると、軽く慣らすようにドラムを叩き始める。

最初はゆっくりと叩き、感覚を取り戻すと徐々に叩くスピードを上げる。

「上手いな」

ベースを見ていたはずの澪が近くに来ていた。

「そうか？ ほぼ独学だしそんな事は無いと思うけど」

ドラムを叩く手を止め答えると

「少なくとも律よりは上手いな、確実に」

クスッと澪は笑い答える。

「それで、何かいいベースは見つかったか？」

俺の質問に澪は一つのベースを持ってきた。

「これいいなあって思ったんだ」

白を基調としたベースで、ネックは細く重さは軽い方である。

「それ、オーダーメイドだな」

俺の一言に漣は妙に納得した表情をしている。

「これだけいいベースは無いからな……」

ストラップを肩にかけ構えてみる漣。

俺は少し考え込んだ後

「そのベース、欲しければやるが？」

そう尋ねると漣は驚いた表情を浮かべる。

「さ、流石にこれを貰うのはダメだろ？」

漣はオドオドした様子で俺に尋ね返す。

「構わねえよ、俺が持つてても必要無いしな。ギターはあるしベースは漣の部屋に置いてあるし」

俺の言葉に漣は真剣に悩み始める。

「因みにこのベースの値段はいくらくらいなんだ？」

恐らくはオーダーメイドで作った際の金額の事だろうと思い、俺は思い出しながら

「さあなあ……、ざっと500万ぐらいじゃないか？」

そう答えると漣は最早苦笑いするしかなかった。

「そんな高価な物、貰えないよ」

漣が告げるが俺は特に気にしていないので

「まあまあ、俺からのプレゼントだと思って貰ってくれ」

俺の一言に更に漣は悩んでしまう。

10分程悩んだ末に漣が出した答えは

「……本当にいいのか？」

だった。

「ああ、実際に使ってくれる人に渡るならその方がいいしな」

俺の答えに戸惑いながらもしつかりとベースを握り締めていた。

その時の漣の表情は太陽のように輝いて見えたのは言わないでよかった。

「これも渡しておくよ、そのまま持って帰るのは不便だろうからね」

そう告げると俺は部屋の奥からケースを取り出し差し出す。

「ありがとう、何から何まで悪いな」

漣はケースを受け取るとベースをしまい肩に担ぐ。

「とりあえず部屋に置いてくるといいよ」

俺の提案に漑は頷くと部屋を抜け用意した部屋に向かう。

俺は一人部屋に残ると

「これで良かったよな、親父……」

部屋の天井を見上げ一言呟く。

答えなど返ってくるはずが無いとわかっていながらもつつい呟いてしまふ。

俺はフツと笑うと部屋を後にする。

そのまま俺は自室に戻ろうとすると、ちょうど漑と鉢合わせする。

俺の表情を見た漑は頭に？マークを浮かべながらも追求はしてこなかった。

部屋に戻った俺は携帯を手にとると時間を確認する。

現在午前9時15分。

携帯を閉じベッドに投げると

「これからどうする？」

俺の後ろをトコトコと付いてきた漑が俺に尋ねる。

「今日は特にする事も無いからな……」

腕を組み天井を見上げ答えると

「なら外行かないか？」

漑から提案を受けた。

家に居ても暇なだけなので

「ああ、いいぞ。10分後に玄関前に、な」

漑は荷物の整理等もあると考え俺が告げると漑は頷き部屋を後にする。

俺は漑が出たのを確認し着替え始める。

それから10分後、俺たちは玄関前に集合した。

「流石に暑いな」

外に出た直後、外の熱気が俺たちを包み込んだ。

「そうだな……」

漑の言葉に俺は力が抜けたように返す。

それでも俺たちはゆっくりと歩き始める。

街中に到着すると俺は

「どこに行く？」

漣に行き先を尋ねてみた。

俺の質問に漣は腕を組み考え

「まだ決めてないな……、適当に歩いてみないか？」

一つの答えを俺に投げかけてきた。

俺はその言葉に頷き街中をゆっくりと歩き始める。

（そういや、この状況って俺と漣がデートしてるみたいだな……）

「何か、デートみたいだな」

俺の考えとほぼ同じ事を漣が告げてきた。

「ああ、そうだな」

小さくクスッと笑い同意する。

すると不意に漣は俺の手を握ると

「こうすると……もっとそれらしく見える……かな？」

上目遣いで尋ねてくる。

漣の上目遣いに弱いらしい俺は、再び小さく笑うと指を絡め握り返

す。

それから暫く、俺たちは街を散策し今はマックスバーガーに来ている。

「
」

表情を見てもわかるように、漣はかなり上機嫌だ。

その表情を見て、俺はクスッと笑ってしまう。

現在正午である。

漣はポテトを、俺はコーラを飲んでいる。

俺は何となく視線を外に向けてみた。

すると、店のすぐ近くで一人の女の子に対し3人の男が絡んでいるのを見つけた。

「漣、あれってやっぱり……」

俺は視線は外さず漣に声をかけてみる。

漣も俺の視線の先を見て漸く意味がわかったらしく

「だな……、どうするんだ？」

視線を俺に戻し尋ねてくる漣に

「見て見ぬ振りは出来ないから……、ちょっと行ってくる」

俺は即答すると、漣には見抜かれていたようでクスッと笑っている。

「怪我だけはするなよ？」

漣の一言に俺は右手を軽く挙げ応え店を一度出る。

「は、離してください！」

店を出た直後に聞こえて来た女の子の声。

黒髪のツインテールの少女だった。

「そういつわけにはいかねえなあ」

「そうそう、少し俺たちと遊ぼうぜって言うてるだけじゃん？」

「って事で、行こうぜ？」

男たちの声も聞こえるが、話し声を聞いて俺は深々と溜め息を吐く。

「だ、誰か助けてください！」

少女は腕を掴まれながらも周りを見回し声をあげるが、誰一人として少女を助けようと動く者は居なかった。

ただ一人を除いて。

「無駄無駄、誰も助けになんて

「来てるとしたらどうする

「？な！？」

恐らくはリーダー格であろう男が話す間に割って俺が入る。

「んだてめえ？」

3人のうちの一人が俺に近付き睨みつけてくる。

「お前らみたいなやつに名乗る名前なんてねえよ」

俺は鼻で笑い一蹴すると、俺の態度にキレた男二人が俺に襲い掛かってくる。

襲い掛かる二人に対し俺は半歩右に避けるだけで、二人の攻撃を簡単に避ける。

がら空きになっている首元に手刀を落とし二人を気絶させる。

「お前……、なかなかやるな？」

リーダー格の男が俺に尋ねてくるが

「別に……、それよりアンタは仲間が居ないと動けないのか？」

俺はその質問に答える気は無いため素っ気無く返し、挑発をかけてみる。

男は少女を手錠でガードレールに結びつけようと連れて行こうとするが、少女も負けじと抵抗するが男の力の前には無力であった。

少女の左手の手首に手錠をかけガードレールに繋がると、俺と対峙する。

「逃げられちゃ困るんでね、カッコよく登場してもらったが早々に退場してもらおうか、謎の男よ」

先ほどの雑魚とは違い、この男からは隙が無かった。

「……でも俺の敵じゃねえな……」

俺は一言呟くと瞬歩で相手の懐に潜り込み、ボディに右ストレートを放つ。

が、読まれていたらしく簡単に防がれてしまう。

「素早いな、それに一撃の威力も高い……」

男は俺を冷静に分析しだす。

それにも俺は反応を見せず畳み掛けるように攻撃を繰り返す。

男は徐々に反応が鈍くなってきたのか、防ぐ動きが遅くなってきている。

俺は狙い目だと判断し攻撃を仕掛けようとするが、気絶させたはずの男の一人が俺の足を掴む。

「へっへ……、ただでやられるわけにはいかねえんでな……」

もう一度気絶させてやろうとすると同時に、俺の鳩尾に対峙してい

た男の拳が入る。

「ぐ……」

何とか踏み止まると足を掴んでいる男に蹴りを食らわせ卒倒させる。

「ほう、俺の一撃を食らってまだ倒れないとはな」

正直俺は鳩尾に重い一撃を食らっているため、少しばかり力が落ちている。

「っせえ……、これで終わりだ……」

一言告げると俺は足に集中する。

すると男は先手必勝と言わんばかりに俺に接近しようとする。

俺は男が動く瞬間を見極め上に飛び上がると、男の背後に周る。

そのまま男の背中に手を当て微量の魔力を込め発勁を放つ。

「ぐふ……っ」

男はなす術無く地面に倒れる。

男たちをまとめて街路樹に縛ると、俺は遠慮なくリーダー格の男のポケットの中に手を入れると手錠の鍵を見つける。

少女の元へ行き手錠の鍵を開錠すると

「あ、ありがとうございます！」

ペコンと頭を下げお礼を述べる少女。

「気にするな、大した事してねえしな、んじゃ気をつけてな」

俺は小さく笑うとその場を後にしようとする。

すると後ろから

「梓ちゃ〜ん！」

聞き覚えのある声が聞こえて来た。

俺は声をかけた人物を探してみると、憂ちゃんと頭の横に二つの団子を作った女の子が居た。

「あ、憂〜、純〜！」

梓と呼ばれた少女はそれに応えるように手を振り呼びかける。

「翔さん？」

梓と呼んだ少女の元に辿り着いた憂ちゃんは、俺に気付き声をかけた。

「久しぶりだな、憂ちゃん」

クスッと笑い憂ちゃんに挨拶し返す。

「お久しぶりです、翔さん」

姉とは違い礼儀正しい妹。

「憂、この人と知り合いなの？」

梓と呼ばれた少女が憂ちゃんに尋ねる。

「うん、神藤翔さんって言って、お姉ちゃんと同じ高校の先輩だよ」

憂ちゃんの答えに二人は驚いている。

「え、桜ヶ丘って女子高じゃなかったっけ!？」

梓（仮）が憂ちゃんに詰め寄り尋ねる。

「う、うん、そうなんだけど……詳しい事は翔さんに聞いてみて？」

流石に理由までは知らない憂ちゃんは俺にバトンを回してくる。

溜め息を一つ吐くと俺が桜ヶ丘に入学するまでの経緯を説明する。

「それは……」

「大変ですね……」

「あはは……」

上から梓（仮）・純（仮）・憂ちゃんの順である。

「ま、そういうわけだ。つか、俺憂ちゃん以外知らないんだが」

俺は梓（仮）と純（仮）を見て一言呟くと

「私も知らないな」

後ろから声が聞こえてきた。

俺はゆっくりと後ろを振り返ると漣が立っていた。

「どうした、漣」

俺の言葉に漣は笑みを浮かべ

「翔が憂ちゃんと話してるから私も出ようかなーって」

俺は漣の言葉を聞いて納得していた。

「それで、その二人の名前は？」

漣が梓（仮）と純（仮）を見て尋ねる。

「あ、自己紹介が遅れました、中野梓です、よろしくお願いします」

「私は鈴木純です、よろしくお願いします」

二人はペコッとお辞儀しながら自己紹介する。

「私は秋山漣、よろしくな」

「俺は神藤翔だ、よろしく」

俺たちも自己紹介を返すと鈴木から

「ところで、お二人はデートですか？」

と尋ねられた。

「な！な、な…… / / / / /」

鈴木の言葉に漑は顔を赤くし俺の背後に周る。

「さあ、どうだろうな？」

俺はクスクス笑い答える。

「漑さんと翔さん、お似合いだね」

憂ちゃんは微笑みながら答えてくる。

「とは言っても、俺たちはまだ付き合ってるわけじゃないしな」

俺の答えに3人は意外そうな表情を浮かべる。

「でも、傍から見たら恋人同士のデートにしか見えませんか？」

中野が俺と漑を見比べて首を傾げ尋ねる。

「あはは……」

漣は既に後ろで頭から煙を上げている。

そうこうしている間に憂ちゃんは携帯を見て時間を確認すると

「あ！そろそろ行かないとマズいよ？」

中野と鈴木に告げる憂ちゃん。

憂ちゃんの言葉に二人は携帯を取り出し時間を見る。

「やばい、もう少しで上映始まるじゃん！」

「行こう、二人共」

中野と鈴木も時間を見て慌ててこの場を離れようとする。

「もう絡まれるなよ」

俺は中野に向け一言告げると、中野は少し離れた場所で立ち止まり俺たちの方に振り向く。

「本当にありがとうございました！！」

透き通った声が響き中野はお辞儀をすると憂ちゃんたちを追いかけ行った。

「行ったか……、桜ヶ丘に来るかな？」

俺は3人を見送ると漣に尋ねてみる。

が、漑からは返事は無く疑問に思った俺はそつと振り返ってみる。

漑は顔を真つ赤にし立ったまま気絶していた。

「起きろ、漑」

肩を掴み揺すって起こしてみるが、効果無し。

俺は一つ溜め息を吐き漑を背負い、その後漑の荷物とベースを持ち漑を自宅へ送る事に。

暫く歩き漑の家が見えて来た頃

「んん……」

漸く復活した漑が声をあげる。

「起きたか？」

俺は漑を背負ったまま尋ねてみると、漑は今自分が背負われている事に気付き

「な、何で翔が私を背負ってるんだ!？」

俺の背中の上で暴れだす。

「ちょ、暴れるなって」

俺は漑を何とか宥めると漑を背中から降ろす。

そのまま二人並んで漣の家に向かう。

「とりあえずあがつて？」

漣の家に着くと家の鍵を開けた漣が招きいれてくる。

俺はその言葉に甘える事になり漣の家に入る。

2階にあがりある一室の前で漣は立ち止まると

「ちょっと待っててくれ」

と告げて中に入って行った。

数分後、部屋の中から

「入っていいぞ」

と漣の声が聞こえたので扉を開け中に入る。

部屋に入った俺はグルツと部屋の中を見渡す。

漣らしいシンプルな部屋だが、同時に自分の部屋に酷似しているとも思えてくるような部屋だった。

「あ、あんまり見るなよ……」

漣は苦笑いしながら俺に注意し、適当な場所に座るよう勧めてくる。

「悪い、何か漣の部屋が俺の部屋によく似てるような気がしてな」

少し大きめのテーブルの前に座ると一言告げてみる。

「私はあまり物を置いたりしないからな……、ちょっと待ってて」

澪らしい一言に俺はクスッと笑うと、澪は何かを思い出したように部屋を出る。

澪が部屋を出て5分後、澪が戻ってくる。

「悪いな、何も出さなくて」

苦笑いを浮かべた澪はお茶を俺の前に置いてくれる。

「別によかったのに……、でもありがとうな」

俺はお礼を述べると澪はクスッと笑いポケットから携帯を取り出しパソコンに向き直る。

澪は慣れた手つきでパソコンを操作し始めると、今朝メモした曲を検索し始める。

聞き慣れた曲が流れ始めると澪はマウスから手を離し椅子の背凭れに凭れ掛る。

「いい曲だよな……」

澪が決めた順で曲を流す。

「澪のお気に入りはどれだ？」

お茶を啜りながら俺は尋ねてみた。

「私は……、これかな？」

そう答える澪は再びマウスを操作し、曲を流す。

「どこら辺が気に入った？」

俺は更に質問すると澪は

「歌詞、かな。色々考えさせられるし」

目を閉じ耳を澄ませ、曲を聴きながら答える。

歌詞の意味としては、愛し合う二人の進む道が次第に違っている事に気付いた時。

悲しい別れを歌った大人向きのR＆Bナンバーで歌詞は男性視点。

恋人との過去を振り返りながら、それでも別れようとする悲しい感情を綴っている。

未だ恋人など居ない俺だが、歌詞には共感出来るところがいくつもあり好きな曲である。

俺は無意識に歌詞を口ずさんでしまう。

そんな俺を見た澪はクスッと笑っているが気にしなかった。

「でもこの曲を歌うとしたら、コーラスも必要だな……」

俺が不意に発した言葉に漑は腕を組むと

「それなら私か唯が担当するよ」

と告げてきた。

「まあ、細かいところは明日かな？」

とりあえず今決めるのは無理と判断した俺はそう告げると

「じゃあ、明日必ず行くからな」

漑らしい一言を聞き俺は頷く。

「さて、明日の準備とかしたいし今日は帰るかな」

俺が告げ立ち上がると

「じゃあ送ってくよ」

漑も立ち上がるが俺はそれを制し

「大丈夫、玄関まででいいからさ」

と答えると漑は少し考えると納得したのか頷く。

外に出ると陽は傾きかけ風は少しばかり涼しくなっている。

「んじゃ、また明日な」

漣の家の玄関先で一言告げると歩き出そうとする。

が、漣に腕を掴まれ振り向かされるとキスをされる。

ある程度時間が経つと漣は満足したのか自ら離れると

「じゃあまた明日な」

満面の笑みで俺を見送ってくれる。

俺はクスッと笑いそれに右手を挙げ応え帰路に着いた。

〈第16話〉（後書き）

エタ「出たね、梓」

翔「ああ、しかし出会い方がベタというかなんというか……」

エタ「うるさい、梓のキャラを考えたらこうなるかなーって書いたんだから言っくんじゃない」

翔「何でもありだな……」

エタ「そしてまた翔は漣にキスされてるし……、羨ましいなこんちきしょう」

翔「そこで何で氷の大剣を作り出す!？」

エタ「大丈夫、痛いのは一瞬だ……」

翔「やってやるよ!！」

ギャーギャー!

漣「あー……、えっと、二人が戦闘始めちゃったので私が代わりに?」

梓「そういう事になりますね……」

漣「って、今回初登場の梓じゃないか」

梓「何故か呼ばれました……」

漣「あはは……、さて次回も夏休みの日常編になります」

梓「えっと……」 カンペ確認中

漣「梓？」

梓「作者曰く、次回で夏休み編ラストになる……との事です」

漣・梓「それではまた次回お会いしましょう」「」

く第17話く（前書き）

エタ「夏休みの日常編ラストです」

翔「ホント3日に1話のペースだな」

エタ「正直ネタが浮かばない時は寝てるからね」

翔「寝るなよ」

エタ「では第17話です、どうぞ」

〈第17話〉

〈翔サイド〉

「……ねむっ」

現在8月3日午前9時である。

昨日澪の家から帰宅する際、買い物を済ませ戻った俺は用事が出来たのですぐさま家を空けた。

そして用事を済ませ帰宅したのは午前4時前であつたため、5時間しか寝ていないのである。

「普段ならもうちょいのんびり出来るけどなあ……」

盛大に欠伸をしつつ一言愚痴を漏らす、愚痴を言っても何も変わらないのでベッドから抜け出すと手早く私服に着替える。

私服に着替えた俺は少し遅い朝食を摂るため階下に向かう。

本日の朝食はご飯に味噌汁、サーモンの刺身に鮭の焼き魚。

俺が一人で朝食を摂っていると不意にチャイムが鳴った。

食事を中断し玄関に向かいドアを開けると

「おはよう」

「おはよー、カケちゃん」

漑と唯が立っていた。

「とりあえずあがりな」

俺は疑問を抱くが、立ち話もなんだしと考え招き入れる。

二人は頷くと俺の家にあがる。

「漑は俺の部屋知ってるだろ？先に行つてくれ」

リビングに招いても仕方ないと判断した俺は、漑にそう告げると俺は麦茶の準備をする。

が、漑たちは部屋には向かわず俺の後を付いて来る。

「あ、翔朝食中だったのか」

テーブルに並んでいる料理を見て漑が一言漏らす。

「ああ、だから先に部屋に行つててくれて言ったのに」

俺は溜め息を吐き麦茶をテーブルの上に置く。

「そついえば私朝食食べてくるの忘れてたな……」

漑の言葉に俺は吃驚していると

「あ、私も」

と唯も声を挙げた。

俺はもう一度溜め息を吐くと

「ちょっと待ってろ……、すぐ用意してやる」

そう告げキッチンに行くと、二人分の朝食を用意する。

「悪いな、翔」

二人分の朝食を用意していると、不意に漣が告げてくる。

「構わねえよ、っと」

朝食を二人の前に置くと

「いただきます」

漣と唯の声が重なり一言告げると朝食に手をつける。

「ああ、それから品数少なくて悪いな」

俺は先ほどと変わらないペースでご飯を食べながら、「冗談交じりに告げてみる。

「カケちゃんはいつもこんなに少ない方なの？」

唯がモグモグと鮭の焼き魚を食べながら尋ねてきた。

「基本的に小食だな、たまにガツツリ食べる時もあるが大抵これくらいだ」

サーモンの刺身を一切れつまみ口に運びながら答えると

「でもそれだと、栄養のバランス偏らないか？」

漣が最もな質問を投げかけてくる。

「正直、栄養のバランスはあまり考えてないから……」

俺は苦笑いしながら答えると

「しっかり考えないとダメだぞ……、翔が倒れたら困るのは私たちなんだからな」

本気で心配しているような表情を浮かべながらも、ご飯を食べるスピードは落ちない漣。

「それは軽音部のメンバー全員に言える事だよな、誰が倒れても困るのは俺たちなんだし」

俺はクスッと笑い答えると二人共笑っていた。

雑談をしながら朝食を摂り、気付けば30分が経過した頃に全員食べ終えていた。

「「ご馳走様でした」」

「お粗末様でした」

二人の声に俺はクスッと笑い答えると皿をシンクに浸け置きしておく。

「さて、約束の時間まで後1時間半か」

携帯を開き時刻を確認し一つ呟くと

「あ、翔、もう一度翔のお気に入りの曲教えてくれないか？」

漣が再び提案してきたので

「ああ、いいぞ」

俺は二つ返事で答えると二人を部屋へと案内する。

「カケちゃんの部屋久しぶりだ」

唯は嬉々とした表情で俺の部屋を見ている。

「で、何が知りたいんだ？」

俺は漣に尋ねてみると

「うん、というか全部の曲をメモしてみようと思ってな」

苦笑いを浮かべ頬を掻いて答える漣。

「ほら、これが基本的に聴く曲だ」

俺はお気に入りの曲を一覧にし表示すると、漑は素早く携帯のメモ帳に打ち込む。

「焦らなくても、ゆっくりでいいぞ？」

椅子から立ち上がり漑に一言告げると

「時間もあまり無いだろう？だからちよつと急ぎめで打ち込まないとダメなんだ」

漑はモニターを見たままクスッと笑い答える。

「カケちゃんこれ何？」

トコトコと唯が近寄ってきたので振り返ると、唯の手には摸造刀が握られていた。

俺は唯から摸造刀を受け取ると、躊躇無く鞘から刀身を露にしてみる。

「おお、カッコいい！」

ただ引き抜いただけなのにどこがカッコいいのだろうか、と考えながらも

「持つのはいいが、振り回すなよ？後、刀身には触らない事」

唯の手に摸造刀を持たせると注意すれば唯は頷き色々なポーズを取り始める。

「カケちゃんはどんな構えだったわけ？」

不意に唯が俺に尋ねてくる。

「剣の構え方か？」

俺は質問し返すと唯は頷く。

「色々あるが、一番楽なのはこれだな」

唯から摸造刀を受け取ると剣先を右下に向け床スレスレの位置で止める。

以前、入学してすぐに行った剣術決闘で見せた構えである。

「どついう構えなの？」

更に唯から質問が飛んできた。

「攻撃と防御、どちらにも特化した型だな」

すると唯は鞘の方を両手で持つと、ゆっくりながらも上から俺の頭を狙うように振り下ろす。

俺は剣を頭の上まで持ち上げそれを受け止める。

「なるほど」

納得した唯は鞘をすぐに引き俺に渡してくる。

鞘に刀身をしまうとベッド近くに立てかけておく。

「でも決闘中のカケちゃん、ホントにカッコいいな〜って思ったよ」

唯が入学した頃を思い出しながら一言告げてくる。

「そうか？」

俺の答えに漑と唯は苦笑いしていた、何故だ？

疑問を抱きながらも俺たちは雑談していると、再びチャイムが鳴る。

俺は階下に降りると玄関のドアを開ける。

「おっす、カケ」

「おはようございます、翔君」

律とムギが来ていた。

「ちょうどいい、とりあえずあがってくれ」

俺は二人を促し部屋へと案内する。

「お、漑たち先に来てたのか」

律が入るなり漑と唯を見つけ一言言つと

「あ、律にムギ、ちょうど良かった」

漣はメモが終わったのか振り返ると

「みんなに相談があるんだけど」

とテーブルの前に座りつつ一言告げる。

俺を除いた全員はテーブルを囲むように座る、俺は椅子に座っているが。

「何だ？」

律は一言尋ねると漣は

「学園祭で演奏する曲なんだけど、オリジナル1曲だけじゃ味気ないと思ってな」

そこで言葉を区切るとみんなの反応をうかがう。

「確かに、1曲だけじゃ何か……な」

「そうだね……」

「そうですね……」

皆漣の意見に同意の反応を見せる。

「そこで、既存の曲を2曲か3曲ぐらい追加してみようかなって思うんだけど、どうかな？」

漣の提案に皆考え始める。

「でも、歌うのは誰なんだ？」

律の最もな意見が飛んでくると漣は俺に視線を向ける。

律はそれに気付き漣と同じように俺を見てくる。

「なぐるほどね……」

俺は一つ溜め息を吐くと

「そういう事だ、既存の曲を歌うのは俺だ」

俺が認めると全員は納得したような表情を浮かべる。

「で、既存の曲は何をやるんだ？」

律は漣に視線を戻すと質問を投げかける。

「翔」

漣は俺を呼ぶと音楽を再生する。

「翔のお気に入り曲から選んでみようかなーって思ってな」

漣が告げると皆流れてくる音楽に耳を傾ける。

一通り聴いた皆のお勧めの曲は俺と全く同じだった。

「じゃあ、この3曲を追加しておくな？」

漣は皆に最終確認をすると、皆は頷いた。

「つか、練習した曲の歌詞は漣が書いてくるんだよね？」

俺が漣に尋ねると視線をこちらに向けて

「ああ、夏休みが明けるまでには書き上げるつもりだ」

漣の返事に律が俺の耳元で

「漣は結構メルヘンな詩を書いてきたりするけど、大丈夫なのか？」
と小声で囁いた。

その言葉を聞いて俺は深く溜め息を吐くしかなかった。

「最悪、漣か唯に歌わせるようにするしかないな……」

俺の返答に律は苦笑いするしかなかった。

「さて、そろそろ時間だし行きますか」

パソコンに表示されている時計を確認すると椅子から立ち上がる。

「行ってくて、どこにだ？」

漣は疑問に思い俺に尋ねてくるが、俺は目で付いて来いと合図する。

4人はよくわからない、と言った表情を浮かべるがとにかく俺につ

いてきた。

俺たちは階下を降りると浴室の左奥にある扉へ向かう。

「ここに来るのも久しぶりだな……」

一言漏らしながらも扉を開けると地下に繋がる階段が現れる。

「この家って地下もあったのか……」

漣の一言が聞こえるがあえて何も言わずゆっくりと階段を下りる。

電気の類はついているので、基本的に明るいため足を踏み外すことは無い。

にも関わらず、漣はビクビクしながらも俺の後を追いかけてくる。

階段を降り直線の道を進むと、だだっ広い空間に到着する。

「ここが俺のトレーニング場だった場所だ」

俺は空間の中央に立つと、皆の方に振り返り一言告げる。

「こんな広いところがあるなんて……」

皆は空間の広さに驚き、漣が一言漏らす。

「さて、早速だが始めようか」

ただただ圧倒されている皆の元に戻ると、俺は設置されているコン

ソールを操作する。

「使用者認証、モードトレーニング。トレーニングダミーの強度を設定してください」

空間の中に機械の音声が響き、俺は無言で強度をMAXに設定する。

「これでよし……っと、まずはどの型から見たい？」

最早呆然としている4人に俺が尋ねると

「じゃ、じゃあまずは決闘の時やった型を見せてくれ」

律がさかさず提案してくるので俺は了承する。

空間の中央に移動すると、皆も間近で見たいのか少し離れた場所で観戦している。

『はあ……』

不意に頭にルリエルの声が響く。

『何だよ、溜め息なんてついて？』

俺はルリエルに尋ねると

『何でも無いわ』

素っ気無く返される。

俺は疑問を抱きながらも、持ってきたペットボトルの蓋を開け手のひらに水を流す。

頭でイメージした氷刀を生成すると、剣先を下に向け構える。

「カケ、ちよつといいか？」

不意に律が俺に声をかけてきた。

「何だ？」

俺は視線を律に向けると律は俺の構えを指差し

「何で刀の先を地面スレスレまで下げるんだ？」

と尋ねてきた。

確かにこの型は傍から見れば隙だらけで、攻撃のチャンスはいくらでもある様に見える。

「これは攻撃にも防御にも特化した型だ、見てな」

するとダミーが動き俺に攻撃を仕掛けてくる。

狙いはもちろん一刀両断。

だが俺は刀を頭上に振り上げ簡単に防ぐ。

「こんな風に防御に特化してる面もある、欠点があるとすれば一瞬で防御が出来ない点だな」

ダミーの攻撃は早く、脳天・胴・袈裟斬りと多彩な攻撃を仕掛けてくる。

だが俺はそれを右手に持っている刀だけで全てを防ぐ。

「こんな風に慣れれば防御特化となる、慣れないうちは難しいけどな」

そう告げると俺は再び剣先を地面スレスレにまで下げる。

ダミーはもう一度剣を振り上げ脳天目掛け攻撃を仕掛けてくる。

が、一瞬の隙を突き反撃に転じる。

右腕・左腕・胴と斬り最後に肩から右斜めにダミーを斬り落とす。

「これが攻撃・防御共に特化した型だ」

俺は一息つくと律に向け告げる。

「その型の名前とか無いのか？」

漣が不意に俺に尋ねてきた。

「これは無いな、あえてつけるとすれば『獅水閃^{しすいせん}』とでも名づけようか」

俺の答えに漣はクスッと笑って居ると

「カケちゃん、他の型も見せてください！」

唯が拳手しながら告げてくる。何故拳手しながら……？

「他にか……、後出来るとすれば『獅水閃』以外に5つあるけど」

俺がそう答えると4人は驚いた表情を浮かべる。

「じゃあカケちゃんがそれ以外に得意なのを見せて？」

唯の答えに俺は腕を組むと、一つの型を思い出す。

「んじゃ、これだな」

そう答えると俺は刀を解除し、更に水の量を増やし氷の大剣を2本生成する。

大剣二刀流『氷乱剣戟』と名づけている。

その他にも大剣一刀流『業刀乱舞』や、双小剣『螺旋双戟』、斧『轟衡』、大鎌『旋空烈陣』の5つを持っている。

それを皆に教えると皆は苦笑いしたまま

「……本当に器用……」

と呟いた。

それから1時間後、俺は全ての型を見せ終わると全員で部屋に戻った。

「ホント、カケって器用だな」

不意に律が一言告げてくる。

「そうか？あれくらい普通だと思ってたんだが」

首をかしげる俺の答えに

「「「いや、それは普通じゃないから」「」」

4人は声を揃え答える。

「そついえば律と唯、夏休みの宿題はやったか？」

ふと思いついた澪が律と唯に尋ねてみると、二人の顔は青褪め始める。

それが答えとなり俺と澪は同時に深い溜め息を吐き出す。

「溜め息ついてるカケはどうなんだよ？」

律が俺に矛先を向けてきた。

「貰ってから大よそ2週間ほどで全部終わらせたか？」

サラリと答えると二人は目を輝かせ

「「見せてください！！」」

俺に詰め寄るとそう言ってきた。

俺は目で漣に「どうする？」と尋ねると

「ダメだろ、そういうのは自分でしないと意味無いしな」

漣が二人の発言を棄却すると二人は頬を膨らませぶうぶう言っている。

そんなやり取りを繰り返していると既に時刻は13時。

「お昼どうしよう？」

唯の一言で皆昼食を摂る事を思い出した。

「やっぱここはいつものところか？」

律が提案するいつものことは、マックスバーガーの事である。

俺を含めた全員は異論を唱える者も居らず、全員承諾する。

行く場所が決まると俺たちは家を離れマックスバーガーへと向かう。

「しかし相変わらずあちいな……」

道中俺は空を見上げるとダルそうに一言漏らす。

「ホントカケって暑さにダメみたいだな」

律が苦笑いしながら俺に告げてきた。

「まあな……」

俺は短く返すと皆に遅れまいと歩くスピードを少し上げる。

それから10分程歩き目的地に辿り着くと、律と唯は席を確保、俺と漣とムギは注文する係りとなり行動を開始する。

「海老バーガーとハンバーガー2つ、コーラL1つとオレンジL2つとポテトXL1つで」

俺は簡単に注文を済ませると品物を受け取り律たちの元へ歩み寄る。

律たちが俺に頼んだハンバーガーとオレンジを渡していると漣たちも戻ってくる。

「あゝ……、眠い……」

流石に睡眠時間の短い俺は、眠気を霧散出来ずにいる。

「寝てないのか？」

漣の質問に俺は首を小さく振り

「夕方から夜中まで用事だったんだよ……、帰ったら夜中の4時だったし」

そう答えると右手で口を抑え欠伸をする。

「用事って何やってたんだ？」

ふと律から質問が飛んできた。

「簡単に言えば異世界から来るモンスター共の殲滅が基本だな」

俺は皆だけに聞こえるように答える。

「例えば？」

唯の追撃の質問に俺は腕を組み

「そつだな……、多種多様だからな……」

俺の答えに唯は一つ閃いたのか

「じゃあ今まで戦ってきた中で、物凄く強かったのは？」

質問の内容を変えて尋ねてきた。

「物凄く強かったやつか……、昨日戦った神の力を持ったドラゴンくらいかな……」

俺の言葉に4人は絶句していた。

俺はそれを気にする事も無く海老バーガーにかぶりつく。

皆は各々注文したバーガーにかぶりついたり、俺が注文したXLポテトを食べている。

雑談しながら食事をし、30分後には店を後にした。

「これからどうする？」

俺は伸びをしながら皆に尋ねてみる。

「私はこれから家で勉強かな」

「私は弟とまた映画見に行くからな」

「私は憂と出かける」

「私も用事がありますね」

上から漑・律・唯・ムギの順である。

「そっか、んじゃここで解散かな？」

俺の質問に皆は頷くと

「じゃあな、翔、また夏休み明けの学校で」

「じゃあな、カケ」

「またね、カケちゃん」

「翔君、またね？」

それぞれから言葉を貰うと漑たちは各々向かう場所へと歩いていく。

俺はそれを見送ってから帰路に着く。

「やっと見つけたよ、翔……」

一人の少女が俺の背後に居るとは知らずに。

〈第17話〉（後書き）

エタ「はい、これにて日常編終了しました」

翔「ちょい待て、最後の誰だ!？」

エタ「オリキャラ」

翔「5文字で返すんじゃない!」

エタ「因みにオリキャラ紹介は新歓ライブ後にもう一人出ますので、そこでもう一度新たに登場したオリキャラ紹介を投稿します」

翔「つか、8つじゃなかったのか?」

エタ「改めて思い出したら、1つ忘れてね、思い出せなくなったんだ」

翔「アホだ、究極のアホだ」

エタ「こんな事ならあの小説削除するんじゃないかったorz」

翔「後で後悔するな」

エタ「さて次回は、学祭ライブまで行けたらなと思います」

翔「顧問編も混ざるわけか」

エタ「そうなるね」

翔「まあ頑張れ作者」

エタ・翔「「それではまた次回！」」

〜第18話〜（前書き）

エタ「今日はクリスマスですね」

翔「だな、クリスマスなんていつも一人だったけどな」

エタ「今は軽音部のみんなが居るからね」

翔「それにしても、作者的には余裕を持って投稿したな？」

エタ「うん、実は17話投稿した後書いてたんだけど、投稿して1日と半日で書き上げた」

翔「珍しいな」

エタ「今回は翔の過去、明かされる事実とオリキャラが2名ほど出ます」

翔「一人は騒がしいけど、一人はな……」

エタ「そう暗くならないの、では18話です、どうぞ」

〈第18話〉

〈翔サイド〉

夏休みから時は進み、現在9月1日午前8時。

制服に着替え鞆を手に取ると俺は家を出る。

学校までの道のりをゆつくりと歩き、15分ほどかけて到着する。

昇降口を抜け教室に辿り着くと俺は一目散に席に着き窓の外を眺める。

流石の唯も今日は遅刻せず来たのに驚いたのは内緒な。

俺は担任の話を軽く聞き流し講堂に移動する。

「ん……？」

講堂へ移動中、前髪は漑と同じ姬カットにし、後ろは漑よりは短いが背中に届くほど、更に色は蒼色をした生徒を見つけた。

客観的に見れば普通の学生だが、何故か俺の中学時代の知り合いにそっくりだった。

（まさかな……、あいつは別の高校に行ったはずだしそんなわけ無いか）

俺はその考えを否定し講堂へ急ぐ。

夏休み前と明けに聞かされる校長の話等を聞き流しつつ、眠気に何とか打ち勝つ。

こうして桜ヶ丘高校1年の生活は折り返し地点を過ぎた。

そして再び時は進み現在9月20日。

俺たちは演奏する曲目を練習していると

「あいた!!」

唯の声が響いた。

何事かと振り返ると唯の指の皮が剥けたらしい。

「うわぁ……、痛々しい……」

律が唯の指を見て一言告げると

「澪ちゃん見て」

と澪に見せようとするが

「見えない聞こえない見えない聞こえない……」

澪は部室の隅で蹲り耳を塞いでいる。

それを見た律はニヤリと笑い

「あー！私も練習のしすぎで手のマメが潰れたー！！」

自分の手を見ながら漣をチラッと見る。

（そんなになるまでお前練習してないだろ……）

俺は心の中でツッコミを入れると

「ほらほらー」

律は漣に更に追い討ちをかける。

漣は顔を塞ぎ見ないようにしている。

俺は一つ溜め息を吐き成り行きを見守る事にした。

すると律は何かを思い出したように倉庫に入ると、ダンボール箱を抱え戻って来た。

「昔の軽音部のアルバムが出てきたぞ」

その一言に俺と唯と律はアルバムを見る。

不意に風の流れが変わったのを感じた俺は扉の方を見ると、ムギが戻って来た。

俺は手招きすると4人でアルバムを見る事に。

「いつの時代のバンドだよって感じだよなー」

律は腹を抱え笑っているが、唯は引きつった笑みでそれに答える。

「そつえばムギちゃんはどこ行つてたの？」

ふと疑問に思つたのか唯がムギに尋ねる。

「学園祭のステージを借りる申請をしに行つて来たんだけど、軽音部ってまだちゃんとしたクラブって認められてないから断られちゃつた」

ムギが唯の質問に答えるが、いくつか引つかかる点があつた気がする。

「へー」

部長よ、今の話を思い起こせ。

「「へ？」」

漸く事の重大さに気付いた二人は声を揃えて驚いた。

「軽音部が部として認められてないだつてー！？」

律はムギに詰め寄り尋ねる。

「部員が4人以上集まれば大丈夫じゃなかったの？」

唯が律に尋ねると律は頭をポリポリと掻きながら

「そのはずなんだけどなあ……」

と答える。

「ていうか、部として認められてないのに」

唯はそこで区切ると部室内を見渡す。

「音楽室好き放題使ってよかったのかな……？」

あるのはアンプやら音楽関係なのだが、唯の視線の先にはティーセツトの棚。

（過去にティーセットを持ち込んだ部なんて前例が無いだろうな……）

俺もティーセットの棚を見て一つ溜め息を吐く。

「い、今まで何も言われなかったんだから大丈夫だよ、うん」

律は勝手に自己完結し呟く。

「とりあえず、生徒会室に行ってみるか」

俺を除いた3人は頷き生徒会室に向け部室を後にした。

ゆっくりと歩を進め向かうのは部室の扉……ではなく濤の元。

「おーい濤、生きてるか？」

俺が声をかけるが漑は

「見えない聞こえない見えない聞こえない……」

の状態を保っていた。

はぁ、と溜め息を吐くと漑の頭を撫でてやる。

すると漸く戻って来た漑は辺りを見回し

「はっ、律たちは？」

撫でられている事も忘れ俺に尋ねてくる。

「律たちなら生徒会室だ、軽音部が部として認められてないらしいからな」

俺の発言に漑は立ち上がり

「行こう、翔！」

手を引き漑は俺を引きずりながら生徒会室に向かった。

「……うん、やっぱり軽音部は部活リストには載ってないわね、部活申請紙を出してないからじゃない？」

生徒会室に近付くと和の声が聞こえ俺と漑は顔を見合わせ溜め息を吐く。

「そういえば律が出すはずだったよな、私が部長やるから私が出す！とか言って」

俺と共に来た澪は律に向け一言告げると

「あ……、忘れてた」

苦笑いしながら答える。

「やっぱりお前のせいかあああああああ……!!」

激怒した澪は律の頬つぺたを左右に引っ張る。

その様子を見た和は

「なんていうか、軽音部って唯にぴったりだわ」

そう漏らし、唯はわかっていないらしくすっ呆けた表情だった。

「とりあえず、軽音部は5人で……顧問は？」

和が律の代わりに記載していくが、そこで手が止まり顧問の名前を尋ねてきた。

「……顧問?」「……」

4人の声が重なる、お前らはどこぞのシジ君か。

というわけで、俺たちは場所を変え顧問を探す事に。

すると律は目星をつけていた先生を発見すると

「山中さわ子、我が校の音楽教師である。」

その綺麗な顔立ちとやわらかな物腰で生徒だけでなく教師の間でも人気が高い。

さらに楽器の腕前や歌声も素晴らしく……」

ナレーター口調で語り始める。

「ファンクラブが存在するほど人気がある」

お構いなしに律はナレーター口調で語る。

流石に困った山中教師は振り返ると

「さつきから何を言ってるの？」

と律に尋ねた。

「実は軽音部の顧問になつてもらいたいんです」

律が用件を伝えると山中教師は苦笑いを浮かべ

「だから私の事をヨイショしてたのね……、でもごめんなさい、私吹奏楽部の顧問してるから掛け持ちはちょっと……」

山中教師らしい言葉で断りを入れられる。

律はしょんぼりと落ち込むかと思いきや

「今まで声をかけてきた男の人は数知れず……」

再びナレーター口調で語り始める。

「だ、だからおだてても無理です！」

すると唯は下からジーツと山中教師を見上げている。

「先生つてここの卒業生ですか？」

不意に唯が尋ねると

「？ええそうよ？どうかした？」

山中教師が認めると唯は

「実はさっき見た軽音部のアルバムに先生に似た人が居たから……」

と答えると山中教師は先ほどの笑みが消えうろたえている。

「み、みんなちよつと音楽準備室に来て！」

そついうと山中教師は先陣を切り音楽準備室へ向かった。

漣・律・唯・ムギは山中教師の後を追いかけていくが、俺はゆっく
りとした歩調で歩く。

すると後ろから廊下であるにも関わらず猛ダッシュする音が聞こえ

る。

俺は溜め息を一つ吐き振り返ると

「かゝけるゝ!!!」

猛ダッシュしてきた人影が俺に抱きついてきた。

「離れろ、綾」

俺は綾と呼んだ人物の頭を抑え引き剥がそうとする。

「ぶう、折角久しぶりの再会なのに……」

頬を膨らませ反論するとゆっくりと俺から離れた。

俺に抱きついてきた少女は福井綾^{ふくいあや}、俺の幼馴染の一人である。

というか、夏休み明けに見た少女である。

「つか、お前北海道の高校行ってたんじゃねえのかよ？」

俺は中学時代、綾が北海道の名門高校へ行くと聞いていた。

が、今の綾は桜ヶ丘の制服を身に纏っている。

「翔がここに居るって話を聞いて、転校してきちゃった」

綾は舌をペロツと出し答えるが、俺は溜め息を付くしか出来なかった。

「わざわざ名門高校を辞めてまでここに来なくても……」

俺の言葉に綾は苦笑いをするしかなかった。

「で、どこに行くの？」

俺はゆっくりと部室に向け歩き出すと、綾は俺の横を歩きながら俺に尋ねてくる。

「音楽準備室、もとい軽音部の部室だ」

それから5分ほどで部室前に到着すると中から

「お前ら音楽室好き勝手使いすぎなんだよお！……！」

という声が聞こえて来たので俺は一つ溜め息を吐くと、扉を開け中に入る。

「先生、廊下にまで響く程デカイ声で叫ばないでください、正直うるさい」

土下座している4人に対し俺は扉に背を預けながら告げると

「……………今の見た？」

元に戻った先生は軽音部の面々と俺と綾を見て尋ねる。

俺たちは一斉に頷くと崩れ落ちた。

「うう……、先生になったらお淑やかキャラで通すって決めてたのに……」

すると律は先生に近付き

「先生……」

誰もが慰めるであると思っていたが

「バラされなくなったら顧問やってください」

脅しがあった。

こうして俺たちは顧問を獲得し、正式に軽音部は部として認められた。

「ところで」

唯が不意に俺の方を見て一言漏らすと

「カケちゃんの隣に居る子は誰？」

綾を見て尋ねるが、綾は腹を抱え声には出さないが笑っている。

「カケちゃんって……ぶっ」

とりあえず綾を放置し、俺は長椅子に腰掛けると

「おい、いつまでも笑ってないで自己紹介くらいしろよ」

俺の言葉に綾は涙目になっている目を拭うと

「ごめんごめん、私は福井綾、よろしく！」

フツと笑みを浮かべると手だけ敬礼しながら自己紹介する綾。

そして軽音部のメンバーも自己紹介を終えると

「で、何で綾はカケと一緒に居たんだ？」

律が綾に尋ねると

「それは私と翔は赤い系で 「出鱈目抜かすなドアホ」
って痛い痛い！！」

綾がアホな事を抜かそうとするので俺は綾の頭を掴みアイアンクロ
ーをかます。

俺は溜め息を吐くと綾を解放し

「こいつ、元々北海道の名門高校に行ってたくせに、俺がここに通
ってるって話を聞いてここに転校してきたんだとさ……」

俺が真実を伝えると綾は頬を膨らませぶうぶう言っているが無視。

「でも翔、小学時代から全然変わってないよね、変わったとすれ
ば雰囲気ぐらい？」

綾は俺を見ながら一言漏らす。

「そうそう人の外見なんて変わるかよ、雰囲気が変わったのはここに入ってから、だと思っぞ」

俺たちの会話を聞いていた漑たちから

「アーちゃん？」

唯が先に綾に質問しようと声をかけた。

「ぶっ、アーちゃんだっさ　　いてえよ!!」

俺はさっきの仕返しをしてやろうと笑うと綾は俺の腹を抓って来た。

「どうしたの、唯ちゃん？」

綾は俺に何も言わず唯に質問を促すように進めると

「小学校時代のカケちゃんってどんな感じだったの？」

恐らくは核心部分に触れたのであろう、綾の顔が若干真剣になっていた。

「小学校の低学年の頃の翔は、正直言えば今みたいに生き生きしてなかった、つまり真逆で死んだような表情だったね。高学年の頃は低学年の頃に比べてマシになってたけど、今みたいにはならなかったよ」

綾は俺を見て答えを告げると

「あの過去とは断ち切れたの？」

俺に質問をしてくる。

「親父たちの件なら断ち切った。あの件はもうすぐで断ち切れそうだがな」

俺は意味深に答えると綾は納得していた。

「あの件って事は翔はこの事は話してないんだね？」

綾は更に俺に質問してくるので俺は頷いた。

視線を澪たちに戻すと

「翔はね、両親とお姉さん以外にもう一人、大切な人を失ったの」
それを聞いた全員は驚いた。

「その大切な人っていうのは、来栖祭くるすまつりって言う女の子だったの」
澪たちに構わず綾は言葉を続ける。

「私と翔は元々家が近所で、すぐに仲良くなって一緒に遊ぶようになったの」

昔を思い出すように綾は目を閉じ告げる。

「それから毎日のように公園で遊んでたんだけど、ある日に祭ちやんが私たちを遠巻きに見てるのに気付いたの」

俺も昔を思い出すように目を閉じ回想に入る。

く回想く

今から11年前の事。

「あや、とおくになげすぎだよ」

幼少時代の俺は綾とボールで遊んでいたが、綾は勢いのあまり俺の頭上を遥かに超え公園のフェンスまで飛んで行った。

「ごめん、かける!」

クスクス笑いながら謝る綾に俺は気にせずボールを取りに向かって
いた。

そこで俺は一人の少女

祭と出会った。

背は当時の綾より少し低く、髪はショートカットにしていた。

「はい、これ……」

祭は綾が投げ飛ばしたボールを手にとると俺に差し出してくれる。

「ありがとう」

俺はクスッと笑ってボールを受け取り綾の元へ戻ろうとする。

が、服の裾を握られ上目遣いで俺をジッと見つめる。

そこで一つ閃いた俺は

「いつしよにあそぶ?」

祭に尋ねると、祭は大きく頷く。

「おれはかける、きみは?」

俺は綾の元に向かいつつ自己紹介し、祭に名前を尋ねてみる。

「わたしはまつり、くるすまつり」

顔を若干赤らめながらもハッキリと名前を述べた祭。

「いこう、まつり」

俺は自然と祭の手を握り綾の元へと駆け出す。

「うん!!」

祭も俺の手をしっかりと握り返し走り出す。

それから半年後のある日、俺と祭は綾が来れないとの事で今日は二人で遊んでいた。

「かける」

不意に祭に声をかけられ

「なに？」

俺は短く尋ね返す。

「かけるのしょうらいのゆめってなに？」

いきなりすぎる質問に俺はうろたえるが

「まだきめてないや、まつりちゃんは？」

俺は曖昧に答えを返すと、祭に尋ね返した。

「わたしはおよめさんかな」

祭は笑顔で俺の質問に答えた。

「だれのおよめさんになるの？」

気になった俺は更に尋ね返すと

「かけるの」

祭は即答した。

流石の俺もこの答えは予想しておらず、恥ずかしさから目を合わす事が出来なかった。

が、祭は俺の前に立つと

「ちかいのやくそく、おとうさんとおかあさんにおしえてもらったから、かけるにもしてあげる」

そう告げると祭は俺にキスをした。

それから俺たちは時間も遅くなるという事で、祭を家まで送っていた。

祭の家はとにかく大きく、豪邸と言っても差し支えないほどの大きさだった。

「じゃあまたね、まつりちゃん」

俺は玄関前で祭を見送ると祭は笑顔で頷く。

俺がゆつくりと祭の家を離れようとした時

「ぜったい、おおきくなったらかけるのおよめさんにしてねー!!」

その場でジャンプしながら両手を振り、大声で叫ぶ祭。

クスッと笑い俺は右手を挙げ

「やくそくだよ!」

祭の約束に応え帰宅した。

これが祭と話す、最後の会話だと知らずに。

それからもう半年、つまり1年後の事故からそれなりの日にちが過ぎたある日の事だった。

両親と姉を無くしたショックで部屋に籠りがちだった俺は、何気なくテレビをつけてみた。

今思えば、この行動は後に俺は後悔する事になった。

テレビでは飛行機墜落事故の犠牲者リストを表示していた。

俺は何気なくそれを見ていたが、ある名前を見て目を見開いてしまった。

そこには『来栖祭』と書かれていた。

更にテレビのアナウンサーからも『くるすまつり』とハッキリ名前

が読み上げられた。

俺は即座にテレビを消し布団に潜り込み、何かの間違いだと自己暗示をかけていた。

しかし現実とは非情なものだった。

翌日の夕方頃に家のチャイムが不意に鳴り響いた。

俺はゆっくりと起き上がり玄関に向かい扉を開けると

「神藤翔君だね？」

髭を生やし、白髪の如何にも初老なおじさんと、その奥さんである人物が立っていた。

「……はい」

俺は頷くと

「単刀直入に言おう、祭が亡くなったのは知っているね？」

その言葉を聞き「やっぱりこれは現実なんだな……」と改めて思い知らされる。

弱弱しく頷くと

「これを君に、祭が書いた手紙だ」

差し出された一通の手紙、俺は受け取るのを躊躇ってしまうが、覚

悟を決めその手紙を受け取る。

「それと、いつも祭と遊んでくれてありがとう、心から感謝するよ」
初老のおじさんはそう言つと深深と頭を下げた。

二人が帰つた後、俺は部屋に戻り祭が書いた手紙を開けてみた。

文面には綺麗な文字が並んでいた。

祭なりに頑張つたのか、ところどころ漢字が書かれていた。

祭と知り合いよく遊んだ時の事を思い出しながら読んで行く。

そんな中、ある一文を見つけた。

「この手紙をよんでるってことは、わたしはもういないとおもつ」

恐らく死の間際に続きを書いたのであろう、文字が少しずつ乱雑になつていた。

「かけるとあそんだ日々はたのしかったよ、ほんとうにありがとう
ね？」

何を思つて祭はこれを書いたのか、今では知る由も無い。

「かけるとのやくそく、はたせなくてごめんね？」

俺は読んで行くうちに目の前が涙でばやけ始める。

「だからかける、わたしとのやくそくはわすれて、本当にたいせつな人ができたらぜったいまでもってあげてね？」

目に溜まった涙が俺の頬を伝い布団に零れ落ちていく。

「今まで本当にありがとう、わたしの大好きなかける」

そこから先は血に塗れ何が書かれていたのかわからなくなっていた。

俺は全部を読みきった後、涙が枯れるまで部屋の中で泣き叫んだ。

そして小学校に入る頃の俺は、最早死んだ目をしていた。

そんな俺を見た綾は何とか励まそうとするが、この時の俺は誰の声も届いていなかった。

学校から家に帰った俺は何もする気は起きず、身体を引きずり部屋に閉じ籠る事が日課になっていた。

俺は机の上に置いた手紙を読み返す気にはならず、布団に寝転んだ。

そのまま眠りについた俺は夢の中で祭と会った。

「どうしてそんな目をしているの？」

祭は今の俺の状況を知っているかのように尋ねてきた。

「だって……、大好きなまつりちゃんがないんだから……」

俺の答えに祭は近寄り

「こんなの、わたしが好きになったかけるじゃない」

ハッキリと一言告げた。

俺はその一言に驚き祭を見ると、祭は涙を流していた。

「こんなの……かけるじゃないよお……」

祭は俺の胸に抱き付き泣きじゃくる。

俺はそっと抱き返し

「ごめん、まつりちゃんがいなくなっただけどうかしてたみたいだね、おれ」

祭の髪を撫でながらそっと呟く。

「すぐにまえみたいにはなれないとおもう、だけどいつかかならずまつりちゃんがおれを好きになってくれたおれにもどるから」

俺は自分自身に言い聞かせるように祭に告げる。

「うん……やくそくだよ?」

祭は俺を見上げ尋ねる。

「やくそくのしるし、たしかこうだったよね?」

俺は以前祭と交わしたキスを、今度は自ら祭にキスする。

「うん……、あってるよかける」

お互いキスをやめるとクスッと笑いあう。

「じゃあ、そろそろじかんだから……」

そういうと祭は俺から離れる、その瞬間祭の身体は徐々に光の粒子となって消えかけていた。

「わたしはいつでもかけるをみまもってるよ、だからかけるもつよくなって好きな子をまもれるちからをてにいれてね？」

笑みを浮かべた祭の最後の言葉だった。

俺は祭の言葉に大きく頷くと祭の姿は消えていた。

「ぜったいにつよくなる、もうだれもうしなわないように」

光の粒子を見上げ一言俺は呟くと、夢の世界から現実世界へ引き戻された。

それから俺は、なんとしても祭との約束を果たすべく自ら変わろうと努力を惜しまなかった。

そんな俺を見た綾は

「かける、なにかあったの？」

と尋ねてきたが、俺は小さく笑い

「うん、たいせつなやくそくのために」

俺の答えに綾は頭に疑問符を浮かべるだけだったが、それ以上は追求してこなかった。

く現実・翔サイドく

「という事があったの、それから翔は何かある度に祭ちゃんの約束を思い出して頑張ってたの」

俺は綾の言葉を聞きながら目を開ける。

「「「「.....」」」」

何となく軽音部の皆を見ると、4人とも涙を流していた。

「でも翔？」

不意に綾が俺に声をかけてきた。

「何だ？」

俺の返答に綾は

「もうすぐで祭ちゃんの方も断ち切れるって言ってたけど、どういう事？」

綾の質問に俺はクスッと笑い

「漸く見つけたんだよ、祭と同じかそれ以上に愛せる人を」

そう答えると綾と軽音部のメンバーは驚いた表情を浮かべた。

「誰なの？ここに居るの？もしかして私！？」

綾は俺に詰め寄り尋ねてくる。

「最後のはどうあっても違うから、お前は俺にとって最高の友人だ」

俺の答えに綾は頬を膨らませている。

「今はまだ言えない、が、いずれは俺から言うつもりだ」

更に俺は告げると、心当たりがある人物2名は頬を掻いている。

それを見逃さなかった綾と唯とムギは、漣と律に詰め寄る。

「漣ちゃんと律ちゃんだったのね？」

漣と律は3人の気迫に追い込まれ

「ああ……」

素直に白状した。

「カケちゃんは漣ちゃんと律ちゃん、どっち選ぶの？」

唯は俺の話を聞いていなかったらしく、俺に尋ねてきた。

「さてね、いずれどちらかに告げるつもりだ」

俺は唯の質問にあえて答えようとしなかった。

が、綾は俺の首根っこを掴むと漣と律の前に差し出す。

「何しやがる綾」

俺はジト目で綾を睨むと

「いいから今答えを出しなさいよ、ズルズル引きずってたら愛想尽かされるわよ？」

綾もジト目で俺に告げてきた。

俺は一つ溜め息を吐くと

「わーったよ……、というわけで漣、律、ちょっと屋上に行こう」

俺の言葉に漣と律は頷き移動しようとする。

「……お前らまで来なくていいから」

二人を先に行かせると俺は綾・唯・ムギを押し留める。

3人は頬を膨らませぶうぶう言うつが無視し二人の後を追いかけた。

屋上の扉に差し掛かり扉を開けようとすると

「律、翔がどっちを選らんでも恨みつこ無しだからな？」

漣の声がハッキリと聞こえた。

「ああ、望むところだ！」

漣の言葉に律は笑顔でハッキリと答える。

俺は意を決し扉を開け放つ。

二人は俺を見るが、俺は一度空を見上げる。

何となく、祭がそこに居る気がした俺は空に向かいクスッと笑う。

すると昼間にも関わらず、一つの星が輝いていた。

俺はそれが祭なんじゃないかと考えるともう一度笑う。

そして俺は零と律、二人に視線を向ける。

「俺が選ぶのは……」

俺は一呼吸置き彼女となる相手の名前を告げた。

く 零サイドく

部室で聞いた話に私は正直驚いた。

翔がこんなにも辛い出来事を背負っていたとは全く思っていなかったから。

だけど、翔はその祭という少女と同じかそれ以上に愛する人が居ると言った。

その人の名前は私なのか、それとも律なのか。それは翔にしかわからない。

だけど、私は一つの疑問を抱いてしまう。

もし仮に私が選ばれたとしても、私が本当に翔の彼女に相應しいのか？という事である。

あの話を聞いた後では、自信を無くしてしまいそうだった。

「俺が選ぶのは……」

不意に翔の声が聞こえた。

私は翔の次の言葉を待った。

「……漣だ」

翔は私の名前を呼ぶと、近付き抱き締めてきた。

律はというと、やっぱりか、と言った表情を浮かべている。

「じゃあ、私は先に部屋に戻ってるな？」

律は氣を使ったのか屋上から姿を消した。

「で、でも翔、私なんか相應しくないだろ……？」

私は先ほど考えた事を翔に尋ねると

「相応しい相応しくないじゃないんだよ、漣」

クスッと笑い一言返す翔。

「俺が本気で好きになったのが漣だった、ってのが重要なんだよ」

更に翔はつけたし答えるとギュッと抱き締めてくれる。

翔に抱き締められながら私は翔が空を見上げたのと同じように空を見上げてみる。

そこには小さいけれど暖かそうな光を放つ星があった。

翔は私が空を見上げているのに気付くと私の隣に立ち

「あの星、恐らく祭だと思う」

私が見ていた星を指差し翔が告げてきた。

「うん、何となく私もそんな気がしてた」

翔の右手に私は左手を繋ぎギュッと握る。

翔もそれに気付いたらしくギュッと手を握り返す。

（会ったことも無いけど、祭ちゃんの分まで私幸せになるから、見守っててね？）

心の中で見たことも無い祭ちゃんに向けたメッセージを小さく呟く。

それに呼応するかのように星は更に明るくなった気がする。

私はそれに気付くとクスッと笑い翔と共に空を見上げ続けた。

〈第18話〉（後書き）

エタ「おめでとう、翔」

翔「ああ」

エタ「今回、翔は漣を選びましたが、後ほど急展開を迎えます」

翔「だから先の事を今言うなっつーの」

エタ「そして登場しましたオリキャラのお二人です」

祭「初めまして、来栖祭です……」

綾「福井綾だよ、よろしくね」

翔「祭は恥ずかしがってるし、綾は唯によく似てるし……」

祭「あはは……、というか作者さん、私の出番はもう無いの？」

エタ「とりあえず今は無いかな、これも先の事だけど、とある事によつて祭ちゃんの出番はあるよ」

翔「今度は何をやらかすつもりだ、この糞作者」

綾「あはは……」

エタ「まあ祭ちゃんは、翔たちが2年生になった時、出番をあげるとだけ言っておくよ」

翔「まだ当分先っぱいな」

エタ「だねえ」

翔「とりあえず、この二人の紹介は俺たちが2年生になった頃にもう一度オリキャラ紹介を投稿するんだろ？」

エタ「そう考えてたんだけど、これを投稿した後に追加したオリキャラ紹介をもう一度投稿しようかと考えてる」

綾「まあそれが無難かもしれないね、私たちの事全く触れなかったんだから」

エタ「んー……、じゃあこれを投稿した後オリキャラ紹介を書くか」

翔「じゃあ今すぐ書けよ」

エタ「任せろ！」

祭「えーっと、作者さんが執筆を始めたようなので私が代わりに仕切らせてもらいますね？」

綾「まさかの祭ちゃんが！？」

祭「といっても、最後の挨拶をするだけだから大丈夫だよ、綾ちゃん」

綾「じゃあ二人で終わらせようか」

祭「だね それじゃあ……」

綾・祭「また次回お会いしましょう」
「」

エタ「それと、回想中のセリフがほとんどひらがなののはご容赦ください！」

翔「作者曰く、子供だから漢字で書いたらおかしいだろうと思ったらしいので」

エタ「読みにくくなってすみませんでした！orz」

く新たに加わったオリキャラ紹介（前書き）

エタ「改めて、翔以外に登場したオリキャラの紹介です！」

く新たに加わったオリキャラ紹介く

ふくいあや
福井綾

髪は漑と同じお姫様カットにし後ろは背中まで伸びている。色は蒼色。

翔の幼馴染。

幼稚園から中学まで同じだったが、高校1年の時は北海道の有名高校に進学していた。

翔が桜ヶ丘に居るとい話を聞きその高校を辞め桜ヶ丘に転校してきた。

所属部は料理部。

性格は誰にでも優しく人当たりがよくノリもいい。

よく翔とバカ話をしては翔にアイアンクローなどを食らっている。

料理以外の家事が得意で、綾が料理をすると失敗作しか出ないという噂もある。

翔を見返してやろうと心に決めた綾は、桜ヶ丘で料理部に所属する事を決意する。

中学の頃のあだ名は戦慄の綾。

CV：水樹奈々

魔法少女リリカルなのはシリーズ：フェイト・ハラオウン（またはフェイト・T・ハラオウン役

くるすまつり
来栖祭

髪はショートカットにし、色は赤。

唯の髪型を赤くしたと思えば想像しやすいと思う。

翔と綾の幼馴染で、10年前の飛行機墜落事故の犠牲者。

翔とは幼い頃に将来を約束し合っていたが、その約束を果たせず亡くなる。

そして翔の初恋の相手でもある。

性格は人見知りだが、打ち解ければ結構話すタイプ。

風の噂では、祭によく似た少女を目撃したという話がいくつも挙がっているが、真偽は定かではない。

C V：野中みゆう

D・C：？シリーズ（白河ななか役

く新たに加わったオリキャラ紹介く（後書き）

エタ「祭ちゃんに関しての、最後の一文は翔たちが2年生になった頃に明らかとなります、それまでお待ちください！」

翔「それでは、感想などございましたらお願いします」

く第19話く（前書き）

エタ「今年も後少しで終わりますね」

翔「今年一年、どんな年だった？」

エタ「そうだね、まずはこのサイトに小説を投稿し始めた事が一番かな」

翔「だろうな、そのお陰なのか少しは変わってる気がするしな」

エタ「まあね、さて皆様にとって今年はどんな年だったでしょうかな？」

翔「それでは第19話です、どうぞ」

〈第19話〉

〈翔サイド〉

俺と漑が部室に戻ると4人はニヤニヤしながら俺と漑を見てきた。

「綾、アイアンクローとヘッドロックどっちがいい？」

俺は綾限定で質問してみると

「どっちも嫌だよ!？」

綾の答えに俺はクスッと笑う。

「つか、綾ってこの学校に在籍してるんだよね？」

律が不意に尋ねると綾は律の方を向き頷く。

「部活は何してるんだ？」

更に律は尋ねる。こいつ部活してなかったら軽音部に引き込もうと
してるな……。

「えっと、料理部だけど？」

俺はそれを聞いた瞬間、俺は我が耳を疑った。

「……綾、もう一度お前がやってる部活名を言ってくれないか？」

恐る恐る俺は尋ね返すと

「だから、料理部だってば」

今度は先ほどより声を張り答える。

俺は左手を額に当て深く溜め息を吐いた。

「お前が料理部とは……、俺もそろそろやばいかも知れないな……」
というのも、中学時代に綾手作りクッキーを貰ったのだが、色々と間違えすぎて形はクッキーとは程遠く、色合いも酷かった。

それでも俺を含め、クラスの全員に1つずつ配られたクッキーもどきを食してみたが、結論から言えば戦慄を覚えた。

ある者は口元を押さえトイレに駆け込み、ある者は口から泡を吹きその場で気絶した。

そう、綾は元々家事全般は得意なのだが、料理は全く持ってダメなのである。

「むう、あの事件はもう起きないよ!」

綾は頬を膨らませ反論してくる。

「綾、お前自分のあだ名を忘れてないよな?」

俺は溜め息を吐き尋ねると綾は視線を明後日の方向に向け吹けない口笛を吹いている。

「翔、綾のあだ名って？」

俺の隣に居た漑が俺に尋ねてきた。

予想外だったのか綾が

「ダメええええええええええ！！！」

と叫ぶが俺はそれに構わず

「ああ、綾のあだ名は「戦慄の綾」だ、俺はあの日の事を絶対忘れないほど、綾のあのクツキーに恐怖を覚えたからな」

俺が告げると俺と綾を除いた4人は苦笑いしている。

「翔にそれほどの衝撃を与えたクツキーって言うのも、見てみたい気がするけど……」

湊の一言に綾は耳を立て

「じゃあ今から作ってくるね？」

目を輝かせるとそう告げ部室を後にした。

俺は逃げ出そうか考えたが、濡に押し留められ部屋に残る事に。

「私、空気になってるわよね？」

不意に俺たちのものではない声が聞こえた。

山中教師だった。

「おお、すっかり忘れてた」

俺の答えに山中教師は深く溜め息を吐き出し

「ところで演奏する曲は決めてあるの？」

俺たちに質問してきた。

「はい、オリジナル1曲と既存の曲を3曲ほどです」

まったりと綾を待ちながら俺たちは紅茶を飲みつつ、澪が代表で答える。

「じゃあちよつと演奏してみてくれないかしら？」

山中教師の一言により俺たちは楽器の準備を始めた。

演奏する曲順は決めてあるため、すぐさま澪は全員に確認すると俺たちは頷く。

最初の3曲の楽譜は既に渡しており、各自家で練習するようになっている。

「歌わなくても大丈夫か？」

俺が尋ねると澪たちは頷き、視線だけを山中教師に向けると了承だと思われる頷きが返ってきた。

視線を律の方を向き頷くと演奏を始める。

（ （ （ （ ） ） ） ）

一通り曲を演奏し終え

「どうですか？」

澪が山中教師に尋ねる。

すると山中教師は右手を顎に当て

「そうねえ……、とりあえず技術面に関しては色々指摘したいけどそれは後回しにして……」

そこで一度区切ると俺たちを見据え

「4曲目は歌詞無いの？」

そう尋ねてきた。

すると澪は鞆から1枚のルーズリーフを取り出す。

「それが歌詞か？」

俺が尋ねると澪は頷く。

すると唯が澪に近づき

「わー、見せて見せてー！」

子供のように顔を輝かせ見せてもらおうとするが

「え、でも恥ずかしい……」

澪はルーズリーフを胸に抱え見せないようにしている。

「えー、見せてよー」

「で、でも……」

という二人のやり取りが延々と続き、山中教師はイライラし始め

「はよ見せんかい」

無理やり澪からルーズリーフを奪い取った。

（素を出してどうする……）

俺は心の中で溜め息を吐くと山中教師と横から覗き込んだ律を見やる。

二人はルーズリーフの歌詞を読んで行くが

「うおお……身体が……、か、かゆっ……！」

「鳥肌が……」

律は腕に鳥肌がたち、山中教師にいたっては背中を掻いている。

俺は二人からルーズリーフを取ると目を通してみる。

出だしに関しては問題は無いが、そのまま俺は読み進めサビに差し掛かったところで

「漣……」

顔を上げた俺は漣を見て

「ごめん、これは流石に俺じゃ歌うのは無理だ……」

そう告げて漣にルーズリーフを返す。

当の漣は俺や山中教師に告げられ涙目になっている。

「私なりにいい感じに書けたと思うんだけど……」

ウルウルと今にも目から涙が零れそうな漣。

「やっぱりダメかなあ……」

その表情に慌てた律と山中教師は

「いや、ダメっていうか、その、ねえ？」

「そ、そうだって、カケもそう思うだろ？」

律は返答に困ったのか俺に話を振ってきた。

「まあ歌詞自体はいいと思う、俺が歌ったらそれこそ社会的に死ぬから却下だが……」

俺は未だに涙目の漑の頭に手を乗せ撫でながら答えると、漑の目に浮かんでいた涙はいつの間にか消えていた。

「唯はこの歌詞どう思った？」

ふと唯の方に視線を向け尋ねると

「凄くいい……」

恍惚とした表情を浮かべ一言告げた。

唯の言葉に律と山中教師は驚愕していたが、とりあえず放置。

「ムギはどうだ？」

俺は今度はムギを見てみると、ムギはうつとりとした表情を浮かべている。

どうやら賛成4：反対2という状態らしい。

と、そこへタイミングよく(?)綾が戻って来た。

「たっだいまー!!」

手には以前よりはマシになったクッキーがあっただが、俺は冷や汗をかいた。

「はい翔、食べてみて」

綾はそういつとクッキーを一つ俺に差し出してくる。

「……唯、先に食ってくれ」

俺は無意識のうちに唯を前に差し出すと

「ほえ？うんわかったー」

何の躊躇いもなく唯は綾の作ったクッキーに手を伸ばした。

そしてクッキーを一つ摘み、唯は一口で食べた。

（果たしてどうなるやら……）

俺は心の中で唯に合掌するが、その予想に反して

「うん、美味しいよ？」

と唯は答えた。

俺はその答えに吃驚してしまった。

「はい、翔」

綾は俺に一枚のクッキーを差し出してきたので、恐る恐る受け取り食べてみる。

「……」

俺は無言で綾の肩を掴み

「これ本当にお前が作ったのか？」

俺の質問に綾は頬を膨らませ

「当然了！」

声量を大にしハッキリと答えた。

「しかし、あの地獄の一件以来、綾の手料理って言うのが物凄く怖くてな……、ある意味トラウマだからなあれは」

俺はもう一つクッキーを貰い食べつつ告げると綾を除いた皆は苦笑いしていた。

綾が作ったクッキーは形も焼き加減も絶妙になっており、更に味はチョコチップが散らばっており仄かに甘味があった。

「じゃあ今度料理作りに行く

「いや結構」

ぶう」

綾のセリフに俺は即座に断りを入れると綾は頬を膨らませぶうぶう言い出す。

「あ、綾ちよつといいか？」

タイミングを見計らった律が綾に声をかける。

「何？」

綾は振り返ると律は先ほどの漚の歌詞が書かれたルーズリーフを差し出す。

「この歌詞を学園祭で歌おうと思うんだけど、賛成か反対か意見が欲しいんだけど？」

律が差し出すルーズリーフを綾は受け取り読み始める。

「つか、何で綾に尋ねた……」

俺は溜め息を吐くと同時に一言呟くが

「うん、これいいんじゃない？私は好きだけど」

意外にも綾も賛成の言葉が飛んできた。

これにより賛成5：反対2となるが

「さわちゃんはこれはこの詩は無いと思うよね？」

律は負けじと唯一の反対派である山中教師に尋ねる。

「諦める律、多数決という壁の前には律でも勝てやしない」

俺は律の肩をポンポンと叩き一言告げると

「はあ、もうこれで行くしかないか……」

律は溜め息を吐きそう告げる。こうして4曲目のオリジナル曲が決

定した。

「それにしても、ホント軽音部って美少女ばかりだよな」

綾が軽音部のメンバーを見て一言呟く。

「何を藪から棒に言ってるんだお前は」

俺は一つ溜め息を吐き綾に告げると

「いやぁ……、これなら確かに翔が好きな人出来るのも頷けるよ」

綾は俺の言葉を聞かず話を続ける。

「お前は少しは人の話を聞け」

俺の話を聞かない綾の頭を軽く小突き告げる。

「もー、いいじゃん、ってか頭殴らないでよ、バカになったらどうするの?」

綾は頬を膨らませぶうぶう言うが

「さてね、つーか綾は中学時代ほぼ成績トップクラスだったんだから落ちる事はねえだろ?」

俺の一言に唯と律が綾の手を取り

「「勉強教えてください!!!」」

と告げた。

「というか、ホント翔と綾仲いいな、少し羨ましいよ」

漑は俺と綾を見てクスッと笑い告げてくる。

「まあな、幼馴染つてのもあるし、綾は意外とノリいいしな」

俺の答えに漑は綾を見やるが、ふと何かを思い出したように

「そついえば翔、さっきの話に戻るんだけど」

と告げてきたので

「何だ？」

短く返してみた。

「祭ちゃんからの手紙って未だに持ってるのか？」

漑の質問に俺は頷いた。

「あれは捨てられないさ、祭が死の間際まで書いた手紙だしな、今でも大事に取ってあるよ」

俺の答えに漑はクスッと笑い

「そっか」

それだけ告げてそれ以上は何も追求してこなかった。

「今度澪にも見せてやるよ」

俺は澪の頭を撫でつつ告げると澪はクスッと笑う。

「あ、そうだ」

不意に綾が声をあげる。

「私軽音部には所属出来ないけど、料理部の差し入れを軽音部に持つて来ようと思っただけど、どうかな？」

綾の唐突な提案に俺たちは驚いた。

「綾……、頼むから俺を実験台にするのは止めてくれよ。」

俺の一言に綾は苦笑いしている。

「あれはーそのー……なんというかー……」

綾はそれ以上何も言えず苦笑いしたまま頬を掻いている。

「何があっただ？」

澪の質問に俺は思い出したくない記憶を蘇らせた。

「あれは中学2年の時だったかな、もう両親の居ない生活に慣れた頃だけど未だに料理だけは苦手だな、コンビニ弁当で済ます時期があっただ」

俺が思い出しつつ語ると綾は未だに苦笑いしている。

「そんな俺を見かねた綾が俺の家に来て料理を作ってくれたんだが、手料理と言う名の実験台にされたからな……」

俺は綾を横目で見て一つ溜め息を吐いた。

「だからあれはゴメンって謝ったじゃん！」

綾が俺を見ながら反論する。

「全く、出来もしないのにビーフストロガノフに挑戦して、結果謎のドロつとした牛肉の何かが出来ただけじゃねえか」

俺の一言に綾を含めた軽音部メンバーは苦笑いしている。

「あ、あれは参考にした本が悪かったんだよ！！」

綾の反論に俺は溜め息を付くばかりだった。

「苦しい言い訳だな……」

律がボソッと呟くと綾は律の方を向くと

「何か言ったかな？」

満面の笑みで律に迫りながら尋ねた。

「な、何でもないって」

律は両手で綾を抑えつつ答える。

後で聞いた話だが、律から見て綾の背後には般若と阿修羅が同時に出てきていたそうだ。

「そうだ、ふわふわは誰が歌うんだ？」

律が不意に部員全員に尋ねるが誰も答えない。

「じゃあ作詞した漣が歌うって事で」

誰も声を発しなかったため、律は漣を見て一言告げるが

「む、無理だよ!!」

漣は両手をブンブンと振りその一言を却下する。

「どうして？」

疑問に思った律が漣に尋ねると

「こんな恥ずかしい歌詞なんか歌えないよぉ!」

漣はそんな台詞を言うと両手で自分の顔を覆う。

流石の律もその答えには驚き

「おい作者!!」

と叫んだ、俺も同感だが。

「で、既存の曲3曲は翔君が歌うの？」

不意に山中教師が俺に尋ねてきた。

「一応俺が歌う予定ですよ？つと、そうだ」

俺は山中教師の質問に頷くとある事を思い出し漣に近付く。

「な、何だ？」

漣は後ろに後退りし始めるが、俺は漣の肩を掴み

「俺が歌う時のコーラスを頼みたいんだがいいか？」

クスッと笑い尋ねてみると、漣は考えが外れたのかポカンとしている。

「そ、それくらいならいいけど……」

漣の返答を聞くと俺は漣の肩から手を離す。

「さて、漣が書いてきたのはホント誰が歌うんだ？」

再び律が声をあげてみるが、誰一人として立候補する者は現れない。

が、一人だけ律に目を輝かせ視線を向ける人物が居た。

唯である、それに気付いた律は

「……唯歌ってみる？」

苦笑いしながら唯に尋ねてみる。

「で、でも私そんなに歌上手くないし、私なんかで勤まるかどうか……」

照れながら両手を頬に当て答えると

「じゃあムギ歌ってみる？」

律はあっさりとムギに尋ねてみる。

「ごめん、歌う、歌いたいです！」

律の行動に慌てた唯は律の肩を掴み告げる。

「じゃあちよつと歌ってみよう」

律は唯に告げると、唯はギターを構え

「らじゃー！」

そう答える唯だったが

唯が歌いだす、しかしギターを弾かない。

「唯、ギター弾かないと」

律が注意すると

「あ、そっかー」

と答える唯。

しかし今度はギターを弾くばかりで一向に歌わない。

）

「今度は歌忘れてるぞ」

苦笑いの澁から指摘されると、唯は床に手と膝をつけ

「ギター弾きながら一緒に歌えない……」

小さく呟いた。

その呟きを聞いた山中教師が唯の近くに歩み寄ると

「仕方ないなあ……」

と告げながらしゃがみこむ。

「先生が一週間付きっ切りで特訓してあげるわ!」

山中教師は唯の肩を掴むと唯と共に部室を後にした。

「大丈夫かな、唯のやつ……」

俺は一抹の不安を覚え溜め息を吐き出した。

唯が特訓を始めてから一週間が過ぎた。

俺たちは相変わらずお茶しながら時間を過ごしていた。

しかも、何故か綾までお茶を飲んでいる。

「みんな、待たせたわね！」

不意に扉を開け放ち入ってきたのは山中教師。

（大丈夫かな、唯……）

一週間前に呟いた不安が今もよぎっている。

「さあ、唯ちゃん！」

山中教師の後ろに待機していた唯が頷き一歩前に出る。

（

「おお、ギター上達してる！」

確かに洩の言う通り、ギターの腕はかなり上がった。

が、何故か俺は未だに不安が拭い去れなかった。

唯が歌い出すが、ガラガラ声の唯に皆はずっこけ、俺は不安が的中し溜め息を吐く。

「練習させすぎちゃった」

「声枯れちゃった」

山中教師と唯の言葉に俺はもう一度溜め息を吐く。

「これじゃ唯がボーカル無理じゃん……、どうするんだ？」

俺が律に向け尋ねると律は少し考え込み

「やっぱり歌詞作った漣が歌うしかないんじゃないか？」

律は漣を見ながら尋ねる。

（それ、最早漣にとっては死の宣告だよな……）

俺は言葉にこそしないが心の中で律にツッコんだ。

「へ？」

律の言葉を聞いた漣はそのまま頭から煙を上げ倒れた。

それから俺たちは30分ほど時間をかけ漣を復活させたが、漣の表情は落ち込んでいた。

部活も終わり、俺たちは下校していた。

いつもの別れ道の交差点に差し掛かり

「じゃ、また明日な」

信号が青に変わり俺は一言告げると先行していた綾たちを追うため歩き出そうとする。

が、誰かに服を引っ張られそれを阻止される。

俺は振り返ってみると、澪が俺の服の裾をしっかりと握り締めていた。

それに加え涙目＋上目遣いで俺を見上げているので、俺は心の中で溜め息を吐き

「先に帰ってていいぞ」

俺は綾たちに一言告げると、3人は頷き帰路に着いた。

3人を見送った後、澪に視線を向け

「で、何で澪は俺の服の裾を掴んでるんだ？」

俺の問いかけに澪は答えずしっかりと握ったまま離そうとはしなかった。

すると律はニヤニヤし始めると

「折角恋人になれたんだから、澪としてはもう少し一緒に居たいん

じゃないか？」

そんな事を告げると、漑は反論するかと思いきや

「……………うん……………」

意外にも律の言葉に頷いた。

俺は漑が律の言葉に頷く事に驚いた。

「そついう事なら全然構わないぞ？」

漑の頭を撫でつつ俺が答えると漑は先ほどよりは表情が若干明るくなる。

「そつだ力ケ」

不意に先行していた律が立ち止まり一言漏らす。

「何だ？」

俺は律の後姿を見ながら尋ねると、律は振り返り満面の笑みで

「私は絶対力ケの恋人の事は諦めないからな！」

そつ高らかに宣言した。

俺と漑は顔を見合わせると

「どうするんだ、翔？」

澪はクスッと笑い尋ねてくる。

俺は一つ考え始めると

「そうだな……、いつか一夫多妻制でも出来たらいいかな？」

俺も澪と同じくクスッと笑うと律に向け告げる。

「その言葉、絶対だからな！」

律もクスクス笑いつつ答えると、先に帰路に着いた。

その場に残された俺と澪は二人同時に歩き出し、澪の家へと向かった。

「それじゃあ、また明日な？」

澪の家に着き澪を告げると澪は家に入っていく。

途中、澪が駄々っ子になり抱き締めたりキスしたりはしたが、そこには触れないで欲しい。

「さて……」

ゆつくりと帰路に着こうとした俺だが、不意に魔力を帯びた風が頬を掠める。

「……行くか、用事を済ませに！」

鞆からいつもの服を取り出すと一瞬で着替え、背中に3対6枚の氷の羽根を作り出す。

ペットボトルの水を掌に流し氷の大鎌を作ると同時に、空間が歪みそこから無数のモンスターが現れる。

中にはドラゴン種最上位に君臨すると言われている、天使の羽根と悪魔の羽根を持つ絶望の象徴とされているドラゴン。

全長は40mに達する程巨大なアークフラウロスと呼ばれるドラゴンまで居た。

その数は最早軍勢と呼んでも差し支えない程大量であった。

「やれやれ、これは何時に終わるかわかんねえな……」

大鎌をギュッと握り締め、飛翔すると相手側も俺の存在に気付き吼える。

「ま、やりますか」

俺はクスッと笑うともう一度空を見上げ

「皆を守る為に！」

視線を相手の軍勢向けると一気に相手の軍勢に飛び込み戦いが始まった。

〈第19話〉（後書き）

エタ「あれえ、最後バトル物に変えるつもりは無かったんだけどなあ……」

翔「なら何故こうなった」

エタ「まあいいかなーと」

翔「おい作者、少しは考えろ」

エタ「あはは……、全長40mに達するドラゴンってどれぐらいかな」

翔「さあな、実物見たら首痛くなるのは確かだな」

エタ「さて次回は、学園祭本番です」

翔「恐らく長くなると思われるので、前編後編と分けるかもしれないません」

エタ・翔「それではまた次回」

〈第20話〉（前書き）

エタ「今年最後の投稿になります」

翔「今回はキリよく20話目です」

エタ「紅白も途中で抜け出してきた、水樹奈々様は見たけどな」

翔「はあ……、それでは今年応援してくださった皆様本当にありがとうございました、来年もよろしく願います!」

エタ「それでは第20話、どうぞ!」

〈第20話〉

〈翔サイド〉

ガチャ、と自宅の扉を開ける。

空は既に暗くなっており、時刻は午前3時。

真っ直ぐに自室に戻ると手早く着替える。

空間の歪みから現れた敵たちは総数3000に及び、7時間に及ぶ戦いを繰り広げた後1匹残さず殲滅した。

しかし油断していた俺もところどころではあるが傷を負わされた。

が、どれも掠り傷程度なので簡単な応急処置程度で済ませる。

俺はベッドに寝転ぶとそのまま眠りに付いた。

時は進み学園祭本番の9月30日。

俺は講堂の舞台袖に隠れつつ客席の様子を伺っていた。

「うわー、人がいっぱい居るよー……」

俺と同じく舞台袖から客席を見ていた唯が呟く。

「そりゃあな、学園祭の出し物って結構人気あるからな」

唯の呟きに俺はクスッと笑い答える。

「よし、今こそ練習の成果を見せる時だぜ！」

律の一言に俺と唯は頷くと

「ち、ちよつと律……」

漣の声が聞こえて来た。

俺たち3人が一斉に振り返ると、頭だけ出した漣が居た。

「何してんだ？こつち来いよ」

俺が手招きすると、俯きながらもこつちへ歩いてくる漣。

「どうしてこんな格好で平気なんだよ！！」

漣は不意に律に叫ぶ。

こんな格好というのは、俺を除いた軽音部のメンバーはゴスロリ服を身に纏っていた。

「うぶぶ、良く似合ってますわよ漣ちゅわん」

律はからかうように一言返す。

さて、何故こうなったのか少し時間を遡ってみよう。

時間を遡る事3時間前。

「んじゃ、これ講堂に運んどいて」

律は唯にアンプを手渡すが

「おわっ！」

危うく落としそうになる唯。

「あー、重いから気をつけてね」

その様子を見て苦笑いしながら律が告げる。

すると不意に唯はキョロキョロと辺りを見回し

「あれ？ 澪ちゃんは？」

と不在の澪の行方を尋ねた。

「あー、澪なら今別の事やってもらってる」

そう告げると更に付け足し

「今の澪は危なっかしくて機材運ばせられん！」

律の言葉に今日の溼の様子を思い出す。

（確かにあの状態じゃ危険だな……）

俺は苦笑いを浮かべると、自分の使うアンプと溼のアンプを両手に持つ。

「んじゃ行くぞ、唯」

クスッと笑い告げると俺は一足先に講堂へ向かうため、部屋を出る。

「あ、待ってカケちゃーん！」

すぐ後ろからフラフラしながらもアンプを運ぶ唯がついてくる。

ある程度歩くが、不意に唯は床にアンプを置き

「どうしてこんなにアンプって重いんだろう……」

腰に手を当て小さく呟く。

「さあな、ってあれはムギ……？」

俺たちより先に機材を運んでいたムギが戻ってくる。

その表情には汗など一つも浮かんでいなかった。

「……行くぞ、唯」

俺は小さく溜め息を吐くと唯に告げる。

「……うん」

唯は小さく頷くと再びアンプを持ち歩き出す。

10分かけて漸く講堂の裏口に辿り着き、アンプを置くと俺たちは部室に戻った。

「運び終わったー」

唯は部室の入り口に着くと、扉に背を預けズルズルと床に座り込んだ。

因みに俺もムギ同様汗一つかいていない。

「お疲れさん」

律の労いの言葉と同時にムギから

「お茶の準備が出来ましたよー」

と声がかかったので俺たちはいつもの定位置に座る事に。

こうして漣を抜いた4人でのティータイムが始まった。

「そっぴや律ちゃんって漣ちゃんの事良く知ってるよね?」

不意に唯が律に尋ねると

「そりゃ幼馴染だからなー」

そう答える律に

「いつからの幼馴染なんだ？」

俺が尋ねると

「幼稚園からずっと一緒だし……あれ？小学校だっけ？」

律の回答に俺は溜め息を吐き出し

「「幼馴染違うんかい」」

唯とハモリツツこむ。

「澪ちゃんって小さい頃から恥ずかしがり屋さんだったの？」

唯は紅茶を啜りながら尋ねると律は頷く。

「私が「うわー、きれいなかみだねー」って言ったり、「すごい、ひだりききなんだー、みんなみおちゃんすごいよー」って言ったら顔を真っ赤にして恥ずかしがってたもんない」

律はケラケラ笑いながら答えるが、俺は苦笑いするしかなかった。

「いやそれ、律ちゃんのせいじゃん！」

律の言葉を聞き唯はツツコんだ。

すると不意に部室の扉が開いた。

視線を扉の方に向けると、かなり落ち着いている様子の漣が戻って来た。

「結構落ち着いてるな？」

俺が漣に声をかけると

「そんないつまでも子供じゃないんだし」

漣はいつもの定位置に座ると、差し出された紅茶を手取るが

「いつまでも動揺してられないわよ」

と言いつつ、手に持ったカップとソーサーはガチャガチャと音を立て震えている。

（（（メツチャ動揺してるし……）））

俺たちは漣の様子を見て苦笑いを浮かべるしかなかった。

「そんな調子でどうするんだよ？」

律がかなり落ち込んでいる漣に尋ねると

「……………もうヤダ……………」

一言ポツリと漣が漏らすと律に駆け寄り

「律！私とボーカル代わって！」

律に吃驚なお願いをし始めた。

「んじゃドラムどうすんだよ？」

「私がやるから！」

律の質問にかなり真剣に答える漑、漑ってドラム出来たっけ？

「んじゃベースどうするんだよ！」

「それも私がやるから！」

だんだん漑の目は涙目になっっている。

「おー！やってもらおうか！逆に見てみたいわ！」

律の一言に俺もつい納得してしまった。

（ドラムとベースを同時に操る能力なんて、俺でさえ持ってたねーよ……）

俺は心で小さく呟くと再び部室の扉が開かれた。

「皆居るわね！」

眼鏡を光らせ現れたのは山中教師だった。

「どうしたんですか、先生？」

俺が尋ねると山中教師は不敵な笑みを浮かべる。

「不本意ながらも軽音部の顧問になったわけだし、何か出来る事は無いかなーと思って」

そこまで言うと山中教師は背に手を回すと

「衣装作って来ましたー！！」

衣装を手にとするとそれを前に差し出してくる。

（ノリノリじゃねえか、この教師……、しかもゴスロリだし……）

俺が溜め息を吐くと同時に

「いや……、気持ちはありがたいんだけどね先生……」

律はそこまで言うと視線を漣に向ける。

「ちょっとタイミング悪かったかな……」

漣を見ると、まるで石化したように衣装を見て真っ白になっている。

「そっかー……これはお気に召さなかったかー……」

若干落ち込んでる山中教師だが

「それじゃ私の昔の衣装はどう？」

そう言うとなんとも形容しがたい服を取り出す。

それを見た澪は涙目になりながら

「あー！やっぱりさっきの服着たくなつたー！」

と叫んだ。

そんな二人を見かねた律が

「ストップ！さわちゃん！」

仲裁に入った。

「こんな衣装、澪じゃなくても着るの恥ずかしいよ！」

「だ、だよな！」

正論を突きつける律だったが

「そうかなあ……、頑張つて作っただけどなあ……。それに……」

そこまで言うとは山中教師は唯とムギを見る。

「唯ちゃんたちは喜んで着てるわよ？」

唯たちを見るといつの間に着替えたのか、唯はスク水、ムギはナース服を着用している。

「お前らー！！！」

俺は溜め息を吐き出すと

「ちょ、唯にムギ、翔が居るのにどこで着替えたんだ!？」

漣がツッコむと俺は親指である一室を指すと漣は納得していた。

そして時は流れ今。

漣・律・唯・ムギはゴスロリを身に纏い、俺は山中教師曰く、用意する時間がなかったらしく持参していた服を着用する。

そろそろ冬に入るといふ事もあり、ロングコートも着用している。

しかし、未だに漣は緊張しているらしく、震えが止まらないらしい。

そんな漣を見た俺は

「悪い律、ちょっと出てくる」

ギターをギタースタンドに立てかけるとクスッと笑い漣の手を引き講堂を出る。

「ちょっ、翔?」

講堂を出ると講堂からは見えない位置に移動し漣の手を離すと

「まだ緊張してるのか？」

俺の言葉に小さく頷く。

漣の頷きを見て俺は無言で漣を抱き寄せる。

「え？」

よく状況がわかってないらしく、漣はキョトンとした表情を浮かべている。

「開始5分前まではこうしててやるから、その間に緊張をほぐせ」

俺の言葉に漣は頷くと俺の背に腕を回し抱き返す。

漣と抱き合い10分が過ぎ、もうすぐで俺たちの出番の時間になったので漣を解放すると

「一つお願いしてもいいか？」

と漣から声をかけられた。

「何だ？」

俺は首を傾げ尋ねると

「その……、き、キスしてくれないか……？」

漣は顔を真っ赤にし尋ねてきた。

その様子には俺はクスクス笑うと漣を抱き寄せる。

漣は意図を汲んだのか顔を上に向ける。

俺からキスをし、1分程で離れる。

「んじゃ、行きますか」

俺の言葉に漣は笑みを浮かべ大きく頷いた。

戻って来た俺たちはすぐさま楽器を手に取り幕の降りているステージ上へ向かった。

「よし、行くぞみんなー！」

戻って来た俺たちを見た律は一言掛け声をかける。

その掛け声には唯とムギは腕を挙げ「おー！」と応える。

俺はクスッと笑いそれに応え、漣もクスッと笑っていた。

因みに配置は

唯 俺 漣

律 紬

という並びである。

俺たちは和に合図し幕を上げてもらう。

果たして、桜高軽音部の初ライブはどのようなのか？

〈第20話〉（後書き）

エタ「いかがでしたでしょうか」

翔「今年最後の投稿の割りに、内容は短い気がするし、最後の終わりは何だよ」

エタ「気にするな！ともかく次話は明日に投稿出来ればと考えてます」

翔「今回は学祭ライブ本番です」

エタ「それでは皆様、よいお年を！」

〈第21話〉（前書き）

エタ「何とか1月1日に投稿が出来た」

翔「時間ギリギリだしな、後37分で1月2日だし」

エタ「うん、さて今回は学園祭後半、ライブの模様を描いてみました」

エタ「それでは今年最初の21話です、どうぞ！」

翔「久しぶりに薄視点から始まります」

エタ「65800PV&5700ユニーク突破しました、ありがとうございます！」

〈第21話〉

〈澗サイド〉

翔にキスをしてもらったおかげか、恥ずかしさはまだ残っているが緊張はもうしないほどほぐれた。

幕が上がきると目の前には沢山の観客が居た。

それだけで私はまた緊張してしまいそうになるが、翔は私を見てクスッと笑う。

その意味を理解した私はその笑みに笑みで返す。

翔は後ろを向き律に頷くと

「1・2・3・4！」

カウントが始まり1曲目が始まる。

〃

1曲目は初めて聴いた時はちょっと怖いイメージがあったけど、何度も聴いているうちにそのイメージは消えた。

翔は一度深呼吸をすると澄んだ声が講堂内に響く、初めて聴いたけど私はこの声に驚いた。

いつもの翔の声とは違う声色だったというのもあるが、何より楽し

そんな表情を見て私は驚きと嬉しさが隠せなかった。

〵〵

1曲目が終了する、律は続けざまにスティックを鳴らし2曲目に入る。

翔の家で教えてもらった曲の2曲目。

〵〵

翔は歌い終わり深く深呼吸をすると

「どうも、軽音部です」

突然MCを始めた。

これには流石に私たちも驚くが、翔の考えもあるのだろうと思い何も言わずにいた。

「連続で曲を演奏しましたが皆さん楽しんで頂けたでしょうか？」

翔が話す度に客席から歓声が沸き起こる。

「それではパートの紹介を始めます、ギターの平沢唯」

翔は唯を見てパート紹介を始め唯の名を呼ぶと、唯はギターを軽く弾く。

「続いてベースの秋山澪、4曲目のボーカルでもあるのでよろしく」

続いて私の名前を呼ばれると、私も唯と同じ様に軽くベースを弾く。

「キーボード、琴吹紬」

ムギは慣れた手つきでキーボードを弾いていく。

「ドラム、軽音部の部長、田井中律」

律もドラムを叩き、最後にシンバルを打ち鳴らす。

「そして、1曲目から3曲目までのボーカル兼ギターの俺、神藤翔の5人です」

翔は視線を客席に戻すとクスッと笑い自分の紹介を終える。

翔は私たちを目で見やると、小さく頷く。

私はその意味を理解するとその頷きに応える。

「それでは3曲目、聴いてください」

翔はそれだけを告げるとギターを構える。

くく

前奏が始まると翔は私を見て再びクスッと笑い頷く。

私もそれに頷きで返すと

翔に合わせるように私も負けじと声を張る。

翔は一度息を吸い込み再び歌い出す。

ワンコーラス歌うと、演奏しているにも関わらず客席から大歓声を浴びた。

私は不意に律の方を見ると、律はドラムを叩きつつ頷く。

（翔にこの曲を最後まで歌わせようって意味だな……）

心の中で呟くと私も律に頷き返し、翔を見ると翔と目が合う。

どうやらそれだけで意図を汲んだようで、続きを歌い出す。

後から聞いたけど、悲しい別れを歌った大人向きのR＆Bナンバーなんて演奏するとは夢にも思っていなかった。

私の作詞に曲をつけてくれるのはみんなだが、こんな曲を私は一度も思いついた事はなかった。

そして歌詞も、こんなにいい歌詞を思いつくなんて私ではほぼ不可能だと思う。

私はメルヘンな曲が多かったりする、故にこのような曲とはある意味無縁なのかも知れない。

私は視線を客席に向けると、この曲を聴いた大半の人はこの歌詞の意味を理解したらしく涙を流している人も居る。

演奏が終わるともう一度、講堂内全体から響き渡るほどの大歓声を受ける。翔はクスッと笑い

「ありがとう、それではちょっとボーカルの位置が変わるので少々お待ちください」

と告げると私を見て頷く。

私も小さく頷くと二人揃ってアンプの音量を下げコードを抜くと、翔とバトンタッチする。

もう私はこのライブで緊張はしないと思える。

ベースを構えると翔も準備が出来たらしく、私は律に合図を送る。

「1・2・3・4！」

律の合図と共に私たちは演奏を始める。

（ ）

翔のお陰か、いつも以上に緊張する事は無く練習と同じ様に演奏が出来る。

（ほんと、私も負けられないな）

心の中で小さく一言漏らすと私は苦笑を浮かべる。

（ ）

演奏が終わると私は汗をかきながらも

「みんなありがとう！」

マイク越しにそう伝えると、先ほどと同じ大歓声が返ってきた。

私たちは一礼しステージ上を降りようとする。

が、私は一步を踏み出すとコードに足が引っかかりそのままスローモーションのように倒れていった。

（翔サイド）

演奏を終えた俺たちは、ステージから降りようとしていた。

が、誰かがこける音が聞こえ俺は振り返ってみると、漣がこけてい

た。

どうやら足にコードが引っかかったらしい、が、今の漚の状態を見た俺は着ていたロングコートをすぐさま脱ぎ漚に投げる。

しかし、今の漚を見た観客は啞然としていたが、漸く事の重大さに気付いたのか誰かが漚にロングコートが届く前にカメラで撮影する音が聞こえた。

「律、漚を頼んだ」

俺はそれだけを告げた。今撮影した人物を探し始めた。

ギターは唯に任せておいたので安心している。

「いやあああああああああ！……！」

本日最大の漚の大絶叫が講堂内に響き渡るが、俺はお構いなしに探し続けると一人の男を見つけた。

明らかにここから脱出しようとしているどこかの高校の生徒らしい。

その男は席を立ち退室しようとするところに俺は声を低くし

「ちょーっと待ってもらおうか？」

黒い笑みを浮かべ男の肩を掴むと、男は凍りついたように背筋を伸ばし恐る恐る振り返ってくる。

「撮影したの、君だよな？」

黒い笑みを浮かべたまま尋ねると

「すみませんでしたあ!!!!!!」

超光速で土下座しカメラを差し出してきた。

俺はカメラを受け取ると中に入っているメモリーカードと、本体に記録されていた写真全てを物理的に消去した。
はかい

その行動に男は涙を浮かべていたが、俺の威圧の前では無意味だと悟ったのか頭を垂れている。

俺はミッションコンプリートすると、漣たちの元へと走った。

講堂裏に着くと漣は真っ白になったまま固まってしまったようだ。

「カケ、どうするよ?」

律がコートを俺に手渡しながら困り果てたように尋ねてくる。

俺は腕を組み考え込むと、一つの妙案を思いつき

「悪い律、唯とムギを連れて先に部室に戻っててくれ、後俺と漣の楽器も頼む」

俺が告げると律は頷き唯とムギは律と共に部室に向かった。

「もう……お嫁にいけない……」

漣はつわ言のように小さく呟いている。

はあ、と一つ溜め息を吐くと漣の隣に座り込み

「漣、大丈夫か？」

と尋ねると漣は首を左右に振る。

「もう……お嫁にいけない……」

まだ漣は立ち直れないらしく、小さく呟き続けている。

俺はその状態を見て、漣の耳元でとある一言囁いてみた。

するとその一言を聞いた漣は顔を真っ赤にし

「それ、本当か……？」

上目遣いで尋ねてきた。

小さく頷くと漣は俺に抱き付いてきたが、時間も無いので

「漣、また今度うちに来たらいくらでも抱きつかせてやるから、今は戻ろう？」

そう告げると漣はすつと俺から離れ

「今の言葉、約束だからな！」

笑みを浮かべた漣は一言言つと部室へと向かった。

え？とある一言が何なのかって？

それは秘密だ、俺自身言うのも恥ずかしかったからな。

俺は制服に着替えると少しばかり時間を潰してから部室へと戻った。

く第21話く（後書き）

エタ「うん、原作にもあった事故が起きたね」

翔「補足をする、俺がロングコートを投げて、漣にかかる直前にカメラで写真撮影されたんだよな」

エタ「そうなるね、ギリギリで撮ってるから恐らくぶれてると思うけど」

翔「まあ物理的に破壊したしいいか」

エタ「あはは……」

翔「因みに見られた漣を一瞬で立ち直らせた俺の一言って何だ？」

エタ「秘密」

翔「おい!？」

エタ「はあ、仕方ない教えよう」

翔「最初から言えよと」

エタ「翔は漣にこう言いました。「俺が嫁に貰ってやるから落ち込むな」と」

翔「……………」

エタ「どうした？」

翔「いや、突拍子も無いからどう反応していいか……」

エタ「いいじゃん、今でもラヴラヴなんだからさ」

翔「ぐう、否定出来ない……」

エタ「それでは読者の皆様、本年も「けいおん！」春風と共に響く音楽」をよろしく願います！」

翔「それではまた次回、お会いしましょう！」

〈第22話〉（前書き）

エタ「お待たせしました！（？）22話完成したので投稿します！」

翔「つか、一週間もかかってんじゃねえか……」

エタ「ソレについては正直弁解出来ません、申し訳ありませんでした！」

翔「まあ、リアル風邪気味っぱいんだから更新速度遅れるかもな」

エタ「というより、喉が痛い・咳き込む・鼻炎が酷いのトリプルパンチ」

翔「熱は無いのか？」

エタ「熱は不思議な事に無いんだよ、むしろ平熱？」

翔「そうかい……」

エタ「そういえばこの前、カラスこと文が来てミナギルンXXつてのを配達してくれたな」

翔「大丈夫なのかそれ……？」

エタ「レイン君製作らしいからね……、でも折角配達してくれたんだ、服用してみよう」グビッ

翔「ちょ、一気飲みかよ!？」

エタ「……」

翔「えーと……、作者がどうなったかは後書きにて、では第22話ですどうぞ！」

く第22話く

く翔サイドく

学祭ライブが終わり、時は流れ今は12月15日。

俺たちはいつものように部室でのんびりとしていた。

「クリスマス会のチラシ作ってたよー」

律の声に俺たちは頭に？マークを並べた。

「……あれ？クリスマス会ってやる事になってたの？」

漑はチラシを見たまま一言漏らす。

「私も聞いてませんでしたけど……」

ムギも困ったような表情で呟く。

「誰にも言っていないからね」

律改めデコ部長の一言に俺は溜め息を吐いた。

「言えよ」

俺は漑のツツコミを聞き流しつつ外を見る。

空は青空が広がって……おらず、雲が辺り一面に広がっている。

今にでも雪が降るんじゃないか、と言うくらいに広がった雲を見て俺はもう一度溜め息を吐いた。

「翔も来るんだろ？」

不意に漣が俺に尋ねてきた。

「ん、あー……、行けたら、って事にしておいてくれ」

俺は曖昧に答えを返すと

「それじゃダメだ！カケも強制参加だ！そして会費を忘れるなよ！」

デコ部長が反論してきた。

「会費なんか、何に使うんだよ……」

俺の呟きにデコ部長は答えなかった。

そんな会話をしていると部室の扉が開かれた。

俺たちは視線を向けると、そこには走ってきたのか綾が肩で荒い息を繰り返しながら立っていた。

「綾？どうした」

俺はゆっくりと立ち上がり綾の元に行き尋ねると

「翔、さっき聞いた噂なんだけど、祭ちゃんそっくりな人を見たっ

て！」

呼吸を整え発した綾の言葉に俺を除いた軽音部の全員は驚いている。
が、俺はそんな事はありませんと考えていたので

「綾、それは他人の空似だ、死んだ人間は生き返らない、もし生き返ったらそれは奇跡だ」

綾の肩に手を置きそう告げると

「で、でも……」

先ほどの勢いは無くなったが、それでも諦めきれないと言った表情を浮かべている。

「もし仮に生き返ったとしたら、祭の事だ、真っ先に俺のところに来ると思うけど？」

祭の性格を知っているが故に俺は綾に言葉を紡ぐと、綾はそれに納得したのか

「そう……だね、でもそういう噂もあったって事は覚えておいてね？」

綾の言葉に俺は頷いた。

しかし、この時の俺はまだ知らなかった、俺の考えを遥かに超越した事が起きている事に。

「にしても寒いねー……、翔のロングコート借りるよ」

綾は一言告げて俺のコートを剥ぎ取るうとするが

「させるかよ」

ヒラリと俺はバックステップでそれを回避する。

綾は頬を膨らませぶうぶう言っているが無視し時間を見る。

午後4時50分。

「そろそろ帰るか」

俺の一言に全員が頷き帰宅準備を始める。

学校を出た俺たちはいつもの道を歩いていく。

「雪降りそうだねー」

俺たちと共に帰宅中の綾が空を見上げて一言言つと

「雪が降るのはまだいいけど、暑いのと寒すぎるのだけは嫌だなあ

……」

唯の返答に俺は苦笑した。

5人の吐く息は白く、冬が到来している事を示している。

俺にとっては最高の季節である。

2つ理由があるが、1つ目の理由として、ルリエルの力が春・夏・秋のどれよりも飛躍的に能力が上がるためである。

そしてもう一つの理由は、毎年俺の誕生日の日には必ずある場所に向かう。

そのある場所とは……

「翔」

不意に声をかけられ俺は意識を声がした方へ向ける。

「何だ？」

どうやら声をかけてきたのは漣だった。

「翔、クリスマス会のプレゼントはどうするんだ？」

漣の質問に俺は軽く考え込むと

「無難な物にしておくよ、中身は秘密だけど。あ、律」

俺は漣の質問に答えると律に声をかける。

「んあ？」

相変わらず間の抜けた声で返事をする律に苦笑しながらも

「クリスマス会なんだが、先に始めててくれ、俺は朝から行かなき

やならない場所があるから遅れて行く」

俺の言葉に律は疑問を抱いているが、綾はそれだけで理由がわかり

「そうだね、私の分までよろしく」

綾が告げると俺は溜め息を吐き

「たまにはお前も行けよ」

ジト目で綾を睨みつつ答えると綾はそっぽを向く。

「んー……、まあいいけどあまり遅くなりすぎるなよ？」

律は渋々了承すると一言告げてきた。

「なるべく早く行くようにはする」

俺が答えるといつの間にかいつもの別れ道に辿り着いていた。

「それじゃまたね」

その言葉を合図に漣と律は右手を挙げそれに応えた。

信号が変わり帰路に着きながら空を見上げる。

（もう10年か……、早いもんだな）

小さく笑うと鞆とギターを持ち直し家路をゆっくりと歩き出す。

再び時は流れ12月25日、俺の誕生日であり、クリスマス会の日である。

綾から聞いた話だが、前日は俺の誕生日だったのだが、クリスマス会と併用して祝おうと言う事になったらしい。

「さて、行くか」

いつもの私服に着替えると俺は鞆を持ち家を出た。

時刻は午前8時半。

鞆の中には今日のクリスマス会用のプレゼント等が入っている。

程なく歩き俺は電車に乗り込んだ。

途中、乗り換えを繰り返し電車で揺られ1時間半、目的の場所の入り口に辿り着く。

目の前に一つの山が聳え立っている。

そう、この場所は10年前の飛行機墜落事故の現場でもあり、弔いの場所でもある。

近くの花屋で花を2つ購入し、山登りが始まる。

頂上までは2時間かかり、途中には休憩出来る小屋もある。

ゆっくりと歩を進め辺りの景色を見渡しながら山を登ってゆく。

「10年でここまで成長したとはな……」

俺は一本の大木を見て一言漏らす。

事故当時、この大木が辺りの木々よりも一番酷く傷を負っていた。

しかし、10年という歳月をかけ大木は元通りとまではいかないが、ゆっくりと成長を遂げていた。

俺はその大木で少し休憩を取ると再び頂上目指し歩き出す。

1時間かけ頂上に辿り着くと、眼前には慰霊碑が2つ置かれている。

1つ目の慰霊碑の前に向かうと俺は腰を下ろし花を手向ける。

俺はしばらく無言を貫き

「それじゃ、また来るよ」

それだけ告げると次の慰霊碑へと向かう。

この慰霊碑には小学生から高校生、果てまでは生まれたばかりの子供までの人が亡くなった際に書かれた慰霊碑だった。

もちろん祭の名前はこちらに書かれている。

「よう祭、今年も来たぜ」

慰霊碑の前に祭が大好きだった花を置きつつ俺は一言発する。

それから暫く、俺はこれまでの近況を独り言のように話した。

30分ほどその場で言葉を紡いだ俺はゆっくりと立ち上がり

「そんじやな、また来年来るとするよ」

クスッと笑い一言告げると慰霊碑に背を向け下山していく。

再び電車で揺られ帰宅した俺は少しばかり眠りについた。

く
漫
サ
イ
ド
く

「やつほー唯、来たよー」

私・律・ムギは唯の家に着くと律が玄関口から声をかける。

翔はまだ来ていないらしい。

「皆さんいらつしゃーい」

奥のリビングからエプロン姿の憂ちゃんが現れた。

「和さんは少し遅れるそうです」

憂ちゃんの言葉に私たちは頷いた。

というのも、15日の帰り道で和に会い律が和をクリスマス会に誘っていたのである。

「ところで唯は？」

律が憂ちゃんに尋ねると、2階から唯が顔を出す。

「何してんの？」

どうやら唯は飾りつけを作り出したが、止まらなくなったのだろう。

私は唯を見て苦笑いしてしまった。

憂ちゃんに案内され私たちはリビングに向かうと、テーブルの上には無数の料理が鎮座していた。

「あれ？カケは？」

律が辺りを見回し憂ちゃんに尋ねる。

私も律同様辺りを見るがやはり翔の姿は無い。

「まだ来てませんね」

憂ちゃんは首を左右に振り来ていないと告げる。

「そういえば、朝から出かけるところがあるって言ってたっけ」

律はふと思い出したように一言呟くと

「んじゃ先に始めようぜ」

律の一言によりクリスマス会が始まった。

『メリークリスマス！』

グラスを軽くぶつけ乾杯する音が響く。

因みに今居るのは私・律・唯・憂ちゃん・ムギ・綾である。

「いやー、今年も終わっちゃうねー」

律が一言発すると

「やーねえ、親父くさい」

誰かの声が聞こえた。

私たちはその声がした方を向くと料理を食べているさわ子先生が居た。

（つてあれ……、いつの間に？）

「おわー！さわちゃん！？」

律は物凄いスピードで後退りしている。

「全く、顧問を呼ばないなんてどういう事？」

さわ子先生は少し怒ったような表情で尋ねてくる。

「いやー、忘れてたわけじゃないんですけど……」

律はその言葉に反論すると

「先生は彼氏と予定があると思って呼びませんでした」

唯の天然発言には私も流石に驚いた。

「そんな事言うのはこの口かあああああ！？」

さわ子先生は泣きながら唯の頬を引っ張っている。

（（天然は凄い……））

私と律の思いが一つになった。

するとさわ子先生は

「罰として唯ちゃんはこれに着替えなさい」

どこからともなくミニスカサンの服を取り出し唯に突きつける。

「何でそんなもの持ってるんですか」

唯は苦笑いしながら反論するも、それを手に別室に向かった。

数分後、着替え終わった唯が現れ

「ど、どうですか？」

ポーズを取りながら尋ねるが

「……ダメね、唯ちゃんには恥じらいが足りないわ」

そう告げると唯は再び別室に戻りミニスカサンタ服をさわ子先生に渡す。

「ここはやっぱり……」

服を手にしたさわ子先生の目が私を捉える、というか既に狩人の目だった。

私はそれから逃れようと抵抗するが、上着を剥ぎ取られてしまう。

私とさわ子先生のバトルの中、不意に扉が開き

「遅くなりましたー」

和がやってくるが、私たちを見た和は固まり

「すみません、間違えました……」

扉を閉め静かに退室していく。

「間違つてないよ！」

私は手を伸ばし助けを求めるが、既に和は退室した後だったので抵抗も無意味になってしまう。

それから数分後、漸く私とさわ子先生のバトルが終わり、服を奪い返し着替えると皆の元へ戻る。

結局私はミニスカサントラ服を着せられてしまった。

一言「もうお嫁にいけない……」 呟こうとしたが、そこでふとライブ後の事を思い出す。

ライブ後のパンチラ事件の後、私を立ち直らせる為に翔は私に一言告げてくれた。

その一言とは「俺が濡を嫁にもらってやるから落ち込むな」だった。

翔の言葉を聞いた時、私は嬉しくて泣きそうになった。

（だから、もうこの言葉を呟いちゃダメだな……）

心の中で納得すると、ふと辺りを見回し

「そういえば翔遅いな」

未だに恋人の姿が見えず時計を見ながら呟く。

皆も連絡は無いらしく首を左右に振る。

私は携帯を取り出しコールするが、電話に出る気配もなかった。

「はあ、ちよつと翔のところ行ってみるよ」

コートを羽織り私は立ち上がり告げると

「ああ、頼んだぞ遷」

律の一言に私はクスッと笑い応えると唯の家を出る。

「寒いな……」

冬の風は冷たく、家の中に居た時は暖かかった手もすぐに冷えてしまふ。

私は両手に息を吐き手を擦り合わせながら翔の家に向かう。

唯の家から3分で着く距離だったため、すぐ様私はチャイムを鳴らす。

が、返事は無く誰も出てくる気配はなかった。

「どうしよう……」

玄関前に立ったまま一言呟くと、不意に扉が開いた。

私は吃驚して後退りすると

『零さんね?』

頭の中に声が響いた。

「この声……ルリエルさん?」

驚いたまま硬直しそうになった私だが、声に聞き覚えがあり尋ね返す。

『ええ、そうよ。寒いから中に入るといいわ』

うつすらとルリエルさんの姿が見えると、私は少し躊躇しながらも中に入る。

『翔の事で来たんでしょう?』

私の目的を知ってか、ルリエルさんが尋ねてきた。

「ええ、翔は今どこに居ますか?」

ルリエルさんの質問に私は頷くと

『翔なら今自室で寝てるわ、何度が起こしてみたんだけど効果が無

くて……』

ルリエルさんの言葉に私は苦笑いを浮かべ、ルリエルさんは溜め息をついていた。

私は翔の部屋に直行すると、扉をそつと開く。

部屋の電気をつけると翔の寝顔が見えた。

翔の寝顔を見て私はクスクス笑うと

「翔、起きて」

翔の身体を揺すり起こしにかかる。

何度か揺ると翔の目が徐々に開き始める。

「……漣？」

翔の一言に私は笑みを浮かべ頷く。

が、すぐに私は怒ったような表情に切り替えると

「翔、皆待つてるんだぞ？」

一言告げると翔は眠そうに目を擦りながら携帯を開き時計を見る。

「………やっべ、寝過ごしてるし」

漸く事の重大さに気付いた翔はベッドから飛び起きた。

翔は一直線にクローゼットに仕舞われていた真っ赤なコートを取り出す。

長さは以前のロングコートと同じ長さで、色や装飾が違っただけのようだ。

そこで私はふと

「翔？」

声をかけてみた。

「何だ？」

翔はコートを着用し、寝癖などを直しながら応える。

「翔のロングコート、一着でいいから余ってたなら私にukれないか？」

私自身も無茶なお願いをしたと思っていたが

「んー……、これでいいか？」

翔はクローゼットから一着のロングコートを私に手渡してきた。

色は薄い緑色のコートで、装飾などは入っていない。

「それは俺が最初に見つけたロングコートで、一番愛用してたコートだ」

最近はもう着る事が無くなったがな、と付け足し翔は笑っていた。

「いいのか？これ……」

私は翔の一番愛用していたコートを貰うとなり、少し罪悪感が沸くが

「いいんだよ、俺が持つててもしょうがねえし、それなら着てくれる人に渡した方がいいだろ？」

クスッと笑い翔は答える。

私はギュッとコートを抱き締めると、ある妙案を思いついた。

「翔」

未だ寝癖を直している翔に声をかけた。

「ん、今度はどうした？」

翔は振り返り私の方を向く。

「メリークリスマス」

私はクスッと笑い翔に近付きキスをする。

流石の翔もこれには吃驚したようだったが、すぐにクスッと笑いそれに応える。

1分もしないうちに私から離れ

「皆を待たせるのも悪いからな」

笑みを浮かべ告げる。

「そうだな。っと、そうだ」

頷く翔は何かを思い出したように机の引き出しを開ける。

気になった私は後ろから覗き込むと一通の手紙を取り出す。

「それ、もしかして……」

手紙を見た私には心当たりがあった。

「そう、祭の最初で最後の手紙だ」

翔は頷くと私に手紙を差し出してくる。

私は手紙を受け取ると封を開け手紙をじっくりと読もうとするが、私の携帯に着信が入る。

手紙を翔に返すと、私は携帯を取り出し電話に出る。

「あ、漣、カケは？」

律からの着信だった。

「ああ、今からそっちに行くよ」

私の返答に律は「そっか、早く来いよ」と短く返し電話を切った。

「手紙ならいつでも読めるしさ、早く行こうぜ」

翔は手紙を引き出しに戻すと鞆の中からプレゼント交換用のプレゼントを取り出す。

「そうだな、行こうか」

私は翔から貰ったロングコートを着ると、自然と翔の手を引き共に玄關に向かう。

外に出ると再び冷たい風が私と翔を撫でるが、何故かそれ程寒さが気にならなかった。

翔はまだ眠いのか小さく欠伸をしながら共に歩いている。

私はクスッと笑うと翔はそれに気付き苦笑いを浮かべている。

程なくして唯の家に辿り着き、チャイムを鳴らすと憂ちゃんが出迎えてくれた。

私は一足先に皆の待つリビングへと戻っていった。

く翔サイドく

「悪い、寝てた」

リビングに案内され、中に入り一言謝罪する。

「まったく、何してんだよカケ」

律はやれやれと溜め息を吐きながら一言告げてくる。

「時間もまだあったし、仮眠するつもりが普通に深い眠りについてた」

ロングコートを脱ぐと憂ちゃんがコートを預かってくれた。

「んじゃ、カケも来た事だしプレゼント交換でもするか」

俺は適当な席に座り、並んでいた料理をつまんでいると律の一言により、プレゼント交換が始まる。

「あ……、でも先生は……？」

唯が山中教師に尋ねると、ゴソゴソと鞆を漁り

「ちゃんと用意してきたわ」

用意周到な山中教師に唯と律は褒めていたが

「……本当は今日、彼氏に渡すつもりのも物だったんだけど……」

その一言が加わり空気が重くなるのを感じた。

「それじゃ始めるわよー!」

若干やけくそ気味な山中教師の言葉によりプレゼント交換が始まる。

俺のプレゼントはどうやら漑に渡ったらしい。

唯は憂ちゃんと、憂ちゃんは唯と交換したらしい。

「私のは漑ちゃんのね」

不意に山中教師の声が聞こえそちらを向く。

それに気付いた漑は

「あ！先生それは……っ!」

必死に止めようとするが既に遅く、山中教師が箱を開けると

びよーん。

漑のプレゼントはビックリ箱のようだった。

「……あはははははは！！最高のクリスマスだわ！」

頭の螺子が何個か飛んだんじゃないかと言うような笑い声と共に、山中教師の悲痛な言葉が耳に残った。

「うわー！先生が壊れたー！」

律の一言に俺は苦笑いすると漣の方を向き

「何であれ……？」

親指でビックリ箱を指しながら尋ねると

「うう……、あれは律を狙ってやったんだ……」

漣の言葉に俺は苦笑いすると

「何も仕返ししなくてもいいだろ……」

俺の呟きを聞いた漣は

「やられっぱなしは悔しいし……」

こちらも小声ながらも呟く。

負けず嫌いな性格も相まって、いつか仕返しをと目論んだのが本音だったのだが、失敗に終わったらしい。

「それにしても、いいネックレスだな」

不意に漣は俺のプレゼントであるネックレスを首に着けながら告げる。

「気に入ったのなら良かった」

俺はクスッと笑っていると、袋の中から一つの指輪が落ちた。

漣はそれを拾い上げると

「翔、これもプレゼントなのか？」

俺を見て尋ねてきた。

「ああ、良かったらつけてみな」

俺は頷き答えると漣は左手の薬指に指輪をはめる。

「って、そこなのか？」

漣の行動に俺はついツツコンでしまうと

「ダメか……？」

しょんぼりとしながらも漣が尋ねるので

「まあ……別にいいけどさ」

俺は苦笑いを浮かべ答えるしか出来なかった。

「さて、クリスマス会もそろそろお開きにするか」

不意に律の言葉が聞こえると、皆頷いた。

携帯を取り出し時間を確認すると、午後１１時３０分を回っていた。

「零に律、確かバスだったろ？」

俺の言葉に二人は頷くと

「そろそろやばいからな……、ダッシュして間に合うかどうか」

律が携帯を見て一言漏らす。

「ムギはまた前同様、迎えが来るんだろ？」

俺は後ろに居るムギに向き直り尋ねると

「ええ、もうそろそろ来る頃よ」

笑みを浮かべ答える。

俺はその答えを聞くとコートを取り着ると不意に

「翔さん」

憂ちゃんから声をかけられた。

「ん？」

俺はクルツと回り憂ちゃんに向き直ると

「翔さん、今日あまり食べれなかったですよ？ですからこれ、タッパに入れておきましたので家に帰って食べてください」

憂ちゃんから本日の料理の詰め合わせを差し出された。

「ああ、ありがとう。タッパは近いうちに返しに来るよ」

クスッと笑い受け取るとビニール袋を貰いその中に入れ肩に担ぐ。

「……「お邪魔しました」……」

俺・漑・律・ムギ・山中教師は声を揃え一言告げ各々の家へ向かう。

山中教師は車で帰宅し、ムギは迎えのリムジンが来ていた。

「じゃ、カケまたな！行くぞ漑！」

律が慌てたように一言告げ漑を促すが

「ちょい待ち」

俺が二人を引き止める。

「なんだよ、やばいんだって」

律は本気で焦ってるのか時間を気にしている。

「……今日はうちに泊まってけ」

俺の提案に二人の表情からは焦りが消えるが、意味がわからずポカンとしている。

「いいのか？」

漣が尋ねてくるので俺は頷き応える。

「家に連絡は後でしておきな、とりあえず行くぞ」

それだけを告げると俺は先に自宅へ向かい歩き出す。

俺の後ろを二人はテコテコと付いて来る。

鍵を開け自宅に入るとまずはリビングに向かう。

「「お邪魔します」」

二人はそつと家にあがりながら一言告げる。

俺はテーブルに憂ちゃんから貰った料理を置くと踵を返し2階へと上がる。

「俺の部屋の向かい側が漣、俺の部屋の隣が律な」

予め用意しておいたため、二人に部屋割りを告げると二人は割り当てられた部屋へと入って行った。

二人を見送り俺も部屋に戻りコートをクローゼットの中に戻す。

「ふわ……、眠っ……」

誰も見ていないため盛大に欠伸をすると、不意にやってきた睡魔に俺は負けベッドに身を投じるとすぐさま眠りについた。

く第22話く（後書き）

翔「おーい作者、生きてるか？」

エタ「……」

翔「ダメだ、返事が無い、ただの屍のようd」

エタ「ふう」

翔「生き返った!？」

エタ「いや、これ正直無茶苦茶効く」

翔「マジかよ!？」

エタ「ただ、効力が強すぎて意識が飛びそうになる」

翔「そ、そうかい……」

エタ「後は夜中になると無駄に力が漲る」

翔「あれ？おかしくないか？」

エタ「そして何故か身体が軽くなった気がする」

翔「……?」

エタ「下に俺の姿が見えるけど気のせいだよな？」

翔「待て待て待て待て！戻って来い！死にかけてるぞ！」

エタ「はっ！危ない危ない……」

翔「つたく、とりあえずどうなんだ？」

エタ「うん、とりあえずは大丈夫そうかな？」

翔「まあ風邪は引き始めに治すのが大事だからな、少しは療養しろよ」

エタ「わかってる」

翔「次回はいつ投稿予定だ？」

エタ「とりあえず一週間ください……」

翔「との事です」

エタ「早ければ前と同じ投稿速度に戻るとは思いますが、現状どう転ぶかわからないので時間をくださいorz」

翔「はあ……」

エタ「それから、74361PV&6375ユニーク突破致しました、本当にありがとうございます！」

翔「これからもこんな駄文ですが宜しければお付き合いをお願いします」

エタ「それではまた次回！」

〈第23話〉（前書き）

エタ「最近翔サイドばかり書いてるような気がする作者です」

翔「最近作者の書くスピードの遅さに若干の苛立ちを隠せない翔です」

綾「たまには私サイドの話も書いて欲しい綾です」

翔「まあ今回は1週間以内に書き上げたな」

エタ「今24話書いてる」

綾「24話は基本的に原作沿いだよね？」

エタ「ああ、25話が翔たちが2年生になる話にしたいから、24話は短くなると思う」

翔「まあ……、俺は何も言わない」

エタ「あはは……、25話にはちょっとした出来事がありますので首を長くしてお待ちください」

翔「こいつは……、また俺と澪絡みか？」

エタ「いや、25話では翔×澪絡みじゃないよ」

翔「へえ、そうなのか」

エタ「ま、それは追々話すとして……23話です、どうぞ」

綾「ところで作者さん、私サイドの話は書いてくれないの？」

エタ「番外編で書くか」

綾「本編で書いてよ!!」

〈第23話〉

〈翔サイド〉

クリスマス会から10日後の1月4日、軽音部のメンバー+綾で初詣に行く事になっていた。

「ねみい……」

俺は一言呟くと皆との待ち合わせ場所に向かっていった。

「おっはよー」

先に来ていた綾と唯が手を振りながら俺を呼ぶ。

「ういっす」

右手を挙げ軽く挨拶を交わしていると

「おーい、カケ、綾、唯ー」

漑・律・ムギが来た。

「あ、みんな。明けましておめで……とう」

唯が言葉を紡ぐが漑の服装を見て固まってしまった。

皆は私服なのに、漑だけ晴れ着を着ていた。

「新年から気合入ってるね」

綾が茶化すように漑に一言告げると

「ち、違っんだ!」

漑は両手を左右に振り反論する。

話を聞くと、前日に律から電話で「明日晴れ着着てくんの?」と尋ねられ、漑は律も着るのだと勘違いして着てきたという事らしい。

「私は着てくんの?って聞いたただけだぜ」

律の言葉に漑はショックを受けると二人で言い合いが始まる。

「漑ちゃんのポジションは相変わらずかー」

唯の一言に俺も妙に納得してしまった。

「着替えに帰る!」

漑が若干ふて腐れたような表情を浮かべ、来た道をUターンしようとする。

「まあまあ」

が、それを律が引き止めると

「そのままでもいいじゃん、可愛いよ?」

唯が追撃する。

「ああ、確かに可愛いな。そう思うだろムギ？」

俺も唯同様追撃しふとムギに視線を送ると、唯と澪を見て恍惚の表情を浮かべていた。

（まさか……百合属性？）

俺は心の中で疑問を呟くと苦笑いしていた。

「それにしてもムギは絶対晴れ着着てくると思ったんだけどなあ」

澪がムギを見ながら一言漏らすと

「私も着てこようと思ったんだけど……」

そこで一度言葉を区切り、再び言葉を紡ぐ。

「三が日中ずっと晴れ着着てたから、普段着着るのこれが今年初めてなの」

ムギの言葉を聞いた澪と律は揃ってお辞儀をし

「「ご苦労様です」」

と労った。

労いの言葉を貰ったムギは唯を見て

「唯ちゃんはどうなお正月だった？」

不意に質問すると、漣が

「唯はだらだら過ごしてそうだな」

漣の言葉に律が反応を示し

「一日中こたつの中とかな」

律は笑いながら告げるが

「まあそれは無いだろうけど……」

漣が否定しようとするが

「何で知ってるの？覗き？」

唯が肯定の言葉を零すと同時に俺は溜め息を吐いていた。

そんな話をしながらも俺たちは近くの神社へと向かう。

「唯、この正月で太ったんじゃないか？」

不意に律が尋ねるが、俺が聞くのは忍びないので歩調を速め少し離れる事にした。

「はあ……」

空を見上げ一つ溜め息を吐くと歩きながら眠気を覚ますように伸び

をする。

神社まで時間にしておよそ15分、ちょっと距離はあるなと感じていたが特に気にしない事にした。

「神社到着ー」

神社に到着すると、唯が一言漏らしているが何かを見つけた律が

「あれ、さわちゃんじゃね？」

後ろ姿だが、真剣にお祈りを続けている山中教師の姿があった。

俺たちが後ろ姿をジッと見守り10分が経過するが、未だにお祈りを続けている。

（（お祈りなげえ……））

漣と律の心の声が不意に聞こえてきそうだった。

漸く山中教師のお祈りが終わると、次はおみくじを引きに行く。

その表情は横からチラッと見た程度だが、嬉々とした表情を浮かべている。

が、おみくじを引き結果を見た山中教師は素の顔を露にすると舌打ちをし、もう一度おみくじを引いている。

「もう行こうぜ……」

俺は小さく呟くと皆一斉に頷きお賽銭箱の前に向かう。

少しの静寂の後

「みんな何お願いした？」

律が尋ねてきた。

「私は家内安全を」

「体重減りますように……」

「美味しいものが沢山食べられますように！」

上からムギ・漑・唯である。

「みんな軽音部の事祈ろうぜ……、つか力ケと綾は何お願いしたんだよ？」

律が溜め息を吐くと俺と綾に話のネタを振ってきた。

「俺はいつもと変わらない毎日が過ごせますように、ってな」

「私はこれからも面白い事が起きますようにって」

俺・綾の順に答えると律は曖昧な表情を浮かべていた。

結局、漑・律・ムギ・唯の4人で再度お願いをやり直す事に。

「私は部員増えますようにってお願いしたぜ」

「演奏が上手くなりますようにってお願いした」

律・澪が告げると

「唯は？」

律が唯の方を向き尋ねると、唯は恍惚の表情を浮かべ

「ムギちゃんの持ってくるケーキをもっとたくさん食べられますように」

唯の答えに俺は溜め息を吐くと、律が拳骨を一つ落とす。

「ギターが上手くなりますように……」

3度目にして唯のまともなお願いに律も頷いた。

すると律は何を思ったか

「ちょっとここで待っててー」

一言残すと人ごみの中に消えた。

「何だ？」

とりあえず俺たちは律が戻ってくるのを待っていると

「おみくじ引いてきたよー」

律の手に人数分のおみくじを持ち戻って来た。

「何で勝手に引いてくるんだよ！」

漑はツツコミながらも一枚引く。

それを合図に俺たちも一枚ずつ引き、結果をしてみる。

「大吉だ」

「あ、私も」

「私もです」

「私も私もー」

「俺もだな」

上から漑・唯・ムギ・綾・俺である。

5人の視線が律に注がれるが

「返せ！！」

律は漑の腕に抱き付き一言告げるが

「ええい、見苦しい！」

何とか引き剥がす事に成功した漑。

「ほら、結びに行こう」

落ち込む律を宥めながら漣が告げる。

が、二人が辿り着くと

「この一角だけ、妙におみくじ結ばれてるな」

他のところには数個ぐらいしか結ばれていないが、ここだけはゴチヤツと結ばれていた。

その原因を探ろうと目を辺りにやると、必死におみくじを結んでいる山中教師が居た。

「「どんだけおみくじ引いてるんだよ!」「」

漣と律のツツコミに山中教師はビクツとしていた。

俺は一つ溜め息を吐き

「先生、そんだけやると逆に縁遠くなりますよ」

一言告げると、山中教師は項垂れてしまった。

「翔……、トドメ刺したらダメだよ……」

綾が苦笑いしながら俺にツツコンできた。

俺たちは溜め息を吐くと今日はそのままお開きとなった。

初詣から日が流れ1月20日。

いつもの授業を終え、放課後になり俺は部活に行こうとすると

「かつけるー」

綾が笑みを浮かべながら俺に声をかけてきた。

しかし俺はそれを見て溜め息しか出なかった。

何故なら「綾が笑みを浮かべ俺に声をかけてくる」料理作ったから実験台になれ」という方程式が俺の中で確立しているからである。

「俺部活だからまたな」

一言綾に告げ部活に向かおうとするが

「却下」

綾は俺の襟首を掴みズルズルと引きずって料理部の部室に連行しようとする。

「唯、皆には遅れると言っておいてくれ」

諦めた俺は教室を去る間際に唯に一声かけると綾に引きずられていった。

暫く引きずられると見えてくるのは調理室とかかれたプレートのある部屋。

綾は部室の鍵を開けると俺を招き入れる。

「まったく、綾の強引さには呆れるぜ……」

俺は一言小さく呟くが綾は気にしない様子で

「じゃ、今から作るから待っててね」

そう告げると鞆から白のエプロンを取り出し着用し調理を開始する。

「そういえばさ」

不意に調理をしたまま綾が声をかけてくる。

「昔みたいだな、って言いたいんだろ？」

綾の次の言葉がわかっていた俺はクスッと笑い先に尋ね返すと綾は小さく頷く。

「今日は何にチャレンジするんだ？」

俺が綾に尋ねると

「今日はハンバーグだよ」

綾の返答に俺は「ふーん」と返す。

と、そこに携帯に着信が入る。

ポケットから携帯を取り出し名前を見てみると「秋山漣」と表示されていた。

「どうした？」

俺は通話を開始すると開口一番に尋ねてみた。

「通話始まっていきなりどうした？は無いだろ、今何してるんだ？」

漣は一言ツツコミを入れるが、そう尋ねてきた。

「綾に拉致されて今料理部の部室に居る」

俺が答えると綾は頬を膨らませている。

「拉致ってなんかないよ！」

一言聞こえた気がするがスルー。

「あはは……、あまり遅くなるなよ？」

漣の一言に「ああ、わかってる」と答えると漣は特に用件も無く電話を切った。

俺が首を傾げていると、いつの間にやら完成したらしく綾がハンバ―グを持ってきた。

「はい、綾特製ハンバーグの完成だよ」

綾の言葉に今一度俺はハンバーグを見てみる事に。

形や焼き加減は申し分無い、相当練習したのだろう。

だが、味の方には正直未だに不安を隠せないで居た。

意を決し俺は箸を受け取るとハンバーグに手をつけてみる。

「……うま」

意外にも味も抜群で、中にチーズが入っていた。

俺の一言に綾はホッと一息つく

「翔が私の手料理を食べた時、反応無かったからいつか見返したくて練習しました」

照れたように頬を掻きながら一言漏らす。

「うん、これくらいなら及第点だな」

クスッと笑い俺の評価を告げると綾は不満そうに頬を膨らませ

「合格点はどれくらいなのさ」

と告げてきた。

俺は腕を組み考える素振りを見せると

「合格点はもう少しだな」

俺の言葉に綾は目を輝かせ

「そのもう少して何したらいいの？」

俺の目の前まで近づき尋ねてくる。

「ちけえよ……、それは自分で考える宿題だな」

雑談しながらも食べるスピードは衰えず、いつの間にか用意されたハンバーグは全て平らげていた。

「ごちそうさん、なかなか美味かったぜ」

俺は綾の頭を軽く撫でると綾ははにかんだような笑みを浮かべる。

「じゃ、俺は行くからな」

鞆とギターケースを持ち立ち上がり告げると

「次は何かいい？」

綾からの質問に俺は苦笑するが、今日の出来を考えれば少しは期待出来るかもしれない。

「じゃありベンジつつー事でビーフストロガノフで頼む」

クスッと笑い答え俺は調理室を後にした。

ゆっくりとした足取りで俺は部室に向かうため歩き出す。

ふと視線を窓の外に向けると以前見た清々しい青空が広がっている。

「ホント……、もし祭が生きてて、俺と綾と同じようにこの高校に来てたらどうなってたんだろうな……」

誰に言うでも無く小さく呟くと首を左右に小さく振り考えていた事を霧散させる。

（祭は死んだんだ、死んだ人間は生き返らないってわかってるのにな……）

綾の噂話を聞き、少なからず俺の頭の中にはその事が残り心に引っかかっている。

少し落ち込みかけた気分を切り替え俺は鞆とギターケースを持ち直し部室に向かった。

5分ほどで部室前に着くと躊躇なく扉を開ける。

「やっと来たな」

律が俺を見て一言漏らすと

「わりいな」

クスッと笑い一言返す。

「ところで翔、新歓ライブの事なんだけど」

不意に漣が俺に近付き声をかけてきた。

「新歓ライブでは何歌うんだ？」

漣の質問に俺は曲を思い出し

「そうだな……、今歌いたい曲でいいならあるがな」

俺の答えに漣はメモ帳を俺に差し出してきた。

「何だ？」

意図がわからず俺は漣に尋ねると

「2曲決まってるんだが、曲順は翔が決めてくれ」

漣の言葉に俺はメモ帳を受け取り開いてみる。

曲順の番号は振ってあるものの、曲名は未だに記入されていなかった。

よく見ると端っこの方に演奏するであろう曲名が書かれていた。

「その端に書いた曲名も入れるんだけど、どう？」

俺は苦笑いを浮かべると筆箱からボールペンを取り出し

簡単に記入し漣にメモ帳を返す。

「前回同様、最初の2曲は俺が歌うが後は漑が歌うなり唯が歌うなり決めな」

一言告げると俺はいつもの指定席に座る。

タイミングよくムギが紅茶を差し出してきたので、俺は遠慮なく頂くことに。

開いていた窓から入り込む風は妙に寒かった。

（さて……、新入部員獲得するために俺も頑張るとしようか……）

いつものロングコートを肩に羽織りながら漑たちを見やり一つ心で呟く。

「というか楽譜用意しないと……、翔持ってないか？」

紅茶を楽しんでいると漑が最もな事を俺に尋ねてきた。

「明日まで待つてくれ、1日で書き上げてくるから……」

俺の答えに漑が驚くが

「全パートなんだけど……頼めるか？」

一転し漑は心配そうな表情で尋ねてくるが、俺はそれに頷きで応える。

俺の頷きにホッと一息ついた漑は誰が歌うかの話を唯たちと始めた。

話し合いの結果、唯が新歓ライブで歌う事が決まった。

が、最近全くと言っていいほど練習をしていなかったため、唯がギターのコードを忘れていた。

俺は一つ溜め息を吐きもう一度唯にギターのコードを教えるハメになった。

〈第23話〉（後書き）

翔「作者よ」

エタ「何だ？」

翔「新歓ライブでの曲の事なんだが……」

エタ「ああ、どっちも俺好みの曲を選択した」

翔「やっぱりな……」

エタ「予想ついてたなら何も言っなよと」

翔「つか、作者の中にあるお勧めの曲って何曲あんだよ」

エタ「正直数え切れない」

翔「ダメだこいつ……」

エタ「ざっと100曲以上あるんじゃないかな？」

翔「多すぎだ！」

エタ「仕方ないよ、それだけいい曲に巡り合ってるんだから」

翔「はあ……、次回はいつ予定だ？」

エタ「とりあえず短いですが、ネタが浮かばない可能性もあるので

また1週間程：」

翔「それではまた次回お会いしましょう」

エタ「聞いておいてスルー！？」

く第24話く（前書き）

エタ「二日で書き上げた事に驚いている作者です」

翔「いつもこのペースで書き上げてくれればと思う翔です」

エタ「今回は1年最後の期末試験です」

翔「一番最後、誰サイドだよ……」

エタ「それは25話になればわかる。それでは24話ですどうぞ！」

〈第24話〉

〈翔サイド〉

新歓ライブで歌うのが俺と唯に決まった日から1ヵ月後。

「……………」

ただいま期末試験中、本日が最終日である。

ふと唯の方に視線を送ってみた。

因みに俺は唯の席の列の後方に居るため、後姿しか見えない。

俺は唯を見て小さく溜め息を吐くと再びテスト用紙に目を落とす。

唯はあろう事か、試験中にも関わらず寝ていた。

キンコン……。

期末試験最後の終了のチャイムが鳴る。

集中しすぎていたせいか、肩がこり眠気が今頃襲ってくる。

俺は軽く伸びをし霧散させるとそのままホームルームは無く皆帰宅していく。

部活も無いため俺もその波に乗るよ様に帰宅しようとする

「翔、良かったら一緒に帰らない？」

和と唯が俺に声をかけてきた。

「ああ、いいぜ」

了承の一言を返すと俺たち3人は揃って帰宅する事に。

「それにしてもよく寝てたわね」

不意に和が唯に声をかける。

「そんなにテスト勉強頑張ってたんだ？」

和の問いかけに唯は

「うん、もちろん！」

即答するが、俺にはわかっていたため溜め息を吐く。

ある程度進んだところで

「……嘘です、全く勉強してませえーん……」

唯が和の腕にしがみつき泣きそうな表情で真実を語る。

「だよ、答案真っ白だったもの」

和もわかっていたらしく苦笑いしている。

「じゃあ何やってたの？」

「ギター！」

和の疑問に唯は即答すると

「新歓ライブの練習で忙しいんだー」

間延びした声をあげる唯。

「ああ」

心当たりがあるのか和が一言で返す。

「新歓ライブ頑張って成功させて、新入生ゲットしてそして……」

そこで区切ると唯は和の方を向き

「軽音部を潰そうとした和ちゃんを見返してやるのだー！」

ビシッと和を指差し高らかに宣言する。

「私の意志じゃないわよ」

和は相変わらず苦笑いを浮かべ反論する。

そんな二人を見てクスッと笑い俺たちは帰宅していった。

期末試験が終わり1週間が過ぎ、俺たちはいつも通り部活をするため部室に集まっていた。

〃

唯がギターを弾いている。

「おー、ギター上手くなったなー」

律が賞賛すると唯は笑みを浮かべ

「えへへ、このソロ2週間前から練習してたもん」

そう答えるが律はある一言に引っかかっていた。

「……2週間前?……テスト勉強もしてたよな?」

律の質問に唯は口を噤み俯く。

それだけで答えになっていたようで

「してないの!??」

律は驚いた声をあげる。

「ただでさえ軽音部がヤバイ状況なんだから」

律が声をあげるが、俺も律のある一言に引っかかりを覚えたが今は静観しようと見守る事に。

「まあまあ、1・2教科くらいなら……」

澪が宥めようと声をかけるが、唯は更に口を噤み俯く。

「……まさか、全教科ヤバいのか……？」

澪は若干震えながら唯に尋ねると、唯は何も言わずただ頷いた。

唯の頷きを見た澪は仰向けに倒れていく。

「澪ー！？」

律が隣で声をあげると、何とか意識を取り戻したが起き上がる力はないらしく律に支えられている。

「唯ちゃん、進級とか大丈夫なの？」

ムギが心配そうに唯に尋ねると

「進級なんかより……、やっぱり軽音部が大事だから……」

唯は目を閉じ言葉を紡ぐ。

「唯……」

3人はその言葉に感動して……。

「んなわけないだろー！」

いなかった。

「あれ？」

唯の目が点になりながら頭に？マークを浮かべる。

俺が一つ溜め息をつくと同時に部室の扉が開いた。

「その意気やよし！」

登場したのは眼鏡を光らせていた山中教師だった。

「うわっ！！」

律がビクツと驚き後退りする、漣に至っては口から泡を吹き気絶している。

「話は聞かせてもらったわ」

腕組みをしながら山中教師が言葉を紡ぐ。

「唯ちゃんのテスト、どうにか出来るかもしれないわ」

山中教師の言葉に律は目を光らせているが、俺には嫌な予感しかしなかった。

「定期試験の答案……、いつも職員室に置いて帰る先生が居るのよ……」

予想が的中した俺は溜め息を吐き静観を続ける。

「おい教師!!」

律の渾身のツッコミに

「やーね、冗談よ」

山中教師はサラッと答えるが、先ほどの表情を見る限り実行に移そうとしていたと思う。

「まあ今は出来る事をするしかないんじゃないかしら」

珍しく教師らしい事を話す山中教師。

「そしてもし追試だったとしても……」

そこで区切ると山中教師は澪の後ろに回り

「澪ちゃんが面倒見てくれるわよ」

要約すると丸投げだった。

「ところで皆は今回のテスト、自信あるか？」

不意に澪が尋ねてきた。

律とムギは「まあまあかな？」と答え、澪も同様らしい。

「翔は？」

澪だけじゃなく全員の視線が俺に注がれていた。

「それなりに難しいところはあったが、ほぼ全て埋めた」

紅茶を一口啜りながら俺が答えると

「いいよなあ、頭のいいやつって」

律が頭の後ろで手を組みばやく。

「別に頭がいいわけじゃないさ」

自嘲めいたように笑うと紅茶を飲み干す。

「ともかく、唯のテストが返って来ない限りなんともいえないな」

俺が告げると皆頷きその日は練習を少しした後、いつものようにインタータイムに戻り一日を過ごした。

期末試験から2週間後、テストの答案が返され始めた。

「ん、まあまあだな」

全教科80点台をキープしていた俺は可もなく不可もなくといった感じに頷く。

放課後になり、俺たちは部室に向かうと

「みんな！」

唯が声をあげた。

俺を除いた全員が唯の次の言葉を待っている。

「全教科赤点より一点上だったよ！」

唯は自分の答案を見せると

「逆にすげえ！！」

律がツツコむと視線を山中教師に向ける。

「やってないやってない」

山中教師は苦笑いを浮かべたまま律の思惑を否定した。

「ま、追試が無いから良しとしようか」

俺が場をまとめるように一言告げると皆頷き各々の席に着く。

鞆から自分専用の楽譜を取り出すとボーっと眺めてみる。

新歓ライブも近いという事もあり、澪が

「練習しよう」

一言告げると異論を唱える律と唯だったが俺と澪とムギが楽器を用意すると、律と唯も各々の楽器の前に。

（（

五重奏の音が部室内に響き渡る。

〃

演奏を終えると皆は顔を見合わせ頷き合う。

「皆上手くなつたな」

俺がクスッと笑い告げると皆ははにかんだような笑みを浮かべる。

不意に西日が差し込み空を見ると、既に夕焼け空になっていたの
で練習を切り上げ帰宅していった。

く
? ?
? ?
サイド
く

「楽しそうだなあ……」

私は桜ヶ丘の街並みを見ながら一言呟く。

今の私ではこの街並みに出向く事は出来ない、故に見守るだけだった。

「貴方に一度だけチャンスを与えましょう」

不意に私の後ろから声をかけられた。

私が振り返るとそこには白いローブに身を包み私と同じように佇む一人の女性が居た。

違いがあるとすれば背中に羽が生えているところである。

「1年という期間を設けますが、貴方を一度だけあの街へ戻させてあげます」

女性は私に微笑むと言葉を紡いでいく。

「本当ですか？でも何故……？」

私は嬉しさのあまり力が抜けそうになるが、疑問も浮かんだので尋ねてみた。

「貴方は私に良く似ているから、と言っておいたほうがいいかしら？」

言葉を紡ぐと私は意味を理解し、同じように微笑み返す。

昔を懐かしむように女性は無言で空を見上げる。

不意に視線を私に戻し

「期間は1年、これはどうあっても変わる事は無いわ。だから戻った後の1年間、悔いの無いように思いっきり楽しみなさい？」

女性が告げると指を鳴らす。

すると女性の後ろに巨大な門が現れる。

「この門をくぐれば戻る事が出来るわ」

女性の言葉に私はお辞儀をする。

私は女性の横を通り過ぎ門の入り口で立ち止まると、一度振り返り

「色々ありがとうございます、ガブリエル様」

もう一度深くお辞儀をしてお礼を述べると女性 ガブリエルは

「いいのよ、とにかく悔いだけは残さないようにね」

笑みを浮かべ答えを返す。

私は少しばかり躊躇いがちに門を開き光の中へ飛び込んだ。

〈第24話〉（後書き）

翔「ホント最後誰だよ……」

エタ「ここでネタバレはしたくないから言わないよ」

翔「ケチな作者だぜ」

エタ「まあでも、これまでの話を覚えていればすぐにわかるけどね」

翔「そんなもんか……？」

エタ「そんなもんだ、次回もまた一週間ください、その間には書き上げて投稿しますので」

翔「それではまた次回」

く第25話く（前書き）

エタ「今回、オリキャラが出ました」

翔「誰だ？」

エタ「それは本編参照」

翔「はあ……、それと新歓ライブはどうした」

エタ「長くなりそうだから、新歓ライブは26話に持ち越し」

翔「無計画め……」

エタ「うるさい、それでは25話です、どうぞー」

〈第25話〉

〈翔サイド〉

ベッドに置いておいた携帯からアラームが鳴り響く。

右手だけを伸ばし携帯を手に取りアラームを止めるとゆっくりと起き上がる。

「ねみい……」

現在時刻は6時を少し過ぎたところである。

そして本日は4月4日、俺たちが2年になりクラス分けが発表される日である。

しかし、起きてしまったものは仕方ないのでそのままベッドから抜け出し制服に着替え居間に向かう。

「んー……」

まだ脳が覚醒していないが、冷蔵庫の中身をチェックするため扉を開く。

冷蔵庫の冷えた風が俺を包み込み徐々に脳が目覚める。

1から作っていると時間が無いので、今回も手短かに料理を作る。

本日はご飯に味噌汁、サーモンの切り身を焼き、べったら漬けにシ

ーザーサラダというものである。

既に作るのは何度もやっているもので20分ほどで作り上げテーブルに並べておく。

『そろそろアレの時期よ』

不意にルリエルの声が聞こえると俺は天井を見上げ

「ああ、アレの時期か……」

一度席に着いたが立ち上がると部屋に戻り予め調合しておいた薬を手にとると居間に戻る。

薬を飲み水で流し込み食事始める。

『いつも悪いわね』

珍しくしおれたような声で謝罪するルリエル。

「気にすんな、もう慣れたさ」

食事続けながら俺が答えると

『貴方も相変わらずよね』

クスッと笑い告げてくるルリエルに一つ溜め息をつく

「相変わらずって何がだよ」

あらかた食べ終わると俺は茶碗を置き尋ねる。

『何でもないわ』

そう告げるとルリエルは俺の奥へと戻っていった。

「なんなんだ？」

疑問しか浮かばない俺だが気にしなくても仕方ないので、全てを食べ終わると食器をシンクに置いておく。

時刻は7時をちょっと過ぎたところだが気にせず鞆とギターケースを背負い家を出る。

いつもの通学路を一人で歩き、途中コンビニでカフェオレを購入しておく。

学校の門の入り口に到着した頃には7時半を回っていた。

桜ヶ丘の生徒もチラホラ見えるが気にせず門をくぐる。

と、タイミング良くクラス分け発表の紙が張られていた。

「さて、誰と一緒にーっと」

一言呟くように見上げていく。

1：秋山 澪

（今年は澪は1組か）

見上げたまま一つ心で眩き1組の欄を見ていくと

14：来栖祭

15：神藤翔

俺は目を疑った。

（何で祭の名前が……？あいつは死んだはずじゃ……？）

自問自答を繰り返すが、答えなど出るはずも無く俺は考えるのを止め一足先にクラスへと向かった。

因みに、綾と和も同じクラスであると付け足しておこう。

俺はクラスに着き適当な席に座りヘッドフォンを耳にかけ音楽を流す。

少しばかり時が流れ、現在時刻は11時ジャスト。

澪や綾ものんびりとホームルームを聞いていた。

「えー、本日から転入生が来る事になった」

担任の一言にクラスが浮き足立つ。

「1年間だけだが、皆仲良くしてやってくれ」

それだけを告げると担任は扉に視線を送り

「それでは入ってきなさい」

一言声をかける。

扉が開かれ現れたのは

「「祭!^{ちゃん}!」」

紛れも無く俺と綾が知っている来栖祭だった。

綾は席に座ったまま口を抑えているが、俺は椅子が倒れるのも気にせず立ち上がり信じられないといった表情を浮かべる。

祭は俺と綾を見つけると小さく手を振る。

「神藤と福井は知ってるみたいだが自己紹介を」

担任に指摘され俺と綾はハツとし、俺は席に座りなおす。

「来栖祭です、1年間だけです……よ、よろしくお願いしましゅ」

祭は自己紹介するが徐々に人見知りスキルを発動し、最後には噛んだ。

祭の席は漣の一つ後ろと言うことになった。

それから担任から簡易的な話を聞かされ、ホームルームは終わった。

俺は席を立つと鞆とギターケースを持つと、綾もちょうど立ち上が

る。

俺たちはアイコンタクトを交わすと頷き合い

「祭、ちょっと」

祭の席に向かい声をかけると、祭も意図がわかっているのか無言で頷く。

その様子を見ていた澪が

「翔、私たちも一緒にいいか？」

一言断りを俺に尋ねてきた。

「ああ、全員呼んできてくれ、話はそれからだ。後場所は屋上でいいだろ」

俺が頷き場所を伝えると澪は教室から飛び出し、律たちを呼びに行った。

「私もいいかしら？」

和までも俺に声をかけてきた。

俺は頷くと4人で屋上へ向かう。

屋上へ向かう途中、祭は終始無言だった。

無理も無い、全く知らない人が一緒に居るのだから。

屋上に先に着き、5分ほどで軽音部のメンバー全員と綾・和も加わった7人が揃う。

「さて、単刀直入に聞くが祭は死んだはずだよな？」

静寂を破るように俺が尋ねると祭は小さく頷いた。

「なら何故祭がここに？」

恐らくは全員の疑問であろう質問を俺が投げかけると

「転生させてもらったの。大天使ガブリエル様に」

祭が漸く口を開いた。

「転生か……、俄かには信じがたいが……、現にこうして祭が居るのが何よりの事実か」

俺が小さく呟くと祭は頷く。

「でも転生期間は1年、それはどうあっても変わらないらしいの」

祭の言葉に驚いた表情を浮かべる6人。

俺は何となくそんな気がしたので然程驚かなかった。

「悔いが残らないように、思いっきり楽しんで来なさいって」

祭はクスッと笑い告げてくる。

「そつか、なら思いつきり楽しまなきゃね」

綾が俺の代わりに言葉を紡ぐ。

「うん、だからまた二人にはお世話になるね？」

綾の言葉を聞き祭は笑顔を浮かべ尋ねてきた。

「もちろん、祭ちゃんにも私の手料理を振舞ってあげるよ」

「気にするな、俺ならいつでも歓迎だぜ」

俺と綾の言葉に祭はお辞儀をする。

「ところで、二人の後ろに居る人たちは……？」

漣たちを見て俺の服をギュッと掴んでくる祭。

「ああ、こいつらは軽音部のメンバーだ。後そこに居るのは真鍋和な」

俺が簡易的な紹介をすると

「それじゃ私たちの名前がわからないだろ、私は軽音部部長の田井中律、よろしくな祭」

「私は平沢唯です！」

「琴吹紬です」

「あ、秋山澪です……」

「真鍋和よ、よろしくね？」

各々自己紹介を交わすと祭はまだ慣れないのかぎこちない笑みを浮かべ

「く、来栖祭です……」

祭も自己紹介を返す。

「そうそう祭ちゃん、翔と澪ちゃんってね……」

綾が茶化すように声をかけると

「うん、知ってるよ。二人は付き合ってるんだよね？」

祭が頷き俺に視線を向け尋ねてくる。

「やっぱり知ってたか。あの時のあの星は祭だったか」

俺の言葉に祭は頷き応える。

祭は俺から視線を外すと澪に視線を向け

「これからも翔の事、よろしく願いします」

何故か祭がそんな一言を漏らし一礼する姿に俺はクスッと笑ってしまった。

「ああ、わかった。ところで来栖さん？」

漣はハッキリと頷くと祭に声をかけた。

「祭、でいいですよ。何ですか漣さん？」

祭が訂正すると首を傾げ漣に尋ね返す。

「来栖……じゃなくて祭ちゃんは住んでるところはどこなんだ？」

漣の何気ない一言に祭が思い出したように固まる。

「今はどこにも住んでません、私自身死んでる身なのでどうしても家に戻るのに抵抗があつて……」

ポツリと祭が答えると俺たちは少し考え込む。

「「「あ」」」

漣と律と綾が同時に何かを閃いたように声をあげた。

「何かいい案でも出たか？」

俺が3人に声をかけると、一斉に3人は俺の方を向き

「「「翔の家に住まわせてあげればいいじゃん」」」

突拍子も無い事を告げてきた。

「俺は別にいいが、祭はどうする?」

異論も無いのでサラッと答えると祭に尋ねてみる。

祭は少し顔を紅くし俯きながら

「か、翔がいいならお世話になりたい……かな……」

消えそうなくらい声量を低くし答える。

ふと視線を3人に戻すと、漑は発言したにも関わらず複雑な表情を浮かべ、律と綾は面白そうなネタを見つけたと言わんばかりにニヤニヤしていた。

俺は綾を手招きで呼ぶと、無条件で綾の頭にアイアンクローを炸裂させる。

「痛い痛い!!! ギブギブ!!!」

綾が俺の腕を叩き俺は手を離す。

「翔のアイアンクロー、ホント痛いよー」

頭をさすりながら俺に愚痴を漏らす綾。

「いや、綾がニヤついてるのが何か腹が立ったから」

俺はサラッと答えると

「それだけでアイアンクローはやめて!?!」

綾のツツコミが炸裂した。

俺と綾のコント（？）が披露されていると、不意にクスクス笑う声が聞こえて来た。

俺と綾は同時に笑い声のする方を向くと、目に涙を浮かべ笑いを堪えている祭の姿があった。

「ホント、昔と変わってないね、二人共」

目の涙を拭いながら祭が俺と綾に声をかける。

俺と綾は顔を見合わせるとクスッと笑い合う。

「さて、明日の新歓ライブのために練習するかー」

律の言葉に俺たちは頷くと祭は？マークを浮かべ

「新歓ライブって？」

と尋ねてきた。

「新入生歓迎会の事だ、俺たちも出てライブをやるから新歓ライブだ」

俺の答えに祭は感心したような表情を浮かべ

「私も練習風景見たいから一緒に行ってもいい？」

更に尋ねてきた。

俺は律に視線を送ると、律は特に異論は無い様子で頷く。

「部長の許可も下りたし、いいぞ」

クスッと笑い答えると

「私はここで失礼するわね、生徒会の用事がまだ残ってるし」

和が不意に一言告げてきた。

「ああ、わかった。またな和」

俺が答え全員で和を見送った。

「さて、行くぜ！」

和が屋上を去り律が一言言つと律は先頭に立ち屋上の扉に手をかける。

俺たちも律に続き屋上を後にする。

部室に向かう途中、俺は一つ提案を思いつき

「律、ちよいと」

先頭の律に声をかけると

「どした？」

最後尾に居る俺の元へ歩み寄る。

「皆は先に部室行つててくれ」

俺は皆に促すと、俺と律を残し全員は部室に向かった。

「んで、どした？」

2度目の質問に俺は律に視線を戻し

「律、学祭で1曲歌つてみないか？」

俺の提案に律は驚いた表情を浮かべる。

「いやいや、私にはドラムがあるし歌う暇なんて……」

律の答えを予想していた俺は

「その1曲の間は俺がドラムやってやるよ、ギターは唯に任せても問題無さそうだしな」

俺の言葉に律は深く考え始める。

クスッと笑い俺は肩に手を置き

「ま、期間はまだあるしじっくり考えな。出来れば今週か来週までに返事があるといい」

俺はそれだけを告げると律の横を通り過ぎ一足先に部室に向かう。

と、律も考え事をしながら俺の後を着いて来る。

部室に向かう道中、お互い話す事も無いので無言のまま歩き続ける。

「……………うん、やってみようかな」

不意に律の了承の言葉が聞こえて来た。

俺は立ち止まり振り返ると

「なら決まりだな。メインボーカルは律でコーラスが漑ってとこだな」

クスッと笑い答えると律は頷く。

「曲に関しては後で聴かせてやる、曲名も一緒に教えておくよ」

俺が言っていると律は再び頷き

「楽しみにしてるぜ」

笑みを浮かべ答えた。

そのまま俺たちは部室に戻り、皆には学祭での曲が1曲決まったから楽譜を後で渡す、とだけ説明した。

その際、誰がボーカルやるのか、と漑に尋ねられたが俺はあえて答えなかった。

因みに律は俺のヘッドフォンを耳につけて曲を聴いている。

律の表情は真剣そのものだったので、俺たちは各自で自主練をする事に。

暫くして、漑が合わせるために律を呼ばうとするが俺が漑を止める。

何故？というような顔をしていたが、アイコンタクトを交わし頷き合つと漑も黙って引き下がった。

「眠いー！」

というわけでただいま下校中、因みに眠いと言ったのは律だ。

「あんだだけ集中してれば眠気も来るわな」

俺が苦笑混じりに答えると、律も苦笑いで返す。

「でも、何でそんなに集中してたんだ？」

漑の質問に律は俺を見てきた。

別に話してもいいと思ったので頷くと

「それはまだ秘密だな」

律は笑みを浮かべ答える。

「翔は何か知ってるのか？」

不意に漣が俺にネタを振ってくる。

話すべきかどうか悩み律に視線を送ると、律は自身の唇に指を当て黙るようジェスチャーしてくる。

律を見て苦笑いを浮かべ

「悪いな、こればかりは話せない。もう少し時期が来れば話すかもしれないが」

俺の返答に漣は考え始める。

「翔、今日からお世話になるけど大丈夫？」

不意に一緒に帰宅していた祭が声をかけてきた。

「ああ、それはいいが？」

「じゃあ私も今日泊まりに行つていい？」

俺が答えると綾も俺に質問してきた。

「別にいいが、綾は絶対にキッチンには入れないからな？」

綾の質問にも答えると綾は頬を膨らませぶうぶう反論する。

「それじゃ、また明日な」

いつの間にかいつもの別れ道に来ていたらしく、律と漣と別れ帰宅する事に。

軽く手を挙げ二人を見送り俺たちも帰路に着く。

途中、ムギとも別れ4人で歩く。

「それじゃ、また明日ねー」

俺の家に着くと唯が手を振り俺たちに背を向け自宅へ向かう。

「ん、また明日な」

俺は軽く答えると唯は振り返り再び手を振る。

「さて……」

唯を見送ると俺は一息つき自宅を見る。

「翔の家、全然変わってないね」

祭も俺と同じように家を見上げクスッと笑う。

「まあな、というか家はそうそう変わったりしねえよ」

俺もクスッと笑い答え家の鍵を開ける。

俺は家に入ると二人も俺に続き家に入る。

「とりあえずリビングでくつろいでくれ、綾と祭の部屋を用意する」

それだけを告げると、2階の空き部屋に向かう。

（向かい側は滞専用だから……）

ふとそんな事を考えている自分に苦笑してしまう。

適当な空き部屋に入りベッドの支度や部屋に置かれている荷物類を別室へ移動させる。

ある程度整理を済ませると自室に向かい着替え居間に降りる。

「二人の部屋、用意したから案内するぜ」

二人に声をかけると二人は立ち上がり俺の後をついてくる。

「こつちが祭、祭の向かい側が綾な」

2階に上がり部屋の前に案内すると、二人は嬉々とした様子で割り振られた部屋へと入って行った。

俺は二人を見て苦笑いを浮かべ自室に戻る。

『祭ちゃんの事、どうするの?』

不意に頭にルリエルの言葉が響く。

「正直まだわからない、どうするべきなのか」

ベッドに身を投げルリエルの質問に曖昧な答えを返す。

『ご両親にお話した方がいいんじゃない？』

ルリエルの的確な質問が飛んでくるが

「それは考えたんだけどな……」

一つ深い溜め息を吐き出しまたも曖昧に答えを返す。

『ま、貴方が後悔せず祭ちゃんにも悔いが残らない選択をする事ね』

ルリエルはクスッと笑いそれだけを告げると、再び俺の奥へと戻っていった。

「どうするよ……、ったく……」

ぼやくように言葉を紡ぐと目を閉じる。

そのまま俺は深い眠りについていた。

〈第25話〉（後書き）

エタ「というわけで今回から再登場、来栖祭ちゃんです」

祭「よ、よろしく願いしましゅ……」

翔「また囃んでるし……」

エタ「そこはツツ」むところじゃない」

翔「はぁ……」

祭「あはは……」

エタ「正直、今回律に歌う事を求めましたが、よくよく考えたら学祭ライブって当分先ですよ」

翔「前書きでも言ったと思うが、無計画すぎる」

エタ「うるさい、それに何故か翔サイドばかりで、漣や律サイド全く書いてないし」

祭「私サイドはあるんですか？」

エタ「んー、今のところは未定、としか言えないかな？」

祭「（・・・）」

翔「ところで作者よ」

エタ「ん？」

翔「1年後、祭はどうなるんだ？」

エタ「ああ、その事で読者の皆様にアンケートを取ろうと思ってたんだ」

翔「どんなアンケートだ？」

エタ「簡単だよ、1：1年後になっても祭は消えず翔たちと共に生きていく 2：消滅してしまうが特定の期間だけ現世に蘇る事が出来る のどちらか」

翔「なるほどな、アンケート結果は感想か活動報告に書くといいのか？」

エタ「そうだね、基本的に感想の欄に書いてもらえると助かるかな？」

祭「集計が大変そうですね……、私的には1に投票しておきたいところですが」

エタ「うん、一応1だった場合の話の構成はまとまってる」

翔「2の方は？」

エタ「まだ」

翔「おい！」

祭「あはは……」

エタ「そくだ、この小説が96220PV&7908ユニーク達成だ」

翔「ありえねえ……、もうすぐで10万PVじゃねえか……」

エタ「ホントだよ、こんな自己満な小説なのに」

翔「全くだ……」

祭「それではアンケートの方は感想または活動報告の方に1、2どちらがいいかお書きください」

エタ「1人1票までなのでご注意を、それではまた次回に！」

祭「またね」

翔「ところで次回はいつだ？」

エタ「もう聞くな……、一週間お願いしますorz」

翔「早く書けよ」

く番外編 零の誕生日！く（前書き）

エタ「何とか書きあげました……」

翔「遅い」

エタ「仕方ないだろ、ネタが浮かばないんだからorz」

翔「ま、今回のもネタ無い状態で書いたから物凄いグダグダだよな」

エタ「うん……、というわけで本編はこれから書きます」

翔「では番外編その1です、どうぞ」

エタ「本日で105230PV&8699ユニーク突破致しました、
ありがとうございますー！」

く番外編 零の誕生日！く

何気なく部屋に飾っておいたカレンダーに目をやると、今日の日付に赤いペンで しているのを思い出した

本日は1月15日の午前11時。

「とりあえず確認だけしておくか」

携帯を取り出しある人物に電話をかける。

「どしたー？」

ソイツ 「田井中律」 は3コール目で出ると間延びしたような声をあげる。

俺は苦笑を漏らしながらも

「今日だよな？アレは」

律に尋ねてみると

「ああ、そうだな。何にするか決めたか？」

律から質問返しが飛んでくる。

「いや、これから色々見回るところだ」

俺の答えに律は苦笑を浮かべている様子だった。

「まあ何でもいいけど、時間に遅れるなよ?」

未だ苦笑したままの律から注意されるが

「遅れる時は連絡する、会場はやっぱり俺ん家なのか?」

俺が尋ねると律は「ああ、よろしくなー」と短く返す。

溜め息を吐くと時計を見て

「悪い、そろそろ出るからまたな」

それだけを告げると律の返事を聞き俺は通話を終了させる。

そのまま既に着替えていた俺は部屋を抜け玄関を出る。

「流石にまだ雪が降るな……」

外に出ると一面銀世界だった。

コートを羽織り玄関に鍵をかけ俺は街へ向かうため歩き出した。

「薄サイド」

「律のやつ、一体何なんだ？」

携帯が鳴り電話に出ると律から「今日予定空けといってくれー、皆でカケの家で食事会するからー」と一方的に伝えられ電話を切られた。するともう一度携帯が鳴る。

今度はメールだった。

私は疑問を抱いたままメールの内容を確認する。

「ごめん、時間言い忘れてた！時間は夕方5時にカケの家の前に集合で！」

それだけが短く記載されていた。

何か企んでいるとわかっているが、こうなった律を止めれるのは私だけなので、メールを送り返しベッドに寝転ぶ。

「何するつもりなのかな、律……」

一人天井を見上げ呟く。

何となく翔にも電話をかけてみたが、翔は携帯の電源を切っているのか電波が入らない場所に居るらしく、無機質なアナウンスが流れてきた。

はぁ、と溜め息を吐き出し天井を見上げていると、ベッドから起き上がりパソコンに向かう。

「たまには作詞しないとな」

前回のふわふわでは翔はともかく、律とさわ子先生の反応が酷かった。

なので二人を見返してやろうと私はふわふわのようなメルヘンな作詞はしない事に決めた。

しかし、今までメルヘンな詩ばかり書いていたせいか、なかなかいい歌詞が思いつかない。

椅子の背凭れに背を預け、腕を組み天井を見上げる。

そんなこんなで1時間が過ぎ、今は13時。

お昼を食べるのを忘れていた私は、気分転換も兼ねて外食にすることをした。

外に出た私は、いつものバーガーショップではなく気分を変えて一

人でファミレスへと足を向けてみた。

一人でファミレスなど、人生初なので結構緊張してしまう。

適当に注文した私はお冷を飲みながら何気なく外をしてみる。

休日という事もあり、外は人でごった返していた。

中にはカップルであろう人も結構目につく。

（翔、何してるのかなあ……）

無意識のうちに携帯を取り出し翔の番号を出す、先ほど電話した際の事を思い出し携帯をポケットへと戻す。

程なくして私が注文した料理が運ばれてくる。

食事を始めながらも私は時折視線を外へと向ける。

ゆっくりと食べ終え紙ナプキンで口を拭いながらもう一度だけ外を見してみる。

すると、翔が着ているのと同じ白いロングコートを着た人を見つけた。

翔かも知れないと思った私はすぐさま清算を済ませ店を出て、先ほど見かけた人を追いかけてみる。

が、途中で見失ってしまい深い溜め息を吐き出す。

外に居てもいい詩は浮かばなかったので、適当にぶらぶらと街を歩いていく。

クリスマスに翔から貰ったコートを改めて着直し、目的もなく歩き続けるといつもの楽器屋の前に来ていた。

寒さと退屈凌ぎになるかな？などと考え、そんな事を考えた自分自身に苦笑いしてしまう。

エスカレーターを使い地下に降りると、すぐに楽器がズラリと並んでいるのが目に入る。

それと同時に、室内は暖かく温風が私の顔と手に当たる。

私はいつものようにレフティ用のベースを探してみる。

が、やはりそう簡単には見つからず諦めて帰ろうと踵を返す。

結局、その後も誰にも会う事は無く私は家に戻った。

部屋に戻りベッドに身を投げた私は寝転んだまま携帯を開いてみる。

相変わらずメールも着信も来ていないのはわかっているが、何故か開いてしまうのは癖になっているからだろうか。

時間は16時10分。

一度深い溜め息を吐き出しベッドから抜け出す。

簡単に荷物の準備を済ませ、少し早いが家を出る。

何度か翔の家へと続く道を一人歩く。

その度に積もっている雪を踏みしめる音が鳴る。

程なくして翔の家の前に着くが、まだ誰も来ていないようだった。

（ちょっと早く来すぎたかな……、翔居るかな？）

そう考えた私はインターホンを鳴らす。

が、不在らしく誰も返事はしなかった。

翔がいつも吐く溜め息に似た溜め息を私も吐き出す。

時間を再度確認してみる。

16時55分。

もう後5分で集合時間となるのにも関わらず誰も来ていなかった。

不振に思った私は律に電話をかけようとコールした直後、私に通ってきた道から律と唯とムギと憂ちゃんが来るのが見えた。

「おっす、零ー」

相変わらずの律の挨拶に私は苦笑を漏らす。

「ちょうど良かった、カケの家行こうぜ」

律が私に促すが

「さっきインターホン鳴らしたんだけど、居ないみたいなんだ」

律に先ほどの事を告げると律は

「ま、押してみればわかるって」

お気楽というか暢気な台詞を発し律がインターホンを鳴らす。

が、やっぱり先ほどと変わらず誰も出てくる気配は無かった。

「カケのやつ居ないのか？」

律が携帯を取り出し翔にコールしようとした瞬間、扉が開いた。

「ああ、みんな来たか」

翔が出てきた。

「居るなら最初から出てきてくれ」

私は少し怒ったような口調に翔は苦笑いを浮かべ中へと促す。

「悪い、少し地下室に居たから気付かなくてな」

リビングに案内しながら翔が答える。

「そういえば、携帯に電話かけたら電源が入ってないって言われたけど？」

私が不意に尋ねると

「ああ、充電し忘れてて途中で思い出して、今は充電中だ」

翔の言葉に珍しい事もあるのだと納得していた。

リビングに到着した私たちを迎えたのは、豪勢な料理の数々。

中には見た事も無い料理もあるが、見た目も綺麗だった。

「こ、こんなに……、誰が作ったんだ？」

私は少し声が震えながら尋ねると

「ああ、全部俺が作った」

翔が即答する。

「んじゃ、時間も勿体無いし早速パーティー開始だー」

律の言葉にクスッと笑う翔は全員にグラスを渡していく。

「今回は特別に、俺特製のシャンパンでも空けるか」

冷蔵庫とキッチンのある棚の奥から1本のシャンパンを持ってくる。

「って、シャンパンってお酒じゃないのか？」

ハッと気付いた私が翔に尋ねると

「ん、アルコールはまず無い。ほぼジュースに近いから安心しな」

それだけを告げて皆のグラスに注いでいく。

因みに配置はこうなっている。

ムギ 唯 憂

律 私 翔

という並びである。

全員が揃ったところで

「それじゃ、カンパニー！」

律の号令により、全員グラスを軽くぶつけ合い翔の作った料理を思い思いに取っていく。

結論から言えば翔の料理はどれも美味しかった。

見た事の無いサラダのような料理にも手をつけたが、これも絶妙な味で皆にも好評のようだった。

当の翔はシャンパンを軽く飲み、皆の様子を見ている。

翔の家でパーティーが始まって1時間ほどした後

「そんじゃ、そろそろアレにするか？」

律が意味深な言葉を発する。

その言葉に皆は一斉に頷き合つと

「じゃーカケ、後は頼んだ」

律が翔に声をかけると、翔は頷き

「漣、こつちだ」

私の手を取りリビングを離れる。

「ちょ、どこ行くんだ？」

私はわけがわからないまま翔に尋ねるが、翔は優しく微笑むだけで答えなかった。

そのまま私と翔は地下へと進んでいく。

地下に向かう途中、翔にバンダナで目隠しをされ、翔に手を引かれ地下へと向かう。

真つ暗なので不安に思いながらも翔の後を着いていくと、不意に翔の手が離れた。

「か、翔！？」

私は不安になり声をあげると

「心配すんな、すぐ終わる」

後ろから声が聞こえ振り向こうとするが、翔はバンダナを外そうと
していたのでジッと待つことに。

程なくしてバンダナが解かれ目を開けると、そこには色々な箱が置
いてある。

「翔、これは……？」

私が翔に尋ねると

「これは皆からのプレゼントだ、もちろん俺のもある」

プレゼント、と言われ私は頭に？マークを浮かべる。

「今日は零の誕生日だろ？」

翔は私の様子を見てクスッと笑い尋ねると、私はハッと思い出した。

私は翔とプレゼントを交互に見ると、翔は頷き私をプレゼントのあ
る場所まで行くよう促す。

大小様々な箱があり、私は一番大きい箱から開ける事にした。

中から出てきたのは以前から私が欲しかったレフティベースだった。

ネックは細く、色は今のベースと同じ黒。

私はこれが誰のプレゼントなのか一瞬でわかる。

「これ、翔のプレゼントだな？」

私は確信を持って尋ねると、翔は頷くだけだった。

以前、二人で楽器店に行った際にこのベースが欲しい、という話をしていたのだ。

が、今の私では到底買えそうに無かったので眺めるだけだった。

私はベースをケースに戻すと他のプレゼントも開けてみる事にした。中にはネックレスやぬいぐるみ、シャープンのセットなどが入っていた。

因みに私が最も苦手としているホラー系のゲームや映画も入っていたが、私は一瞬で送り主が誰かわかってしまう。

「律の発案でな、澪を驚かせようって事で澪に内緒でこれを使ったんだが、成功かな？」

翔の言葉に私は笑みを浮かべ頷く。

翔も私の頷きに笑みを浮かべ返すだけ。

「後でこれらは澪の家に送っておくよ」

そう言葉を紡ぐと、翔は私の手を取りリビングに戻る。

リビングに戻った私たちは、律たちが居なくなっている事に気付く。

「どこ行った、あいつら」

翔も想定外らしく、声をあげると私はテーブルに置かれていた置手紙を見る。

「私たちは十分楽しんだから、後は二人でゆっくり楽しんで来いよ」と律の筆跡を見て苦笑いを浮かべる。

翔も同じように苦笑いを浮かべていた。

「まったく、あいつらは……。とりあえず二人だけでパーティーの続きでもするか？」

翔は居なくなった4人の食器を片付けながら私に尋ねる。

「そうだな、折角翔が用意してくれたんだ、もっと味わいたいしな」

私が答えると翔は改めてシャンパンを注ぐ。

暫くは二人で料理を堪能していくと、時刻は既に11時を回っていた。

時間を見た私は帰宅の準備に取り掛かるが

「今日くらい泊まっていかないのか？」

不意に翔の提案に準備していた手が止まる。

私は一度翔を見ると、翔は小さく頷く。

私も頷き返すと帰宅準備を中止する。

あらかた料理を平らげると、余った料理はラップに包み冷蔵庫へ送る。

元々量は6人分に合う量だったので、簡単に食べ切る事が出来た。

（体重大丈夫かな……）

不意に私は視線をお腹回りに送ると、翔は何かを読んだのか何も言わず片付けていく。

片付け終わると翔は私を部屋へと案内した。

「悪いな、少し散らかってるけどさ」

翔はそう言うが、私から見たら全く散らかっていないように見える。

そのまま翔はベッドに寝転ぶと、人一人入れる程のスペースを作る。

「一緒に寝たければ寝てもいいぜ」

翔の一言に私も一緒にベッドに寝転ぶ。

私はすぐさま翔をギュッと抱き締めると、翔も私を抱き締めてくれる。

時間も忘れ私は今日の事を話す。

翔に似た人を見かけた事、一人でファミレスに行った時の事等。

その事を話すと

「俺に似た人は恐らく俺だな。ファミレスなら今度一緒に行くか？」

翔はクスツと笑い言葉を紡いだ。

私は頷くと緊張の糸がほぐれたせいか、不意に睡魔に襲われ小さく欠伸をしてしまう。

翔はそれを見て右手で毛布を私にかけると

「眠かったら寝ていいぞ」

そう告げると私は頷き目を閉じる。

「ありがとう……」

私の最後の言葉を発し、私の意識が闇に落ちかける直前に

「気にするな、大好きだ漣」

翔の告白に私は微笑みを浮かべ眠りについた。

〈番外編 零の誕生日!〉（後書き）

翔「一応聞くが、これ番外編だよな？」

エタ「そうだが、どうした？」

翔「なんだかいつもと変わらない気がする、特に俺と寝てる辺り」

エタ「色々ツツコむな、眠いながらも書いたんだから似てるのは仕方ない」

翔「ダメ作者」

エタ「orz」

翔「さて、作者と話していると時間の無駄なのでこれくらいにして、これからもけいおん!〜春風と共に響く音楽〜を宜しくお願いします」

エタ「次回は30万PVを達成したら番外編その2を書きますのでそれでは!」

〈第26話〉（前書き）

エタ「今回は一気に新歓ライブ＋梓加入です」

祭「そしてとあるイベントが発生しました」

翔「祭、そこで　をつけるな。それを望んでたかのような口調でも言うな」

祭「ダブルのツッコミが来るとは思わなかったよ……」

エタ「あはは……、それでは26話です、どうぞ」

〈第26話〉

「翔サイド」

「翔、起きて」

そんな声が聞こえると同時に俺の身体が揺れる。

誰かが起こしに来たらしく、俺はうつすらと目を開けてみる。

徐々に視界が開け見えてきたのは

「おはよう、翔」

制服の上にエプロンを着用している祭だった。

「……………祭？」

脳が覚醒していないため俺が尋ねると、祭は笑みを浮かべ頷く。

「早く着替えて下に来てね、朝食がもうすぐ出来るから」

それだけを告げると祭は俺の部屋を出た。

祭が部屋から出た後、俺もベッドから抜け出すとまだ眠気眼のまま制服に着替える。

不意に「何で祭がここに？」と独り言を呟こうとしたが、漸く覚醒した脳を使い思い出す。

（そうだ、祭は1年間だけ転生してうちに泊まってるんだっ たな…
…）

心の中で呟くと苦笑を浮かべ鞆とギターケースを手に居間へと向かう。

「おっはよー、翔ー」

既に居間に居た綾が俺に気付き声をかけてくる。

「ん、早いんだな二人共」

綾の挨拶に一言で返し、綾と祭に告げる。

「祭はともかく、綾は2度寝して確実に遅刻ギリギリまで寝てると思っ たがな」

俺は綾に皮肉を言うと

「祭ちゃんが起こしてくれたからそれはあり得ないね」

胸を張り威張ったように答える綾。

祭は料理を運びながら苦笑いを浮かべている。

「そっぴや今日は新歓ライブか……」

小さく欠伸をしつつ料理を食べながら不意に俺は思い出したように呟く。

「何時からやるの?」

祭が俺に尋ねてきたので俺は腕を組み

「確か午前11時ぐらいじゃないか?」

曖昧にしか覚えていないので念のために漣にメールを送信してみる。

するとすぐさま返信が返ってきたのでチェックする。

「今日は11時から新入生歓迎会開始で、私たちの出番は30分後だからな。忘れるなよ?」

漣のメールを見てクスッと笑い「わかった、ありがとうな」とだけ書いて返信する。

「11時から新入生歓迎会開始で、出番は11時半だつてさ」

漣のメールに書かれていた事を祭に教える。

「翔の出番なら見ないとね」

クスッと祭は笑い俺に言葉を向ける。

手早く食事を済ませると俺たちは揃って家を出た。

祭と綾は二人で雑談しているが、俺はヘッドフォンを耳にかけ本日歌う曲の歌詞を再確認している。

そうこうしている間に学校へと辿り着く。

そして時は少しばかり進み、時刻は午前10時。

俺たちは部室に集まっていた。

「そついえば今日やる4曲の曲順って決まってるのか？」

不意に律の質問が飛ぶと、漑が

「ああ、コピーしておいたからマイクやスピーカーに貼っておいて」

そう言つと鞆から5枚の紙を取り出し各自に渡す。

「おい、漑」

曲順が勝手に変更になっているのに気付いた俺はすかさず漑を呼ぶと

「わかつてる、勝手に変更したのは謝る、ごめん」

俺が呼んだ理由がわかっている漑は素直に謝罪してくる。

「いや、それはいいんだが何故事前に言わない？」

若干溜め息交じりに尋ねると漑は

「ごめん、ちょっとしたサプライズだ」

と答える。

「ま、いいか……」

一抹の不安を覚えながらも俺はこの曲順に了承する。

因みに山中教師も来ていたが、俺を除いた4人にメイド服を着せようとしていたらしく、全員で無視していた事を付け足しておく。

ところ変わって講堂の舞台裏。

「うわぁー……」

明らかに不安そうな声を上げ講堂内を隠れているのは漣である。

「律うー、講堂人でいっぱいだよー」

律にフラフラとした足取りで泣きつく漣。

「そりゃ新人生全員来るからなー」

律は何とか漣を押し留めようとするが、漣はフラフラと歩き頭を抱え「もうダメだー……」等と呟いている。

「ボーカルじゃなくても結局緊張するのな」

漣の様子を見て律が一言漏らす。

「ま、本番になりやいつも通りになるだろ」

俺の言葉に律は苦笑いを浮かべ頷いた。

「りっちゃん！舞台袖で１００円拾った！」

不意に唯の声が聞こえ振り向くと、１００円玉を高らかに掲げている唯が居た。

「お前はもう少し緊張しろ……」

俺と律は溜め息を吐き、律が代表で思ったことを告げる。

そんなこんなをしていると

『次は軽音楽部によるクラブ紹介と演奏です』

不意にアナウンスが流れる。

「お、出番だ。頑張るぞー！！」

律の掛け声に、唯はそれに応えるように右手を上には上げる、ムギは胸の前で両手をグッと握っている。

漣は未だに不安らしいが、何とか腹を括ったようだ。

「皆……、一つ言っておきたい事があるわ……」

いつの間に来ていたのかわからないが、山中教師の声が聞こえ振り向く。

「制服も……意外といい！！」

何を伝えるのかと思いきやどうでもいい事を言い放つ山中教師。

しかも、右手の親指だけを立てグッと突き出している。

俺は、というか全員が山中教師を放置している。

「漣、俺のポジションはどこだ？」

緊張しているであろう漣に声をかける。

少しでも緊張をほぐすためでもあるのは秘密にしておく。

因みにマイクは3セット用意されており、漣のベースは以前俺が漣にあげたベースを持ってきていた。

「学園祭の時と同じでいいよ」

顔色からはだいぶ緊張の色は消えた漣が俺の質問に答える。

舞台袖に待機している和に唯が準備完了の合図を送る。

和はそれを見て幕を上げる。

幕が上がりきると、俺は目で祭を探してみる。

すると祭は綾と共に講堂の扉側に立っていた。

祭も俺の視線に気付いたのか軽く手を振る。

「どうも、軽音部です。新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます」

唯のMCが始まる。

「私、最初軽音部って聞いて軽い音楽だと思ってたんですよー」

唯の言葉に会場が笑いに包まれる。

（まあ普通はそう思わないからな……）

心の中で小さく呟くと苦笑いを浮かべる。

「カスタネットが出来ればいいかなー、なんて軽い気持ちで入部しました！なので皆さんもそんな感じで気軽に入部してください！」

そこまで言うとなんたちは演奏が始まると思いきや

「あ、でもカスタネットって実は難しいんだってさわちゃんが言うてました」

再び唯のMCが続く。

「あ、さわちゃんっていうのは音楽の先生のあだ名なんですけ……いたっ！」

未だに説明を続ける唯にツッコみ代わりに律がスティックを投げ、唯の後頭部に命中させる。

「はよ始めんかい！！」

更に言葉でもツッコミが届く。

俺は一つ溜め息を吐き出すと

「それでは聴いてください、ふわふわ時間！」

〃

俺たちの演奏が始まる。

が、なかなか歌詞を歌わない唯。

「（唯、歌忘れてるぞー！）」

漣が小声で唯にツツコむと、唯は漸く思い出すが視線を辺りに巡らせるだけだった。

溜め息を吐き出し漣に視線を送り頷く。

漣が唯の代わりに歌い出すと、唯も思い出したように一緒に歌い始める。

〃

歌い終わった唯がすぐさま律の方へ振り向き頷く。

律もその合図と共にスティックを鳴らし次の曲に入る。

〃

演奏しながらも客席を見る余裕のある俺は視線を客席へと向けてみ

る。

祭と綾とはすぐに目が合うが、その隣に中野と憂ちゃんが居た。

恐らく今来たのだろう、少しばかり二人共息を切らせていた。

一瞬だけ驚いた表情を浮かべるも、俺はすぐに視線を戻し演奏に集中する。

〃

2曲目も演奏が終わると

「次の2曲はボーカルが代わります、それじゃカケちゃんよろしくね」

マイクを通じて唯が言葉を紡ぐが、最後の「カケちゃん」の部分を聞き俺は溜め息を吐く。

俺は律に合図を送ると、先ほどと同じように律はスティックを鳴らし3曲目が始まる。

〃

一度深呼吸をし、俺はマイクを通じて歌い出す。

〃

歌い終わり、ふう、と一息つき一度深呼吸をする。

若干額に汗が滲むが、それを拭う事もせず律へと合図する。

（ ）

すぐさまドラムの音が聞こえ俺たちは演奏を始める。

（上手く歌えるといいがな……）

心の中で小さく呟くと俺は苦笑いを浮かべる。

が、すぐに切り替え深呼吸をし歌い出す。

（ ）

演奏が終わると全員で一礼をする。

そのまま幕が降りてくると澪が歩み寄り

「大丈夫か？」

声をかけてきた。

「ああ、大丈夫」

ギターを下ろしケースに戻すと、澪が手を差し出してくる。

クスッと笑い澪の手を取るとそのまま俺たちは部室に戻る。

新歓ライブを終え、部室にて新入部員及び仮入部員を待っていたが、来たのは祭と綾と憂ちゃんだけだった。

律たちは軽く溜め息を吐いていたが、俺は何故か新入部員が来ると予感がしていた。

今日はこのまま帰るといふ事になり、俺と漑と律と祭という面子で帰宅していく。

綾と唯と憂ちゃんは買い物、ムギは既に迎えの車が来ていたので校門で別れた。

和は未だ生徒会の用事のため学校に残っている。

「あ、そつだ。カケ、今日のニュース見たか？」

帰宅途中、不意に律が何かを思い出したように声をあげ俺に質問をしてくる。

「何だ？」

ニュースは当然見ていないので何の事が検討もつかない俺は、律に尋ね返す。

すると律はニヤリと笑みを浮かべ

「今日から一夫多妻制が制定されたってニュースをやってたんだよ！」

そう高らかに宣言した。

その言葉に流石に俺も驚いた、勿論漑と祭も。

俺はポケットから携帯を取り出しワンセグを起動させる。

映し出されたニュースの画面には確かに律の言葉通り、一夫多妻制が制定されたと発表されていた。

それだけを確認すると携帯を閉じポケットへ放り込む。

「約束、守ってくれるよな？」

未だ勝ち誇ったような表情を浮かべる律の言葉に、俺は苦笑いを浮かべる。

俺は一度澪に視線を向けると、澪がクスッと笑い小さく頷いた。

恐らくは了承の意だと考え

「ま、約束だから……。いいぜ」

俺も澪同様にクスッと笑い答える。

こうして律も澪同様に俺の彼女となった。

その答えを聞いた律は我慢出来なかったのか俺に抱きついてきた。しかも頬擦り付きで。

律の様子を見て俺と澪は苦笑いを浮かべる。

それから20分後、漸く律が離れそれぞれ帰宅していった。

新歓ライブから1週間後、未だに新入部員は来ていない。

「うーん……、誰も来ないなあ……」

「ライブ上手くいったと思ったのに！」

「やっぱり軽音部って人気無いのかな……？」

上から順に律、唯、漑である。

俺は3人の様子を見ては溜め息を漏らす。

「あのー……皆さん」

不意にムギが言葉を紡ぐ。

「そんな目で見てたら来るものも来ませんよ？」

そんな目、というのは律たちの威圧するような目でジーンと見ているのである。

律たちはムギに注意されるとこちらへ戻ってくる。

「こうなったら憂ちゃんを拉致るしか！」

律がそんな事を言い出す。

「拉致とか言うな」

漑が素早くツツコむと、不意に扉が開いた。

「あのー、軽音部ってここですか？入部希望なんですけど……」

そこに居たのは中野だった。

中野の発言を聞いた漣、唯、ムギは嬉しそうな表情を浮かべるが

「確保ー！！！」

律が中野に飛び掛る。

「ぎゃー！！！」

中野は本気で後退りする。しかもツインテールを器用に上に上げて

しかし、あっという間に律に捕まる。

はぁ、と一つ溜め息を吐き出し

「そこまでにしとけ、律」

律と中野を引き離す。

中野は漸く俺に気付いたのか驚いた表情を浮かべている。

「カケだってわかるだろ！？待望の新人部員だぜ！？しかも何気に私より胸大きいし！！」

律は興奮気味に俺に尋ねてくる。最後のはあえてスルーしたが。

「「わかったから落ち着け」」

自然と俺と漣のツツコミがハモる。

俺は中野に視線を向けると、中野は俺に一礼してくる。

「お久しぶりです、翔先輩、漣先輩」

中野の挨拶に俺と漣を除いた全員が驚いていた。

「カケ、どういう事だ？」

律が俺に尋ねてくるが、俺は溜め息しか出さない。

「その前に色々やる事があるんじゃないのか？」「部長」「よ」

俺があえて「」の部分を強調しながら尋ねる。

「はっ、そうだった！」

漸く思い出した律は唯と共に

「お名前はなんていうの？」

「あ、中野……」

「パートは何やってるの？」

「あ……えっと……」

「誕生日は？」

「血液型は？」

「好きな食べ物は何？」

上から唯・中野・律・中野・唯・律・唯の順である。

中野は目が点になったような表情を浮かべている。

「落ち着けお前ら」

再び俺と澪のツツコミがハモる。

中野を質問攻めから解放すると中野は深い溜め息を吐いた。

「えっと、1年2組の中野梓といいます。パートはギターを少し…」

「お、唯とカケと同じパートだな」

パートを聞いた律が俺と唯に告げてくる。

「よろしくお願いします、唯先輩、翔先輩」

俺はいつものように返すが、唯は先輩と呼ばれてトリップしている。

「おい、帰ってこーい」

律がツツコミが、帰ってはこなかった。

結局唯がトリップから戻って来たのは5分後の事である。

「とりあえず何か弾いてみせて」

そう言うとき唯は自分の愛用しているギターを中野に手渡す。

「まだ初心者なので下手ですけど……って重いっ」

中野が謙遜したように言葉を返し、ギターを構え一言漏らす。

「大丈夫！私が教えてあげるから！」

唯は自身の胸元と右手で叩きながら告げる。

「お、早くも先輩風吹かせてるな」

澪が感心したように告げる。

「それじゃ……」

準備が整った中野が一言告げギターを弾き始める。

が、ギターテクは俺よりも上じゃないかと思えるほど上手く、全員言葉を発する事が出来なかった。

演奏を終えた中野が俺たちに気付く

「あ、あれ？」

言葉を発するがしーんとした空気に何を考えたのか

「ごめんなさい、やっぱり聞き苦しかったですよね……」

中野が俯きながら呟く。

「あ、いやそういうわけじゃ……」

慌てて澪がフォローしようとするが

「ま、まだまだだね!」

見栄を張った唯が腕を組み告げる。

すかさず律が唯の近くまで行き左肘で唯をつつき

「(いつまで見栄張ってるんだよ!)」

小声で唯に告げていると

「私、もう一度唯先輩のギター聞きたいです!」

中野が目の前まで来てワクワクした表情で告げてきた。

「あー……、えーっと……」

唯は視線を部室内に巡らせると

「ライブのせいでギックリ腰になったからまた今度ね!」

唯は腰に手を当てながら答える。

はあ、と溜め息を吐いていると律が唯を退かし

「と、とにかく入部してくれるって事でいいんだよね？」

中野に尋ねた。

「はい！」

律の言葉に即答で答える中野。

「新歓ライブのみなさんの演奏聴いて感動しました！これからよろしくお願いします！」

中野は満面の笑みを浮かべそう付け足し答える。

「うっ……眩しすぎて直視出来ません……」

唯は両手で目を覆い小刻みに震えながら呟く。

「それじゃ、入部届受け取ったから明日からよろしくね！」

律の手には入部届らしき紙を握っている。

「はいっ！それじゃ失礼します」

中野がまたも即答で答え、そのまま部室を後にした。

唯も笑顔で見送っていたが、中野の姿が見えなくなった頃に

「わ、私どうしよう……」

本気で焦ったような表情で律に尋ねる。

「練習しとけ」

至極真つ当な事を唯に告げる律。

「カケちゃん、またギター色々教えてくださいっ!!」

すかさず俺にギターを指導するよう懇願する唯に溜め息を吐く。

一抹の不安を覚えつつ俺は唯にギター指導を始めることにした。

く第26話く（後書き）

エタ「というわけで、律も恋人となりました！」

翔「これで二人目……、おい作者、まだ増えるのか？」

エタ「一応後一人か二人の予定」

翔「一度その頭、カチ割ってもいいか？」

エタ「ダメに決まってるだろ」

翔「はあ……」

エタ「それと報告がございます」

翔「報告？」

エタ「うん、アンケートを集計した結果、1のストーリーで進行します」

翔「ああ、1年後祭が消滅するかしないかでアンケート取ったな」

エタ「忘れてたのかよ！？まあそういう事」

翔「つか、ちょっと早すぎたんじゃね？」

エタ「いいんだよ、これくらい早いほうが」

翔「構成は頭に浮かんでるのか？」

エタ「勿論。ただ、祭消滅の期限までが長くて、読者様が覚えてるかどうか……」

翔「だから無計画と言われるんだな」

エタ「orz」

翔「それでは、感想などございましたらお待ちしております、それではまた次回」

く第27話く（前書き）

エタ「漸く書きあがった……、お待たせしてしまい申し訳ありませんでした!!」

翔「で、4ヶ月もかった割りに内容があれな気がするが?」

エタ「言つな……、そして聞くな……」

翔「はあ……」

エタ「とりあえず今回は原作に沿ったところは薄サイドのみです、後は完全オリジナル＋バトルです」

翔「最後には何があるんだ?」

エタ「今言つ事じゃないね、とにかく27話です、どうぞ」

翔「ところで聞くが、次はいつだ?」

エタ「ほんつと未定です……、とにかく早く書ければ、と」

翔「ダメだこの作者、早く、何とかしないと」

〈第27話〉

〈澪サイド〉

梓が軽音部に入部した翌日

「こんにちはー！」

梓は上機嫌でギターケースを背負い部室にやってきた。

「お、元気だなー」

私と話していた律が梓に気付き振り向きながら挨拶を返す。

すると不意に梓は辺りを見回し始めた。

「どうした？」

気になった私が声をかけると

「いえ、翔先輩の姿が見えないんですが……」

小さく呟くように答える梓。

「そっいえば翔のやつ、放課後になるなり居なくなっただな」

先ほど、教室から飛び出すように出て行った翔を思い出し一言漏らす。

翔が何をしているのか気になったが、無断で部活を休む事は無いと考えたのだろう

「それじゃ早速……」

律が声をあげる。

梓は何やら目を輝かせているのはあえてスルーする。

「お茶にするか」

予想通りの律の言葉に梓を除いた全員がそそくさと自分の席に着く。

私たちのティータイムの事など知らない梓は驚いた表情を浮かべている。

「あ、あの……、部室でこんな事してて大丈夫なんですか？」

梓が恐る恐る抱いた疑問を律に尋ねるが

「あー、大丈夫大丈夫」

律はそれを軽く流す。

「にしてもカケのやつ、部活放置してどこ行ったんだろうな。戻ってきたら尋問だなこれは」

ぶつくさと律が愚痴(?)を漏らすと、私は苦笑いを浮かべてしまふ。

（なんだかんだ言いながらも、律も翔の事心配してるんだな……）

律の様子を見た私がそんな事を考えていると、不意に部室の扉が開く。

私たちは一斉に扉の方を向くと、そこには山中先生が立っていた。

「あ」

山中先生は一言発すると、スタスタと真っ直ぐ私たちの方へと向かってくる。

「あ、あの、これはその……」

梓がしどろもどろになりながら言い訳を探しているが、山中先生はいつもの席に座ると

「私、ミルクティーね」

いつものようにムギにミルクティーを頼んだ。

梓はその光景にただただ驚くばかりで、何も言えない状態になっていた。

私たちは状況に全く付いていけない梓を取り残している事を忘れ、ティータイムを楽しんでいた。

すると梓は不意にギターケースから一本のギターを取り出す。

梓はそのギター ムスタング を構えるとピックを持ち、その

まま弦を弾こうとする。

その瞬間、不意に部室の扉が弱々しく開かれた。

私たちは一斉に扉の方を向くと、そこに居たのは扉に背を預け真つ白なロングコートが血で紅く染まり切り刻まれたようにボロボロで血塗れの翔の姿だった。

く翔サイドく

少しばかり時を遡り放課後になった直後の頃。

H Rも終わり俺は何気なく外を見ると、一台の白のジムジンが止まっていた。

他人からすれば車の、それも高級車が止まってる、程度にしか捉えないだろうが俺は違った。

その車には見覚えがあり、俺としては最も会いたくない奴らの車だったからだ。

（っ、恐らく目的は俺か……）

心の中で舌打ちをすると鞆から必要な物だけを取り出し教室を飛び出した。

昇降口で靴を履き替えるのも手早く済ませ、俺は一気に校門へと駆け抜ける。

幸いにも放課後になったばかりで下校する生徒は少なかった。

俺が校門へと駆けるのを見たのか車の窓が少しばかり開き、中から黒い何かが少しばかり顔を覗かせた。

勿論照準は俺に狙いを定めていた。

（相変わらず本気なのかよ、こいつら……）

走り続けながらも一度心の中で愚痴をこぼすと

『翔、上！』

不意に脳内に響いたルリエルの声の意味を瞬時に悟り、俺は走りながら足に力を込める。

俺が跳躍をするのとはほぼ同時に、車の方から『何か』が飛んでくる。俺はそれをギリギリのところかわすとその『何か』は近くにあった木に衝突する。

すると衝突した木は『何か』によって一瞬で消滅した。

（冗談じゃねえっつの……、何が悲しくて消滅弾なんて食らわなきゃならねえんだよ……）

空中に飛び上がりルリエルの力を解放しながら木が消滅した事を見ながら心の中で一言漏らす。

『翔、とにかく人気の無い場所まで』

ルリエルにも焦りの色が浮かんでいるのか、言葉に余裕が無かった。

『ああ、いきなりだが3段階で行くぞ』

俺の言葉にルリエルは無言で返す。

俺とルリエルの間ではルリエルが無言の際は了承の意と取る事になっているのである。

普段は1対2枚の翼で済ませているが、今回のような場合のみ3対6枚、もしくはそれ以上の翼を出す事を許可してくれる。

因みに俺の翼には5段階まであり、1段階・2段階はバランス型、3段階はスピード重視の型、4段階はパワー重視、5段階は魔法重

視という組み合わせになっている。

6段階解放も存在するらしいが俺は一度も解放した事は無い。

俺はいつもの真っ白のコートを羽織り翼を生やすと一気に飛び立つ。

すぐさま車も俺の後を追いかけてつつ俺へと消滅弾を連射してくる。

飛行しつつ消滅弾を回避し、時折振り返り対消滅の魔法を施した氷剣で消滅弾を弾き返す。

学校から飛び続け、俺は5km離れた平原へと降り立つ。

そこには俺を追いかけてきた車と同じ車は何台も停車していた。

その中央に一人の男が立っていた。

「久しぶりだね、翔君？」

その男が俺へ声をかけてくる。

「相変わらず俺を消滅させようとしてやがるみたいだな」

俺は皮肉を込めた一言を返すと、男はクツクツと笑う。

「それもそうさ、キミが僕たちに協力しないと言ったあの日から僕たちの障害にしかならないと判断したからね」

男の言葉に俺は溜め息を吐き出すしかなかった。

「俺はお前らのようなやつらに手を貸す事もしたくねえからな」

俺の言葉を聞いた他の男たちは拳銃を俺へと向ける。

恐らくあの拳銃にも消滅弾がいくつも入っていると思われる。

「これ以上話しても時間の無駄だね……、今度こそケリをつけようか」

それだけを告げると男は大剣を構えるポーズを取る。

その手には風を纏っているのが見えた。

『暗聖剣バルムン……、かなり厄介ね』

ルリエルの言葉に俺は自然と手に力が入る。

『初めて見る武器だが……、どんな武器だ？』

俺も知らない武器だったため、ルリエルに尋ねると

『詳しくは知らないけれど……、風の力を最大限に引き出せる上に使用者の意思によって形態が変化すると言われているわ。それに…

…』

ルリエルの言葉を聞いていた俺は珍しくルリエルが言いよどむ事に驚く。

『それに、どうした？』

その続きが気になりルリエルに尋ね返すと

『風を自由自在に操れる上に聖剣としても、そして暗黒剣としても使える、聖剣の中でも禁忌とされた剣よ』

ルリエルの言葉に俺は背筋に悪寒が走るのを感じる。

「さあ、始めようか」

男が言葉を紡ぎ終わると同時に目の前から姿を消す。

何とか視認出来るスピードだが、純粋な移動スピードで考えれば俺と同等かそれ以上の速さである。

次々と繰り出される攻撃に俺は何とか防ぐか凌ぐのが精一杯だった。

俺は隙を見て攻撃を防ぐと自ら距離を離す。

「おやおや、どうしたんだい？逃げてばかりじゃ僕は倒せないよ？」

あからさまな挑発に耳を傾ける事もせず俺は深い溜め息を一度吐き出す。

（本来は使いたくなかったが、仕方ないか……）

俺はある決意をするともう一度深い溜め息を吐き出すと

『……翔、これを使いなさい』

不意にルリエルの言葉が脳内に響くと同時に、右手には見た事もな

い剣が握られる。

『これは?』

無意識のうちにその剣をしっかりと握り締めたまま尋ねると

『本来なら使わせないと私が封印していたのだけれど、分が悪すぎるからこれを使うといいわ』

ルリエルの返答に俺は再度剣を見直す。

刀身は叩かれれば一瞬で折れるんじゃないか、と言わんばかりに細く、氷で作ってあるとは思えない程白い輝きを放っていた。

試しにと一振りすると、草原だった場所は徐々に凍りつき、辺りは白く染まっていく。

『対暗聖剣用の七神剣の一つ、神剣ルベリエよ』

俺がこの剣の名前を尋ねる前にルリエルが言葉を紡ぐ。

『なるほどな、これなら行けそうだ』

男を倒す唯一の光を見つけた俺が言葉を紡ぐと

『ただし、それを振るうにはそれ相応の対価を支払う事になるわ』

ルリエルから一言告げられた。

『それ相応の対価だと?』

俺は嫌な予感を覚えながらもルリエルに尋ね返す。

『七神剣全てには対価が必要となる、勿論その対価はその神剣によって異なるけど、私のルベリエは使用者の魔力と生命力を同時に対価として奪うわ』

ルリエルの言葉に俺の嫌な予感が的中し、俺は思いつき溜め息を吐き出す。

『諸刃の剣かよ……、だがこれを使わないとあいつには悔しいが勝てないからな……』

溜め息を吐くと覚悟を決め、眼帯を外し更に俺自身の持つ全魔力を解放する。

「ふむ、翔君も本気になったみたいだし、僕も全力で行かせてもらうよ！」

周りの銃を構えていた男たちが倒れていく中、余裕そうな男の言葉に俺は顔を上げ相手を見据え

「遊びは終わりだ」

いつもより声を低くし相手を威圧するように一言告げ構えを取る。

「ふふ、それは僕も同じさ。我が名は日下部くさかべれいじ霊次、お相手致す」

男の 霊次の言葉と構えに俺はルベリエと持っていた剣に魔力を纏わせ構える。

お互いに牽制していたが、俺の額から溢れた汗が顎から一滴零れたのが合図となり、俺と霊次は一気に間合いを詰め斬り合う。

「ぐ……」

暗聖剣の攻撃を防いでは攻撃を繰り返すが、防ぐのも限界はあった。魔力を纏わせた剣が徐々にひびが入り遂には砕け散ってしまったのだ。

剣が砕けたその一瞬の隙を見逃さなかった霊次は一瞬で25回程俺を斬り付けた。

更に神剣を扱う対価を常に奪われ俺の生命力も蝕まれ続け片膝を地につけてしまうも、ふらつきながらもすぐさま立ち上がり対峙する。

不思議な事に斬りつけられたにも関わらず俺を斬りつけた箇所からは血が噴き出さなかった。

すかさず負けじと俺も素早く反撃を繰り出す。

霊次は暗聖剣で攻撃を防ぐが、いくら暗聖剣といえど、流石に神剣の剣戟には耐え切れならしく徐々に霊次は動けなくなっていく。

お返しとばかりに俺は一瞬の隙を突き霊次の足元を蹴り上げ空中へと浮かせる。

「し、しまった!」

空中に浮かされた霊次は俺の行動を読んだが、時既に遅く俺の攻撃を防ぐ術が無かった。

何故なら空中へ浮かす際に霊次へと氷結触手束縛を撃ち込んだからである。

手足の自由はおろか、全身を縛り上げているため最早トレーニングと同じ扱いとなっていた。

「これで終わらせてやるよ」

一言告げると俺は霊次を下から何度も斬り付け更に上へと押し上げていく。

俺自身が決めた一定ラインまで押し上げた後、今度は霊次の眼前に移動しルベリエを使い乱れ斬りをお見舞いする。

徐々に降下しながらもなお斬り続け、ある程度下降したところで

「神剣一刀術奥義、ルベリエ・ランス「全てを貫く神氷の槍」！」

瞬時に右腕に極限まで力を貯めた突きを霊次の腹部へと叩き込む。

なす術無く霊次は突きによる加速度を加え地面へと叩きつけられる。

俺は羽を広げたままゆっくりと霊次が落ちた地面の近くへと降り立つ。

「……………」

霊次の姿を見て戦意が無いと判断した俺は暗聖剣を奪い取る。

『どうするの?』

ルリエルの声が聞こえると

『こつするまでだ』

俺は暗聖剣を地面に突き立て、神剣による乱舞を暗聖剣へと打ち込む。

すると暗聖剣は音も無く砕け散った。

『なるほどね』

ルリエルはその様子をジッと見つめ一言漏らす。

「さてと……」

あまり濡たちに心配をかけまいと思い飛び立とうとした矢先、神剣による命の侵食と切り刻まれた箇所からの大量の出血により再び片膝をついてしまう。

『怪我の程度が酷いわね……、それに神剣の代償も大きく影響してるし早く戻らないと危険ね』

ルリエルの言葉に俺は返事をせず傷だらけの身体を引きずり飛び立つ。

普段なら5分程度で着く距離だが、傷だらけと魔力不足という事も

あり正門に降り立つまでに20分以上かかってしまった。

至るところから血が溢れ指先や足を伝い地面に落ちていく。

しかし俺には考える間もなく何かに操られるように部室へと足を向けていた。

壁に背を預けたりしながらも15分かかけ漸く部室前の扉へと辿り着く。

幸いな事に俺が戻った時には下校する人はあまりおらず、誰にも見づからずここまで辿り着けた。

残った力を使い意識をギリギリまで維持し部室の扉を開ける。

部室の中では弱々しく開かれた扉を凝視するかのように5人の視線が集まっていた。

が、俺の姿を見た途端全員の顔色が一気に青褪めたようにも見えた。

（何とか戻ってこれたか……）

心の中で一言漏らすと部室の中へ一歩踏み出したと同時に、力尽きた俺はうつ伏せに倒れこんだ。

く第27話く（後書き）

エタ「何か前書きも後書きも書くのが久しぶりだ……」

ルリ「まあ仕方ないわね、投稿すらしてなかったし」

エタ「orz」

ルリ「そういえば祭ちゃんと綾ちゃんから伝言よ」

エタ「ん？」

ルリ「えーつと『何で私たち登場しなかったの！？後翔が瀕死って
どういう事！？』だそうよ」

エタ「綾と祭に関しては追々出てくるから待ってると、翔が瀕死に
なるのはそうしかっただけ」

ルリ「えー」

エタ「まあでも、28話では綾も祭も登場してもらっよ」

ルリ「あら、私は？」

エタ「とりあえず出るには出る、とだけ言っておく」

ルリ「ならいいわ」

エタ「さて次回は、翔は生と死の狭間でとある方と会話をしてもら

います。現実世界では溲たちにも色々してもらいます」

ルリ「因みにその生と死の狭間のとある方って言うのは、私と馴染み深い人物だったりする？」

エタ「ある意味ではね、でも馴染み深いというほどでもないかも」

ルリ「そう」

エタ「まあ天使の一人、とだけ言っておくよ」

ルリ「私に全く馴染み無いような気がするのだけど？」

エタ「いやいや、意外とあずかり知らぬところで馴染みがある、という事にしておいてくれ」

ルリ「ダメだこいつ、早く、何とかしないと」

エタ「お前まで言うな」

ルリ「それでは今回はこの辺りで」

エタ「次回も投稿は未定ですが、完成次第投稿しますので楽しみに、それでは！」

〈第28話〉（前書き）

エタ「今回は意外と早く完成した」

漣「どうしてまた？」

エタ「本来なら4回ぐらい翔視点と漣視点の切り替えを混ぜた28話にしようと思ったけど、それだと読者様が萎えるかなーと思って」

漣「私には詳しい事はわからないが、視点切り替えは少ないほうがいいな」

エタ「そう言う事、しかも今回は漣サイドから始まるし」

漣「やっぱり私からか……」

エタ「それでは28話です、どうぞ」

漣「そういえば翔復活はいつだ？」

エタ「29話かな」

〈第28話〉

〈澪サイド〉

翔は一度私たちを見た後、血塗れのまま床に倒れこんだ。

「か、翔!？」

はつとした私はすぐさま翔の元へ駆け寄る。

私の行動に皆も遅れながらも翔の周りに集まる。

そつと手を伸ばし翔に触れると、手の平に生暖かい感覚を感じた私は、翔から手を離し手の平を見る。

「ひっ……」

先ほどまで触れていた手の平には血がべつとりと付着していた。

それを見た私は恐怖のあまり言葉が出なくなる。

「と、とにかく救急車だな、さわちゃん早く!」

律がすぐ近くで声を上げると、さわ子先生は携帯を取り出し電話をかけようとする。

『お待ちなさい』

すると翔の近くからルリエルさんが姿を現した。

梓とさわ子先生はルリエルさんと会うのは初めてのため、吃驚した表情を浮かべている。

「い、今、どこから出てきたんですか!？」

「幽霊？」

上から順に梓・さわ子先生だ。

「そ、それより待ってってどういう事ですか？」

私は焦りながらもルリエルさんに尋ねてみた。

『言葉通りの意味よ、翔を医者に診せたところで翔の傷は治らないわ』

ルリエルさんの言葉に皆絶句していた。

「ど、どういう事ですか？」

実体を掴めないとわかっていてもルリエルさんの目の前まで移動し尋ねてみた。

『翔の受けた傷は普通の刃物なんかじゃない、簡単に言えば闇の力を纏った刀によってつけられた傷よ。そしてそれを治す方法もあるけれど……』

ルリエルさんはそこまで言つと言葉を詰まらせる。

「あるけれど……なんですか？」

その先が気になった私は続けて尋ねてみる。

『……その薬の材料を翔が持っていれば、の話になるわね……。材料さえあれば薬の生成方法は私が指導するわ』

ルリエルさんの言葉を聞いた私たちは一度顔を見合わせ頷き合つと、律が部室を飛び出し教室へと向かう。

続いてムギと唯も部室を飛び出す。

私と梓、さわ子先生の3人で翔を長椅子の前に横たわらせ律たちの帰りを待っていた。

律たちが出て行ってから5分もしないうちに3人が帰ってくる。

その後ろには綾ちゃんと祭ちゃんも居た。

唯とムギの手にある包帯や消毒液等を見た私はすかさずそれを受け取り、翔の傷口を手当てし始める。

「カケの鞆持ってきたけどどうすればいい？」

律はルリエルさんに向かい行動を尋ねていた。

『その中に特殊な薬草が常備されてるはずよ、探してもらっていいかしら？』

ルリエルさんの言葉に律はすかさず鞆の中を探し始める。

「翔に何があつたの？」

綾ちゃんが手当てしている翔を見ながら尋ねてきた。

「わからないけど、部室に来た時にはこうなってたんだ」

私は手当てする手を緩めることなく答える。

すると祭ちゃんは翔の近くまで歩み寄ると、そつと左手を持ち上げた。

何をするのかと横目で見ながらも手当ては続ける。

「……ダメ、翔の脈が無い……」

祭ちゃんが一言漏らすと次は首に手を当ててみるが、やはり同じらしく首を振る。

流石にその一言に私たちは絶句してしまう。

『まだ手はあるわ、律さん、翔の鞆から薬草は見つかったかしら？』

私たちの気持ちを汲んだのかルリエルさんが律に声をかける。

「あ、ああ……、これか？」

いつもの律らしさは身を潜めていたが、翔の鞆から小さな葉っぱのようなものが出てくる。

『あつたわね……、今から律さん、紬さん、唯さんにそれを調合してもらうわ、指示は私が言う通りにしてくれればいいわ』

少しばかりルリエルさんの声に安堵の色が混じる。

「ああ、どうすればいいんだ？」

律も徐々にはあるがいつものらしさが戻る、が、私はそんな余裕も無く無我夢中で翔の体を止血していく。

（翔……、戻って来てくれ！）

私は、いや、私たちはただそれだけを願っていた。

『時間もあまり無いからすぐ始めるわよ、まずは

』

く翔サイドく

俺が目を開くとそこは一面真っ白な世界だった。

以前零の誕生日パーティーを行った際に、一面銀世界を見たのと同じか、それ以上に綺麗なほど真っ白だった。

「ここは……どこだ？」

ゆっくりと起き上がり適当に散策しながら一言呟いてみる。

しかし当然といえば当然だが、誰も居ないため返事などはなかった。

どれくらい歩いたかわからない、ただひたすらに前へと進む。

「貴方が神藤翔ね？」

不意に背後から声をかけられ俺は警戒しながらも振り返る。

そこには白いローブを着ている上に、3対6枚の純白の翼を生やした女性が佇んでいた。

「……あなたは？」

未だに警戒を解かず俺が尋ねてみると、その女性は苦笑とも取れる笑みを浮かべる。

「私はガブリエル、大天使ガブリエルよ」

その名前を聞いた時、俺は祭が転生した際の事を思い出す。

「あんたが祭を転生させたガブリエルか？」

俺の問いかけにガブリエルは頷いた。

「俺は死んだのか？」

更にもう一つ質問するとガブリエルは

「いいえ、ここは生と死の狭間、生きるも死ぬも貴方の思いと現世に残してきた人たちの思いが左右する場所」

微笑みを浮かべ答える。

「ですが、貴方にはどうやら生の道しか選べないようね？」

ふとガブリエルの後ろを見てみると、巨大な扉のようなものが聳え立っていた。

「これは転生の門、この扉をくぐれば現世に戻るわ」

その言葉にホッとするが

「ですが、貴方をこのまま帰すわけには行きません」

ガブリエルの一言に少し驚いてしまう。

「……どう言うつもりだ？」

身構える俺にガブリエルは微笑を浮かべたまま

「簡単な事ですよ、貴方に更なる力を授けますが、方法は二通りです」

戦闘では無いと聞かされるが、二通りの方法というのが引っかかってしまう。

「1つは簡単に言えば私にキスをしなさい、という事」

いきなりのガブリエルの発言に俺は驚きを通り越して溜め息をこぼしてしまう。

「何ですか、その溜め息は？」

ガブリエルがジト目で俺を睨みつけてくる、良く見るとガブリエルの頬はうつすらと赤くなっている。

「……んで、2つ目は？」

俺はあえて何も言わず次の提案を尋ねてみる。

「2つ目は私と完全なる契約を、つまり貴方の魂と同化しているルリエル同様に私も住み着くというものだけど……」

ガブリエルは伏せ目がちに言葉を区切る。

「貴方は今、ルリエルの魔力暴走が時折来るのを経験済みよね？」

不意にガブリエルから質問を投げかけられた。

「ああ、今では慣れたが初めて暴走した時は止めるので精一杯だったな」

俺が答えるとガブリエルは申し訳なさそうな表情で

「それに加え私の魔力暴走が加わる事を想像してみてください」

そう言われ軽く想像してみるが、すぐに答えに辿り着く。

「あんたを取り入れた場合、最悪いつか身を滅ぼす、とでも？」

俺の問いかけにガブリエルは頷いた。

「勝手に決め付けられても困るな、俺にはやらなきゃならねえ事が沢山あるしな」

ガブリエルの頷きを俺は一蹴し答える。

「そのやらなければならぬ事とは……彼女たちを守ることかしら？」

そう尋ねるガブリエルは魔法陣を展開し、現世の様子を映し始めた。

そこに映っていたのは俺の体の傷を必死に手当てをしている澪や何かを作っている律たちの様子が映し出された。

その映像を見て俺はクスッと笑い

「ああ、それもあるかな」

一言答えると、ガブリエルから

「では一番の要因は何かしら？」

まるで慈愛に満ちたような口調で尋ねてくる。

「俺は元の世界へ戻る術を探してる、が、一向に見つからなくてあの世界に残っている」

俺のやらなければならぬ事の要因を語ると、ガブリエルから

「では元の世界へ戻る術があれば彼女たちはどうするのかしら？」

その問いかけに俺はすぐには答えが出なかった。

沈黙する俺を見たガブリエルは

「そこが一番重要よ。確かに貴方の持つ力、そして神の魂を持ちあ
の世界には無い異質な力を持った人間なんて貴方一人だけれど、彼
女たちにしてみたら貴方はたった一人しかないのだから」

優しく微笑み諭すように告げてくる。

「さて、長々と話したけれど本題は私の力をどういう手段で得るか、
に戻るわね？」

ガブリエルの言葉にハツとした俺は顔を上げる。

「この場でキスをするか、あるいは私の魂を持ちこれからを生き抜くかのどちらかよ？」

私としては前者をお勧めするけどね？と付け足しガブリエルは俺の返答を待つ。

暫く俺は考え込んだ後に答えを導いた。

〈第28話〉（後書き）

エタ「漣たちの迅速行動に驚いてます」

律「アイコンタクトで済むからなあ……」

漣「ムギも唯も何も言わずに包帯やら取ってきたし……」

エタ「祭は翔の脈測ってたけど、綾は何もしてないよな」

律・漣「あはは……」

エタ「とりあえず予定では29話で翔が復活します」

漣「今回はどうなるんだ？」

エタ「まだ構想が頭に浮かんで無い」

律「ところで作者」

エタ「何だ？」

律「カケは最後、どっちを選んだんだ？」

エタ「それも次回、今言うのは癪に障るからね」

律「ちえー（・3・）」

エタ「次回投稿はまだ未定です……、近いうちに投稿出来ればと考

えています」

漣「だらしないやつだなあ……」

エタ「言っくんじゃねえorz」

律「それじゃこの辺りで引き上げるか」

エタ「だな、それではまた次回」

く第29話く（前書き）

エタ「ちよつと時間かかったけど29話完成」

翔「珍しいな」

エタ「まあ色々だね、ともかく相変わらずグダグダなのは否めない」

翔「まあそれが作者だしな」

エタ「……29話です、どうぞ」

翔「無視か！」

〈第29話〉

〈澪サイド〉

『それでいいわ、後は完成したその薬を翔に飲ませて暫く様子を見ないと……』

不意にルリエルさんの言葉が聞こえ私たちは一斉に律の方へ向く。

律はゆつくりと私たちの方へ振り返り私と視線が合うと頷いた。

私の隣に来た律は少し開いた翔の口へ完成した薬を流し込む。

「これでいい……んだよね？」

視線を翔に向けたまま律が声をあげる。

『ええ、お疲れ様でした、律さん、紬さん、唯さん』

ルリエルさんは律たちを労うと宙に浮いたまま私の近くまでやってくる。

『そして澪さんたちもお疲れ様、私は少し席を外すわね？』

それだけを告げたルリエルさんは、瞬きすると同時に消えていた。

それから私たちは何をしていいのかわからず、思い思いに翔が復活するのを待っていた。

しかし、1時間経つても、2時間経つても翔が復活する様子はなかった。

「……なあ、いくらなんでも遅くないか？」

背後から律が私に声をかけてくる。

「ああ……、暫く様子を見ないと言ってたけど、流石に遅すぎるよな……」

床に横たわらせた翔の傍に座り込み翔の手を握る。

が、未だに反応はないが、ルリエルさんの言葉を信じて私は待ち続けた。

「こうして見るとカケって意外とこういう時の顔は可愛いんだな」

不意に律が私の隣に座り込み翔の顔を覗きこんでいる。

（そっか、律にはまだ寝顔見られてなかったんだ……）

私は心の中で呟くと律には申し訳ないが密かな優越感を味わってしまふ。

「あれ？」

長椅子に座っていた唯が不意に声をあげる。

「どうした？」

私が唯に尋ねると、唯は翔を指差し

「カケちゃんの身体、今一瞬光ったと思うんだけど」

唯の一言に私たちは吃驚しすぐさま全員が翔の元へと集まる。

注意深く翔の身体を見ていると、確かにうつすらとはあるが光を帯びている。

「これって……？」

私の疑問に誰も答えれるはずもなかった。

しかし、私たちはこの光は翔が復活する光だと信じ全員で翔の手を握った。

私たちはアイコンタクトも交わさなかったにも関わらず

「……………翔、戻って来て！」……………」

と一言叫んだ。

「ルリエルサイド」

漣さんたちの元を離れ私は生と死の狭間へと向かっていた。

「はぁ……、翔には呆れるばかりね……」

自然と溜め息をこぼし宿主である翔の愚痴を漏らす。

（確かにあの戦いは生身の人間なら死ぬ程ではあるけれど、翔は違うのに何故……？）

愚痴を漏らしながらも些細な疑問を抱いていると、程なくして私は生と死の狭間へと到着する。

暫く辺りを浮遊し続けると見慣れた翔の姿とガブリエルの姿を見つける。

が、二人は密着とまでは行かないもののかなり間近まで接近していた。

私はその意味をすぐさま理解すると、ガブリエルとの契約を終えるのを待った。

すると二人はどちらからともなくゆっくりと離れた。

（どうやらガブリエルとのキスは終わったみたいね）

そう直感で判断した私は二人に近付き

「相変わらずね、ガブリエル？」

まずはガブリエルへと声をかけた。

するとガブリエルはゆっくりと振り返り

「……相変わらず神出鬼没ね、あんたも」

挨拶代わりに一睨みする。

「……ルリエル」

翔は相変わらずな感じで私に声をかけてくるので

「……貴方を迎えに来たのよ、翔」

溜め息を一つ吐き来た理由を述べる。

私と翔のやり取りを見ていたガブリエルが

「翔には私の力の一部を分け与えたわ、後は知恵の書で覚えなかった魔法も、属性も全て習得出来るようになってるはずよ」

ただし、魔法も属性も徐々に身に付けていくようになるけれどね、と付け足し告げてくる。

「そう……、ここは素直に礼を言うわ、ありがと」

私が礼を言つと

「やめてよ、あんたに礼を言われると寒気がするわ」

ガブリエルは憎まれ口を叩くが、その口元は嬉しそうに笑みを浮かべていた。

（素直じゃないわね、ガブリエルも）

心の中で呟くと私は翔を見やり頷く。

翔もその意図を理解したように頷き

「んじゃガブリエル、転生の門を開いてくれ」

ガブリエルに告げると、ガブリエルは頷く。

「開け、転生の門よ」

その一言で転生の門が開き始めていく。

完全に扉が開かれると同時にガブリエルは翔を見据え

「私が先ほど尋ねた一番重要としている質問の意味、そしてその答えを貴方は必ず導かなければなりません」

一言告げると、翔はクスツと笑い

「ああ、どれほどの時間がかかるかわからないが、必ず導いてやる。俺たちにとってどういう結末かはわからないがな」

はつきりと答えを返すと、ガブリエルは満足そうに頷く。

「ではお行きなさい、そのルリエルを引き連れてね」

最後に私を一瞥した後ガブリエルが言葉を発する。

「あら、連れないわね？折角200年振りの再会だというのに」

私はその言葉に少しばかりの嫌味を込め答えを返す。

「……まあいいわ、早く行きなさい」

ガブリエルは何か言いたげだったが、それを押し殺し転生の門を差し告げる。

翔と私は揃って門の前に立つと、不意に翔が振り返り

「ガブリエル、色々世話になったな」

一言告げると同時に私の手を引き転生の門へと飛び込んだ。

「……貴方たちに神の加護があらんことを」

ガブリエルは門が閉じる直前に一言呟いたのは私たちは知らなかつ

た

。

「翔サイド」

転生の門をくぐり抜けると、暖かな光が俺たちを包み込んだ。

その光の中で俺は目を閉じるが、瞼の中にまで光が包み込む。

光が徐々にその力を失い遂には辺りが暗くなる。

そして俺はゆっくりと目を開ける。

『お帰りなさい、翔』

不意にルリエルの声が聞こえると同時に

「……………翔!」……………」

漣たちが俺を覗き込みながら声をかけてくる。

どうやら現世に戻る事に成功したようだ。

が、流した血の量と魔力を切らしているせいか上手く動く事が出来なかったが

「……………済まないな、皆に迷惑かけちゃったみたいで」

一言何とか発すると全員安堵したのか溜め息を吐き出す。

「まったくだぜ、いきなり力ケ血だらけで倒れるしさ?」

両手を後頭部で組みながら律が溜め息+ジト目で俺に声をかけてくる。

「色々あつたんだよ……………」

律の言葉に反論しながらも起き上がろうとすると、完全に傷口は塞がっていないらしく痛みが全身を駆け抜ける。

その痛みに顔をしかめるが一瞬でその表情を戻すが

「無理するな、翔。もう少し横になってて」

頭上から聞こえる声に視線を送ると、漣の顔が見えた。

どうやら俺は漣に膝枕されているらしい。

俺は漣の言葉に甘え寝転がる。

「律、悪いが俺の鞆を取ってくれないか？」

律は俺の言葉に頷くとすぐさま鞆を持ってきた。

「サンキュ、確かこの中に……」

律に一言礼を述べると俺は手探りで鞆を漁る。

一通り鞆の中を探し俺が取り出したのは小さな小瓶を2つ。

「何だそれ？」

予想通りの律の質問に苦笑いを浮かべつつ

「これは魔力回復用の薬で、もう一つは体力回復用だ、と言ってもすぐに効くが本当に少ししか回復しないからな……」

それだけを答えると蓋を開け両方を飲み干す。

俺は試しに手をグツと握り力を込め、その手を開いてみる。

それを何度か繰り返す

「やっぱいつも通りまでには当分かかりそうだな……」

俺は小さく溜め息を吐きながら呟く。

「あー、翔先輩……？」

おずおずと中野が俺に声をかけてきた。

「どうした、中野？」

俺が尋ね返すと中野は溜め息を吐き出し

「梓でいいですよ、先輩」

と告げてくる。

俺もその意図を汲み取り

「どうした、梓？」

もう一度尋ね返す。

「先ほど、幽霊みたいなのが見たんですが……、あれって何なんですか？ 妙に翔先輩の事知ってるみたいでしたが……」

梓の質問に俺は直感でルリエルの事だと判断し

「ああ……、ちょっと待ってろ。出て来いルリエル」

俺は一言告げゆっくりと立ち上がるとルリエルを呼び出す。

『皆さん、先ほどぶりですね』

ルリエルは開口一番にそう告げる。

「やっぱり幽霊にしか見えない……」

梓の呟きに事情を知っている俺たちは苦笑を漏らす。

因みに祭も綾も俺の中にルリエルが居るというのはずいぶん昔から知っているので割愛させてもらう。

『幽霊と似たり寄ったりですね、私の存在は魂のみなので』

俺が話す前にルリエルは自身の口から説明する。

「翔先輩とはいつからの付き合いなんですか？」

梓がすかさずルリエルに質問すると

『そうねえ……、正確には覚えて無いけれど、異世界で過ごした年数も加えればざっと1900年の付き合いかしら？』

ルリエルの言葉に流石の漣たちも絶句する。

無理もない、大方良くて20年ぐらいかと思っていただろうが、それを遥かに上回る1900年と聞かされれば絶句するのも頷ける。

「翔、結構長い間生きてるんだな……」

漣は苦笑いしながら俺に言葉をかけてきた。

「そうでもないさ、異世界では100年で1つ歳を重ねるからな」

俺の言葉に漣は再び苦笑いすると、俺たちのやり取りの最中

「翔先輩、異世界というのは……？」

「翔君、説明してくれないかしら？」

梓と山中教師がずっと俺に顔を近付け説明を求めてきた。

俺は溜め息を一つこぼしこれまでの経緯を話す事にした。

説明の最中に律が茶化して来たが、漣が鉄拳を振り下ろし沈黙させたのは言うまでも無い。

一通り説明を終え、二人の反応を見てみると

「……………」

「そついう事があったのね……………」

梓はどうやら話した事の状態がわかっていないらしく、頭に？マークが浮かんでいる。

一方山中教師はある程度は理解してくれたらしく、頷きを見せてくれる。

「それが本当だとしても」

不意に山中教師が声をあげる。

「もし仮に翔君が元の世界へ戻る事になったら、こっちにはもう戻って来れないんじゃないかしら？」

俺はその質問に驚いた。

その質問はガブリエルからもされた質問と全く同じ内容であったから。

「そう言われれば確かに……」

洩もその事を失念していたのか、今になって頷く。

「とりあえずは俺はこの世界に留まる、それから元の世界へ戻る術が見つかった際の俺の決断もしなきゃならないからな」

俺がそれだけを告げると律が

「その決断は今じゃダメなのか？」

鋭く質問を投げかけてきた。

「現状ではまだわからない、だがいずれこの事にもケリをつけなきゃならないから今すぐには、というのはまだ無理だな」

俺たちが話し込んでいる間に閉門時間が迫っている事を告げるチャイムが鳴り響く。

「貴方たち、今日はこれくらいにしてもう帰りなさい？」

山中教師はそれだけを告げると席を立つ。

その後姿をみて俺が

「今日ここで見聞きした事は一切口外しないように」

とだけ言うと、山中教師は右手の親指だけを立て部室を後にする。

「翔、立てるか？」

漣が俺に手を差し伸べながら尋ねてくる。

「ああ、当然」

差し出された手を握り立ち上がると痛みはまだあるものの、先ほどよりは緩和していたため普通に立つ事が出来た。

荷物をまとめ終わると俺たちは並んで昇降口へ向かう。

何とか正門を抜けると、ムギは相変わらず迎えが来ているらしくその場で別れる。

唯と梓と綾は行くところがあるとの事で、同じく正門で別れる。

残されたのは俺と漣と律と祭だった。

佇んでいても仕方ないと考えに至った俺たちは誰からも言葉を発する事無く歩き始める。

しかし、ある程度歩いていたところで沈黙は破られた。

「まったく、カケにはきっちり何があったのか説明してもらわないと気が済まないぜ」

沈黙を破ったのは律だった。

そしてそれを合図に漣と祭も頷き合う。

「今度教えてやるから……」

はあ、と溜め息を吐きつつ俺が答えるも

「ダメだ」

漣に一言でその答えを棄却される。

「これは今日はカケの家で問い詰めないとダメだな？」

律がそんな事を言つと、漣も頷き

「そうだな、というわけで翔、今日は翔の家にお邪魔する事にしたからな」

最早決定事項となつていゝらしい。漣たちの目には有無を言わせない何かが見えた気がした。

（やれやれ……、今日は簡単には寝れそうにないな……）

溜め息を吐き心で呟いた俺は、3人の先導をするかのようにゆっくりと歩き出した。

〈第29話〉（後書き）

エタ「というわけで翔復活！」

翔「まったく……、とりあえずは魔法関係は徐々に強くなれそうだな」

エタ「うん、因みにだけど今の翔では氷と　が扱えるんだけど、には何を入れようか思案中」

翔「俺的には風がいいがな」

エタ「作者的には光か闇なんだが」

翔「……まあそれは追々考えとけ」

エタ「……そうする」

翔「ところで最後の終わり方はなんだ」

エタ「大丈夫、あそこで手招きしてる3人娘にじっくりお話してくればいいよ？」

翔「……死亡フラグ？」

エタ「それは無いから安心しろ」

翔「……とりあえず次回は？」

エタ「次回は漣が猫耳付けて、その後は全体練習するシーンかな」

漣「それだけは絶対に嫌だ！！！」

翔「おお……、遠くに居たはずの漣が……」

エタ「というわけで次回更新は速ければ2週間、遅ければ1ヶ月以上になるかもしれませんorz」

翔「まあ何とかするんだな」

エタ「それではまた次回！」

その後、翔は漣に引つ張られ3人娘にじっくりお話をされたそうなの。
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0809p/>

けいおん！～春風と共に響く音楽～

2011年10月7日22時06分発行